

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

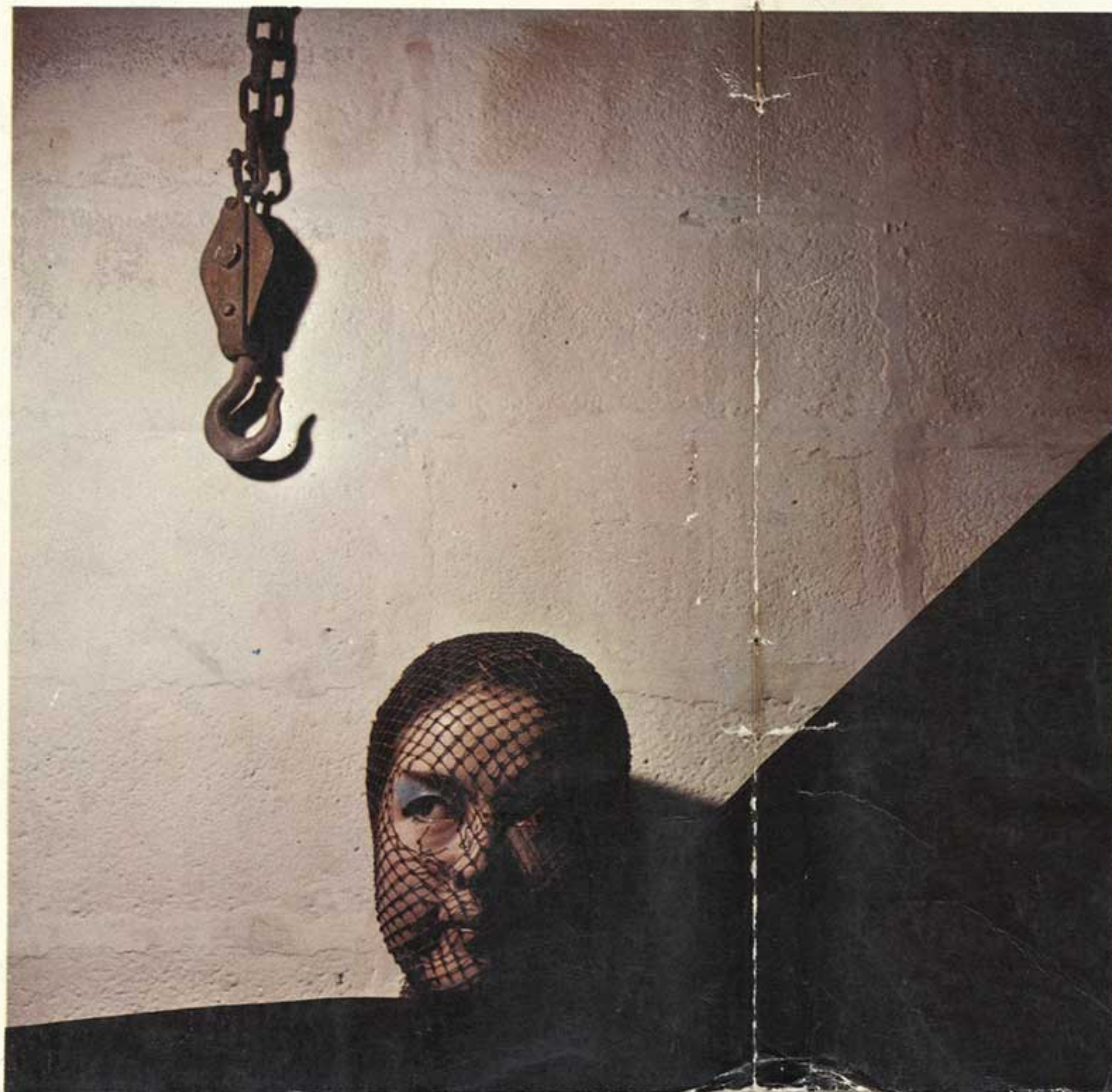
昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第11号 昭和39年11月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第11号 昭和39年11月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓



11月号

定価 300円
IBM 1807

800 円
〒900

シヨツキング画集

共著 藤見郁



★アメリカのS・Mマニアを唸らせたジョン・ウイリーの華麗な縛り絵を筆頭に、ウイリーの模倣から入ってこの道一流の画家になったスタントンの名作、奇怪な道具を好んで使うジムの責め画、その他、マリオ、エネグにいたる眼をみはるばかりの作品が、総枚数二百二十九枚ノアート紙オフセット印刷の豪華本

東京都中野区松が丘2-21(振替口座) 株式会社 あまとりあ社
東京55408

裏窓の
合本用ファイルをお
申し込みください!

◎本誌の新装判を簡単に合本できる、秘蔵用ファイルです。

◎堅牢優美な高級仕上げで、これさえあれば、お揃えになったバックナンバーが散逸する心配もなくなりますし、また、好みの頁を取り外して、ファイルすることもできます。

◎御希望の方は、頒価**130円**に送料**20円**を添えて、スグお申し込み下さい。

◎なお御注文の際は「**裏窓用ファイル**」と御指定ください。

◎裏窓の1年間(12冊)直接購読者にはファイル1個を無料で差し上げます。

東京都中野区松が丘2丁目21番
株式会社 **あまとりあ社** 営業部

★本誌の記事および挿絵写真を、無断で転載
上演、上映、放送することはお断りします。
★お買い上げの本誌に、落丁・乱丁等がありま
した際は、お買いになった書店でとり替え
下さるか、または、本社宛にお送り下されば
すぐおとり替え致します。
★直接購読を御希望の方は、6ヵ月分(1,800
円)または、3ヵ月分(900円)を本誌営業部宛に
お払い込み下さいますと、送料は本社の方で
負担しまして店頭発売前に直接お送りします。
★外国からの直接購読は、送料を1冊につ
き20円御負担下さい。

裏窓・十一月号

(第九卷·第十一号)

定価 300円・送料18円

印刷……昭和39年10月25日
 発行……昭和39年11月1日
 編集兼人 } …飯田豊一
 発行所 ……向上印刷株式会社
 ……伸光印刷株式会社
 ……株式会社あまとりあ社
 東京都中野区松が丘2丁目21番

(振替東京・55408) 電話 (386) 3151
(あまとりあ社宛) 3152
3153

38年(三月号)二〇〇円	絵物語・スリーベットの号 不時着す	文・豊田一狼 絵・鬼頭晩	38年(二月号)二〇〇円	絵物語・魔法師呪文 変化黒髪小僧	文・島本 春雄 絵・小日向一夢	38年(二月号)二〇〇円	絵物語・ハレウインの歌う首 赤鯨奇伝	文・松平莊司 絵・中川彩子	37年(十二月号)二〇〇円	絵物語・洞穴の姫と 片耳の悪魔	文・松平 莊司 絵・中川 彩子
・白峰の女忍者 ・黒猫を捕えた(2) ・黒猫を捕えた(1) ・醜いコメディ ・大根根無頼	文・矢桐重八 絵・小日向一夢 ・藤沢 修 ・毛 沢 三 ・泰西出版資料 ・淡路周五 ・祖父江新 ・宮古志満夫 ・かびや・かすひこ ・水尾 究 ・村山 省 ・春川光彦 ・海老沢七郎 ・安東 泉	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人	文・島本 春雄 絵・小日向一夢 ・秋吉 樹 ・泰西出版 ・金井 行雄 ・金井 行雄 ・泰西出版 ・春川 光彦 ・立原 道夫 ・豊中 夢夫 ・九十九十郎 ・三 俊 ・おれの名はタニエル ・祖父江 新 ・白木ゆりこ ・水尾 究 ・かびや・かすひこ ・新・森栄利論 ・新・安岡章太郎論 ・女因お蓮の死 ・浪人夢想日記 ・カブ一家の第二夫人

裏窓叢書ご案内

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵

450円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵

400円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 鬼頭 暁絵

400円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵

400円 送料80円

第六集 地獄谷の女たち

塔婆十郎著 山田彬弘絵

450円 送料80円

第七集 大利根柔肌草紙

花巻京太郎著 鬼頭 暁絵

450円 送料80円

第八集 悪魔術の塔

九十九十郎著 中川彩子絵

450円 送料80円

お手頃な値段で
いっぱい！
あまとりあ社の
特選出版物！

■東京都中野区松が丘二丁目二一番
株式会社 あまとりあ社
振替・東京五五四〇八・



★ S M 芸術の粋をあつめた豪華版 ★

グラビア48ページに選りぬきのS写真・責め絵が満載

+++++ 内 容 +++++

■ 絵画集 ■

落合竜二凄艶画集
沖涉二特選傑作展
中川彩子・女奴隷の檻
中川彩子・吊り蔵
鬼頭暁時代妖美画集
羽仁京志傑作選

■ 写真集 ■

滝の女・石の部屋
密室・絶望の風景
金井行雄作品集・
さるぐつわ・縄目
凝固



▼ながいあいだお待ち致しました。洗練されたセンスと伝統を誇る裏窓が、そのスタッフの総力をあげて、ここに、S写真と責め絵を豊富に掲載したグラフを発行致します。

▼このような写真絵画集の発行は、数年前より愛読者のみなさまからご要望を頂いておりましたが、このたび、ようやく刊行に至った次第であります。

▼定価は、送料とも一部千円です。

▼書店では発売いたしません。

▼厳重に密封して、個人名でお送りいたします。安心しておまかせください。

▼お申しこみには、住所とお名前のほか、かならず年令を明記してください。▼二十五才未満の方には、お売り致しません。未成年者は、絶対にお申しこみにならないでください。

耽美芸術グラフ

第一集 定価 千円
送料とも

★二十五歳未満のかたはお申しこみにならないでください★



裏窓・十一月号・目次

表紙モデル・牧このみ
カメラ・吉田久
目次カット・落合竜二
とびらカット・落合竜二

倒錯の自由を求めて……戸山一彦 (44)

妖異蝙蝠城……潮一樹 (134)

絵物語 グェンドリン物語……ジョン・ウイリー (70)

奢れる女神への祈り・8……森本愛造 (163)

続・煩惱繩……矢桐重八 (70)

陰画……九十九十郎 (54)

体当たりマゾヒズム論・29…水尾究

長い悪夢…羽島七郎

たぬき…綾川妖司

名月…絵・古正英生

ある奴隷の生態…瀬川美岐

裏窓文芸評論…安東泉

ゴルドンの記憶・20…阿麻哲郎

読者コーナー・編集後記

裏窓既刊号総目録

あるドイツ・フィルム車と踊る美女…藤見郁

私のコレクションから…森下高茂

地の底の踊り…吉田久

黄色い福音…淡路周五



地の底の踊り

カメラ・吉田 久 モデル・じゅりい・まや



裏

窓



11 月 号

第 9 卷 第 11 号

弱きをくじき強きを助く――

《横行する権威主義》

映画《赤い殺意》の宣伝方法に、山形の或る映画館主が奇抜なアイデアを用いて話題をまいた。

「左の人びとの中からあなたの殺したい人の名前の上に○印をつけて下さい」

というのである。名前をあげられた人々はフルシチョフ、池田首相、大鵬、美空ひばり、神近市子、税務署長、担任の先生、警察の本部長、やくざ――

神近さんが登場させられたのは「売春禁止の提唱者」のゆえで、大鵬は、山形出身の柏戸のライバルのせいとか。

支配人は「単純な気持ち」で考えたと言っているが、これが以外に波瀾を呼んだ。そして名前をあげられた人たちから嚴重な抗議がきた。新聞や雑誌で批判された。いつのまに

か支配人氏の卓抜なアイデアも沙汰済みとなつてひっこめられた。しかし残念だ。せっかくこれだけ凄味のきいた涼味津々のアイデアが出ながら、沙汰済みとは――

かつて《毒薬と老嬢》という喜劇映画の傑作があつた。映画史上にも残る喜劇の名品である。ふたりのおしゃべり好きなかわいらしい老嬢たちが、事もなげにお茶に呼んでは老人たちを毒殺して、キョトンと収まりかえっているところがおかしかった。おかしかったというより背筋に迫るこわさがあつた。だがそのこわさが、痛烈なユーモアとなつて観客を笑わせその心を射した。ユーモアが同時に風刺であつた。たくまずして人間の心の機微をさかなでしたものであつた。

映画の看板を見ると、みんな超大作であ

る。超大作でない映画は一つもない。出演者はいずれも迫神の名演技ということに決まっている。ばかげてるというのは、こういう宣伝文句の、慢性化したような画一主義をいうのである。

「赤い殺意」、だれにもあることだ。いっそおもしろいことである。これを大っぴらに公開しあつて、心理スリラーの涼味津々といったユーモアを開陳しては。じとじとしてうつとうしい社会的緊張をときほぐす清涼剤の意味でも、何んぼ健康的で、かつスリルに富んだ心理的スポーツであることか。

ことさらに目に角を立てることもあるまいに。《くたばれヤンキーズ》という映画もあった。この「くたばれ」というフレーズが読者の気に入れられ、週刊誌ではよくこの句を



使った。

「くたばれ巨人」「くたばれ阪神、大洋」

「くたばれ南海」「くたばれ王」なんでもいいのである。「ヤッチマエ」という勇ましい江戸言葉と同じく、それこそみんなくたばっちゃまえ、である。愉快ではないか。痛快ではないか。ここには偶像崇拜へのアンチ族の、健康な抵抗精神が脈打っている。

「私の殺したい奴」

偽善者、裏切者、密告者、ユーモアのわからない奴、検察官僚、虎の威を借るキツネ、——等々沢山居る。

小・中学生に「私の殺したい人」に×○をつけさせると何が出るか。いっそ全国一億の国民に全員×○をつけさせて、三分の一以上の得票を得たものは、公開の場でギロチンにかけることにしたらどうであろう。うかうか人気者などになって目立つことは、はばかられてくる。

「あなたはだれを殺したいですか」

「はい、オヤジをやっちゃみたいですよ」

と言えるうちはいいのである。腹の中では何を思っているのか、不倶戴天の政敵同士がいちおうカメラの前ではニコニコ笑い合って握手をしたりなどしているところの、あの不可解でグロテスクな光景の方が、不健康でい

かがわしい。

学生サークルの児童演劇研究会員の国学院大学三年生が、地方公演を自分の郷里でやるうとして反対され、カッとなって学友を肉切包丁で刺し、屋上につけあがって飛降り自殺をしようとして抱きとめられ、庖丁でわが腹を刺し、二人とも重傷だと。

こんなばかげた話はない。だが、日本の若者の通弊として、すぐカッとするのがお定まり、「頭にキタ」というのが決まり文句のうちに、子どもっぽく青くさい。という現実から見るとよくありそうな事件だった。

《赤い殺意》というのは、こんなロクでもない殺傷事件とは何のかかわりもない。

《赤い殺意》の宣伝アイデア、よし買ったくらいでいききたいものである。

一流の大新聞が、映画評で武智鉄二の《紅閨夢》を取り上げ、真向からこれを論難した。何ともすさまじい見幕でかみついている。

論旨は次のとおりであった。

「《白日夢》に続いて武智鉄二氏が企画・監督した。この恥知らずな題名が物語るように製作態度も無責任きわまるもの。セリフもしやべれないシロウトが画面をウロウロし、料理や喫茶店のコマースャル場面がひんびんと

出、どのような興味でこの映画を見ようとする人にも、くだらなく腹立たしい愚作である。

だが、このような作品にも、ある種の「芸術的価値」を強弁する武智氏には、何を言おうと通じまい。配給会社の松竹に強く訴えたのは、このような作品を配給することは、社会がこれまで映画会社に与えてきた信用、社会と映画会社との「無言の約束」に対する重大な裏切である、ということだ。

少なくとも最近までは、社会と映画会社との関係はこうした形で定着し、映画界はこうした信用を社会から得ていたはずである。

《白日夢》《紅閨夢》とつづく公開が、「重大な裏切だ」というのは、こうした意味である。あのようなあぶな絵じみた看板が都心の一流劇場で堂々と掲げられているような国が、どこにあるか。映画会社の全国的な宣伝網が、あの煽情的な宣伝に威力を発揮すればどういうことになるか。

東京近郊のある映画館では《白日夢》《博徒》《悪女》の三本立てを上映している。映画会社は、かつて市民の健全な娯楽の場であった映画館を、痴漢とやくざとに譲り渡すつもりなのか。世の親たちに、「自分の息子や娘にとっても最近の映画は見せられない」という社会通念ができてしまえば、どうす

るつもりなのか。映画界は社会の「日陰者」になりたいたのか。過去に数々の名作を生んできた、あの日本映画界が——」

この論旨の調子でわかるとおり、何とも批評のテイをなさぬヒステリックな感情論というのほかないしろものであった。

もちろん、《白日夢》も《紅閨夢》も、どう転んでみても傑作とは言いかねる作品であることはまちがいなさそう。それならそれでそのことについて映画批評としての論難を加えるべきが妥当であろう。

三流、四流新聞ならいざしらず、一流の大新聞が、こんな青くさい大見得を切る必要がどこにあるか。むしろこっけいだ。

ここにはただ、不当に思い上がった指導者の意識だけが、露骨に表われて不愉快だ。

「この恥知らずな題名が物語るように」と批評では言っているが、だいたい何がどう恥知らずなのか、そのところからしてわからない。《紅閨夢》という題名の、どこをいったい恥知らずというのか。

「閨」というのは、壁をうがって設けた戸、宮中の小門、または婦女の居室のことである。「紅閨」とは、赤く塗った美人の部屋という意味で、それ自体にどういう恥知らずな個所があるというのであろうか。

赤く塗った美人の部屋、と聞いただけで、

もう耳をおおい、そんな恥知らずなことば、聞く耳持たぬと、わめき散らす色情潜在症の擬道徳家のポーズではないか。こういう神経からでは《枕草紙》《好色一代女》なぞと、聞いただけでオコリが起こりはせぬか。

「くだらなく腹立たしい愚作」と思うなら、それはそれでよい。なぜそれが愚作なのか、もっと冷静に語れないものか。それを語るどころが映画批評をなす者の勤めではないのか。己の本分を怠って、ただ感情的に、主観のみをわめき散らすような批評家こそ、許してはおけないと思う。

「このような作品にも、或る種の『芸術的価値』を強弁する武智氏には、何を言おうと通じまい」

で、批評も話合いも打ち切ったんでは、言語道断である。通じるか通じないかは、やはり作品を通して話合ってみるべきではなからうか。それをやらないどころか、これではケンカである。

「配給会社の松竹に強く訴えたいのは、このような作品を配給することは——」云々と、これはまさに力による圧殺をたくらむことを示す。口では話がかぬ、力でおさえやるといふ、さながら戦時中の検閲官並

のセンスが露骨だ。

なおここで留意したいのは、一流新聞の権威主義である。その新聞がいかに社会良識の先達であり、世論の正しい導き手であるかを時と折りにつれ公示しなければならぬ、という立場にあったにせよ無難な相手を見つけ、それをおとなげもないやり方でやつけてみせ、自己の良心を示そうとするポーズ、このポーズこそ最もタチの悪い宣伝だということだ。

かみつく時には、必ず弱いものにかみつく。強いものには最後のところでハタを巻く、こんなことがあってよからうか。

ともあれ、われわれはもっともつと鑑賞に耐えうる《紅閨夢》の出現を期待する。ヤクザ路線、忍者路線、何でも結構、理屈は抜きに面白い映画であればそれで結構、やがてそれにもアキがくれば、またまたメロドラマの悲恋路線とかが復活したりもするだろう。それもそれでよい。

さて《紅閨夢》問題に関連してもう一つ、同じ新聞に読者の次のような投書が載っていた。「貴紙の映画広告の中に、貴紙にふさわしくないと考えられるようなどぎついものがあり

残念に思います。映倫を通つたものならどんな内容の作品の広告でものせるのですか。映画広告の表現内容の審査はどうしておられますか」

それに対して新聞側は次のように答えていた。

「最近の映画の傾向として、特に男女間の露骨な描写を売りものにしたものが続出しているのは、ご承知の通りです。したがって映画広告も、社会の公共物としての紙面を飾るのにふさわしくないものや、品位をそこなうおそれのある広告の原稿が持ちこまれる場合があります。本社は現在、映画広告についてはこういった傾向のものを全部事前に審査しており、ひどいものは訂正をもとめ、あるいはその作品の内容によっては、広告の掲載をお断りしている場合があります。」

映倫の審査さえ通れば、どんな作品の広告でも無条件に掲載するということは絶対にありません。これらの審査は、広告部校閲課審査係が、本社で制定している広告掲載基準に従つて、「社会道義、良風美俗を害するもの」「新聞紙面の品位をそこなうもの」は掲載しないように、事前審査を綿密にするよう努めておりますが――」

これはまるで、悪名高い日本の検察官、そ

の検閲制度にキュウキュウジョとして奉仕している、という告白みたいなものである。

「社会道義、良風美俗を害するもの」「新聞紙面の品位をそこなうもの」とか、検察官の口調をそのまま真似たような思ひ上がったセリフが飛び出したりするのである。

いっそ正直に、

「うちの新聞の性格からくる営業政策上」云々と言つたほうが、よっぽど筋が通つてはつきり理解できる。問題は「営業政策」、これ以外にはないと思うがどうだろう。

「消費者は王様だ」ということで、客は丁寧に扱われる。デパートや銀行に行くと、至れり尽くせりのサービスに務めてくれる。もっともこのごろのサービスは、実のない、形式だけのサービスで、と不満の声も聞かれるがまずまず「消費者は王様」待遇には違いない。

ところが、これは物資が豊かに出回っている天下泰平時のことと、戦時から戦後にかけての物資欠乏時代は、文字通り「売り手が王様」であつた。客は売り手にペコペコ頭を下げ、オベンチャラの一つも言わないことには、売ってもらえなかつた。買い手市場、売り手市場の力関係がそうさせる。

「客に親切、専心誠意のサービス」を心がけるのは、商業道徳上からのものではなく、一

つの営業政策上の手段であることは自明の理である。その必要がなければ、サービスなぞくそくらえ、なのが実の本心である。ところが商店側はそれを公には認めない。「すべてお客さまのお陰で、サービスに務めるのは商業的良心としては当たり前で」と、殊勝なことしか言わない。

サービスといつても、魚屋が呉服屋みたいに、中性的な腰の低い応待でいたんでは、商品の性格からして全く不似合ひである。魚屋は魚屋らしく、威勢のいい、下町言葉でまくし立ててこそ、その商品に似つかわしい。魚屋と呉服屋には、それぞれサービス上の性格の違いが出てくることはやむを得ない。どちらが上品で、どちらが下品とは言えないタチのものである。いずれも営業政策から必然のものとして生じた一つ一つのタイプなのである。プロレスの新聞と、業界紙と、一般大新聞とにも、それぞれの性格の役回りというものがある。堅い記事を主調とする大新聞がことさらに大きく一面にプロレスやセックス記事を掲げれば、それは確におかしい。化粧品店が、魚屋式に荒らっぽく販売するようなものであろうから――。

だがここでカン違いは困る。化粧品や呉服が品位があり、魚屋は品性下劣、美俗を害す

るもの、なぞと思うとんでもない。

新聞はそれぞれその性格と役回りで成り立ち共存している。その性格を出すことがサービスである。サービスとは、しかく断言すれば営業政策にはかならない。『社会道義、良風美俗を害するもの』なぞの基準を振り回されたんでは迷惑だ。『うちの新聞の性格に合うように』と弁明されると、なんぼか実があり、かわいげがあるというものに。

大新聞の記者とて、いったんクビにでもなつてプロレス新聞などにはいると、結構セックス記事の一つも書いてみなくてはならなくなる。それが営業政策というものだ。サービスというものだ。品位云々の問題ではない。

米軍当局の間で、六月一日以降、ひそかにTIT・FOR・TAT作戦というのが練られていたそう。邦訳して『しつぺ返し作戦』というのだそう。

たとえば、南ベトナムの政府軍石油貯蔵所がベトナムにより破壊されたとすれば、米軍は戦闘爆撃機を北に飛ばし、北ベトナムの石油貯蔵所を爆撃する。もしベトナムが南ベトナムの一村を攻撃すれば、米軍機は北ベトナムの村落を報復爆撃するという、これが「しつぺ返し作戦」である。

これと並行して米軍は、南ベトナムにおけるベトナムとの戦いの劣勢を補うため、ラオスのパテト・ラオ共産軍の本拠地である、ジャール平原のカンカイを反復空襲し、続いて北ベトナムとジャール平原を結ぶ有力補給路である第七号公路を爆撃した。六月下旬以来のことである。米軍の最大の目標は南部ラオスのチェボン空軍基地だという。チェボン空軍基地は南北ベトナム境界線の十七度線にびつたりと寄りそい、北ベトナムからラオスを迂回して、南ベトナムのベトナム基地に通ずるホー・チミン・ルートの根拠地だという。確かなことはわからないが、もう既に、米空軍はこのチェボンをも攻撃したのではないかと推測されている。

その矢先、問題の八月四日の「トンキン湾海戦」は起こった。待ってましたとばかり、米軍は北ベトナムを攻撃した。八月五日の正午から五時間にわたり、北ベトナムのホンゲイ、フクロイ、ロクチャオ、クアングの計四カ所の魚雷艇基地とビンの石油貯蔵所を攻撃し、二十五隻の舟艇と北ベトナムの全石油貯蔵量の約一割を破壊した。

これに先だち五日朝、横須賀にいた米の第七艦隊は出動を開始していた。七隻の駆逐艦、ミサイル巡洋艦、空母キアサーシ号等、

二十三隻の軍艦が姿を消していたという。わが外務省事務当局の政府談話の草案ではこの予定的ともいえる米軍の行動を「米國としては当然である」としていたそう。それがあまりに刺激的な表現でありすぎる、ということから「米國としてはやむを得ないことだ」と思う。池田首相が書き直させ、官房長官談話として発表したのだと。

トンキン湾といえば東を海南島、北を中共本土、西を北ベトナムが、それぞれ懷にいだくようにかかえこんでいる入海である。公海がどうのという原則論以上に、いわばトンキン湾は人の家の内庭みたようなものである。そのハナ先を、公然と威かくする形で、軍艦が横行すること自体、非常識な話である。もしメキシコ湾か、あるいはカリフォルニア湾あたりにも共産系の軍艦が現われ、横行したとしたらどうであろう。当然米國は、これに嚴重な抗議をするか、もしくは実力でもってこれを追い払おうとするだろう。これは当然なことである。やむを得ないことである。わが外務当局の見解は、全く本末てん倒の観がある。そして現実には、無謀にも、己の非力を顧みず、アメリカ第七艦隊に事を構えた北ベトナムの行動が大胆すぎたと、その点を不審がられている。そのため米國の北ベトナム

攻撃に口実を与えた。

つまり、力のない者は、黙っておとなしくしておれということである。もし背後に、中共の存在がなかったとしたら、北ベトナムは攻撃どころか、一挙に米軍によって占領されてしまったに違いない。また米軍にしても、相手が北ベトナムであればこそ、トンキン湾にこれ見よがしに軍艦を入れもするし、口実を作っては攻撃もする。中共やソビエトが相手では、こんな軽々しい暴挙には出られない。国際道義とか正義なぞというものはありはしない。要はすべて力関係に尽きる。日本の外交はそのシリ馬に乗って、右顧左顧しているにすぎない。

原子力潜水艦問題がいい例証だ。初め寄港受諾に当たって政府は「サブロックは通常爆雷と核爆雷の併用であって、日本に寄港する場合に核爆雷はつんでこない」と説明した。ところが海原防衛局長が「サブロックはすべて核爆雷」と、ホントのことをいったものだから事はフンキュウ、政府は苦しまぎれの統一見解というのを出した。

「将来サブロックを積んだ原子力潜水艦寄港の場合は、当然事前協議の対象になる」とし鈴木官房長官は「原子力潜水艦はサブロックを他の艦船につみかえて入港するだろう」と

説明した。

こんな見えすいたウソがあるだろうか。スレッシャー型の潜水艦は、ポラリス型が敵本土襲撃用であるのに対して、敵のミサイル潜水艦を攻撃するのが主任務の潜水艦である。サブロックはそのための武器だ。その武器を寄港のたびにいちいちはずしてくるだろうか。その疑問に政府はまともな答え方をしない。「アメリカのいうことを、信じなさい。信じなさい」の一点張り。

核兵器を絶対に持ちこまない、と、アメリカに確約させることすらも、「日米親善関係にマイナス」だそう。

寄港受諾という結論が、既に先にあったのだ。国会での質疑応答は形式みたいなもので、一種の茶番劇である。たいてい先にもう答は出てしまっている。

先般、クエートの王子が来日、そのとき、大変冷淡な扱いを受けたと王子がふんがい、シコリを残した事件があった。クエートは小国なので、相手をみくびったのが日本政府の態度として現われた。クエートだけではない。こういうことは、東南アジア、アフリカ諸国の小国に対して、とかく日本は無礼で尊大だと、その点評判は悪い。徹底した事大主義なのだ。だから一面、アメリカ様のいうことな

らどんなことでも忠実に従う。フランス、イギリス、西ドイツと、それぞれ独自の歩みを見せている自由陣営の中で、一番素直に忠実なのは日本だということ。もちろん韓国や台湾などは論外であるが――

三井グループが国産技術で開発した一千万ドルに上る尿素プラントを、年利五・五％、八年の延払い条件でソ連に輸出する契約の仮調印が七月五日に行なわれた。ところがこれをなかなか政府が許可しないので、ご破算になりそうな形勢であった。輸出振興、なかでもプラント輸出の重要性を説く政府が、二か月近くも態度を決めかねたのは、一にも二にもアメリカの横ヤリのためであった。米国は五年以上の共産圏向け信用供与に反対しているのである。情けない話である。それがやっとな、すったもんだの末、幾つかの条件付きで九月二日に認可になった。だが、ニチボクの中共向けビニロンプラントの延払い輸出は認可されずじまいだった。

事大主義の、こういう風潮を基本線とする政策のもとで、どうして真に独立的な人格を持った人づくりがねらいの文教政策が達成できよう。弱きをくじき、強きを助く、いつもこうしていじめられるのは風俗営業であり、風俗関係の興行出版物である。



淡路周五

▽1△

本部から制服が支給される。その制服を洗濯に出した時、クリーニング屋が洗剤を間違えて、ひどく生地を痛めて茶色に変色したのを持って来た。「いいです。構いません」と言ったのが悪かったんだらう。洗濯では恐らくこの時は過失でこんな事になったんだらう。こんなに痛めた服を持っていったら、きっと手ひどく文句を言われ、ののしられ、洗濯代だって貰えない、と予想していたに違いない。お代は貰えずとも、せめて弁償金を取られないように、ただ「すみません」と頭を下げて返して来い、と主人に言いつかっていたに相違ないのだ。あんなにびくびくしていたではないか。恐らくこの洗濯物を持って来た小僧は、くじ運が悪かったに相違ない。それを、私と来たら、弱い立場にある人間には強く出られない本性があるのであって、私自身はその性質こそこういう職業にふさわしい性質だと思っていたのだが、しだいに、そうでない事が判明して来たのである。私は傷物にされた洋服に対して文句を言わなかったのみならず、お代もちゃんと払ってやった。ところが、ここが人間の心理の変な所で、そんな風に恩を施された小僧は、私が普通の人間より弱気なのを感じとって、意外な気がすると共に、増長した。或は私が本当に親切心からそんな一風変わった行為をしたのかどうかを験すためであろうか、今度洗濯物が出来て来たのを見ると下着だけ汚れたまま返して来ている。沢山のシャツや服の間にかくすように突っこんであつたので、小僧が帰ったあとで気がついたのだ。これも洗ったことになっていて、請求書にはちゃんと書いてあるのだから、洗濯屋に怒鳴りこんでその下着を洗わせるべきところだったのだ。しかし私はそうしなかった。金額にしても三十ポロン位のこと

だったし、私はすけすけ人にものを言うのが嫌いだったし、それに私は痔で、下着は血で茶赤色に汚れていたのだ。それを人前につき出すことは何か気がひけた。

この教区の商店街は、一所にかたまっている。私が気弱な事は、忽ち商店街に、号外でふれ歩いたように伝わってしまった。彼等は、この刺激の無い町で退屈していたから何か変わった話題があると、飢えた狼のようにとびついた。例えば私が八百屋で買い物をした時、四百九十ポロンになる事を自分でも計算していたので、五百ポロン札を出して待っていたが、しばらく待っても、お釣りの十ポロンを呉れないのである。私が「あのう」と言いかけると、やっと気がついた風をして、「ああ、そうでしたな」と、にやりと笑って、十ポロン投げてよこした。私がルーズな人間なら十ポロン猫ばばしてやれ位の気だったのだらう。又、私がうわさ通りの経済観念のない、現実ばなれのした間抜けかどうか験す事に最大の関心があったのかもしれない。

大人達がこんな風に私を甘く見始めると、直ちに子供達もその影響を受けた。私の前任者の頃には、教会の庭で子供が遊ぶような事は無かったそうなのだが、今や教会堂の中をばたばた素足で駆けまわり、椅子や説教壇のうしろにかくれて、西部劇ごっこをやる程になっていた。始めは私は、自分が子供達に愛されている証拠だという風に思っていた。ところがやがてそうでない事が判って来た。始めはキャッチボールの手がそれで壊していた窓ガラスを、今では面白半分に壊し始めた。遂には道を歩いている私を後から空気銃で狙う程になった。私は肘に弾を受けて外科医に弾を抜き取って貰わねばならなかった事もあつた。そうやってさえ、私は腹が立ってはいなかった。私の無能さが本部に知れて破門されはしないかと、びくびくはしていたが、彼等信徒共をどなりつけて私の威信を恢復しようという気にはなれなかった。

とも他人に「こうしなさい」「これは間違っています」と忠告出来るためには、他人への愛がなくてはだめだと思ふのだが、私の心のどこを探しても他人への愛など薬にする程もないのだ。私が世の人々のいやがらせを黙認しているのは、彼等を愛しているからではなく、彼等を怒らしたら怖いという臆病心がもとなのだ。

ふり返ってみると私の一生というものは、こんな風に破滅へ向ってじりじりと下降してゆくように出来ていたのだ。頭が少々よくても、肝腎の時には上ってしまったて実力の出ない私は試験に失敗して、こんな薄給の職につくように出来ていたのだ。薄給だから、教区の人にもなぶりものにされる運命にあったのだ。私はほとんど毎日教区の中を歩きまわっては、信徒の家庭を訪問し、教会への寄捨をお願いしてまわることになっているのだが、前述のように馬鹿にされている私に誰も一ポロンだって出そうとは言わない。「すべて、人が金を出すからには、何かそれによって利益を得たお返しとしてでしょうが、一体貴方は私達に、何か利益のある事をして下さったですか」と言ってくれたのは、まだ私を対等に扱ってくれた方で、ほとんどの場合は話もきかず、「乞食、乞食」と、からかって追

立てるのです。

私には、これから述べるような悪癖があるので、こんなに迫害されながらも、彼等をうらむ気にはなれないのです。私は薄暗い教会堂の中にたった一人だけ残されると、私の心の中に今まで押しこめられていた本心がそろそろと顔をのぞかせてくるのです。例えば私は素裸になりたくります。教会堂の中で、私が素裸で立っているのを見たら、人々は一切何とびっくりするでしょう。世界広しといえども、こんな事をする神職は一人だけにいるはずはありません。そう思っただけで私は、その世にも稀な奇行をやってみたくてたまらなくなります。子供時代はこれでも秀才と言われた私ですが、どう歯車が狂ったか、こんな低い地位さえ人並に務められないで、破門になりかかっているのです。今の私が昔したように人をびっくりさせると言えば、こんな、ストリップの真似位の事しかないのです。それでも十分に私の欲求不満は解消できます。いつ人に見つかるかもしれない。ひょっとしてカーテンの隙間から覗いている人があるかもしれない。そういう不安もかえって、この行為をスリルあるものにしてくれます。こんな時、私は、まるで、女を誘拐して来て、これから凌辱しようとしている男みた

いに、喉がからからに乾き、鼓動も早くなり、頭も興奮しています。全身ががたと寒気がしてふるえる事もあります。冷い室内の空気に全身が曝されて、まるで春先に、一人で海辺に立って、これから水泳をしようというように、何か生命の躍動する思いです。俺はまだ若いな、健康だな、とつくづく我が身がいとしくなるのです。

ところで、誤解が無いように断っておきますが、私は鏡が大嫌いで、自分が人に写真をとられるのが、とても嫌なのです。教区の餓鬼共が私をゴリラと呼ぶように、私の人相は猿によく似ていて、口のへんがぐっと突き出ているのです。又、毛深くて一見いかつく見えるくせに、声はボーイソプラノだし、気弱だし、言葉づかいも、ていねいを通りこして女々しいので、ますますその人相のいかつさがぎこちなく、グロテスクに見えるのです。毛深い眉や脂ぎった、てらてらした額も、ますますその感を深くします。更に、私は自分の苗字も、泥棒の一味みたいな気がして嫌なのです。この地方には、やたらに私と同姓の者が多いので、実にありふれた苗字であるため、何か人と変った、秀でた存在でありたい私にとって、自分の苗字は不愉快なのです。そこで人から苗字で呼びかけられると、もう

それだけで尻込みしかけた気分になっているのです。人と五分に立ち合って行けないわけがここにもあるように思います。

その私が、裸体を写真に写したい欲望を持っているといえ、人にはなかなか判ってもらえそうもありません。肉体美だからでは決してありません。大便所に入るところや、出るところを人に見られるのがはさくしく、大便所に入る時は、便所に誰もいない時を見すまして入る程の私なのです。誰か小便していたりすると、大便がすんでも出られず、その人が立ち去るのを待って、出る程の私なのです。つまり、はさくしく醜くて、嫌だからこそ、ますますそれをじっと直視したい、といった心理があるのです。フィルムにまで焼き付けられ、その醜さも頂点迄高まったものと言えましょう。又、その裏には自分の体への、こもりにこもった愛着があるのも見逃せません。こんな醜いポーズでさえ、俺は好きなんだぜ、という気持です。又、こんな心理もあります。硬教育の父を憎んで来たにもかかわらず、自分の顔や体が成長してみると父親によく似ていて嫌なのだ。その父親似の顔や体にいやしいポーズをいろいろさせる事によって復讐しているという快感もあると思います。

たとえば四つ這って、お臀の方向からうつした写真など私の大好きな写真の一つです。まるで猿か牛のようです。股の間から顔をのぞけて、猿目鏡をしているところを尻の方からうつした写真も、大きな蜘蛛のようで魅力があります。よくヌードというと女性のヌードをうつす事になっていますが、男性の体でも、工夫してうつせば十分代用品がつとまる、という事を私は言いたいのです。

◇ 2 ◇

教会に来る信者達の中に、二人、私の目をひいた娘さんがいる。日本からやってきた良子さんと民江さんです。ところで、好きな女性を見つけると傍へ寄って話しかけたり、デイトを申し込んだりするのには私の趣味ではありません。むしろ逆に顔をそむけ、必要な事以外は喋らないようにし、相手に少しも関心が無いことを思い知らせようとやっきになります。私の青少年時代には、男と女が仲よく遊ぶというような風習は全然ありませんでした。この頃の子は幼稚園の頃から、男の子と女の子が相々傘で通っていますが、私の子供頃あんな事をしたら「男と女が遊びよる」と、散々はやされ、石など投げられたもので、結婚した若夫婦でも、仲の良さそうな風

をみせると近所じゅうの蔭口の種になるので、嫁の方が三メートル程後を歩いたり、道の両側に分れて歩いたりしたものです。道をたまに美女が通ると、おかみさん連中は商売の手を休めて外へとび出して後姿を眺めつつ、「少しびっこだ」などと批評して、けちをつけて喜ぶのでした。その私が最大の勇を振るって求婚したのに、二人の娘たちに次々に拒絶をくってしまい、もう女達の力は借りないという気になりました。

さらに思いがけないことで彼女達はこれまでの、しとやかそうな仮面を脱ぎすて、女の本性をみせて、けんけん私に怒鳴りつけるという事件が起きてしまったのです。教会の催しの中に、男子の信者のグループだけで料理など作って、女性の信者をお客様として招くというのがありました。ところが男性の方は全然集まらないので、私が料理の原料を買い集め、ちょうど来合わせていた良子と民江に、

「本来は男性がやるべきもののだが、一こ集まらないので、貴女達が料理の方をやってもらえないだろうか。材料の方は買い集めてあるんだけど」

と、切り出したのです。そしたら、良子と民江が全く予期に反して、血相変えて怒りだし

たのです。

「先生の命令だってあんまりです。男の人達がしてくれないのなら今日の催しは中止すれがいいんです。大体教会の掃除だって男女交互のはずなのに、いつも私達ばかりです。家庭では女性は掃除やお洗濯ばかりでもいいかもしれませんが、ここは神の教会ですよ。私達が今日偶然いたのは、お料理に来たのではなく、パーティの始まる前に子供達に讃美歌を教えるためなのです。これも正式に教会から割り当てられた仕事なのです。それとも二人もいるのだから、民江さんがオルガンを弾き、私が指揮をしていなくても、一方が台所へ行ったっていいとお考えなのですか。男の信者達には怠けても叱言の一言も言えぬあなたが、女とみると大層失礼な事まで出来るんですね」

私の派では、信徒の家をまわることにお酒が出るし、毎月一回は信徒の親睦を深める意味で酒宴が開かれるのです。私は招待されるわけですが、しきたりで、牧師は金一封、千ポロン程度出すことになっているので、結局お酒の飲めない私が一番多額を払っていることになるのです。しかも私にとって、お金のいることよりもつといやなのは、飲みたくもない酒を飲まされる事です。私だって人間で

すから、もしお酒がこんな風に人から強制的に日時まで決めて飲まされるものでなく、自分の飲みたい時に欲しいだけの量、快く酔う程度飲むのなら、酒が大好きになり、ゆくゆくは大酒飲みになったかもしれないのですが、事實はそうではありません。神学校を出るまでは校則通り、絶対、酒一滴も飲まなかった私が、酒に馴れない胃へ、にわかに、牧師に就任するやいなや、いやという程注ぎこまれたのです。「あんたは、いける口じゃろう」「わしの盃が受けられんのですか」と、脅したり、おだてたりで、結局最後は顔面蒼白になり、げえげえ吐くのです。宴会といえぱいつでも決ってこれなのです。日曜学校にも聖餐式にも全然来ないような連中が、この酒宴の日となると、わんさ押しかけて来て、口先だけで、齒の浮くようなお世辞をたらたら並べ、（その実、そんなお世辞を真に受けて喜ぶ私をからかっているのです）結局、することはといえば、私をへべれけに酔わせ、げろげろ吐かせておいて、へいさようなら、と潮の干くように逃げ散ってしまうのです。そして、酒に弱い男は、女にも受けはよくないのです。

そういう体験が重なるうちに思いついたのでしょうか、或る日突如として、私は便が食

べたい、と思い出したのです。あるいは人によつては、私の今のような欲求も、「女に便を食べさせたい」と、いう風に感ずるかもしれません。しかし、私という人間は、前述のように、女のけんけん怒る声、吊り上った細い、狐の化けたような目を見ただけで、サジズムなんか、ふっとんでしまい、すべてのふらちな欲望は煙の如く消えてなくなって、女に対する嫌悪と幻滅だけが残り、自慰に向うような気分で糞食に向うのです。

この糞食に耽り始めると、道で若い女とすれちがっても、心が少しも動揺しなくなるから不思議です。そうなくとも内向的な私の心が、完全に自分の中にこもってしまった気分になり、人が自分のなりふりをどう思っているかと少しも気にならなくなります。

私の心に抱いている空想の中の女の姿は、あんなにけんけん怒るようなものではなく、従順そのものの、どんなにしいたげられても微笑と気品を忘れない、天女のような存在なのです。

そして自分の体をいじめる時、心の内にしまっている、特定の誰とも似ていないその幻の少女が、苦しむ表情になり、声もなく、マゾヒズムの快感に身をよじるのです。その幻の少女は、美人で健康で、利口で、つんとし

て生意気そうで、可憐なところもあり、未婚で、世俗的なところのない、無口な、内向的な女です。十六歳から二十五歳の間位で、かなり肉付きがよく、あまり面長ではありません。世の中に私のような、腐敗した心を持ったインテリもいる事を夢にも知らない純真無垢の少女で、その少女に糞尿を食わせてやる事になるのです。

3

私の考えたところでは、小便は膀胱膜を濾過して出てくる液体なのですから、あまり細菌も居りそうにはありません。始めは飲みこむ迄はやらずに、口に含むだけで吐きだしました。これだけの事さえ、やってみる迄は、随分勇気を要したのです。

口の中は鼻腔にも、耳の孔にも、気管にも、胃腸にも通じていますから、中耳炎や蓄膿などになるのではないかとおそれたのです。淋巴腺が腫れたりするかもしれません。いやしくも神職にある人間が、変な病気にかかってお医者に行き、問い正された結果、尿を口に含んだためにこんな病気になったのだ、とても判明したら、あまりよい噂は立ちそうにありません。

しかし、こうして尿を口にしたら結果は何の

障害も起りはしませんでした。私としては、世界中、古今東西、誰一人やった事も無い事をやってのけたと思って、少々自惚れてさえたのです。才能はありながら、今迄何の機会も無く、發揮出来なかったが、やっと糞尿の分野で世界第一人者になったぞ、と鼻のうごめく思いでした。それが何の異状も起らないので、むしろがっかりしました。以前小便が足首のへんにはねかかった位の事で、足首のへんが湿疹のようになり、脹れ上って、かゆくて困った事がありましたから、せめて口の中に湿疹位出来るのではないか、期待していたのですが、だめでした。

こうなると大胆になり、小便を飲みこんでも害は無いように思えて来ました。尿毒症という病気があります。尿中のアンモニウム塩が血管にまわると血管が収縮したり、脳水腫を起したりするそうです。膀胱結石というのもあります。尿中には、本来膀胱膜を通れないはずの結晶体も含まれているが、それがコロイド状（寒天のようなもの）になっているため通過するのです。そのコロイド状が崩れると結晶が膀胱中に蓄積して膀胱結石となるのだそうです。尿を又、口から飲みでもしたら、その膀胱結石にでもなりかねないのではないでしようか。その他腎臓炎だって、悪く

すれば命とりの病気です。とにかく便をコップに汲んで口許までもっていった時の、この何ともいえない拒絶感、飲みたくない、という本能的な衝動は、どう見ても神様がお与えになったものではないでしようか。

神様が、こうまで飲みにくくお作りになったからには、もし飲んだらよっぽど害があるからに相違ないとも思えます。小便を汲んだ茶碗をじっと眺めているうちに、ひとりで手の方が動きだして棄ててしまいそうになるのです。今日こそ飲んでみようと思つて便所に行き、用意した茶碗に汲み取るところまではしながら、「何も今飲むことはあるまい。尿はいつだって出るんだから。又この次にしよう」という氣になって来、ひとりでに棄ててしまふのです。

それが飲むという決意にまで高まったのは、その日の日曜学校で子供達に侮辱されたためだと思ひます。何しろ子供達と来たら、学校の先生が、硬教育で、何かと言うと、なぐったり、罰をくわしたりするので、それに馴れてしまつて、私が子供は神の子という立前から、「さあ皆さん」という調子でやると、わけもなくおかしくなつて、げらげら笑いだしてしまふのです。

そして説教の最中に歩きまわったり、石こ

ろを私の耳許に投げつけたりするので。そして「さあ怒つてみいや」「流石は牧師じやのう。辛抱強いのう」と大声でからかい始めるのです。

小便は体温がまだ残っていて、なまぬるい塩水といった感じでした。海で水泳中に潮水がぶりと呑んだ感じでした。一寸にがいたところまで海の水そっくりです。口の中へ入れてから余り間をおくと、ぬらぬらして氣味悪い感じが高まつて来て、吐氣まで催してくるので、決然として、早いとこ、ぐいぐいっと、一氣に飲みこんでしまえばよいのです。一寸ぬらぬら寒天みたいな感じがあるのは、尿が一種のコロイド質で、結晶体を、沈澱ささずに支えているせいでしょう。

これで、子供達にはずかしめられた怒りがすうっと静まつたから不思議です。ある宗教家が自分の教え子の非行を叱る時に、自分の体を自分で鞭うって叱つたという話がありますが、どうも宗教にはマゾ的な要素があるようです。こうして体に異状が無いと判ると、今度は、一体どの位まで飲めるものか記録を作つてみたい、と思うようになりました。ある薬品の大瓶に半分以上飲み干すことが出来ました。水だつて、これだけ飲めば、しばらくは、胃がはちぎれる程いっぱいになつてい

ると思います。これだけの量の尿は一ぺんには集まらないので、前日からの尿を集めておいたのです。出たのをすぐ汲んで飲むのと違って、ひんやりと冷えた、塩からい尿が、ごくろぐろりと胃袋の中へのみこまれてゆくさまは、自分がやっている行為ながら、感動的でした。全く現代では、どの分野もすべて誰かが既に手をつけて、たいていのところまでは究めつくしているので、私達が前人未踏の事をやろうとすれば、尿を飲みこむ記録を作る位の事しかないのです。

尿は味からいっても潮水そっくりで、ぬるぬるした感じを別にすれば大して飲みにくいものではありませんが、飲みこんでしまったあとから、しだいに気持のわるさが増してくるのです。一昼夜も瓶の中に尿を置いておくと、底の方へ、古くなった酒のおりのような、どろどろしたにがりのようなのが沈澱しているのです。そのぬらぬらした感触がなかなか取れません。それに、水やお茶だったら飲んで間もなく忘れてしまえるのに、尿は、すでに消化してかすになった不要なもの集りなのです。消化されるはずもなく、いつまでたっても胃袋の中にどんよりたまっている感じなのです。尿をのむより一寸前に食べればかりの食物の方は、もう消化して腸へ移

っている感じなのに、液体の尿の方がいつまでたっても動かないのです。胃袋も、勝手のちがうものが、たんまり注ぎこまれて、もて余している気配なのです。四時間以上もたっても少しも減った感じはありません。遂に尿は胃袋から出なくなって私はビニールの袋をのみこんだオットセイのように新陳代謝がとまって死んでしまうのかしらとも思えて来ました。それでもまだ、私は口から吐こうという気にはなれませんでした。折角苦心して、やっこの思いで飯みこむことの出来た便ですから、そうそう簡単に吐き出すわけにはゆかない。という決意がありました。

こうしてじつと胃袋の中に居られると、いやでも胃袋のひだの間に、どんよりした姿で谷間に満ちた新しいダムの水のように、冷くよどんでいる黄色い小便を想像せざるをえなくなります。その数日前に、テレビで、胃力メラのうつした胃の内壁の動くさまを見たばかりなので、あのてらてら光る胃の粘膜の表面に、邪魔物扱いされながら小便がじつと腰を据えているさまを思い描いてしまい、まるで今、破門になりかけながら教会にへばりついている私のようなだと思ひ始めてくるのです。胃の中の尿を思い描いたり、口の中に残る尿の舌ざわりを思いだしたりしていると吐

きそうになるので、その度に飴をしゃぶって忘れるようにつとめました。

それにしても、食べたパンや肉が小便と一緒に混ぜられ、胃の中でゆすられていると思うと、どうもあまり、すがすがしい気分ではありません。

▽ 4 ▽

ところで、前の実験で自信のついた私は、同じやり方で大便も呑みこむ所までやってみようと、いよいよ固く決心するようになりました。もう小便は実験済みなんだから、あとは大便だけだ。わけはない。という気もありますし、又天下広しといえども、実際に糞尿を呑み込んだ者は私以外にはあるまい、という変な誇りを持ちたい気がありました。大体私は、幼少の頃は牛馬の糞が靴の裏についても汚ながる人間で、級友から、からかわれる程だったのに、その同じ私が、自ら進んで糞を口に入れたいと願うようになるなんて、全く、何という運命のめぐり合わせ、心境の何という変化でしょう。しかし、それには、私をここまで痛めつけた世間が悪いんだ、という気持があります。「お前達は俺に、やれ、つきあいだの何だのと、手前勝手な理くつをつけて、こっちのいやがる酒を飲ませるけれ

ど、俺にとっては、酒と較べれば、まだ糞の方が呑み込み易い位なんだ」と、言い返してやりたい気持で一っぱいなのです。しかし私は例によって、その憤りを全然顔色にさえ表すことなく、まるで自分の体が敵の体であるかの如く、糞を詰め込もうとしているのです。「俺をここまで追いつめたのは貴様達なんだぞ。これで俺が死ぬるようなことがあったら、人に恨みがあるものか無いものか覚えておれ」と言いながら、実は死んでしまったのでは恨みが晴らせるはずもなく、又、便を食べても恐らく死にはしない事を大体予測しているのです。

便の成分といえば、内臓の内壁の脱落したもの、大腸菌、消化したあとのかす、などでその臭気は、硫黄化合物のメルカプタン、黄色いのは、アンモニア分子が六角形に手をつなぎ合ったような構造をもつウロロピンである位の事は本に書いてあります。寄生虫の卵位あるかもしれませんが、よそのまま子が寄生虫だらけになって死んだ事がありますが、私は何とかして、寄生虫位、駆除出来るでしょう。大便の成分表だけ見たところでは、これが命にかかわる程の害をするとは思えないのです。それでも、何しろその形状といい、色彩といい、臭気といい、口に入れ易いしろ

ものとは申せません。この時の私の心の中はなかなか複雑です。又、その心理の裏には、世間から迫害され、嘲弄され、村八分にされた挙句、世間の人間という人間がすべて、見るのもいやになり、その反動として妙な狂おしい、ひん曲った、極度の自我愛、ナルシズムが生じ、その極として、自分の一番醜い風景、自分の一番醜い部分、自分の糞に、最大の愛情を注ぐという心理があります。人が私を醜いと言って迫害するならするでよい、私は、その醜い私の中でも一番醜い、この私の糞を愛してやるぞ、糞の味方、糞の同胞、糞のシンパになってやるぞ、という、何ともかともつかぬ反抗心のあらわれなのです。しかし、それでも便をいよいよ紙の上に落して、じっと眺めてみると、到底口の中へ入れる気にはなりません。私は後に新聞などで言われたように、発狂して便の汚なさもわからなくなつて、こんな事をしているのではありません。実のところ私は便壺の中を覗きこむことさえ気味悪くて、めったにしたくないのです。理性も、なかなか発達した人間で、理論で説明のつかない事は承認しない主義なのです。今便が口に入れられない、と言っているけれど、一体その原因は何でしょうか。よく便はくさいと言われますが、今便を鼻

にすれすれにまで持っていて深呼吸してみるのが、ほとんどにおいは無いのです。屁はくさいですが、便の方はそれ程のおいは無いのです。かすかに感じられるにおいは確かに、良いにおいではありませんが、臭気のために口に入れられないという程ではないのです。思いきって、下顎の歯と下唇で、便を紙からそぎ落すようにして口の中へ掻き込みました。それは、一寸でもちゅうちよしたら吐きそうになるので、一気にやってのけたのですが、もし横で人が見ていたら、何か空腹者が、久しぶりに御馳走にありついて、むしゃぶりついたようだと言ったに違いありません。さて口に入れてみると、においも無かったです。味もほとんど無いのです。一寸酸っぱいような味はありましたが、豆腐のおからより、もっと味が無いのです。砂糖きびを噛んで吐きだしたかすを、又口へ入れて見た時のように味が無いのです。小便は液体ですから口一っぱいに濡らしましたが、便の方は、水銀がガラス容器を濡らさないのので、どうしてこれ程気持の方が不潔がるのか理解に苦しむ程なのです。あまり物足りないのので、さくさく噛んで歯型を入れようとしたら、忽ち吐気を催し、口がかあつと、鞭を打たれたライオンのように開き、危く吐きそうになり

ましたが、一生懸命に何か綺麗なものの事を考えて吐気をなだめました。舌にのせる迄でもどんなに決断力を要したかしのれないのですから、そうかんたんに吐くわけにはゆかないのです。便がこんなにまで吐気を催すのは主にその舌触りのせいです。素足で大便を踏んでみればわかりますが、足の裏で踏んでも気味のわるいものを、舌にのせるのですから、気味悪さは想像に余るものがあります。しかしどうも舌の方が、足の裏より触感鈍いように、足の裏で感ずる程の気味悪さは感じませんでした。それより便を吐いてしまったあとで、舌を紙で拭いたら、用便後お尻を拭いた時のように紙が黄色く染まったので、改めてぞつとし、一体自分は何と無謀な事をしてゐるのだろうと背筋が寒くなりました。

とにかく、便を食べたいという誘惑に一度とり憑かれると、丁度下賤な女に恋愛をしたようなもので、嫌だ嫌だと思ひながら、やりとげてしまうまでは脱却出来ないのです。朝も夕もそればかり思ひ、仕事も手につかず、そわそわし、便意を催すたびに、今度こそ食べてみようか、と思ひ、紙にまで受けて口許まで持って行きながら結局棄ててしまうのです。

ですから、とうとう一思ひに口に入れ、何

も考えないようにして、ぐぐぐ、と呑み込んでしまった時は、やっと思ひを遂げたという嬉しさで一っぱいで、天にも登る心地で、これで死んでも思ひ残しはない、と思ひのでした。呑みこむ時喉の入口のへんで、とてもにが味がしました。口の中は味によって感ずる場所がちがうので、にがさは扁桃腺のへんで感ずるのでしようが、あの薬のようなにがさはきつと肝臓の消化液の味でしょう。幼時より体が弱くて薬を飲むのに馴れた私は他の人より容易に便でも呑めるのでしよう。

こうして大便そのものを呑みこんだ以上、口の中を汚ながつてうがいするのも変だと思ひ、とうとうがいもせずすませてしまいました。そして、さあ今度こそだえ苦しむような反応が現れるぞ、と手に汗握って待ち構えていました。大便の時も小便の時と同じで、呑みこむ瞬間より、胃に入ってしまったからの方が気持が悪いのです。よく腐ったものを食べたりして腹が痛くなる前に、腹が気味悪く冷くなつて、いつまでたつても暖まらず、自分の腹が、魚屋のタイルの上にねている魚の腹のように冷くなまぐさくなつたように感ずるものですが、今の気分がちやうどそれなのです。そして、魚を洗つたあとのぬるぬるした生臭い汁をのみこんだように、口の

中がぬるぬるして気持がわるいのです。用意したクレオソート薬を呑むと、しばらくは落着きますが、再び、口の中が便の舌触りを思ひ出し始め、絶えず心をひきしめていないと、今にも吐気を催して、折角のみこんだばかりの便を吐いてしまひそうなのです。便は小便の時よりもっと居心地悪そうで、便の塊のようすさえ胃壁を通して手にとるよう判る感じなのです。

便は、胃液で消化するはずはありませんから、食物と一緒に揺すられてゐるうちに表面からどろどろとけて崩れていつて、食物と大便の混じり合つた粘液が、腸へと流れてゆくのでしよう。便を以前、ビール瓶にぎつしり詰めてみたことがあります、しばらくして栓はずすと、まるでシャンパンのように、もくもく便が溢れ出してくるのです。便の醗酵によつて便の隙間に炭酸ガスが生じ、このガスが便をこんなに溢れさせたのでしよう。それと同じ原理で、便がげつぷになつて食道を逆流し、口もとまで出て来て臭気を口腔の中へ発散しては、又、ずるずると胃へ戻つてゆきます。

こうして便のげつぷが出続け、八時間も、そのげつぷに悩まされ続けたのです。便の塊は決して硬いわけではないのに、喉の奥をぐ

いといえぐりとするような思いがし、その時、両眼からぼたぼた涙が落ちます。喉の奥を押さえると涙腺が刺激されるのでしょうか。こんな事を続けていたら喉頭癌になりそうです。私自身が勝手に口へ押し込んだ便でありながら、世間の人によって、無理やりに押しこまれたのだ、という風に意識されるのです。何かしら、私みたいな、ちっぽけな個人の力ではどうにもならない大きな力によって無理やり口をおし開かされて、ねじこまれた便であるような気がするのです。「もうこんなに虐めないで。これまででゆるして」と、幼児のようにゆるしを乞いたくなる程なのです。

私が余り立派な働きぶりでないで、本部からビショップが派遣されて、私に忠告したのを思い出します。神職だからといって、お上品ぶる事はない。教会内で秩序を紊す者はなくれ、と言ひ、イエスさえ、教会の前の商人共を追い払われた話を引用するのです。ゆるしの気持とか、相手への愛のために相手がなくれないのではなく、インポテンツが強姦出来ないように、私は人をなぐる事がどうしても出来ないのです。しかし、人をなぐれない、という事だけのために、私が人より一段能力が劣っているように言われたくはないのです。そういえば私は、真剣な顔という奴

がいやなのです。しんと静まり返っている群衆を見ると、むしろ不安になり、少し野次つてくれる事を願いだすのです。服装でも一分の隙もないようなのはいやなのです。真顔の人を見ると、真面目な人だという風には感じないで、何という偽善者だろう、と感ずるのです。その結果、私は服装がだらしく、いつもにやにやしているという結果になり、人々はそんな人間のいう事を真剣な態度で聞く気がしない、という事になるのです。

事情はどうであれ、私が今面目を一新し、本部の人に私を見直させ、破門にならずにすむ道はただ一つ、教会で私を侮辱する態度をとる者をぶんなぐる事だけなのです。この世は食うか食われるかで、相手を罰しなければ自分が罰せられるのです。しかし私には、そんなにして、生存権を確保する事が出来ないのです。

私は次のような心理状態に陥ってゆくのです。私は他人をなぐるからこそ出来ないが、事自分に関しては、こんなむごい事だって出来るんだぞ、というわけです。そういう風に自分を意識しつつ、餓鬼の子を一喝する代りに、自分の口に大便を、ぎゅうぎゅう言いながら押し込んでゆくというわけです。

よく道徳的に立派な大学の先生などの中

に、他人を責むるに寛大、自己を律するには厳格であつた、という風にほめられている人がいますが、私もその一典型らしいのに、自分一人私を立派だと言つてはくれません。自分一人に関する限り、どんな事でも忍んでみせると思うのに、他人に対しては、窓をあけて下さい、という程の命令も、なかなか言えない私なのです。

大便の味は色んな味の集まりだが、特に注意をひいたのは、全然、食道が蛤のように口をとざして、入るのを拒絶する程の妙な味の膜が表面を包んでいるという事です。

そのために便秘の便をけつって押し出す以上の努力で気張らないと、喉元を塊が通らぬのである。マッチをすった時の硫黄の燃えるにおいと共通なおいが便の表面を包んでいて、この物質が、唾液と接すると鉛のような膜を作つて、消化液が便の中へ浸透しにくくしているのです。メルカプタンの一種でしょう。このために胃袋の中でもじっと冷く塊のまま、二十三日間もたつて、やっと腸へ移つたような気分になった。腸では腸で、腸内ガスを発生し、腸が張り裂けるのではないかと一時不安になった位である。

便を食べたあと嘔吐を催して困ったら、あかあかと燃える炭火に顔をあぶるのがよい。

炭火の赤さには、どんよりねっとりよどんだ便とは全然まる反対のふんいきがある。炭火はかつかと明るく、一切のばい菌は、この熱の中で死滅霧散して、清浄潔白だ。その熱は元気で愛情にあふれている。便のようぬるま湯のような、それでいて冷えびえとした、しんねりむっとりしたところは全然無い。色だって、便はにえきらない、黄のような、草色のような、褐色のような色をしていて、次第に空気で酸化されて茶褐色になっていく。全く膿のような、かびを団子に丸めたような、全くこの世のかすだという感じがする。味も色もそうだ。何の味もなく、体内にまぎれこんだ異物も、ごみも、不要になった体内分解物も、皆ここに溶け合って、一つの芋虫のような糞になっている。これをも一度口の中からほうり込んで、養分がまだ残っていないか、消化し直させてみるなんて、ご苦労な思いつきだ。浄水池に糞尿を流し込んだような思いである。水道管に便がぎっしりつまっているような思いだ。便には一寸にくにくに似た味の部分がある。燐か硫黄の化合物だろう。しかし便はどんな食物とも異なり噛みごたえというものが全然ない。

大便を親指大位食べただけで、ますます私の主義に凝り固まって来た。

大体、便意を催おして来るや否や、さあ糞を食べようと思う。そう思っただけで、はや口の中は唾も乾いて、からからになり、膝ががたがたふるえだす。目も恐らく吊り上っているだろう。

人間社会を構成している家族とか、社交とか、制度とか、道徳とか、愛とかいう概念がこの時程縁遠く思われる事はない。以前好きだった書物も、音楽も、今の私には、何の関心も呼び起さない。私は自分の口が便の臭気でおっているような気がするので余り他人の傍には寄らないようにし、人とあまり顔つきあわして話すことはしない。それどころか、他人なんか、おおよそ、犬か猫のように、私の関心の対象の外に弾き出されてしまい、雑踏の中においても無人の境を行くような心境なのである。

大便なんか便壺の中へ不要のかすとして惜しげもなくどしどし棄ててしまい、そのせいで新陳代謝、食欲共に旺盛で、血色もよく、肌色もつやつやして、声音でも張りがあって生き生きとして明るい、世間の健全な奴らなんか、別世界の人間のように思える。私にとっては縁もゆかりもないものだ。私の血管には大便がどろどろ流れているのだ。

私は今や小便を飲んで渴をいやし、大便を

食べて飢をしのぐ事が出来るような気がして来た。そうなればもう食うために働き、本部の見まわりにびくびくする事もいらなくなるのだ。

しかし又、私は何かしら便を食べてから他の栄養物も併食しているのに、何か元気がなくなつたみたいだ。

実は便を食べたいという、以前の燃えるような欲望はすっと消えてしまった。しかし、この気の進まないのを無理矢理行なうのこそマゾヒズムの真の姿ではないか。糞はいつまでもたっても消化する気配もなく、胃に便がもたれている間は、寢床につく気にもなれない。横になって眠ったが最後、体の中で一斉に細菌が繁殖を始め、夜中の二時頃ふっと夢にうなされて起きてみると、熱が四十度も出ているのではないかと思えるのである。

糞食をしてみると大便がいわゆる不要な排泄物とは到底思えず、私のマゾヒズム用の愛玩の玩具のように本当に、いとしく感じられ、美しい硝子細工のコップのセットや、コーヒー茶碗のセットを買って来て、それを次々と毎日の大便で一っぱいにしてゆくのである。

以前は便通が悪く、下痢便が多かった私が、この奇癖に凝りだしてから、いつも不思議なくらい理想的な大便が、規則正しく出る

のである。一体この便の中で、何パーセントが、二度腸を通過した便だろうか、と、湯気の立っている便を鼻先に近づけながら、ふっと思った。

◇5◇

神様は女性をこよなく美しくお作りになったのです。女性が醜いということはありえないのです。アダムは土をこねてお作りになったのに、イブの方は、土からではなくてアダムの肋骨からお作りになったという意味は、イブの方は排泄などしない清い存在としてお作りになったという事なのです。それなのに排泄現象が女性の体にあるのは、女性の心が男性にかぶれて罪な事をいろいろ抱いているために、それが世にも汚らしい便となって出ているのです。真に信仰の深い女は昔から排泄現象をしませんでした。たとえばマリアなどそうです。お聖書の中のマリアに関する記事の中にマリアが大小便をしたという記事がありますか。無いでしょう。つまりマリアは一生潔かったのです。ですからキリストを産む時にも醜い行為を一切しないですみ、産褥で血まみれになる事も無く、水蓮の花が咲くようにキリストをお産みになったのです。どうです。貴女もそんな清い体になりたいと

思いませんか。たとえば貴女のその洋服をみてごらんない。貴女のその豪華なコートはどうです。貴女にとってそのコートは必需品ですか。そうではないでしょう。そんなものが無くても貴女は決して風邪など引かないはず。そのブラウスも貴女は日曜毎に別のを着て教会に来られますね。神様はしかし、そんな意味で貴女に美しくあって欲しいとは思って居られません。ほら、神様はあの頭上に輝いている太陽です。衣裳にこだわる程あの太陽から私達の真の姿は見えざられてしまします。何故貴女はそんな衣裳に使うお金を教会に寄捨なさいませんでしたか？

貴女の髪を見てみましょう。そのごてごてクリスマスケーキのように盛り上げた髪は自然の姿と言えるでしょうか、さあ貴女は心のおごり、驕慢という罪を犯しています。貴女が排泄現象を止められないのはその罪のためです。さあ貴女の胃袋や腸の管の中まで一切美しく洗い潔めるために貴女は排泄現象を否定しなくてはなりません。貴女はもう排泄現象は止んだのだとお信じなさい。

信じましたか。では天にまします私達のお父様に近づくために、その衣服はすべて脱いで教会に寄付なさい。貴女の体は今や真の信仰で輝いていますよ。ですから、シュミーズ

もパンティも着けてなくても決して醜くはありません。道ですれちがう人々も貴女の足許にひざまづいて貴女を拝みこそすれ、気のふれた女だと嘲笑するようなことは決して無いでしょう。

さあ、便意を催して来ましたか。それを否定なさい。つまり、この新聞紙を貴女のお尻の下へかざして、その上に便をなさい。それが出なかったことにするために、再び口の中へ入れて貴女の体内へ送りこむのです。紙の端を持っている指先に、自分の便の重みと熱が伝わって来るでしょう。呑む事を拒絶する人間に無理に吞ませる事は難しいものです。が、貴女のように進んで便を口へなすりこんで下ざると、こちらも仕事やり易くていいです。罪を抱いた事は貴女の体のせいです。体はそのため苦しまねばなりません。その苦しみ、便が喉もとを通り過ぎる時の喉をえぐるようなにがさによって、貴女の体は罪を忘れてゆくでしょう。貴女は便を食べる事によって糞を出すのが、どんなに罪な行ないであつたかが性根に入るでしょう。おお、貴女は吐き気を催し、醜い音を立て、両眼は涙にうるんでいますね。しかし吐いてはいけませんよ。吐いたら又、そのどろどろの、御飯と便の混り合った粘液を胃液と胆汁の混り合っ

た茶褐色の、茶かすのようなものを、ここの洗面器に受けておいて、唇をつけて残らず啜らせますよ。一塊りにまとまった便より、どんなに食べるにいいか、やってみなくても想像がつくでしょう。底の黄色いよこれまで唇で吸いとらせますよ。そうされるのが嫌なら吐くではありません。おなかの中に異物のようにもたれている大便の感触をお忘れなさい。さあ、讃美歌を歌い、清い天使達の事に、聖者マカレンコの苦難に思いを致しなさい。昔修道院では便所を設けず、皆こうやって来たのです。修道女達に出来た事が貴女に出来ないはずがありません。

民江さん、貴女もおごりの罪、驕慢の罪を犯していますよ。貴女はこの頃めつきりとピアノがお上手になった。先日コンサートなんか貴女は音楽の妖精になったかと思われましてよ。しかし民江さん。貴女は現実を忘れてはいけません。貴女の胸に手をあてて、よく考えて下さい。貴女は本当に音楽の妖精のようでしょうか。あんなに美しいのは衣裳とスポットライトのせいで、本当は以前より一層醜くおなりではないでしょうか。貴女は音楽の下手な、音楽を知らない人達を軽蔑し、見下すような気持ちに一度も捕えられたことがないと誓えますか。その心をなくさない

限り、音楽はむしろ貴女を罪に導く悪魔の使用でしかありません。今日限りふつり音楽をやめて私のところへ通いなさい。たとえこの世で収入の道を失っても、この世で名誉を手に入れかけておりながら身を引く事になっても、貴女の魂が、ゲエナの火に投げ入れられるよりはましです。さあ、反抗し始めましたね。しかしその反抗は貴女の心の反抗ではないはず。悪魔にみいられた貴女の体の反抗に過ぎません。

ほら、貴女は今こう思っています。自分が女だから男の暴力に負けたのだ。くやしい、と。いえ、そうではありませんよ。そんな風に感ずる限り貴女の魂は永久に煉獄から抜け出せません。貴女が理性的でない点が男性より劣っているのです。腕力ではありません。その証拠に、貴女のはずかしがっているものを男性としての私の目は、むしろ最も讃美しているではありませんか。

貴女のはずかしがっている分泌物の臭気さえ、私は水仙の花粉のにおいを連想しているところなのです。化学的にもそれは構造が似ているのですよ。芳香と悪臭とは僅かな密度

の差にすぎない事が証明されています。にがいズルチンをうすめると、甘くておいしい味になるように、顔をしかめる屁のにおいさえ、薄めれば香水のにおいになるのです。絶妙な催淫剤です。

貴女は何千円も出して香水をふりかけていますね。愚かな所業です。自分の体から出る真の芳香を忘れるなんて。貴女はもう少し自分のありのままの姿に自信を持たなくてはなりません。ほら貴女の便が出て来ました。ほう。尖の方は茶褐色で、奥にあった方ほど色が薄黄色になっています。茶色の硬い表面にねぎのかみ切ったくづが一つばい混じっています。魚の小骨もくつついていますよ。まだ魚のにおいも残っていません。よくかいでこらんなさい。この世で不潔なものとしてされている大便が実は市販の清涼飲料水程も不潔ではない事が判っています。ほらここに並んでいる瓶詰の黒いものは、全部私の大便です。どうです、このぬめぬめした、粘土のようなものは便壺のふちにこびり着いているものと同じです。壺の底のぬるぬるした肌ざわりは、貴女の日夜お使いになる美容クリームの感触と同じだと思いませんか。貴女の、便に対する嫌悪感には一体どれ程の根拠があるのです。

寄生虫ですって。寄生虫だって生物ですからね。本当に健康な、新陳代謝の順調に行な

われている体の中には、たとえ入っても、そう長く住む事は出来ないものです。流れる川の中にばい菌は住めないようなものです。蛆虫が表面に一っぱいいるのが、そんなに気味が悪いのですか。これは昆虫の幼虫に過ぎません。肌の接触愛の気味悪さだって本当にばい菌の入りこむ可能性のある陰部などより、腫などの方が気味悪さを強く感ずるというのも変な話ではありませんか。一寸肌が、便の酸性によって荒れる位のもですよ。人体は元気な時は血液がアルカリ性で、疲れると酸性になるのです。便は疲労のかすですから酸性なのも当然と言えますね。ごらん下さい。今こそ貴女はステージでファンに拍手をされた時よりずっと大衆の中にとけこみましたよ。キリストの博愛もいわばこんなものではないでしょうか。多くの人の、多くの信者達の疲労のかす、精神の進歩して行った脱皮のあと、ぬけ殻、ぬけかすがここに堆く溜ってよどんでいるのです。その多勢の人の悩みのかすの中に貴女は素裸で文字通りとびこんだのですから、感心なものですよ。これでこそ貴女は真の信仰の生活に入ったと言えますしう。貴女の新しい宗教生活はここから始まる

のですよ。いわばこれは貴女にとって洗礼の一種でしたね。

◇ 6 ◇

女に便を食わせたって、ただ、嫌がる女の醜い顔が見物出来るばかりで、どの位い食べにくい、一体どんな味がするかは自分でやってみて始めて判ったことなのだ。女という他人にかかずらって、この楽しみのふんいきがこわれるなんて嫌な事だという気がする。ただ女が自分で便を呑みこむ気になった時の表情というものは魅力的だ。

便を食って以来、便を口に入れた時のくしゃくしゃとした顔のゆがみが、それっきり取れず、私のふだんの顔になってしまった感じである。

それにしても口というものは、ごみ箱のように入れさえすれば何でも入るもののだという感を深くした。青酸カリだってこの分だと簡単に呑みこめるかもしれない。ほのぼのと明るい気分になって来た。

気持悪く食うと食あたりするというが、便位気性わるく喰うものは無いはずなのに、便を食っても、下痢さえしなかった。ものは何でも、やってみなくては判らぬものだ。

便がこんなに体に害が無い以上、この位い

虐めるのに都合のよい品物は他に無い。

この頃では、便は食べないまでも、必ず一口口に含んで味わってから、吐くようにしている。口腔の形に合わせて団子になって、湯気のたっている便は、においまで馬糞そっくりだ。

勝手な空想をしながら、実は良子や民江に教会の乱脈ぶりを本部へ投書されて、私はくびになったというのが真相である。私は便所の汲取口が往来に面している家の便壺に夜に行っては体を侵すのが病みつきになった浮浪者である。固い便ばかりの集まりなら漬かるのも気持がよいが、下痢便や、できものの膿だの、肺病の喀血だの、生理の脱脂綿だの、嘔吐だのセルロイド灌腸のかすだのが混じっていることが多いのでぞっとする。蜘蛛の巣や鼠の死骸があるし、電球まで棄ててあるのが危くもある。又、便所の紙が多くて、音がしてびくりとすることもあるし、紙屑かごに入った気がする事もある。また後、出てから体を洗う時、紙が膏藥のようにくっついていてるのに気づいたりする。又、洗うのがなかなか難しい。便など付着力も無いようできて、水を浴びた位では落ちない。手でこすり落さないといけないが、自分の体の表面を残りにまなくこするという事は、案外難しく、肘の

裏側や、肩胛骨の間が残っていて、いつまでもにおっていたりするのである。

一度は、帰宅中の良子に土手の上でおそいかかった事もあるが、空想とはうらはらに、ハイヒールで足の甲を踏みつけられ、とび上ったところを股間を蹴り上げられて退散してしまった。女のくせに男の急所をとっさの場合すぐ思いつくなんて、全くぞっとする。それに豚のようにぶりぶり肥えていて私とまる反対だ。私の空想に登場する彼女とはちがって、なよなよしたところはかけらも無い。

教会の祭壇に並べたてた私の大便入りのグラスやカップは、調査の時、私の発狂の証拠として大いに役立ったようだが、私はまだ、良子が嘲笑して言ったように、「しょうこりもなく」その癖を止める事が出来ないのだ。牛乳の空瓶をよその家の玄関口から盗んで来ては、中へ私の大便をするのに使うのである。肛門に瓶をあてておいて排便をすると、屁の音も瓶の中にこもっている。今では熟練して、瓶の外へ便を洩らすような事は無いから、駅の待合で、人前で平気で糞をしてのけてやる。更に人前でセーラ服を着て、糞瓶をさげて歩いてやるのだ。どんな恰好しよう、文句を言われる筋合はない。

私は死ぬる時には胃に一つばい便を詰め込

んで便壺の中に潰かって死にたいと思う。教会帰りの少女が糞をたらふく食べさせられて、公衆便所に潰かって死んでいたそうだが、私もそんな風に死にたいと思う。

頭を使う仕事をすると小便がよく出るが、小便と脳は、そんな風に密接に関係があるのだ。それを今の私のように、出る小便を全部飲みこむので、脳にしだいに水がたまり、頭も鈍って来た。私の頭のよさを一向役立てようとしないうちに、こんな風にして復讐してやるのだ。体全体もふくんで、手も、しもやけたように太くなって来た。体も何だかだるくて、自殺したいならもってこいの気分にまでなる事に成功した。

鼻や口のほとり、股や背中に吹出物がふえつつあり、今や人々も良心の苛責なしに、私に石を投げつけることが出来る。私が泣いていても、ものもらいの膿がしたたっているのしか見えないだろう。



■ 原稿募集



新鮮な感覚の小説を募集しております
207 ページをご参照ください

描きだしたM心理のヒダ

『宇能鴻一郎「密戯」の紹介と批評』



安 東 泉

一

芥川賞作品『鯨神』はまことにつまらない作品であった。少なくともわたしにはそう思えた。同人誌というより、学生仲間の、学友会誌にでもよくありそうな、ヤケに肩ヒジ張った、大言壮語ばかりの、中味はカラッポな作品に思えた。少なくともわたしには退屈以外の何ものも残らなかった。

『鯨神』は映画にもなった。スペクタクル向きには、格好な見せ場もあり、またおあつらえの題材でもあったので、早速に映画化の運びに至ったのであろうが、その出来栄えのいかんはわからない。遂に見ずじまいだった。

ともかく、巨大な鯨が主人公だ。武神のように猛々しく、武神のように不死身で、武神のように大胆かつ速意の妙を心得た達意の闘士だ。大変カンのいい鯨だった。

設定自体は大変おもしろい。興味を引かれる。この鯨を追って、宿命的に対立するふたりの鯨とり、人間と鯨の死闘——日本にはあまり例のない勇壮なスケールの大きい、大海洋活劇を期待させる十分なものがあつた。

だが結果は、学生の習作じみたものとなった。鯨はハリボテの、あるいは特撮向き、動きのギクシャクしたゴジラ式鯨となり、登場人物も類型の見本みたいな男たちが、やたらに大声でわめきちらすだけである。

これは映画の話ではない、小説がそうであった。

《鯨神》が芥川賞を受けたことについては、今さら言うことはない。それぞれ選者の好みもあるし、芥川賞だって、その間には出来不出来があつて、芥川賞作品にもピンからキリまでがある。やむを得まい。

わたしは《鯨神》の作家、宇能鴻一郎は、もはや間もなく、消えて去るであらうと思った。内面に、真実としての一かけらの問題もかかえていないことが、じきに暴露されるであらうからであつた。

ところが、このたび、新潮八月号に所載された《密戯》を読むに至つて、わたしの宇能鴻一郎観は一変した。

《密戯》は大変な作品だつた。そしてそこには、《鯨神》におけるがごとき、若気の至りといった、不毛以外の何ものでもない、ただどしい理屈ばつたものは、すっかりあとを消していた。同じ作者のものとは思えなかつた。

《密戯》は批評家の間にあつては、あまり評判はよくなかつた。というより、初手から毛ぎらいされて敬遠されてしまった、という観が深い。

内容のない、張りボテ作品の《鯨神》が芥川賞をとり、あまりにも異様なその内容のために《密戯》は読書人の不評を買つた、これはあながち主観からのみいつているつもりではない。その批評基準をなす、牢固として抜きがたい道德意識について皮肉を言っているつもりである。

文学作品上におけるモラル、をと、氣負いたつた心がだれの心にもある。小説の中に何かを求めようとする。人世に処する道、人間とは何かという設問、多くの人々の間のカットウを通して、そこに示されたモラル文学は、遂に一つのモラル——だと信じる。どんな

によつた世界を描いていようと、それも一つのモラルの探求のためだとされる。

モラルにさほどの重点を置かない、芸術至上主義者たちも、無意識のうちにその時代のものとして致馴されてきたモラル意識から、全く全的に自由であるわけにはいかない。

各人には各人の、それぞれのモラル観というものがある。その本能的とも言えるモラル観は、各人に生理的な反応を示させる。その人の持つてゐる性的傾向が、批評以前に生理的に傾倒し、あるいは反発する。元々はモラルなどとは何の関係もない、その人の生理的体質に還元されることである。

《密戯》が不評であつたのは、すべて生理的なものからくる反発であつた。文学作品の批評といったものではなく、また本当はモラルの問題でもない、生理的なものである。

「露出症」が潜在するときは、人前では常識以上に羞恥し、隠したがるということだ。そのものには、素手でズバリとさわられることに対しての無意識裡の嫌悪といったらよいか、ともかく《密戯》は不評を買つただけ、それは性の本質に迫つてそれだけ成功したといえるのである。

少なくとも、吉行淳之介の《砂の上の植物群》なぞという、にせ物でないことだけは事実である。

失われつつあるものへの愛惜、歴史へのノスタルジー、原始世界への憧憬を一方で強力に推し進めつつある現今のいわゆる宇宙時代の目まぐるしい転変の時代にあつて、セックスはモラルという名のプラモデルとして、それ自体の内奥にある激しい原始の炎はかき消

されつつある。

アナトール・フランスは嘆息して言った。

「あの黒ん坊ども、あのインディアンどもは新聞も読まなければ、オペラ座へも行かず、裸でくらしているそうさ。素晴らしいではないですか。彼らは契約によってなんか結婚しないが、そのくせ裏切られもしない。彼らの小屋、彼らの丸木舟、彼らの貞操の話こそ聞きたいものだ」

それを語り聞くことでわれわれは回復したいのだ。人間として蘇生したいのだ。

《密戯》とはインディアンのたわむれである。インディアンとは、可能性を無限に内包した裸の人間である。たわむれとは、抱束や習慣的規範を脱した欲するがまま、そのままの行為である。

この稿は、いわゆる《密戯論》ではない。また《宇能鴻一郎論》でもない。そのこととは別の、《密戯》の紹介である。紹介がてらその要所々々のダイジェストをこころみてみたい。その中での取り方、採否は各人自由である。

この中にはいろんな問題やテーマがある。それは「裏窓」が永年培い、求めてきた問題であり、そのテーマと通じる。もはやアブ文学なぞという、特殊なジャンルのものではなく、「裏窓」のテーマや問題が、一般文学の中の、避けられぬ大きなテーマや問題として特に認識され始めたことの証左でもある。

「裏窓」の予言的な性格が《密戯》のこころみと重なり合って立証される。

《密戯》の中には、いろいろな要素が、実に雑然と混じ合って入り

まじっている。しかしこれを整理してながめてみると、その基調を成すものは、はっきりとマゾヒズムだということができる。

だが、その位置づけは一先ずここでは待つことにしよう。それより、《密戯》そのもののダイジェストから始めねばならない。

《密戯》は一人称小説である。私とその妻が主要人物である。

「私は外国系資本の会社に勤めていた。大学での専攻は美学であったが、たまたまペルシア語の能力を買って招いてくれた畑違いの会社に思いきりよく就職、勿々に私の郷里でもある福岡支店にまわされ」

ているという設定で、その妻は名を蘭子、

「正式の妻ではない。私が大学院の修士課程のころ、学習院の学生だった彼女と青山O・A・Gダンスパーティーで知り合い、強引に口説き落として同棲していたにすぎない」

「蘭子の父親は資産家の支那学者で、物堅い人物であっただけに娘の家出には赫怒し、義絶を考えもしたらしいが、近い将来に式を挙げ、籍を入れることを仲人を立てて確約したので、しぶしぶ諦めたのであった」

ふたりの間には子どもが居ない。また子どもが将来できるということも決してない。

「その心配のないことは、私と蘭子だけが知っている。幼時にお多福風邪をこじらせたせいで、私の精液にはほとんど精子が数えられぬのである。」

このことは学生時代、インタアンをしていた友人と面白半分に調べ合って発見し、のちに正式の検査も受けて確定していた」

「検査の結果が判ったとき、多少の落胆を感じはしたものの、とりたてて不幸だとは思わなかった。私の感覚では、子供は家庭の構成員であるには違いないが夫婦生活においてはむしろ邪魔者の印象の方が強かった」

こういう感覚は、SよりM派に近い感覚である。大別していうと保守派にSが多く、進歩派にMが多いという傾向が指摘できる。ということは、S派の方が家庭主義者で、子供をよくかわいがる。M派は子供に存外冷たい。家庭や結婚という制度から自由であろうとする。

「生活の協同者として、蘭子はまことに理想的であつた。ハイ・ヒールをはくと五尺八寸の私と頭が並ぶほど背は高いが、モダン・バレエをやっていただけあってよく均斉がとれており、しかも大女にありがちな動作の粗暴さや心理のキメの荒いところは全くなく、むしろ自分の従順さをいつも楽しんでいるような、並の女以上に女臭い要素を持っていた」

蘭子は私にとって理想に近い女であつた。このような女の設定の仕方でもMの対象としては理想的だと言ふことができるであろう。ふたりの間には、技巧と情熱と精力の消耗、——それから懶惰と物悲しいほどの自由と——倦怠——序幕はこうしてあげられる。

二

「蘭子を飾るのが私のただ一つの趣味だったので、俸給と株の配当からなる収入の、かなりの部分を彼女の身のまわりの品に割くのも惜しいとは思わなかった」

出入りの衣料洋品店の外交員に、ヒツジさん、というあだ名の男

が居た。

「ヒツジさんは、背が高く顔の小さい、浅黒い肉のよく締まった、なかなかの好青年であつた。黒目がちの目は機敏によく動いたが、知的な光はなかった。友人の紹介で最初家に来たときに、苦勞して育った身の上話を聞かされてから蘭子が同情し、来るたびに身のまわりのものや、季節の小ものなどを二つ三つ誂える習慣であつたがやがてコルセットやパンティースまで彼から求めるようになり、私も自慢かたがた彼に蘭子のバスト、ウェイスト、ヒップのサイズを計らせたりするほどに信用されてくる、しだいにセエルス・マンらしい図々しさを發揮しはじめ、この夏にも海水浴がえりに女友達を三人つれて現れ、私の留守中に座敷で昼寝していったことがあつた」

このヒツジさんが、或る夜蘭子ひとりの時、にわかに豹変して彼女を暴行した。

「『応接間でサンプル見ているうちに、急に立ちあがって、殴りかかってきたのよ。——人間が変わったみたい、むきになって、物も言わずに殴るのよ。——気が遠くなるまで——気が遠くなっているうちに、二階へひっぱりあげられたのよ。——叫んだけど、駄目だったわ』

私はなるべく屈託のない声を出そうと努めて言った。

『とにかくできたことはしかたがないから、早く忘れてしまいなさい。さあ、早く風呂に入って、何もかも洗い流してしまふことだ。いいかね。すぐ来なさい』

私が新しい衝撃を受けたのは、タオルを持って前にまわったときである。むっちりとした乳房の、苺のようなピンクの粒々に囲まれた突端を横切つて、そこには月の暈に似た紫いろの齒型がくつきりと残っていた。

『君は——君は、されたんだな。ヒツジめに。あの若造に。ここに接吻を』

湯の玉の溜ってきらめく、毛深い臍の穴にも同じ痕跡は認められるのだった。

『ああ、ここにもされたんだね。接吻を。そのほかのことも』

『そうよ』

『ここには？』

『そうよ』

『ここにも？』

『そう』

さて、怒りと嫉妬のさなかにあつて私が激しく勃起していたのはどういう心理と生理のメカニズムによるものであろうか。蘭子をタイルに転がすと、私は若者が触れたと思われる肉の柔かな部分にいちいち口をつけ、舌と唇で洗い潔めはじめた」

妻が犯されることにひそかな喜びを感じる心理が一部の人のにある。これは決してサジスチックな願望からではない。S派からいえば他人の妻を犯すことであり、暴行することであっても、自分の妻が犯されることを望むものではない。

犯されることを望む心理を一步進めると、合意による姦通を望む心理となる。妻が自由意志によって、他の男と通じることを望むのである。凌辱感の深い谷間に向かって、傾斜を転がり始める。

「世の中にはありふれたことではないか、という弁解も、私は抜く目なく試みてはいた。自分から進んで、女房に浮気させている連中もいるではないか。早い話がお前の友人のMだ。妻との新鮮な愛情を回復するために、彼は学生を五千円でやとい、妻とホテルに行かせ、その間喫茶店で震えながら待っていたではないか。これしきの

ことに、そんなに苦しむほどの、お前は野暮天だったのか。自尊心の問題だって？ 自分をあざむくのも大ていにするがいい。お前の自尊心とか恥の感情とかがどれほど御都合主義の、いいかげんのかは、お前がいちばんよく知っているではないか。ごくわずかのまだ確実ではない快楽の前でさえ、お前の自尊心や恥とやらは容易に頭を下げるではないか。早い話が昨日の、浴室でのことはどうなんだ。蘭子の体を洗ってやったあとに、お前がしたことは——」

「蘭子の全身に接吻したあとで、私がしたことは、もっと奇怪であつた。

さいごに芳香を放つ繁みのなかに顔を埋めたとき、ふと口のなかに覚えのある匂いが流れ入って来た。あきらかに蘭子に属するものでない栗の花の匂いを嗅いだとき、それが何であるかを瞬時に私は了解していた。面をのけぞらせ、流し場に唾を吐きちらした。だがとろりとした液体はすでに口中に入っていて生臭い匂いは執拗に口腔から鼻腔にかけてひろがってゆき、いつまでも薄れぬのである。奇怪だというのは、その次に私がむりやり自分を強いて、嫌悪、反発、不潔の感情を押し殺すと、花びらの内側にあらためて口をつけ直していたことである。蘭子の胎内に残ったものを一心に吸いとりはじめたことである。こんなものを蘭子のうちに残しておきたくない、という衝動はたしかにあった。だが、それだけだったろうか。何の形ででもあれ、快楽がこの行為に少しも伴わなかったであろうか。私が覚えていたのはただ苦痛と紙一重の激しい昂奮であり、この昂奮はあとで記憶をたどって呼び起こしてみると、快楽とすりかえて解釈することも可能な種類のものではあった。

さしあたって次のことだけは言えた。このとき私が感じていたのがもし屈辱にまみれた地獄的な快楽であったとしても、それは肉体的・精神的・はるかに多く精神的な次元のものであった。抽象的な快楽であった」

精神的、抽象的な凌辱にまみれた快楽というのは、マゾヒズムにおいてほかにはない。そこで私の行為は、当然のように、次の場面に引き続くのである。

「私は身を起こし、辛うじて息をつくと、目を閉じたまま身じろぎもせず横たわり、どこか菩薩像に似通っても見える蘭子に、そのままでの姿勢で排尿し、若者の残滓をすべて洗い流すことを要求したのである。物理的にはそれで洗浄の目的が達せられぬことは十分承知していたのであるが、心理的には有効なはずの行為であり、しかもこの場で排尿を促すために、それ以上の適切な口実がなかったのである。それまでも浴室での愛の行為のときはきまって蘭子に同じことを要求したのである。その夜も蘭子はほとんど躊躇わずに要求に応えたのであった。

ここからあとは、はつきりと快感であった。清浄な熱い液体を面に注がれ、傷ついた蛇のようにのたうちながら、私は滝に打たれて悟入の瞬間にある白衣の行者さながらの、靈肉の一致した絶頂感に浸っていた」

三者関係とウロラニズムが見事に結びついて、マゾヒズムの快感に酔うというのである。これはまことに、高度なマゾヒズムである。遠藤周作の《月光のドミナ》より、数等上の理解を示したものである。

私はこの不可解な情欲がそもそも何に由来して起こったものか、それを記憶の中から探り出そうとする。

「高校三年の、運動会の予行演習のことだった、と思う。珍しく体を毀していて参加を許されなかったために、私は教室に居残って窓から仲間の練習を眺めていた。

壇上の一人を中心に放射状に整列した女生徒たちは、めいめい股の下に小さな影を持って、大地のイボのように立ち並んでいた。笛の合図につれて女たちの大群は行進し、散乱し、輪をえがきつつ分裂して、グラウンドに切り紙細工めいた模様を作るのだった。

別の一隅では少女たちの大群が、白シャツに黒パンツだけの姿で、無限の行進をくりかえてしていた。ほとんど顔見知りのその少女たちが、いつもは隠している脚を太腿まで出して、しかも長く見せるために付け根近くまでたくし上げて、つまりはめいめいの若い性器を黒い布一枚でやっと隠して、際限もなく歩いてゆくのであった。

昂奮のため乾いた羞恥。すれちがう男女の集団のみだらな応酬。みだらさに気づいていないための、いっそうの猥褻さ。ふしぎに心をそそる汗の匂い。粘りつく陽射し。そして結局は、砂埃と太陽にほとんど公然とさらけだした夥しい女陰、男根の羅烈と、行進にもなうその一斉の、規則正しい運動——」

この遠い私の記憶は、何と本誌連載の水尾究氏の《体当たりM論》のイメージと、似通っていることか。

三者関係から、抽象的に広げられた女性群という海の中へ、埋没したいと願うに至るMの道程が、その結果を先にして、ここでは未来のイメージを予告しているのである。

「この夥しい若い肉に乱婚させることができた。じっさいおれが犂王や紂王であったなら、この数百人の若者と少女を、醜い無力な

自分ひとりの官能のために奉仕させて、あとは獅子の檻へでも投げこんでしまえたら！」

と私は考える、と書いてあるが、ここはちよつと前後とツジツマが合いかねる連想のような気がする。あまりに通俗にすぎると、通俗に対しての妥協として、実感のない感想が述べられているような気がする。

桀王や紂王であるよりも、若い性器を隠すその一枚の黒い布に身をあやかりたい、と考えるほうが、《密戯》のテーマからしては自然だと思う。

三

私はいつその凌辱感を深めたいがため、蘭子にいろいろなことを言わせる。

「さあ言っておくれ。ヒツジめとほくと、どちらが美味しかったか。いや、本当のことを言わなくともいい。ヒツジさんのほうがずっとおいしかった、と、そう言ってくれ」

「——ヒツジさんの方が、ずっとおいしかった、わ」

「あなたなんかせんせん下手で、詰らないわと言っておくれ」

「あなたなんかせんせん下手で、詰らないわ」

「もっとどこかで勉強してらっしゃい」

「もっとどこかで——」

この会話のあたり、実におもしろいところである。会話が次第に発展し、現実のものとして欲望が形をとり始める。

「そろそろ蘭子が子供を生みたくなっていることは判っていた。何でも嫁の罪にしたがる風潮から脱けきれない親戚の一人が、蘭

子を石女ではないかと母に言ったことも、とうに耳に入っているはずである。そうでなくとも、遊びにくる近所の夫人の幼児を借りて抱きしめたり頬ずりしたりしているときの動物的なまでに陶醉しきった表情からも成熟した女としての蘭子のその欲求が、どんなに根深いものかは十分に推測できる。

たしかに蘭子は他人の精液によってでも母親になる権利はあるはずだ」

私は猟奇雑誌の広告欄で鰐淵という男と知り合う。鰐淵は醜い下卑た男であった。

「こんな化け物に、蘭子を好奇心の対象にされて、黙っていねばならぬのか。かといってこの男を断って、又はじめから新しい相手を探すほどのエネルギーはやはりない」

三人のあいだに、しばらく、沈黙があった。

『厭よ』と、蘭子がやっとかすれ声を出した。

『どうしても厭。やっぱり厭だ』

私は躊躇った。さんざん躊躇したあげく、私はようやく立ちあがった。ズボンの財布から五千円の紙幣を一枚抜き、

「せっかく来てもらって悪かったが、妻がああ言うのでね。これは帰りの車代にでも」

後になってこの鰐淵から、私は十万円ばかりをおとし取られたりするのであるが、

「社が私を経営学研究のために米国に留学させることを決定したのは、その年の暮である」

翌年夏、渡米、ニューヨークに住む。ニューヨークの下町で白黒混血の彫刻家ペルヴィスと知る。そのあたりが日記体になっている。

「ペルヴィス、ハ何トナク気味が悪い。逞マシイ銅イロノ大男デ、死人ノヨウニ物静カデアリナガラ、時々爆発スルヨウニ陽気ニナル。黙ッテ何カシテイルトキハ、檻ノ中ノ沈鬱デ熱ッポイ獣——例エバ、犀ノヨウナ感シダ」

「ペルヴィスガ言ウ『オ前ノワイフハ全ク可愛イ。トコロデ相談ダガ、オ前ノワイフヲ一晚、オレニ貸サナイカ』『条件がアル。蘭子ハアクマデモ私ノ妻ダカラ、愛シ合ウノモ私ノ目前デシテ欲シイ』ペルヴィスハ物凄イ力デ私ノ背ヲドヤシツケタ『何ダ。オ前ハナカナカ話セル男デハナイカ。オ前ガソナ趣味ヲ持ッテイルトハ知ラナカッタ』」

「蘭子を私は浴室へ行つて着替えさせる。ペルヴィスはすでに白いブリーフ一つになって分厚い脂肪層に包まれた黒光りする肌を、岩のような筋肉に覆われた息づまる全身を露わにしている。動物の檻に溺んでいる糞尿の匂いに近い体臭が部屋にみち、箱のような胸郭を膨らませて誇示しながら立っている」

「蘭子はペルヴィスの肩に爪を立てたまま、目を硬く閉じ、はつきりと震えている。キモノの前が割れ、艶やかな丸い膝頭がのぞいている」

「苦痛よ起れ。嫉妬よ存分に荒れろ。暴風のように私を苛むがよい。苦しみが甚しければ甚しいほど、芳醇な美酒になることを私は知っている」

「もう一本の毛だらけの腕が、蘭子の衿の合わせ目にわけ入った。蘭子は一旦拒みかけたが、すぐ身を波うたせ、耐え難げな吐息をつきながらも膝をひらき、私が観察しやすいように工夫してくれるのであった。私を愛するあまり私の希みに応えてくれたのか。それとも現場を夫に露出することに、新しい、異常な快楽を覚えていたのか。

か。

私はうめいた。歯をくいしばったが苦痛は止まなかった。蘭子の指は、いまペルヴィスの導くままに、蒼筋浮かべてブリーフから突き出し、脈打っている黒漆の忿怒尊に絡みつき、私にも覚えのある愛撫を始めたのである」

「たしかにこの図は美しい。二人は蓮華台に乗じた歓喜相の菩薩としか言いようがない。こうしてそれを仰いでいる自分は、随喜渴仰の衆徒というところか。いやいや、きつと大威徳の脚に踏まえられている一匹の邪鬼のように醜いのだ——だがこの苦しみは何と快いのだろう。二人が美しく尊く力強く、自分が醜く卑しく力弱いことを、いやというほど知らされることの、何と素晴らしいことだろう」マゾヒズムの三者関係を、ここまでわきまえて書ける作家は幾人居るだろう。またこのあたりの呼吸が理解できる評者は幾人居るだろう。とはいいいながら、《密戯》のMが、Mとして真を衝く部分は単にこれだけの三者関係を描く部分からのみではない。

Mでなくとも、よほど想を練るに練達の士ならば、あるいはこの程度の場面あたりまでは、奇をてらう形においても描出できるかもしれない。人妻を寝取り寝取られる、という形の変形だからである。それを現代風なアレンジで編曲し直すと、この程度の珍奇な曲ができるかもしれない。作家宇能鴻一郎が、あるいはMでなくともここまでの理解は示せるかもしれないのだ。

しかし、実は、単に理解や想像だけでは、どうしても解き得ない個所があるのだ。微妙な心理のヒダの奥というべきか、M心理のかゆい所をちゃんとそのとおり心にくくもかいてくれたところがある。この細かなところは単なる理解だけでは果たし得ない、作者自身がMでないと決してわからないところだ。それを《密戯》では書

いてある。

「完全に酔いに浸るためには、あと一押しが肉感のほんの小さな助けが必要だと思われた。ほとんど涙ぐんで私は蘭子の白い足をつかみ、銀いろのペディキュアを施した、やや不揃いなのがかえって可愛い指を口にふくんだ。柔かそうでその実は硬い脛脛を愛撫しながら、こう言ったのである。

『可愛い蘭子——いつものように、ぼくの額に足を当てておくれ。そして、軽く小突いておくれ。踊りの練習のように——君の柔かいいい匂いの、ひんやりする足の指で』

ベルヴィスの膝の上で、目をとじて身を震わせながら、蘭子は即座に私の願いをかなえた」

三者関係の中での、この細かな芸当を忘れずに書きこめる人は、マゾヒスト以外にはでき得ないのではないか。

姦通しながら、相手の胸の中で目をとじ、無意識に足指を動かしたその前にはいつくぼる夫のひたいを、軽い舞踏のそのようにたたき続ける、——《密戯》の白眉とも言える部分である。

『初めは、ほんとにちっともしたくなかったんだ。赤ちゃんが欲しかったのと、あなたがお喜びになるから、無理にしたのかもしれない。——でも、もう駄目よ。私の体が、それをしなくちゃいられなくなってしまうているのよ。もう直らないわ。どうしよう。どうしたらいいのかしら』

蘭子の悲痛な叫びの通り、二人のたどりつくところは自ら死を選ぶところ以外にはなかった。ということは、同時にこの作品自体を死の淵に投げこむことであった。

《密戯》のテーマが、一般市場の一般総合誌の上で、どれだけの発言力でもって理解されうるか、これは多大の疑問であった。これが

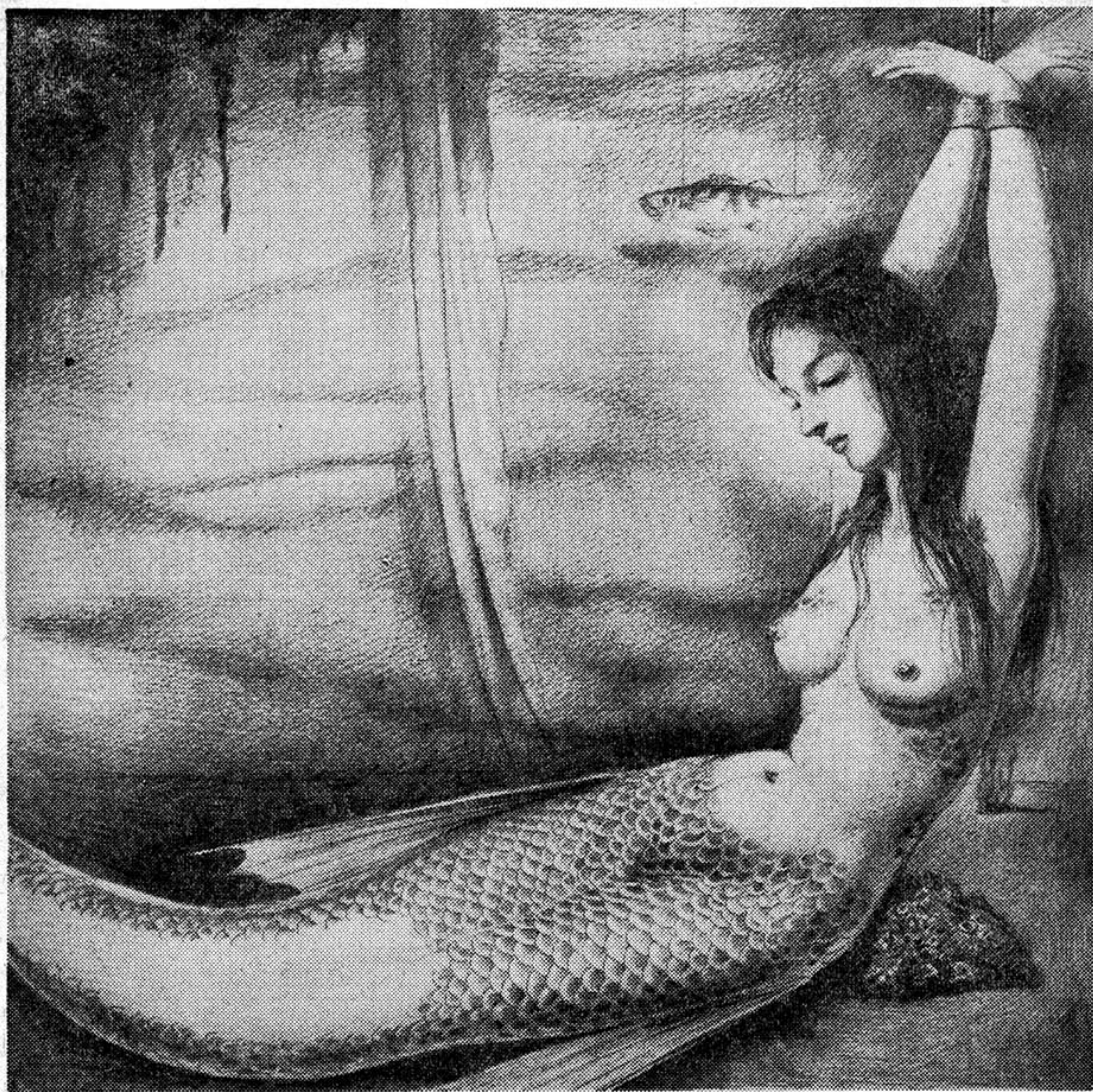
むしろ、或るゆとりを持った遊戯であるか、《砂の上の植物群》並のこしらえ物であるか、あるいは柴田練三郎ばりの通俗Sの立場かであれば、読者も評論家も適当に息を抜きながら楽しんだかもわからない。

ところが、《密戯》では息が抜けなかった。あまりに作者がそのものと密着しすぎて、生な告白を聞かされる時のような息苦しさがついて回った。

しかもその内容は、Mでないと容易に理解できぬ代物であった。《密戯》が不評に終わった所以がここにある。

もう少し題材を突き放してみる必要があるのではなからうか。作者があまりにも痛切に息をはずませすぎたので、読者に嫌悪感を先に与えてしまう仕儀とはなった。残念なことである。





——浦島太郎を知っているかね？

——カメをいじめていた貧しい子供たちにお金を興えて助けてやった漁夫だね。その浦島が玉手箱をもらって故郷の浜辺へ帰ってきてフタを開けたとたん、みるみる白髪のおじいさんになったというんだろ。乙姫さまから、どんなことがあってもフタを開けてはいけなと言われていたのだ。その先があるのかい？

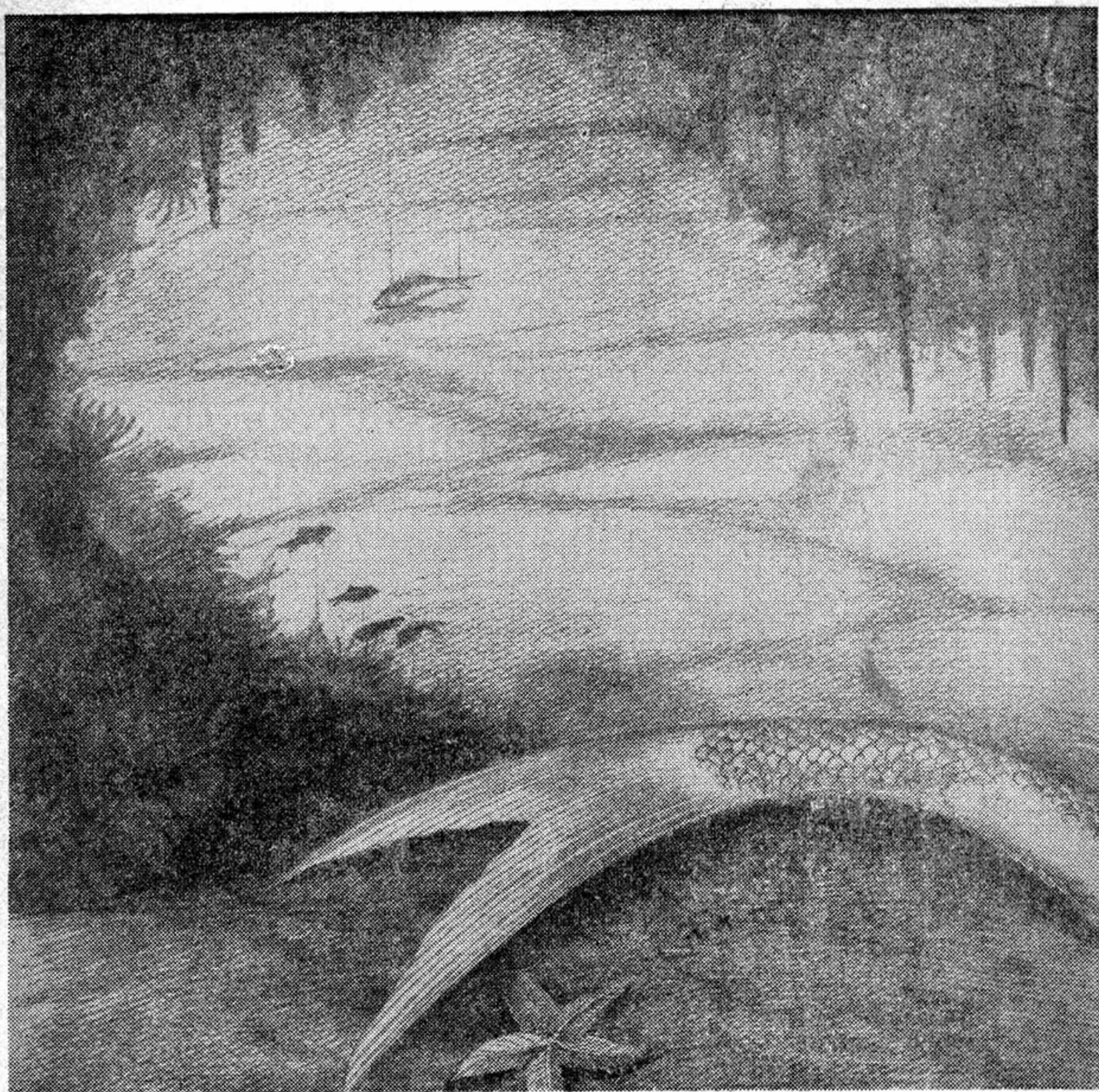
——あるさ。この絵を見ろよ。

——ははあ、これが乙姫さまっていうわけか。

——そう先回りされては話しくい。覗いてはいけなと制御されれば余計に覗きたくなるのが人の常さ。つまり人の心は、飢えた乞食みたいに賤しいってことだな。

——それとこの絵と、どういうつながりがあるんだね

——浜辺でカメをいじめていた子供たちは家が貧乏だった。だから玩具を買うことができずカメをいじめて遊んでいた、というのは、まったくウソだ。でたらめだ。



——というと？

——あれは六尺禪の大人共だ。そしてカメというのは海女。美しい若い海女だ。そこへ通りかかったのが金持、おいほれの網元ってわけだ。カメじゃなくて海女を買いとったのさ。

——？

——船底一枚下は地獄、その上で働いている荒くれ共から救ってやった代りに海女部落へ案内してもらった次第さ。それから毎日毎日若い海女っ子たちの部落で、回春わが世の春をむさぼっていたんだが、ある日ふと漁夫労働争議を耳にし、急ぎょ浜へ帰らねば革命になると思ったのだ。そこで一ばん美しい海女を海底の洞窟へ、ちょうど絵のように陰匿したわけだ。金と色との欲ばり爺さんの業よ。よせばいいのに浜でギロチンよ。可愛そうのは今もって陰匿されているこの海女。見ろよ、だんだん人魚になっている……。

絵・中川彩子

鞭と女

——じゃじゃ馬は鞭で馴らせ——



戸山一彦

ふつうのショーに飽きたナイトクラブの遊客たちは、つねに新奇な刺戟を求めること、洋の東西を通じて変らない。

に女が投げつける短刀も、鮮やかな鞭さばきで、空宙でくるくると巻き落とされてしまうのだ。

まさに鞭の魔術！

英京ロンドンのさるナイトクラブが上演したフロアー・ショーはまさにその要求に答えたもの。

敗北した女の裸身を片手で支えて、男は凱歌をあげる——ショーの幕切れ。

「鞭の踊り」(ウィップ・ダンス)を売りものにする二人組の男女、ロスとラ・マヤが演じた「鞭と女」がそれである。

絶妙な「鞭の踊り」がかもし出す妖しい雰囲気、酔った観客から、夢から醒めたように一せいに拍手の嵐が浴びせられる。

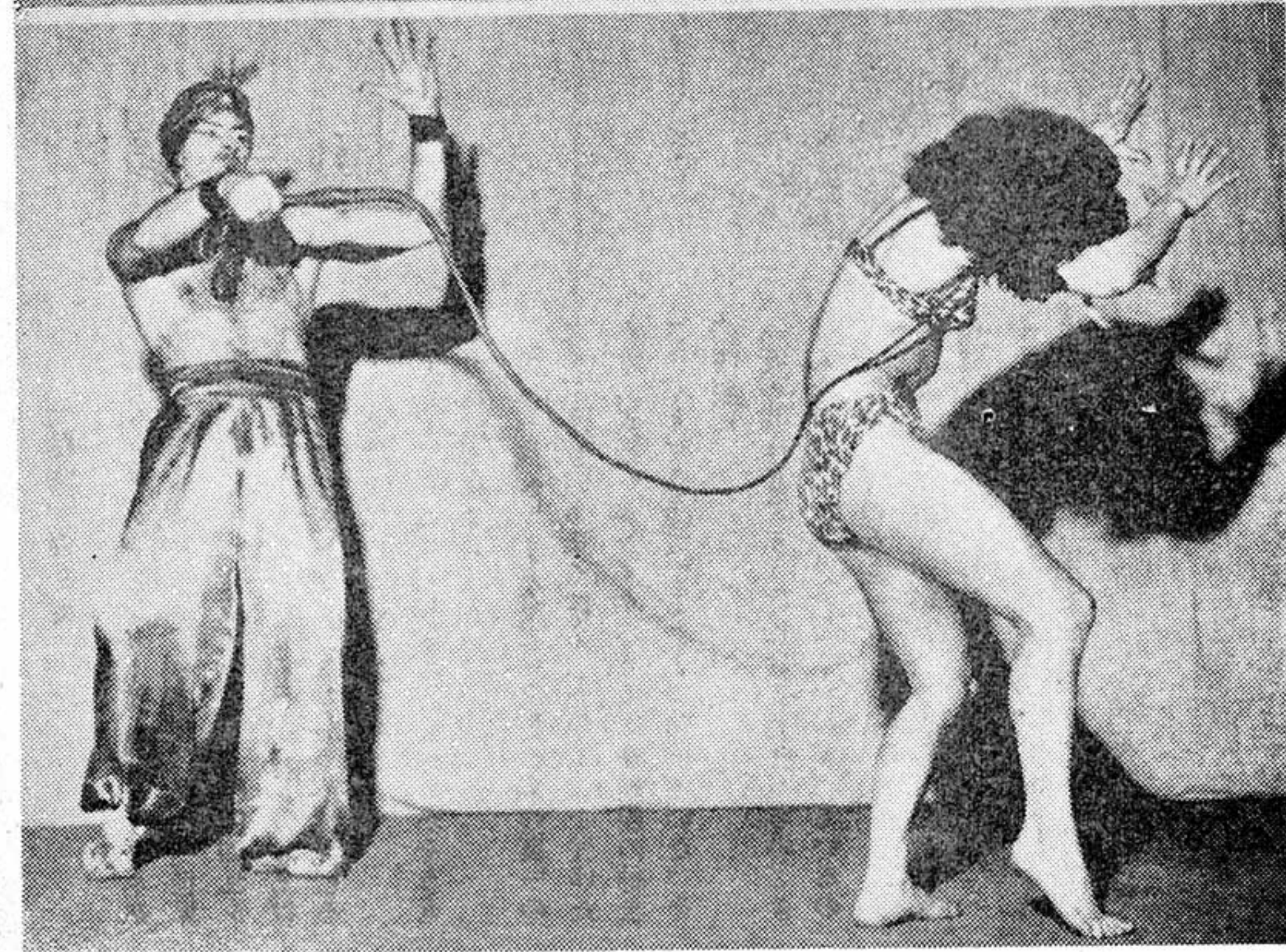
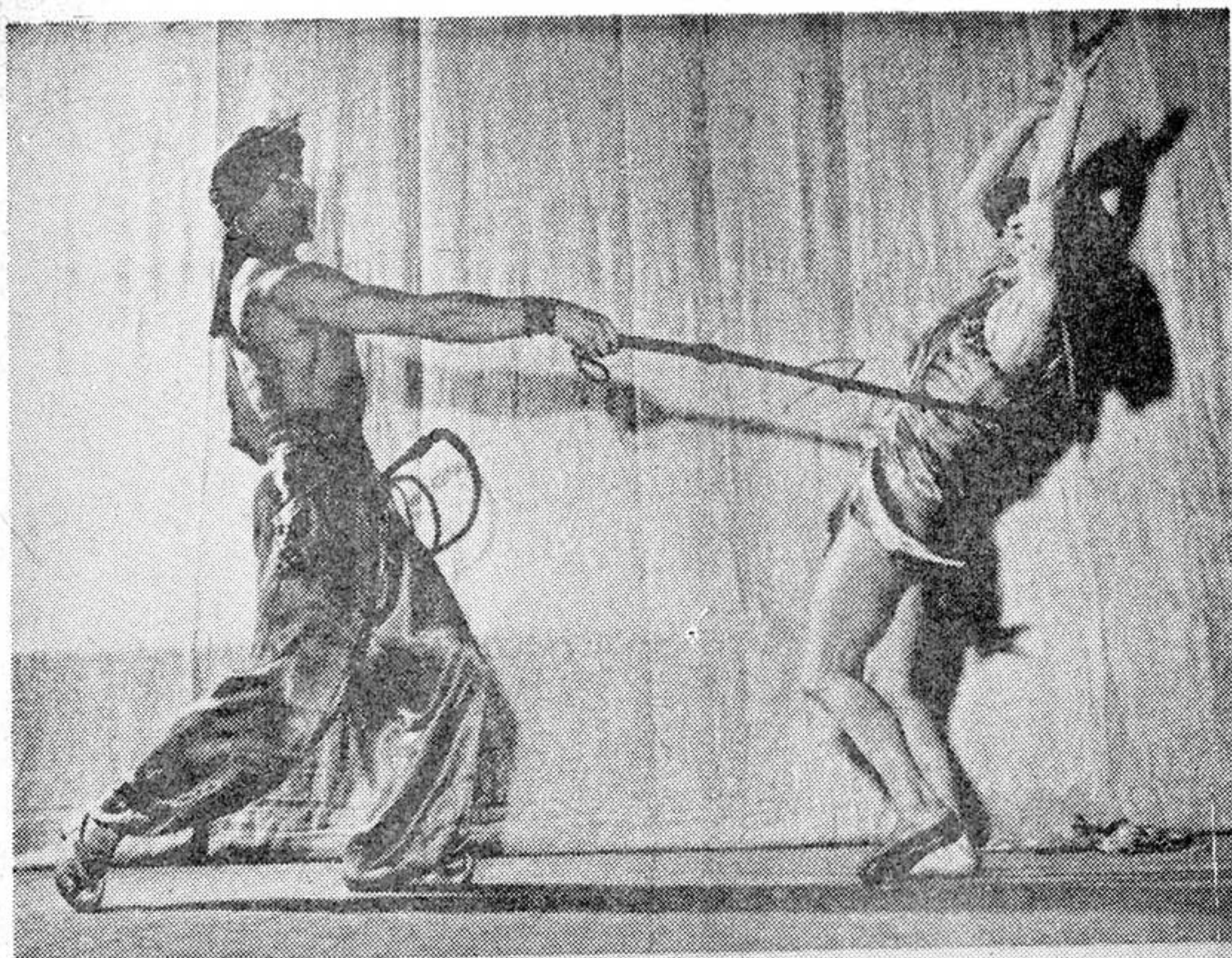
ダンスだから、もちろんセリフはない。が、男の手に握られた鞭の動きが雄弁にストーリーを物語る。おしゃべり女を男がたしなめるそのセリフが鞭に代えられているわけだ。

このショーは、シェークスピア劇の「じゃじゃ馬馴らし」を舞踊化したもので、長身で筋骨逞ましい男性の権化みたいなロスは、鞭使いのテクニクを王室騎兵隊に在任中に習得したそうである。

「お前のそのおしゃべりな口にカギをかけてやる！」と発声する代りに、ピシリピシリ鞭が鳴る。

パートナーのラ・マヤは、黒髪ゆたかなバレエ・ダンサー。彼女のしなやかな筋肉のコントロールは素晴らしく、鞭の一振りごとに、打たれた部分の肉の微妙なケイレンを正確に表現して、ショーを見る客の心をシビレさせてしまうのである。

逆襲を試みて、男めがけて必死

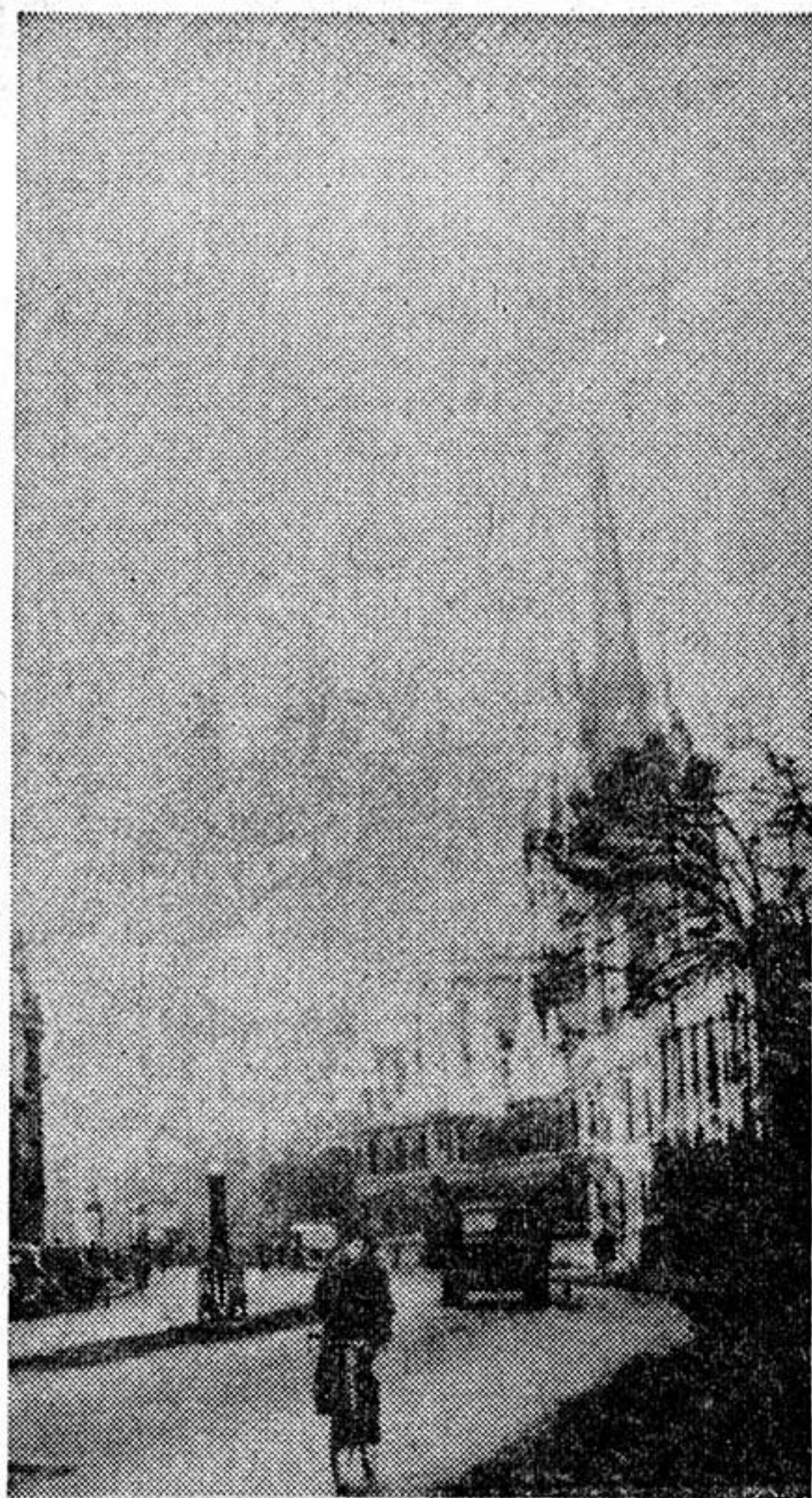


倒錯の自由を求めて

——英米のホモ紳士たち——

戸山一彦

▼ホモ大流行のオックスフォード大学



「裏窓」のミス

「世界の裏」のぞきシリーズも、もうタネが出尽してしまったのか、イタリア映画「世界の裏の裏」も、ただ目まぐるしく小間切れシーンを並べたただけなので、目移りするばかりで散漫な印象しか残らなかった。むしろテーマ音楽で保っていた感がある。

しかし、ここで別に映画評をやらかそうというわけではない。

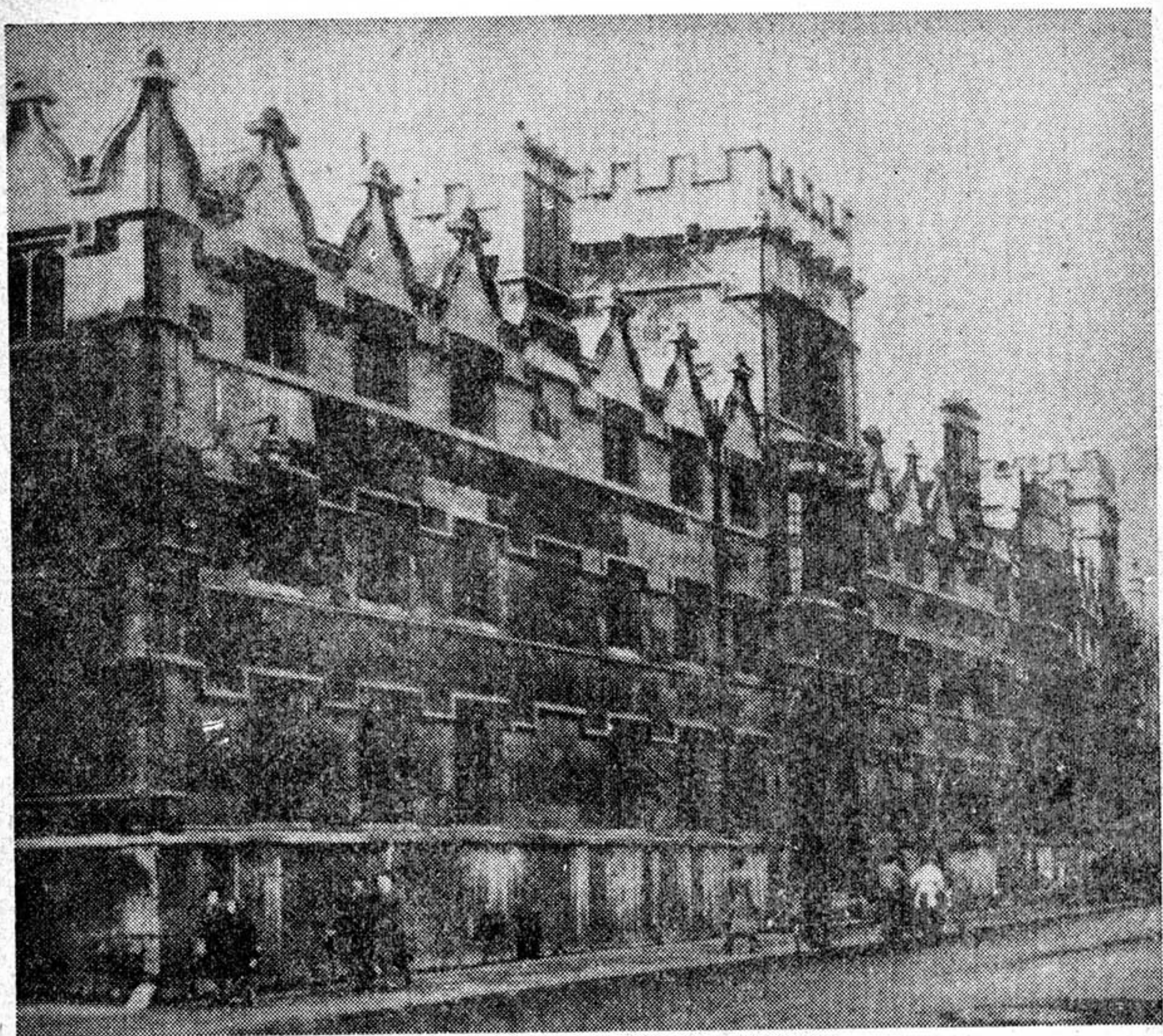
実は「裏窓」七月号で「世界の裏の裏」のスクリーンをいち早く紹介した中に、金髪ゆたかな「女性」がシルクハットに燕尾服の紳士スタイルで歌っているシーンが出ていた。その説明に、

「女の同性愛クラブにおける女性たちのごきげんな生態。シルクハットをかぶっているのが、男役専門の女性」

とあるのに合点がいかないからだ。というのは、映画を見たかぎりでは、

「女性が男装したみたいだが、実は、レッキとしたロンドンのホモ紳士たちのクラブで、「女性」に扮して歌っている男性」だからである。

もっとも、この種の映画を見に行くときのわたしは、暑い昼日中、家でゴロゴロしてい



でも原稿のハカがいかないから、
「いっそ冷房のきいた映画館で、昼寝でもして来るか」といった気分で出かけ、半ばモーロイ状態で半眼をスクリーンに向けている程度だから、あまり口はばったいとも言えないが、「裏窓」を引っ張り出して、問題のスチールをつらつら眺めてみるに、「やっぱり『女装』の紳士である」という結論が出た。
「裏窓」七月号（三九年）八四ページのスチール写真だ。ごきげんで歌っている「彼女は、たしかに金髪のカツラをかぶり、目ばりを入れて、得意満面だが、その得意な表情は女性が「男役」スタイルをしたことから来るのではなく、明らかに、男性が「女装に成功乃至は自己満足している」ところから来るようである。

ロンドンのホモ紳士

それはそれとして、わたしが小文を書く気になったのは「裏窓」のミスをあばくためではない。「世界の裏の裏」の一シーンが示すように、イギリスの上流紳士の間で今やものすごい勢いで「ホモ」が流行していることをお伝えしようと思ったからである。

ここで「紳士」というのは、貴族に次ぐ上流階級、つまり「サー」という称号者以上の

存在を指して言うのである。

すでに二年前に、これら上流階層の人たちの間に同性愛が目立って多いことについて、イギリス議会在特別委員会を設置した。ただし、

「同性愛はたしかに流行しているが、法律に反するものではない」というのが、委員会の正式報告の結論であった。逆に言えば、

「個人のセックス生活は、本人のみの問題であり、それがプライベートに行なわれて、公の秩序を乱さない限りは……という条件で認められた」という解釈も成り立つ。

それがあらぬか、光輝ある伝統を誇るオックスフォード大学でも、男子学生の間で同性愛が猛烈な勢いで流行している。彼らが卒業して、社会へ出て、一人前の紳士となれば、やはり「世界の裏の裏」に登場したホモ紳士のようにクラブをつくって、裏の生活を楽しむにちがいない。

ところが、ふしぎなことに、議会の特別委員会が同性愛を「公認」したことは、ホモ紳士たちに奇妙な反応をもたらした。「公認されたくない」という気持が、ホモ紳士の胸の底にあるのだ。

これは心理学者の領域かも知れないが、人間には法律の禁制を犯してみたいという心理

がある。何か法に触れることをするスリルが快感を倍増してくれるのだ。

女ぎらいの紳士たちは、男同志愛し合うことが法に触れる、しかも違法を覚悟で愛し合う——そのところに、はげしい喜びを見出すのである。だから、それが「公認」されてはせつかくの喜びも消滅してしまう。

そこでロンドンのホモ紳士たちは「プライベートに行う限りは」という「条件」を破り始めた。秘密のクラブから街頭へ進出して、路上でマンハント、あるいはピック・アップをしだしたのである。

彼らは立派な紳士であり、また金持ちでもある。快楽のためには金を惜しまない。貧民街に少年を求め、兵舎に若い兵士を追った。

こうしてシェークスピア劇の有名な俳優、サー・ジョン・ジールグッドや、イギリス外務省の高官ダグラス・ハーベイなど、トップ・クラスの紳士たちが、法律で「街頭淫行勧誘」と呼ばれる条項に引っかかって、逮捕され起訴された。昨年十一月のことである。

サー・ジョン・ジールグッドは罰金刑を課せられ、ダグラス・ハーベイは「相手」をつとめた十九歳の近衛兵と共に目下保釈中の身の上である。これらの事件は新聞には報道されなかったが、ロンドンのホモ紳士たちに方

向転換を余儀なくさせた。

大西洋を越えて

ホモ族の方向転換——彼らは街頭から再び秘密クラブに戻ったか。否！（もちろん一部の連中は、クラブの居心地よいコンパートメントで、公認されたホモの楽しみを味わっているが）ホモ紳士の多くは、海を渡ってアメリカへ向かったのである。

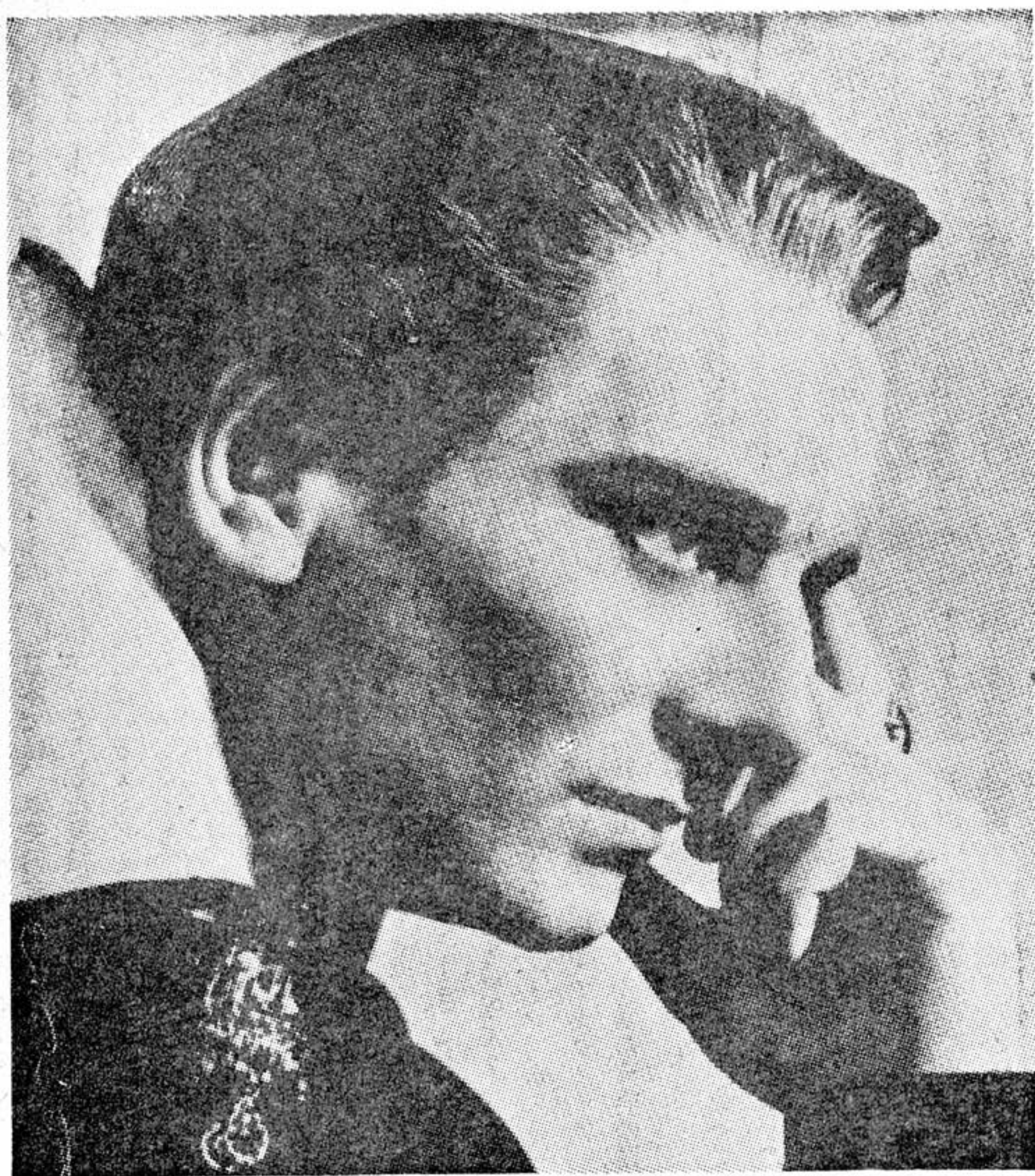
アメリカは自由の天地。そこには、世界最大の同性愛都市ニューヨークがある。

この二年間に、イギリスからアメリカへ、三万人もの人々が「旅行者」として訪ねている。その何十パーセントかは、アメリカの男性に憧れたイギリスのホモ紳士たちである。彼らは、スリルのない秘密クラブにひっそくするよりも、例錯のスリルを活気のある新天地アメリカ、とくにニューヨークに求めたわけだ。

当惑したのは、アメリカ合衆国国務省である。

イギリスからの「来客」たちは、爵位やナイトの称号をもつサーたちだから、そのタイトルによる特権から、簡単に「入国拒否」を発動するわけにはいかない。

そうでなくても世界一づくめのニューヨー



▼ホモ俳優サー・ジョン・シールグッド

クが、ホモセクシュアルの数でも世界一ということだけは頭痛のタネになっているところである。

ホモは社会のあらゆる層におり、年齢もまちまちで、ホモセクシュアル研究家はホモ人口二十万人（ニューヨーク警察当局は十万人ホモ自身は六十万人）という数字を出している。

運転手もいれば、大実業家もいる。白人もいれば黒人もいる。結婚して子供もいる中年男もいる——。女装して女ことばを使う「クイン」もいれば、半長靴などはいて、ゴツイ豪傑型の「ハスラー」もいる。

もっとも、クインやハスラーは数も少く日本という「リツ屋」、ホモ人種にセックスを売っている男娼で、タイムズ・スクエア界隈にたむろしている。

大部分のホモは、東五十丁目から七十丁目にかけて、西七十丁目、グリニチ・ヴィレッツジ一带に群がっているが、昼間はもちろんふつうの職業人であり、立派な社会人である。

そして夜は、上流社会のホモ紳士たちは、山ノ手の高級住宅街にひそかに設けられたクラブで、中流以下の連中は、下町の特等バー（いわゆるゲイ・バー）で「自分たちの世界に生きる」のである。

イギリスからの来訪者が、そのどちらでも「仲間」として歓迎することはいうまでもない。そういう組織活動もげんに行なわれているようだ。

——と、ここまで書いてくると、事のついでに、ニューヨークの「マタチン・ソサイエティ」はじめ、全米各都市に組織されているホモの団体について触れないわけにはいかない。

ホモの大集会

昨年八月三十一日及び九月一日の二日間にわたって、フィラデルフィアのドレーク・ホテルで、全米初のホモ集会が催された。

この大集会には、十指に余るホモ団体が全米各地から参加した。この集りを企画したのは「ECHO（エコー）」の四団体——すなわち、マタチン協会（ニューヨーク支部及びワシントン支部）、ヤヌス協会（フィラデルフィア）、及び「ビリティスの娘たち」と呼ばれるレスビアン組織のニューヨーク支部である。念のために書いておくと、ECHOとは、

E II EAST（東）

C II COAST（海岸）

H II HOMOPHILE（ホモ）

O II ORGANIZATION（組織）

というわけである。

日本では、ホモ同志の個人的な連帯感はいが、こうした組織的な団結、まして大集会などは、とても考えられない。しかし、自由の国アメリカでも、ホモたちが第一回の大集会を開くまでには、さまざまな抵抗を排除しなければならなかったのだ。

アメリカのホモ紳士たちが、全国的な集会を持つと考えたのは数年前のことである。だが、集会の新聞広告が出せなかった。お百度を踏んでようやく「ニューヨーク・タイムズ」にECHO大会の広告を載せてもらえた。これが先例となって「ワシントン・ポスト」紙及び「フィラデルフィア・インクアイア」紙に案内広告を出せたのが、今回の大会の成功の原因となったのである。

障害はほかにもあった。開会前日になってドレーク・ホテルが、契約を解除して来たのだ。

「ホテルの評判にキズがついては困るから」というのが、その理由である。これもスツタモンダ交渉したあげく、「ホテルに迷惑が及ぶような振舞いは決してしない」と一札入れて、ようやく会場の再契約に漕ぎつけることができた。

こうして、前代未聞のホモ大集会に先立つ

て、まず記者会見及び講演者のレセプションが行なわれた。前夜祭のパーティといった趣きで、翌日からのプログラムやサービスのリーフレットが配られた。

参加したホモ協会のメンバーはおよそ一〇〇名、一名につきホテルの宿泊料コミで一五ドルの会費を払っている。ただし「二十一歳以下」はこの集まりには参加できなかった。「未成年に対する淫行勧誘」という口実で、官憲が集会を妨害することを恐れたからである。

自由をわれらに

集会の模様をくわしく書くのはやめにしてそのポイントだけを挙げておく。

「ホモセクシュアル相互の尊敬」がこの大集会の基調になっていた。だから、出席者の服装も一様に中庸を得たものであり、突飛な人目をひく身なりのものはいなかった。いわゆる「クイーン」と呼ばれる連中は、主催者側から、

「帰宅して、適当な衣服に着替えて来るように」注意された。

もっとも例外はどこにもある。珍談をひとつ。

ホテルのエレベーター・ボーイが二人の女

性を個室へ案内した。彼は集会に参加したレスビアン組織のメンバーだと思っていたらしい。

ところが、二人がやがてその部屋から現われた時には、レッキとした紳士になっていたというのである。

さて、開会ののち講演に移った。

ワシントン地区のホモのリーダー、ボブ・キングは「少数者の権利」をアピールした。

「われわれの仲間、いま全米に千五百万人いる。米領土内の『少数民族』としては、黒人に次ぐものだ。しかし、われわれはいつまでもセカンド・クラスに甘んじているものではない。あらゆる面において『少数民族』と同じ自由と権利を得るまでに成長発展しなければならぬ」

講演者は、多数のホモ指導者のほかに、著名な学者作家が登壇した。たとえば、

×ワデル・B・ポメロイ博士（キンゼイ性科学研究所主任、精神病医）

×アルバート・エリス博士（性に関するベスト・セラーズの著者）

×ハロルド・グリーンワルド博士（日本でも広く読まれたコール・ガールの著者）

×ドナルド・W・コリー（作家。「アメリカのホモセクシユアル」の著者）

×R・E・マスターズ（「ホモ革命」その他の著者）

などがおり、このほか集会開催地であるフィラデルフィアの牧師、弁護士など、ホモセクシユアルに関心をもつ有識者がホモについての意見を開陳したわけである。

これら講演者たちは必ずしもホモとはかぎらなかったが、聴衆はもちろん一人残らずホモセクシユアルだった。

主な意見をかいつまんでみよう。

組織活動の必要性

▼ワデル・B・ポメロイ博士。

「——世間でよく『ホモはすぐわかる』といわれるが、実際には、経験を積んだわたしたちでも、わずか一五パーセントを識別できるに過ぎない。一般人にはそう見分けがつくものではない。ホモセクシユアルはまた、信頼と尊敬を心から求めているものだから、こうした組織集会をもつことは、ホモセクシユアルを鼓舞する上で大きな意義を有する。」

▼R・E・マスターズ博士。（代読）

「——女性的なホモが、女性的であることによって、一般の人たちから不必要な反感を買っているということについて、ホモ自身もつと考へなければならぬ。ホモでない人の前

で女性的な性向を露骨に示して、警察の暴力を招いた例もあるのだ。時には、女性的なホモを扱っている精神病医まで迫害される。がそれにもかかわらず、君たちは迫害を排除して何処でもホモであり得るか。そのためにこそ組織の存在が必要とされるのである。」

▼ドナルド・W・コリー。

「——キンゼイ報告以来、ホモセクシユアルを含めて『性の自由』が社会一般に認められるようになって来たが、ホモの組織活動はいまだしの感がある。これは、数百万人にのぼる未組織のホモの中に、自己嫌悪とか、ホモセクシユアルを汚い悪いことのように思い込んでいるいたり、世間から反撥を浴びせられても、仕方がないとあきらめたりしているホモたちが大勢いるからではないだろうか。『少数者』の団体はだから、今こそ清教徒的な団結をもって、抑圧されたホモたちの代弁者として、ホモセクシユアルのイメージを、ホモ自身のみならず、アメリカの社会に受け入れられるものとする努力をしなければならぬ」

こうした激励の演説に続いて「ホモセクシユアル否定論」ものべられたことは、注目にあたしい。すなわち——。

▼エドワード・リー牧師（ホリー・トリニティ監督派教会）

「——教会の立場からは、異性愛を正しいものとし、同性愛を否定するものである。しかし、聖職者としてわたしは、同性愛を理解し援助する義務があると信じている」

これに対しては聴衆の間から、
「愛はすべて善きものである。同性愛であろうとも」という反論が出た。しかし、とにかく牧師の身でホモ集会に出席したことに参加者は好感を抱いた。

ところが、もう一人のホモ否定論者の演説は、会場のホモたちをひどく刺激してしまった。すなわち——。

▼アルバート・エリス博士。

「——わたしはホモセクシュアリティは罪悪だと思う。ホモが排斥され、罰せられるかも知れない状況の中でホモであることは、明らかに病的な精神状態としか考えられない。異性との愛情を全く体験しない人々が、自分たちを健全であると考えるのは、反ユダヤ主義と同じようにおろかな偏見である」

この否定論がのべられたにもかかわらず、史上最初のホモ大集会は、成功裡に二日間の会期の幕を閉じた。

企画当初から閉会まで精力的に集会を運営したのは「マタチン・ソサイエティ」(ニューヨーク支部とワシントン支部)だった。成

立後まだ二年しかたっていないホモ協会だ。今のところはまだ、ホモもレスビアンも、首都ワシントンの街頭で、大デモンストレーションをやつてのける段階には達していないが、この大集会の模様からみて、ここ数年のうちには二十万人のホモ大行進がワシントン広場にみられる公算が大きいと「マタチン・ソサイエティ」のリーダーたちは断言している。

その成否はともかくとして、アメリカにおけるホモの組織活動をうかがうに足りるだろう。

精神分析医のバイバー博士が、

「ホモセクシュアルは、精神分析療法でなおすことができる」

と断言しているが、しかし、現実にはホモセクシュアルがそんな治療を受けようと思っていないだろうか。

答えは、九七パーセントまでが「否!」だったと「ニューヨークタイムズ」は報じているのである。



■ 愛読者通信 ■

十月号拝見いたしました。いささか悲壮感がただよってきましたね。「パノラマ島秘譚」の作者の気持ち実によくわかります。あれはいけない、これもいけない、という言論の圧迫、おそろしい時代になってきました。

しかし、とにかく「裏窓」は公刊を続けていたきたい。それだけでもありがたい。これは日本の良識の問題です。いかに多くの文化人が反対しても、法を決めてしまうのは、この場合も代議士であり、都議であることは、このあいだの都条例問題ではつきりました。(中略)

池田さんは、寛容と忍耐をつづけるとか公言しましたが、こんな実力的な暴言は、過去のどんなに悪評高い大臣も、吐かなかった。

世の中がだんだんおかしくなりますようです。林房雄氏の「大東亜戦争肯定論」、無気味です。

「しあわせなら手をたたこう」の歌を流行させている。正に幸福の押し売り、むかしの軍歌を思いださせます。

(東京・重森東)

裏窓叢書第六集 ■ 裏窓叢書第七集 ■ 裏窓叢書第八集

「さあてと、こうしておいて、今度はふたり
いっしょに縛ってやろう」

角井はひとりごとのようにつぶやき、自分
で満足そうにうなずいた。ひさ子の縄じりを
はなし、壁のすみの千枝子を抱きおこした。

千枝子は、さっきからさるぐつわのなかで、
しきりに、むむむむ、とうめいている。しか
しもう疲れてしまつて、角井に抱きおこされ
ても、あばれる元気はない。

角井は、その千枝子の背中を、ひさ子の背
中におしつけた。それから押入れをあけると
まだ余分の縄たばが用意されてある。それを
不器用な手つきでほどきながら、
「ふふふ。おとなしくしているんだぞ。千枝
子」……

「親分、お光をしょっぱいてめえりやした」
「よし。漁師の捨吉はどうした？」

「へい、天びん棒を振るって暴れ出しやがる
ので、たたっ斬り、海へ投げ込んでめえりや
した」

「上出来だ。よし、お光という娘を、ここへ
つれてきな」

「へい」と政吉が部屋を出て行くと、助五郎
は文七の方をニヤリとして見る。

「細工はりゆうりゆうつてとこだな。可哀そ
うだが、妹のお光も姉のお豊同様、生かして
おくわけにはいかねえ。この助五郎に楯つく
奴は小娘だつて容赦しねえ。それがおれのや
り方だ。な、そうだろう。文七」
助五郎は文七の酌を受けながら言った……

「生贄は？」と侯爵がたずねた。
「あれに」

プレラチが指さすあたりに、何かうごめく
ものがあつた。しかも手足をきつくいましめ
られた若い女である。

「だれの娘じゃ」

「商人ジュールの娘、マリアでございます」
「マリヤとな。今宵の生贄にふさわしい名で
はないか」

「名前と言い、身のきよらかさと言い、ミサ
にふさわしい者。ロッシュ婆めに物色させた
者でござります」

「正真の処女であらうな。さもなければ我れ
らの苦心も水泡に帰するぞ」
「その点はしかと——」……

地獄谷の女たち

塔婆十郎作 山田彬弘絵

大利根柔肌草紙

花巻京太郎作 鬼頭暁絵

悪魔術の塔

九十九十郎作 中川彩子絵

好評発売中

定価四五〇円

送料八〇円

陰 画



九十九十郎

は、この店には固定した客がいて、その者がひとつの確固とした雰囲気構築上げていたからであろう。

その日も私は夕食後の散歩の途中、例によって「いいこい」に立ち寄った。春の宵の一刻をおしむ若いアベックで階下はいっになく混んでいた。私は二階に上がってブランデーを言いつけた。ブランデーをすすりながら、天使の群舞を思わせるモーツアルトの交響曲に耳を傾けていると、ちよつと贅沢な気分にしたれるのである。

私は肘掛け椅子に身を沈めて、煙草の煙の行方を追いながら、取りとめのない夢にふけた。

いや、それは夢想でさえない放心といってよかった。潮の引くように現実感が遠のいて、肉体が時空の重みから解放される陶酔の時間だった。

不意にそれを破るように私のテーブルの前に立つ男があった。

「あなただ。あなたに違いない」

その男は何か大発見でもしたように、私の方を指差して、せきこんで叫んだのである。

「何かご用でも——」

私は椅子から身を起した。柔かい光線を背にしているので、男の顔は見分けにくかった

一

私の住むアパートの近くに、「いいこい」という喫茶店がある。

平凡な名前だが、名前ばかり仰々しくて、その実こげくさい匂いのするものさえ当てがっておけばいい、といった喫茶店の多い昨今では、珍重に値するくつろいだ雰囲気を持った店である。

コーヒーがうまいのはもちろんだが、狭苦しいアパート暮らしから逃がれて、そこを書斎代りに使っている私のようなものでも、けむ

たがらずにもてなしてくれるのが何よりも嬉しい。

わずかばかりの特別料金を払って二階に上がると、二人一テーブルの肘掛け椅子がゆったりとしつらてあって、私のような人種を待っているのである。

この特別席だと、アルコール類も出してくれる。ただし、アルコールがまわり過ぎて他人に迷惑を及ぼす振舞いに出れば、直ちに丁寧に店外へ放り出されるのだが。

しかし、この店との長いつき合いで、そんな不心得な者に一人も出くわさなかったの

が、声に聞き覚えがあった。

「覚えていらっしゃらないんですか。いつぞや——そう、確か四日前の二十三日に、この同じ場所でお会いした——」

相変らずせっかちに話しながら、私の許可も求めずに向かいの椅子に腰を落とすと、男は挑むように体を乗り出してきた。

ようやく顔の見分けがついた。見覚えのある顔だった。いや、忘れられない顔だった。

名前さえ忘れずに思い出すことができた。

しかし、そのとき、

「いや、覚えていませんね。誰か人違いなすっていらっしゃるのではありませんか——」

と、返事をしてしまったのは、なぜだったのか。

ブランデーと、モーツアルトに導かれて限らない空想の世界に遊んでいた私の心が、だしぬけに眼の前に現れた現実界をすなおに受け入れることを拒んだのかも知れない。私の心はなぜか本能的な防禦の姿勢を取っていた。

私の嘘に対する、相手の反応はみじめだった。

「そ、そうおっしゃられると、実ははっきりあなただという自信がないのです」

そう言って、その男はさも困惑しきったよ

うに、分厚い近視眼鏡の奥で気の弱そうな眼

をしばたいた。少ししゃくれた細いあごを突き出すようにして眉を寄せるのが、この男の考え込む時の癖なのだが、それが今も無意識の中に現れているのがおかしかった。

「自信がないとおっしゃると、お探しの人の顔なり名前なりをご存知ないのですね」

私は、自分が意地悪くなるのを別に止めようともせずに聞き返した。

「はあ、それが——実は知っている筈なんです、が、忘れてしまったのです」

私はあきれた。四日前だというのにもう忘れたのか。あの時はあれ程強い印象を受けた様子だったのに。

私の不審げな表情を読み取ったのだろう、相手はあわてて付けたした。

「いや、それがどうも妙なことなので——」
こう言って、椅子の端に尻をかけた体をいらだたしげにゆすっている。

急に興味がわいてきた。相手が私を覚えていないのをいいことにして、何を言いたすか聞いてやろうという意地の悪い好奇心が頭をもたげてきた。私は言った。

「どうです。よろしかったら事情を聞かせていただけませんか。間違えられるのも何かの縁でしょう。もしかしたら、お力になってさ

しあげられるかもわかりませんか」

男は決心がつかないらしく、しばらくためらっていたが、ようやく口の中で何かつぶやくと、本格的に椅子に坐り込んだ。

私は給仕を呼んで、ブランデーをもうひとつ言いつけた。

「遠慮なくやって下さい。聴取料というわけです」

笑顔を向けると相手も頼りなげに頬をくずして頭を下げ、ごちそうになります、と言った。私は四日間という時間を忘れて、あの時の続きが今ここで行なわれているような錯覚を禁じ得なかった。あの時はビールだったが今ブランデーのグラスをぎこちない手つきで握って、唇を突き出すようにしてすすっているのを見ていると、妙な腹立たしさを感じる。

「私は木津と申すものです」と男はグラスを置くと、やおら名乗った。やはり覚えていた通りの名前だった。私も当然名乗ったが相手はそれを記憶している様子はなかった。

「妙にお思いになったことでしょうが、私には記憶喪失症の気味があるのです」

木津は両手の掌で包むように持ったグラスに眼を落としたまま言った。私はハッと胸を突かれた。そうだったのか。この前会った時

より一層自信のないオドオドした態度はそのせいだったのか。

「三年前に結婚してから、それが一層ひんぱんに起るようになって、実は困っているのです」

「医者にみてもらいにはならないのですか」

と私は心から同情して言った。記憶喪失症の人間に嘘をついたことが今になって後悔されたが、それを訂正する気にもなれなかった。

「医者は、精神的な抑圧をなくせよと申しています。ところが、抑圧をなくしようとして酒を飲むと、必ずといっていいくらい、その後事は忘れてしまうのです。その晩もそれでした」

酒を飲んで記憶喪失にかかるのであれば、酒を飲む事自体に精神的な抑圧がかかるからではないか。抑圧というのは彼の結婚生活それ自体なのではないか。おそらく彼はそれを知っているのだろうか、他人の私には敢えて明かさないのであると私は考えた。

木津は肩をすぼめてブランデーのグラスに顔を突込んでいる。やがて顔をあげる。自分でも、不思議でならないというように、ボソボソと語をついだ。

「次の朝になって、前の晩のことをすっかり

忘れてしまっていることに気がついたのです。家内にきくと、十二時過ぎに良い機嫌で帰って来たと言うのですが、その晩何をしたのか、僕自身は少しも覚えがないのです」

すると、私のアパートを立ち去ってから一時間以上もどこかをうろついていたことになる。私のアパートを飛び出した時のけんまくでは、あのままではとうてい納まりそうもなかったから、どこかで酒をひっかけていたのだろう。私は、眼の前に不安そうなまなざしを据えている木津をあらためて見やった。

「すると、ここで或る人に会ったということに覚えていてるわけですね」

「いや、それも初めは忘れていたのですが、どうにか記憶をたどってここまで来たのです。ここで誰かに出会ったというぼんやりとした記憶があるように思うんです。でも、あなたがその人でないとすれば、もう手がかりは全くないんです。本当に万にひとつの偶然で、失った記憶を一举に取り戻すのでなければ、僕としてはもう手の下じようはありません。本当にどうしたらいいのか——」

こう言って、木津は芝居もどきに頭を抱えるのである。

この私が彼の記憶を司る神なのだった。そしてその神は、妙な抵抗感から、その記憶を

彼にもどすのを拒んでしまったのだ。私は罪悪感の入りまじった奇妙な優越感が身体にわき上がるのをこそばゆく感じていた。

「これまで記憶を失っても、たいいていその時一緒にいた同僚とか何かが、後で記憶の穴を埋めてくれました。あざけりとひやかしを我慢しておりさえすれば、相手は問わず語りに僕の失われた時間を再現してくれたのです。相手は僕がそんな病気を持っているとは知りませんから、僕がキョトンとした顔をしているのを図々しい奴と思うんでしょう、あきれた顔を見せながらも、ひやかしの楽しみにつられて話してしまうのです。そして、僕は同僚の間で、手癖の悪い奴、手の早い奴という事になってしまいました。」

「恥ずかしい話ですが、記憶を失ったとき僕のやることといったら、女に手を出すことしかないような彼らの口ぶりなのです。そして、それが本当かどうかさえ確かめることができないんです。僕が口説きにかかったという女に直接会って聞きただしてみる勇氣はとうていありませんし、第一馬鹿げていますからね。あなたにこの気持ちがおわかりですか。僕はこわいんです。いつか、記憶を失っている間に、何かとんでもないことを——たとえば通りすがりの女を——ええ、あの、ナ

ニしやしないかと——（ここで木津はまるで処女のように口ごもってドギマギした。おそろく『強姦』と言いたかったのだろう）

「あなたにおわかりですか、このこわさ。この何とも言いようのない不安。自分がもう一人の自分の陰にかくれてこっそり陰謀をたくらんでいるような、とらえどころのないいらだたしさ。この気持ちがあわかっていただけけるでしょうか」

椅子から身を乗り出すようにして訴える彼の話しぶりには、納弁の雄弁といったところがあった。アルコールが入ったせい、彼の眼からおどおどした光りが消え、熱っぽい、いちずな輝きがそれに代っていた。あの晩もこんな眼つきになっていた。すると、今夜の出来事も彼の記憶をすり抜けてしまうかも知れない、と私はふと考えた。記憶を失うということに対する恐怖が、そのとき初めて、圧倒的な実感をともなうて襲いかかっていた。

蒼白い街灯が一直線に連なっている深夜の街を、記憶を失った黒い影が、飢えた眼を爛爛と光らせて、幽鬼のように、うろつきまわっている。その影が木津であったり、私自身に変わったりするのだった。

木津がブランデーの最後のひとしずくを音

をたててすすり込み、口の中でもごもご礼を言って立ち去っていくのを見送りながら、私はまだそのイメージに圧倒されていた。彼に対する最初の憐憫が次第に共感めいたものに変っていった。

あの男は決して反転されることのない陰画のようなものだ。彼はただ一度だけ私を通じて陽画に焼きつけられた事があった。しかし、その唯一枚の陽画を彼は失ってしまったのだ。彼の陽画を握りつぶしてしまったのは、この私だった。しかし、私自身果して陽画なのだろうか。

新しいブランデーに口をつけながら、私の想いはどうしようもなく、あの日にもどっていくのだった。

二

その日も散歩の途中だった。時間がはんばだったせい、か階下もすいていたのだが、いつもの習慣で二階に上がった。

誰でもそうだろうが、喫茶店にかぎらず行きつけの場所には必ず好みの席というものがある。「いいこい」での好みの席というのは、一番奥の壁を背にした席で、通路からはずれた所になっているので誰にわずらわされることもなく読書や夢想到にふけることができるの

である。

ところが、その日に限って他の席がガラ空きなのに、その席には先客があった。そこは壁際なので比較的明かるいのだが、その明かりにすかさずようにして三十過ぎと思われる度の強い眼鏡をかけた男が、熱心に何か読みふけている。テーブルの上にはコーヒーが冷めるままに置き忘れられていた。

私は心の中で舌打ちをして、どこか別の席を探そうとしたが、その男がどことなく人眼をはばかりようにして読みふけている雑誌を見て、急に好奇心をかりたてられて、他の席を探すのをやめた。

「ここ空いていますね」

そういって、他にいくらかも席があるのに、男の向かいに席を取ったものである。

私に声をかけられた時のその男の狼狽ぶりを見るもあわれだった。読みふけていた雑誌を私の目から本能的に隠すようにしながら、分厚いレンズの奥から、悪い所を見つけた子供のような羞恥と困惑の入り混った眼で私を見上げた。その男が初対面の木津だったのである。

私が腰を降ろすと、彼はバツの悪そうな顔をして、見ていた雑誌をこそこそとテーブルの下にしまい込もうとした。

「読んでいらしたのはSMマガジンじゃありませんか」

出来るだけ親しみのこもった笑顔を作って言ったつもりだったが、相手はギクリとして一瞬動作を止めた。相手のおどろきが意外に大きかったので、私はあわてて付け加えた。「実は私もその愛読者なので、まんざら縁のないお方でもないと思って、こうやって強引にお邪魔したわけなんですよ」

彼は弱々しく笑って、しまいかけた雑誌をテーブルのすみにひっそりと置いた。表紙には書店でつけてくれたらしいカバーがかけられているから、ちょっと目にはどんな雑誌かはわからないのである。

「マニヤってのは恐ろしいですね。表紙や中味を見なくても、綴じ方で、もうわかるんです。こんな綴じ方の雑誌は『SMマガジン』以外にないでしょう。それでひと目で判ったんですよ。そういうえば、今日は発売日でしたね。私はまだ買ってないんですけれど、今月号はおもしろいですか」

ぶしつけな相手に慣れていないのか、彼はどこか手持ちぶさたな顔をしている。それで私はいきおい雄弁にならざるを得なかった。木津（その時はまだ名前を知らなかったのだ）は私にそう言われて、どうぞとテーブル

の上の雑誌を指で押してよこした。

「言論の弾圧がだんだんひどくなって、このところあまりパツとしません。今月号もまあまあというところでしょう」

私はパラパラとページをめくって見た。おなじみのモデル、おなじみの画家による挿絵が、飽きもせずに責め場を展開していた。しかし、それが何ともいえないなつかしさと安らぎを与えてくれるのだった。

或る雑誌の愛読者というのは、その雑誌の持つ独特の雰囲気を受取る者のことなのかも知れない。

体の奥で快い興奮がうごめきだすのを感じて、私は雑誌を閉じた。

「大分前からこれを読んでいらっしゃるのですか」

「ええ、もう創刊当時からといっていいでしょう」

相手は大分くつろいだ様子だった。

これに興味を持っている者は、閉鎖的である。またそうならざるを得ない社会でもあるのだ。

だから、同志といえは妙な言葉になるが、同好の士と会えば、当然心がなじみ、固く閉じていた心の扉が開いて、普通以上の親しみを感じるのである。

私が木津に感じたのもそれなら、彼がようやく胸襟を開き始めたのも、そのせいだろう。私たちの間には、どうやらしっくりしたもの生まれ始めていた。

私たちは、SMマガジンをさかなにして、いろいろな意見を交わしあった。グラフィヤベージのこと、小説のこと、そして挿絵の上手下手、好みなど。その話を聞いていると、彼の読み方はまさに眼光紙背に徹するたぐいのように思われた。古い号に載っていた小説や挿画などを実によく覚えている。私の方はストーリーを聞いて、ああそんなのがあったなと漠然と思い出す程度だし、もちろん作者の名前なんか記憶していないのだが、彼はその小説なら小説、絵なら絵のどこが良かったのかという所まではつきりと記憶していて、作者についても種々批評を下すのである。

好きなものは繰り返し読むのだろう。ファイルなんかを買って、バックナンバーをキチンと整理しているのかも知れない。事によったら総索引なんかも自分で作っているかも知れない。

木津の好みにはハッキリとした型があった。写真はあまり好きでなく、絵でも、何らかのストーリーのあるものでないと、気に入らない。小説ならば、責められる女が美人で

なければならぬのは当然だが、その女は素人でなければならぬ。

素人というのは責めに対して素人という事なのである。

平和で幸福な生活を送っていた「素人」が何かのことで地獄の責め苦に呻吟するようになるのではなくてはならない。つまり、娘なり人妻なりが、ある日突然身におぼえのない理由で、幸福な生活から暗黒の底に突き落とされ、悪魔どもの手によってとことんまでさいなまれ罵られつくし、遂にはその毒牙に屈服するのでなくてはならない。ハッピーエンドは、彼に言わせると、最も唾棄すべき妥協であり欺瞞なのである。

「責められ続けて女がマゾになってしまいうなんて、僕には我慢できない。最後の最後まで自尊心を持ち続け、羞恥にまみれ、はかないながらも反抗の姿勢を取るのだから、何の楽しみも感じられないんです」

と彼はまるで「鉄腕アトム」の漫画をあてがわれた子供のように、眼鏡を光らせ、生気のない頬に血をのぼらせて言うのだった。

それから又、それらの薄幸な美女たちは、あくことのない責めの果てには、いや、その責めの一部として、必ず悪魔に犯されるのでなくてはならない。そのない責めは画竜点

睛を欠き、気の抜けたビールを当てがわれた思いがすると、特に強調した。

「そんな事は公刊誌としてあからさまに書けないのは百も承知していますよ。しかし匂わせるだけでもいいんです。それだけで満足——いや満足しはしないが——気持ちスッキリするんです」

そのあまりな力み方に、私はいささか啞然とした。何かこの男には性的なコンプレックスがあるのではないかと思った。

「ものの本によると、本当のサジストは女を切り刻んだり、局部を破損したりすることにだけ興味を持っていて、性行為そのものにはあまり関心を示さないそうですがね」と私はちよつと皮肉を言ってみた。

「本当のサジストかどうかということなど問題じゃないんです。実際、僕も異常性犯罪の実話なんかを読んで見たことがあります、胸が悪くなっただけで、何の興味もわきまませんでした。あなたのおっしゃる本当のサジストというのは、第一こんな雑誌など読まないでしょう。そんなのは、精神病理学者に任せとおけばいいんです。僕は、自分がサジストとは全然考えていません。精神的には全く正常なので、ただ、好みが少し変っているだけなんだと思っています。いや、変ってさえい

ない。世間が色眼鏡で見て、変っていると言うだけなんだ」

最後の方はおこったような口調で、吐き出すように言った。心の中にうっ屈していたものが噴出したという感じだった。

店の中はかなり混んで来ていたが、そのしのびやかなざわめきの中にあつて、私たちがしきは、別の世界に住んでいるような気がした。外の世界がなんかよそよそしく、向かいあつた二人の間にだけ真に生きるに値する世界が、小さいながらシャボン玉の中の世界のように透明な膜で外界と遮断されて存在するように思われるのだった。

私たちのテーブルの上からは、とうにコーヒータ碗は姿を消し、その代りにビールびんが、二、三本並んでいた。

私の相づちに力を得たように、木津は更に論をおしすすめた。

「正常も異常も相対的なものに過ぎませんか。私たちは、正常という錦の御旗を押し立てた連中のために異常に追いやられているという方がむしろ正しい見方なんじゃないですか。彼らは自分たちの大義名分を立てるために、我々を異端者に仕立てなければならぬのです。それが、世間の圧迫の正体ですよ。私たちこそいいカモなんだ。これに対抗

するためには、我々はユダヤ人のように分散してしないで団結し、異端者の王国を築く必要がある」

ひと息に言い切ると、コップを握んでビールをあけた。仰向けになった彼ののどで不恰好なのどぼとけが奇妙な生きもののよう蠕動するのを、私はなにか猥褻なもののように眺めていた。

彼の言うことには同感なのだが、なにかボンヤリとした異和感が——私にはとてもついてゆけない、彼の気負い込んだ態度によるものだろうが——次第に私の心の中に頭をもたげてくるのをどうしようもなかった。

その気負った言葉の勇ましさと裏腹な、人眼を盗んで「SMマガジン」に読みふける彼の現実の姿はどうだろう。私はそこに押しひしがれた者の足掻きを見るのだ。

気が弱いために社会全体や、特にシッカリ者の妻などに劣等感を抱き、その復讐としてサジスチックな読み物に読みふけり、その罪悪感のために、ますます自分の世界を狭くしてゆくあわれむべき人間。

社会が我々のような人間に冷たいのは確かである。しかし彼のような態度がかえって社会との垣根を取りのぞきたいものにしていくのではないか。異常じゃないと言いつける

のは、異常と見られるのを極度に恐れるからではないか。異端者の王国を築かねば、という彼の言はよい。が、その王国が日陰者の慰めあう場であっては何にもならない。正常者を誇る者たちの国と堂々と拮据できる前向きのものでなくてはならない。必要なのはそんな事より、異常であることを我が身に引き受けること。いわばそれによって精神的なこわばりを持たないこと。異常であって自由であることではないのか。

「失礼ですが、プレイを——というのは、実際に女を責めた経験がおりですか」ときいてみた。答は予期した通り否定的なものだった。ところがそれに対しても彼一流の理屈を彼は持っているのだった。

「プレイというのは、馴れ合いじゃないですか。でなければ女のマゾに奉仕しているようなもんです。そんな生まぬるいことで満足できるとは思いませんね。サジスムのサジスムたるゆえんは、相手が与えたがらないものを奪い取るところにあるんで、いやいやながらにしろ、喜んでにしろ、いずれは与えてくれるときまっているもの——というのは妻とか情婦とか、金で買った商売女とか、或は本当のマゾの女のことですが——そんな連中相手では、僕の欲求は、とうてい満たされない」と

思うんです。そんなものを相手にしたひには、相手の気持ちが見えすいてしまって、たちまち、気持ちが白けてしまうこと、うけあいですよ」

木津は実によくしゃべった。しかも、その内容は、うなずかせるものを充分に持っている。その事について常日頃から考えているのでなければ、とっさの場合にこれだけの事を言えるものではない。しかし、私は彼の話の内容を聞いていて、彼が一種の夢想家であるという確信を深めた。

空想的なサジストの、行きつく所が彼の姿だ。自分の築き上げた空中楼阁に陶醉し、それが破壊されるのを恐れるあまり現実を嫌悪し、拒否しさえするのだ。彼の主張する異端者の王国の幻影は、彼の空中楼阁の中にしか現れ得ないものではないか。

彼の理論にうなづきながらも次第に濃さを増してゆく違和感の原因は、どうやらそこら辺にあるらしかった。それに、プレイのことを頭ごなしに否定されたので、いささかムツとしていた。

「あなたの、そうおっしゃる気持ちは理解できます。しかし、ちょっと矛盾してやしませんか」と私はやんわりと切りだした。「どこがですか」

木津は勢い込んで反問してきた。あなたはご自分がサジストではないとおっしゃりながら、一方では責め写真はモデルの金もうけ仕事だからつまらないとか、プレイは馴れ合いだからくだらないとおっしゃって、思い切ってサジスチックなものでなくては満足なさらないようですが、こういった欲望は本当のサジストのそれに近いんじゃないかと思うんですがね」

木津は痛い所を突かれたようだった。急にそれまでの自信ありげな態度を失って、虚空に言葉を探すように眼をきよろつかせ、せわしなく小刻みに膝をゆすり始めた。

「しかし、空想上の欲望と現実とは区別して考えるべきです」というのが、彼の解答だった。

私はしつこくそれに追い打ちをかけた。

「現実生活に現れたものが本当の自分か、空想上の欲望の中に登場する自分が本当の自分か。そのどちらにより多く生の重みをかけているか。それが問題なのじゃないですか」
「空想はあくまでも空想だ。何を空想したって現実には害を及ぼすわけじゃない」

「現実のサジスト必ずしも有害とは限りませんよ。それに、空想は現実と何のかかわりもないとおっしゃりながら、なぜあなたはそん

なに悩んでるんです。何も悩むことなんかないじゃありませんか」

私は我にもなく言いつのつた。言った後ですぐ後悔した。白けた気分でビールを口へ運んだ。

後は——名前さえまだ名のりあつてはいなかったが、私の同胞なのだ。同志なのだ。何というかと、明かるみに出すことをはばかれる趣味を持った少数派の一員なのだ。意見に反撥は感じて、その気持ちは充分にくめるのだ。それなのに、どうして揚げ足とりなんかして、言いつのることがあろう。

酔いはかなりまわっていた。木津はアルコールで上体を少しふらふらさせている。私に加えた最後の一撃をかううじて耐えているといったような風情であつた。そして、しらふなら思いつきもしないようなことを言いだしたのも、さっきの口論の反動に酔いが加わったせいなのだろう。

「どうです、私の家に来ませんか。ふつつかながら家内にお相手をさせますよ」

同志の有難さというのか、これだけ言っただけで、やがてたしかめるように、

「お相手という……」

「もちろん、プレイのですよ」

私はつとめてさりげなさをよそおった。彼は信じられないといった顔つきで、マジマジと私を見た。

「あなたの——奥さんが——、いや、あなたは奥さんを——」

しどろもどろである。

「プレイはあなたの好まないところかも知れませんが、まだ実際に女を縛られたことがありでないのですから。まだるっこしいかも知れませんが、何かのご参考にはなるでしょう」

今考えて見ると、ご参考などという言葉を使ったりして、いかにもいやみな言い方だった。あの時の私は、さほど意識していなかったが、プレイがどうのこうのと言われたことに、かなり、自尊心を傷つけられていたらしい。そのくせ一方では、妙な自信めいたもの感じていたのである。

「しかし……」

と彼はためらった。

「ご遠慮には及びませんよ。家でゆっくりつろいで、大いに語り、かつ責めを楽しもうじゃありませんか」

私はなぜか妙に寛大な、そして陽気な気分になっていた。テーブルをへだてていなければ、相手の背中ぐらいたたいていたかも知れ

ない。

相手は私の申し出をまじめに受け取りかねたのか、まだ困惑したような眼をしばだたいている。初めの頃の気の弱さが再びもどってきたようだ。

「さあ、行きましょう。お宅の方は構わないでしょう」

「え、ええ。家の方は別に……」

妙に尻ごみする相手の返事も待たずに、私は伝票を掴んで立ち上がった。そして、それはわたしが——と彼があわててさえぎろうとするのに耳もかさずに、先に立った。相手があわてればあわてるほど、私の方は陽気に意気軒昂となっていくようであった。

三

私の口から言うのも妙なものが、妻の安芸子は美人である。少なくとも、この稼ぎのない私という男と結婚しようという気になる女としては美人である。

私たちは恋愛結婚だった。安芸子が私のどこに魅かれたのか今もって明かさないが、私は安芸子にはじめて会ったとき、これこそ自分の妻にすべき女だという靈感のようなものを感じたのを覚えている。これは私の意識の奥にひそんでいるサジストがささやいた言葉

だったのかも知れない。

娘時代の安芸子には（現在でも変わったとは思わないが）どこかなよなよとしていて、強いる者の庇護を無意識に求めているような所があった。それは世間知らずの娘が生理的に匂わせるまどわしなのかも知れないが、白薔薇の半ばひらきかけた花卉を思わせる、哀しいほど匂やかな安芸子を前にして、私は強烈な欲望を感じたことを告白しないわけにはゆかない。そして肌のきめの細かさと深い艶をたたえた白さが、「汚す」というサジスチックな欲求を完全に満足させてくれるように私は思えたのである。

総体的に線の柔らかな日本的なつくりの中で、眼だけは濃い睫毛にふちどられて、つづらで張りがあり、それが安芸子の容貌に活気とうるおいを与えているのだった。しつとりと重たげな髪をカットしないで長いままできとめているのも、それを解き放ったときのみごとさを想像させた。

こんなことを言うと、それは愛とは程遠い感情ではないかとひとは反問するかも知れない。それは愛ではなかったかも知れないが恋であったことは確かである。私は自分の中にいや増してゆく欲望を強いてせき止めることによって（実際、かなり長かった求愛と婚約

の期間を通じて、安芸子に対する愛撫は接吻を限度とすることを固く心に誓ってそれを実行した）この恋を高め、一方では長い交際を通じて彼女をよりよく知るに従って愛をも深めていったのである。

安芸子は知的なタイプではなかったが、柔軟な思考力を持ち、総明であった。夫を押しつけてでも表面に出るという事は全くなく、夫の要求を敏感に感じ取って、その要求に自分をあわせてゆくところに、妻として女としてのしあわせがあると考えているらしい。いわば、男の最も望むタイプの女なのである。

しかし、だからといって、安芸子がマゾにたりやすいたちの女だというわけでは決していない。現在でも彼女はマゾではない。その反対に、責められることをいまだに快とは感じ取れない女なのである。一糸まとわぬ白裸に剥かれる時は（私に命ぜられて自分で脱ぐときはもちろんのこと）文字通り全身を足の裏まで染めて恥じらうし、縛られるときにしても、今にも泣き出しそうな顔をして哀願の言葉、怨みの言葉を繰り返して、弱々しいながらも抵抗することをやめない。

このような「異常」なことは、安芸子の育てられた家庭では大変な罪悪と教えられており、それが、現在でも抵抗となっているのだ

が、夫のである私へのひたすらな愛のために泣きながらも命令に従っているのだった。

だが、ここで誤解してもらいたくないのは、

安芸子が「仕方がない」とか「どうにでもしろ」というようなあきらめや、投げやりな気持ちで私の要求に従っているのではないというものである。縛るのが夫の愛の「かたち」のなら、縛られるのが妻の愛の「かたち」とならねばならないということを安芸子は感じている。だから、それはたんなる従順ではなくて、夫と妻との協同作業なのである。それが夫婦の愛の極致に達する手段であるということとを安芸子は知っている。抵抗は本能から、また頭にしみ込んでいる根強い罪悪感から生まれるもので、その抵抗感或いは罪の意識が二人の結合をより強固なものにしているのである。

長々とのろけ話をしてしまったが、私と妻との関係を先ず理解しておいてもらいたかったのである。

さて、木津（家に着くまでにお互に名のりあっていた）は、安芸子の顔を見るなり、私が最初に安芸子に会った時感じたのと同じ衝動を覚えたに違いない。それに、安芸子が私のサジスチックな欲望の対象であることを知っているのだから、彼の受けた衝撃の大きさ

は容易に想像できる。女を同時に社会的人間であり肉体的欲望の餌食でもあるように考えるのは、非常に刺激的だからである。

木津は一瞬ハッと胸をつかれたように体をこわばらせたが、すぐに眼鏡の奥で、例のオドオドした眼を伏せてしまった。ビールの酔いがなかったら、きつと羞恥の色が頬にあらわになったろう。しかし、居間のソファに腰を落ち着けて、サジズムに関係のない雑談を交している間に、彼の緊張も次第にほぐれて、お互の趣味や欲望を知り合った者同士の間に見られる解放感が、彼の閉じこもり勝ちな心を少しずつ開いてゆくように見えた。

私の住んでいる所は、個人経営のわりにはシッカリしたアパートで（自分としては、趣味の事も考えあわせて、どこか郊外の一戸建てに住みたいのだが、とても手が出ない）六畳の和室と八畳の洋室（居間兼食堂兼台所）から成っている。そこに所せましとタンスやら棚やらテレビやらを飾りたてているのだから、三人の大人が坐り込むと八畳の洋室も狭いくらいである。

安芸子がキッチンとテーブルの間を往復するたびに、ガストロップの熱気のゆらめきにまじって香水の甘い香りが鼻をくすぐった。いつもはそんなことにあまり気を向けることも

ないのだが、その晩にかぎって安芸子の香水のほのめきが異常に刺激的に感じられた。それは木津という第三者が居るせいだということとが次第にわかってきた。

木津は、安芸子の気を張らないもてなしと先程から次第に身内に拡がってゆく解放感とで、少しずつこれまでの印象とは違った面をあらわしてきていた。

先ず、安芸子を見る眼が変わってきた。ライトグリーンのピッチリしたセーターに茶色のウールのスカートという簡単な家庭着の安芸子を、しつように眼鏡の奥で追っている。着物を通して見る二十五歳の胸や腰のまるみをやがては、剥き出されるものとして味わっているのだろう。鎖を引きしほられているために獲物に飛びかかれず、たけり狂っている猟犬のような眼つきになっていた。

もてなしが一段落ついて、安芸子が私の傍に腰を降ろしたとき、はじめて木津を家に伴なって来た理由を彼女に打ち明けた。

それを、私は半ば冗談めかした言葉で話したのだが、そうでもしなければ、心の高ぶりをけどられそうだったからである。

私の要求を聞いて、安芸子は開いた口がふさがらないといった表情で、私をまじまじと見つめた。

「たまに別の人に縛ってもらうのも、気分が
変っていいだろう」と私はのどに出来たしこ
りを強いて吐き出すように言った。

首すじまで赤く染めてさしうつむいている
安芸子を、木津が憑かれたように熱っぽく凝
視しているのを、私は横眼で見っていた。私も
また妻のおこったような横顔を新鮮なものに
眺めていた。

三人の間に、風船がふくらんで行くのをじ
つと見守っているような期待と不安に満ちた
沈黙が流れた。

「さあ、脱がないか」と私は羞恥にかりたて
られて、沈黙を破った。

安芸子が白くほっそりした指を膝の上にか
らみ合せて、身を固くするのが、私の傍で自
分のことのように感じ取れた。

「い、いいんですよ。ほんとに、ここにお招
きしていただいただけで十分なんです。この
上——」

木津が我に帰ったように、あわてて制しよ
うとした。

「早くしないか」と私は木津を無視して妻を
せきたてた。安芸子の顔が今にも泣き出しそ
うにゆがんで、私を見る眼が必死に哀願して
いた。

その表情で私は更に駆り立てられた。やに

わに手を伸ばして妻を羽搔いじめにすると、
セーターのボタンを外しにかかった。

私を制止しようとして、木津が何か口ばし
った。安芸子の柔かく温かい体が私の腕の中
で必死にもがいていた。彼女は客の手前、大
きな拒否の身ぶりもできないのだった。

セーターを剥がすと、その下に白いシャツ
があった。

シャツを剥がす頃には、安芸子はぐったり
となつて、私に身を任せていた。シャツを肩
から抜き取る時、安芸子は「ゆるして」と
小さな声でささやくように言った。

木津は、まのわるそうな顔をして、膝のあ
たりに眼を落としている。

私は立つて洋服ダンスから使い古しの麻縄
を取り出した。それは長い間の使用で、安芸
子の汗と私の手垢で汚れてはいたが、それだ
けに、私たちの間では貴重なものになってい
た。はじめのうちはケバ立って、しくしく肌
をさした麻の繊維も、今では肌になじんで絹
紐のような感触と柔軟さを持っている。

夕食後、私がそれを取り出してきて、居間
のテーブルの上に置くのがプレイ開始の合図
なのだった。その時の安芸子の怨ずるような
眼差しが私には何ものにも代えがたい魅力な
のだ。時には今のようにな安芸子を裸にしてか

ら縄を取りに行かせることもある。全裸の姿
をすくませながらダンスの所までおどおどと
歩いて行く安芸子の桃色に染まった後姿を眺
めるのも、私には楽しみのひとつなのだ。

テーブルの上に置かれた麻縄を、木津は好
奇の眼で見つめた。それと知る者には、麻縄
の古びが何を意味しているかは言わなくても
判るのである。

「自分で縛ってみますか」と私はきいた。
「ほんとにいいんですよ。奥さまにお会いで
きただけで僕は満足なんです。その上こんな
ことまで——奥さまに悪いですよ。それに僕
は全く無経験なんです」

木津は泡を喰って言った。何をあんな眼つ
きで安芸子を見ていながら、といまいまし
くなった。

「だから、これが良い機会じゃありませんか。
遠慮なんかこれっポチもいりませんよ」

そう言われても、彼は間の悪そうな薄笑い
を浮かべて尻込みするだけだった。

私は、両手で乳房をおさえ、白い背を見せ
てソファに突っ伏している安芸子を、赤い絨
毯の上に引きずり降ろした。

小さな悲鳴をもらして、そこに縮こまろう
とするのを、腕を背中からねじり上げてくの字
に折り、重ね合わせた細い手首に、いつもよ

りきつく縄を巻きつけた。そして縄尻を長くあましたままにして、もう一度木津をうながした。

「さあ、あとは好きなように縛り上げてやって下さい」

彼はようやく決心したらしく、ソファから腰をあげて近寄って来た。頬からは照れくさそうな笑いが消えて、後ろ手にくぐられた体を絨毯の上に伏せて、ひときわ白く匂うような安芸子の背すじに焼けつくような視線を当てている。

「お、おくさん、しつれいします」

叫ぶように言って、彼は安芸子の背中にペコリと頭を下げると、私の差し出す縄尻を手にとった。安芸子の背すじが一瞬ヒクッと痙攣を見せた。

木津は縄尻を握ったまましばらく迷っている様子だったが、やがておずおずと安芸子の折れ曲った二の腕に手を伸ばしていった。彼の指がむっちりとした肉のついたそれを掴むのを、あたかも自分が脂手で素肌をなでられたように私は感じた。

彼は縄を安芸子の胸にまわして後ろ手の所で絞りあげ、更にもうひと巻き、今度は乳房の下にかけて、二つの柔かなふくらみを絞め上げた。ためらい勝ちな指が何かの拍子で安

芸子の乳房に触れると、それがピクリと引かれ、安芸子も体をこわばらせる。彼女はかたくなに首をたれて体を固くしたままだが、若い肉体のほてりと柔かさが、縛る者の指先にいやおうなく或る情感を伝えるのだ。

縄をかけ終るとホッと肩を落として、木津は私をふり返った。照れくさそうに笑う。

「うまく縛れないんです」

まだ縄尻は大分あまつていた。

「僕が邪魔なら、しばらく消えますよ」と私はわざと言ってみた。

安芸子がチラと私を見上げた。その瞳は、行かないでと哀願していた。

「行かないで下さい。いらっしやらないと、かえって困ってしまいます」

本当に困ったような表情で木津が言った。

「頭の中ではいろいろ縛り方は知っているつもりなんです、実地になるとサッパリ駄目ですね。手が、縄が言うことをききません。それに――」

私はニヤリと笑った。「それに何ですか」

「その、あれですね。やはり相手の人の体のぬくもりや柔かみが指先に伝わってきたりなんかすると、それに気が奪われて、手がすぐんでしまうんです」

正直なことを言うやつだと私は思った。し

かし、それが小説を読んだだけでは得られない、写真を見るだけでは分らない、本当に縛る事の実感でもあるのだ。

ここまで来たら出しおしみすることはなかった。私自身えたいの知れない浮き浮きした気分になっていた。

「やって見ましようか。気が向いたら、いつでも言って下さい、代りますから」

そういつて、私は縄尻を受け取った。それを手繰り寄せて、安芸子を絨毯の上に仰向けに倒した。

安芸子はワッと泣きだした。狂ったように頭を左右に振っている。髪がほどけて、その甘くしめった匂いが鼻を刺激した。

私は別の縄を木津に渡して言った。

「足首を縛って下さい。そろえてじゃなく、X字に縛るんです」

木津は音をたててつばをのみ込むと、もう何のためらいも見せず安芸子の足におどりがかっていった。その間に私は、さっき木津のかけた縄のゆるみをしめあげた。

唇をふるわせ、伏せた睫毛の間から涙をあふれさせて泣いている安芸子を、これ程にいたいと思ったことはなかった。木津がいなかったら、私は安芸子をめちゃくちゃに愛撫していただろう。

木津が足首を縛り終えるのを見はからって私は安芸子の上体を抱き起こした。

調子づいた木津は、自分から足首を縛った縄のあまりを安芸子の肩から後ろ手の所にまわし、そこをひと巻きして今度は反対側の肩を通して再び足首に縄尻を返し、それを力いっぱい引きしほった。

頭を中心にして足首と手首を体の前後に縄で直結された安芸子の体は、海老縛りになって深く二つに折りたたまれていった。

「く、くるしいっ。ゆるめて……あなたっ」

安芸子はあごを苦しげにのけぞらせ、くぐもった声で泣き叫んだ。振り乱した長い髪の毛で、背中の肉が、後ろ手を吊り上げられてゐるために、高く盛り上がり、脇腹の脂肪が幾重にもひだを作り、その間からひしゃげた乳房が蒼筋を浮かべてはみ出している。

「くるしい」と安芸子が再び絶え入るような声で訴えた。

くくり合わされた足の裏が、汗の浮き出したあごの先にくっつきそうになっているのだ。安芸子の吐く荒い息が、虹のように私の眼を幻惑した。

酔ったような気持ちの中で、私の意識は拡大され、この世のものでない恍惚が、どうにもならない力で私を更に前へと押し流してゆ

くのだった。木津も同じ心境だったろう。

いや、もっとと激しい恍惚感に我を失っていたかも知れない。

くくり猿のような安芸子のピンクに上気した肉体を、私は緋色の絨毯の上に押しこめた。

彼女の体は全く自由を奪われて、思うままにコロリコロリところがった。それは妖しくも美しいものであった。

私がこの部屋の絨毯に緋色を選んだのは、安芸子のきめのこまかい白さを一層引き立てるためだったのだが、それがこれ程の効果を生んだことはかつてなかった。

熱っぽく汗ばんだ絨の肌に緋の色が映じ、それにつややかに乱れもつれる長い漆黒の髪が強烈な対比に見せて、異様な美しさを作りあげている。

しかも、その美の中心をなしている安芸子の肉体の、まるくなって緊張し切った背すじから豊かなヒップに張りついて今にもはち切れそうなパンティの間を、手垢に汚れた麻縄が悪意に満ちたいたずらのように、どす黒く割っているのである。

安芸子は顔を真赤にして汗と涙にまみれ、濡れた唇の奥から舌をのぞかせて呻き声をあげるばかりであった。

その時、不意に私は押しのけられた。木津がてんかんの発作に襲われたように歯を噛みならし眼を吊り上げて、いつ抜き取ったのかズボンのベルトを手にして迫って来たのである。

一瞬、私は彼が狂ったのではないかと思った。それほど彼の眼差しには異常な輝きがあった。

啞然としている私を突きとばして、彼は安芸子のぬめぬめと汗を吹き出している背中、幾重にも縛り上げられて血の気を失った手が握りしめられている、その息づいていいる背中にベルトを振りかぶった。身も凍るような不気味な音をたてて、それは安芸子の背肌にからみついた。

「ああっ。な、なにをなさるんですっ」

安芸子は疼痛に身をのけぞらせながら、不自由な首をねじ曲げるようにして木津をふり返った。恐怖が美しい頬に張りついていた。

私は妻を縛っても、鞭打ったことは一度もない。その欲望を感じないからだ。つねたりくすぐったりしたことはあるが、鞭で打つなど考えて見たことさえなかった。

私が安芸子を縛るのはあくまでもプレイとしてなのである。夫婦の間にあっては（相手がマゾでなければなおさらのこと）プレイに

はおのずから限度がある。それはあくまでも愛撫の変形なのである。肉の味を一段と引きたたせるための、ひとつまみの胡椒なのである。相手を苦しめたり傷つけて快樂をむさぼるのとは全く異なる。

私は、この時はじめて夫婦間のプレイに、ある異質のものを持ち込んだことのおやまりをさとった。木津にとっては、安芸子は他人なのだった。

私が木津を家に連れて来て妻を責めさせるという無謀を敢えてしたのは、私が木津と一体になって——つまり他人の眼で安芸子を責めてみたいという無意識の衝動があったからだ。そして彼が鞭をふるい出すまでは、この私の意図はほぼ達せられたかに見えた。私は今までになく興奮に我を忘れ、妻の新しい美しさを発見して狂喜した。それは全く新しい体験だった。

だが、それは最後の土壇場になって破れ去ったのだ。私はやはり安芸子の夫だった。

私が呆然としている間にも、木津のベルトは安芸子の背に振り降ろされ、安芸子はまじりのように絨毯の上をのたうちまわっていた。

鮮烈な赤い鞭あとが安芸子の肌に焼きつけられるたびに、私は自分の体にも同じ傷を負った。そんな感情は本当のサジストには無縁

なのだ。

自分が傷を負うことなく加虐することができるのは「他人」に対してだけである。木津が空想の上で幾百人という美女を責めさいなむことができるのも、それは「他人」だからだ。そして今、彼の眼の前に生きた他人が現れたのだった。

私は、彼が妻に頭のあがらない生活を送っているに違いないと、突然確信した。その欲求不満のはけ口を彼は小説の中に求め、今安芸子の上に爆発させているのだ。

私は痴漢を家の中に誘い込んでしまったのである。

「あ、あなたっ、助けてっ」

ひととき高く安芸子が悲鳴をあげた。今まで耳にしたこともない、恐怖と苦痛と絶望とにねじまげられた、まさにサジストに襲われた女だけが発し得る声だった。

その声が私を迷妄から完全に解き放ってくれた。

「やめたまえっ」

どなりながら、私は木津を突きとばした。

「やめるんだ。もう十分だろう」

安芸子をかばいながら、私はもう一度どなった。自分で連れ込んだ弱味のために思い切った行動に出られないのがもどかしかった。

木津はベルトを持った手をグラリとたらし、私の前に棒立ちになっていた。

長い長い時間がにらみ合った二人の間に過ぎ去ったように思われた。

安芸子のすすり泣きと、汗ばんだ肌からたちのぼるムツとする程濃厚な甘さを持った体臭が、次第に遠のいていった。

木津は彫像のように私の前に立ちすくんでいた。

気違いじみた恍惚から虚脱の奈落へ、そこから再び現実へと彼の表情はゆっくりとまるでジキル博士とハイド氏の変身を眼の前に見るように、変化していった。彼の記憶はこのとき彼の表情と共に脱落したに違いない。

眼に正常な光が戻ったとたん、彼はアツと口の中で小さく叫んだ。そして、何のあいさつもせずに、ぱっと私のアパートを飛び出して行った。二度ともどらない彼の陽画を後に残したまま、陰画の世界へと彼は再び戻っていったのだった。

四

木津は今、失われた陽画を求めてあてどなく歩きまわっている。

そして、なぜ私は彼の失われた記憶を与えてやらなかったのか、その理由が今やっとわ

かった。

それは、私が本能的に選んだ自己防衛の手段だったのだ。

木津はあの日あの瞬間に、彼の人生における最良の瞬間を生きたのだった。

平素抑圧を強いられている彼の意識は無限にまで拡大され、彼のかつて味わったことのない、めくるめくような生命感の高揚を経験したのだ。

だが、それと共に無意識の防衛機構が働いて、彼からその記憶を奪ってしまったのだ。それがあまりにも日常生活にとって危険な体験だったからである。

私も彼と共にその瞬間を味わう一歩手前まで行っていた。

だが、そこで私は引き返したのだ。めくるめくような深淵の縁にのぞんで、あやうく身をのがれたのだ。

彼に記憶を取り戻させることは、再びあの強力な誘惑を秘めた深淵に近づくことをみずからに許すことになりかねないのである。

彼自身は無意識の中にその記憶を消し去ることによって、再びあの危険な誘惑にとらえられることを防いだのだ。記憶を失わなかった私は、せめて嘘をつくことによって、みずから危険を誘発するのを防ぐしかないのだ。

私こそ、彼に触発されて深淵を垣間見、しかも記憶を失うこともなく、安芸子と共に暮すという危険にたえずおびやかされ続けているのだ。

木津の営々として築き上げた空中楼阁は、安芸子という現実生き、温かく柔かい肌を持った女に接して、もろくも崩れ去った。しかし、私は理論の上で彼に勝ったのだろうか。

彼の空中楼阁がついえ去ったと同じように、私のそれまでの現実も崩壊したのではないだろうか。

私は今でも安芸子とさし向かいになると、あの時の想い出にさいなまれる。

プレイから一歩踏み出して、もう一度禁断の味を味わって見たいという強い誘惑におびやかされる。

彼の空中楼阁も私のプレイも、あれにくらべれば五十歩百歩なのではないか。程度の差こそあれ、結局私自身も陰画の世界に生きているのではないか。

あの時以来、私の眼差しが変わったと安芸子は言う。

その安芸子にしても、あの夜の経験をどのように受けとめているのか。木津が帰った後、気が狂ったように燃え上がったのはどう

してだったのか。

私はなぜかおそろしくて聞く気になれないのである。

そして今、この「いいい」を出て帰路について、私は不安におびえながら、それだけに一層強い魅惑をもって迫って来る意識——このタブーを破るのはいつだろうか、という意識をどうすることもできないのだ。

私には全く自信がなくなってしまった。それが身を滅ぼし安芸子の身をも滅ぼすとは知りながら何をすべきか、自分に自信が持てないのだ。

蒼い街灯の一直線に連なる深夜の街を、幽鬼のように眼をすえた黒い影が行く。それが私なのだ。



はおのずから限度がある。それはあくまでも愛撫の変形なのである。肉の味を一段と引きたさせるための、ひとつまみの胡椒なのである。相手を苦しめたり傷つけて快樂をむさぼるのとは全く異なる。

私は、この時はじめて夫婦間のプレイに、ある異質のものを持ち込んだことのおやまりをさとった。木津にとっては、安芸子は他人なのだった。

私が木津を家に連れて来て妻を責めさせるという無謀を敢えてしたのは、私が木津と一体になって——つまり他人の眼で安芸子を責めてみたいという無意識の衝動があったからだ。そして彼が鞭をふるい出すまでは、この私の意図はほぼ達せられたかに見えた。私は今までになく興奮に我を忘れ、妻の新しい美しさを発見して狂喜した。それは全く新しい体験だった。

だが、それは最後の土壇場になって破れ去ったのだ。私はやはり安芸子の夫だった。

私が呆然としている間にも、木津のベルトは安芸子の背に振り降ろされ、安芸子はまりのように絨毯の上をのたうちまわっていた。

鮮烈な赤い鞭あとが安芸子の肌に焼きつけられるたびに、私は自分の体にも同じ傷を負った。そんな感情は本当のサジストには無縁

なのだ。

自分が傷を負うことなく加虐することができるのは「他人」に対してだけである。木津が空想の上で幾百人という美女を責めさいなむことができるのも、それは「他人」だからだ。そして今、彼の眼の前に生きた他人が現れたのだった。

私は、彼が妻に頭のあがらない生活を送っているに違いないと、突然確信した。その欲求不満のはけ口を彼は小説の中に求め、今安芸子の上に爆発させているのだ。

私は痴漢を家の中に誘い込んでしまったのである。

「あ、あなたっ、助けてっ」

ひととき高く安芸子が悲鳴をあげた。今まで耳にしたこともない、恐怖と苦痛と絶望とにねじまげられた、まさにサジストに襲われた女だけが発し得る声だった。

その声が私を迷妄から完全に解き放ってくれた。

「やめたまえっ」

どなりながら、私は木津を突きとばした。

「やめるんだ。もう十分だろう」

安芸子をかばいながら、私はもう一度どなった。自分で連れ込んだ弱味のために思い切った行動に出られないのがもどかしかった。

木津はベルトを持った手をグラリとたらし、私の前に棒立ちになっていた。

長い長い時間がにらみ合った二人の間に過ぎ去ったように思われた。

安芸子のすすり泣きと、汗ばんだ肌からたちのぼるムツとする程濃厚な甘さを持った体臭が、次第に遠のいていった。

木津は彫像のように私の前に立ちすくんでいた。

気違いじみた恍惚から虚脱の奈落へ、そこから再び現実へと彼の表情はゆっくりとまるでジキル博士とハイド氏の変身を眼の前に見るように、変化していった。彼の記憶はこのとき彼の表情と共に脱落したに違いない。

眼に正常な光が戻ったとたん、彼はアツと口の中で小さく叫んだ。そして、何のあいさつもせずに、ぱっと私のアパートを飛び出して行った。二度ともどらない彼の陽画を後に残したまま、陰画の世界へと彼は再び戻っていったのだった。

四

木津は今、失われた陽画を求めてあてどなく歩きまわっている。

そして、なぜ私は彼の失われた記憶を与えてやらなかったのか、その理由が今やっとわ

かった。

それは、私が本能的に選んだ自己防衛の手段だったのだ。

木津はあの日あの瞬間に、彼の人生における最良の瞬間を生きたのだった。

平素抑圧を強いられている彼の意識は無限にまで拡大され、彼のかつて味わったことのない、めくるめくような生命感の高揚を経験したのだ。

だが、それと共に無意識の防衛機構が働いて、彼からその記憶を奪ってしまったのだ。それがあまりにも日常生活にとって危険な体験だったからである。

私も彼と共にその瞬間を味わう一步手前まで行っていた。

だが、そこで私は引き返したのだ。めくるめくような深淵の縁にのぞんで、あやうく身をのがれたのだ。

彼に記憶を取り戻させることは、再びあの強力な誘惑を秘めた深淵に近づくことをみずからに許すことになりかねないのである。

彼自身は無意識の中にその記憶を消し去ることによって、再びあの危険な誘惑にとらえられることを防いだのだ。記憶を失わなかった私は、せめて嘘をつくことによって、みずから危険を誘発するのを防ぐしかないのだ。

私こそ、彼に触発されて深淵を垣間見、しかも記憶を失うこともなく、安芸子と共に暮すという危険にたえずおびやかされ続けているのだ。

木津の営々として築き上げた空中楼阁は、安芸子という現実生き、温かく柔かい肌を持った女に接して、もろくも崩れ去った。しかし、私は理論の上で彼に勝ったのだろうか。

彼の空中楼阁がついえ去ったと同じように、私のそれまでの現実も崩壊したのではないだろうか。

私は今でも安芸子とさし向かいになると、あの時の想い出にさいなまれる。

プレイから一步踏み出して、もう一度禁断の味を味わって見たいという強い誘惑におびやかされる。

彼の空中楼阁も私のプレイも、あれにくらべれば五十歩百歩なのではないか。程度の差こそあれ、結局私自身も陰画の世界に生きているのではないか。

あの時以来、私の眼差しが変わったと安芸子は言う。

その安芸子にしても、あの夜の経験をもどくように受けとめているのか。木津が帰った後、気が狂ったように燃え上がったのはどう

してだったのか。

私はなぜかおそろしくて聞く気になれないのである。

そして今、この「いいこい」を出て帰路について、私は不安におびえながら、それだけに一層強い魅惑をもつて迫って来る意識——このタブーを破るのはいつだろうか、という意識をどうすることもできないのだ。

私には全く自信がなくなってしまった。それが身を滅ぼし安芸子の身をも滅ぼすとは知りながら何をすべきか、自分に自信が持てないのだ。

蒼い街灯の一直線に連なる深夜の街を、幽鬼のように眼をすえた黒い影が行く。それが私なのだ。



名 月

古正英生・絵



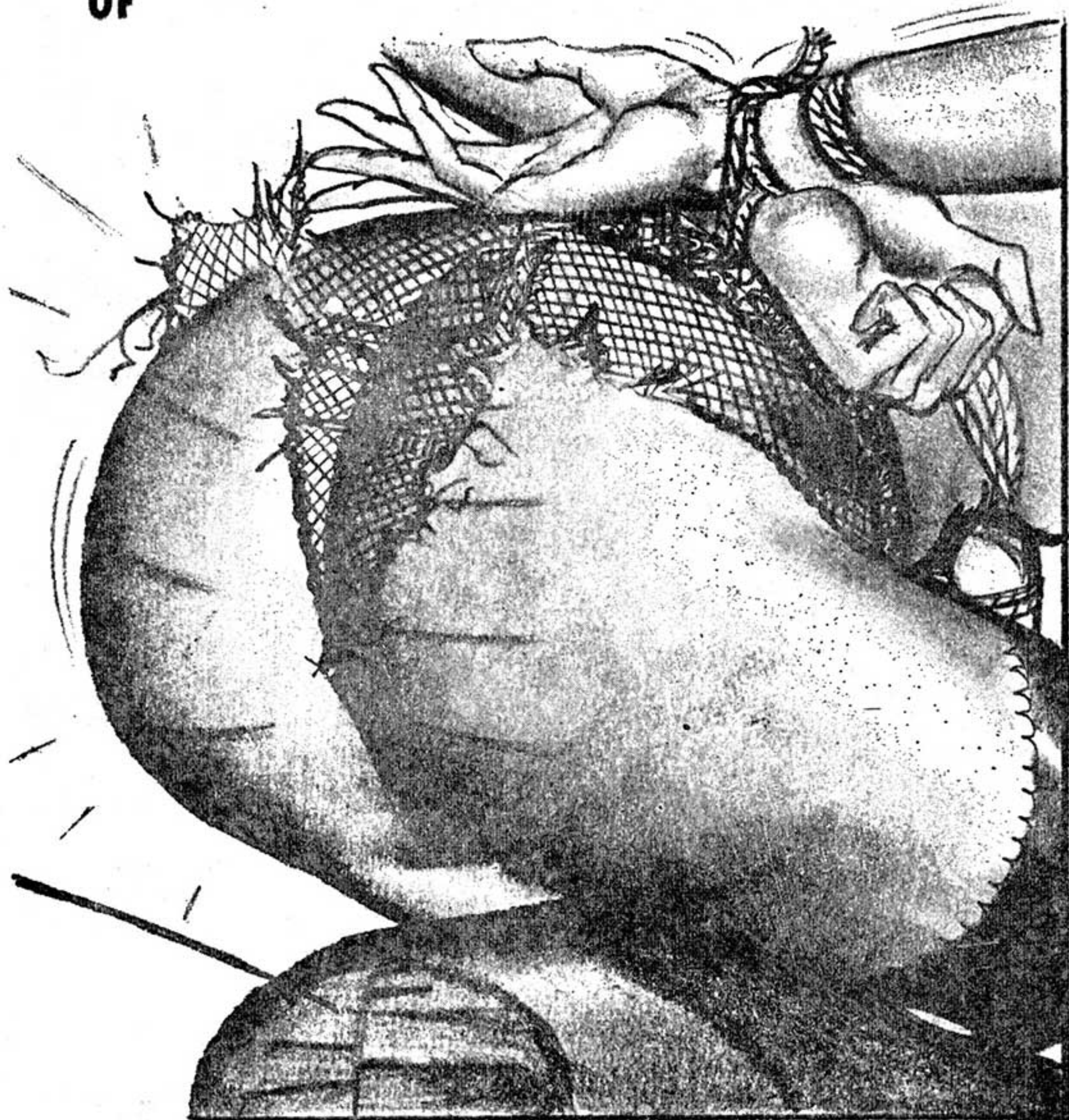
アメリカ絵物語

グエンドリン物語

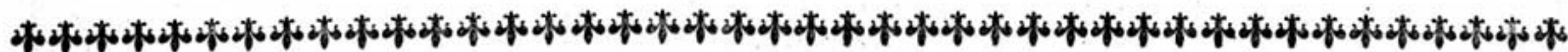
北米・フェニクス商会・特約

前号からひきつづいて、グエンドリン物語を掲載いたします。前回にこの作者名を、ジョン・ウィリーと記載いたしました。フェニクス商会、東京支社の話によりますと、どうもスタントンの絵に近いということ。署名がないので失礼いたしました。おわびと訂正をいたします。

THE RETURN OF GWENDOLINE



HOLD STILL, EUSTACE!
GWEN DIDN'T MAKE
HALF THE FUSS WHEN
I PUT THIS IN HER
LAST NIGHT!



続・煩惱繩

矢桐重八



罨といえ、罨といえ
 た。しかし、雪江はこの
 罨に、みずから望んで身
 を投げたのだ。
 待ちかまえていたのは
 しかし、雪江が覚悟し、
 予想していた罨よりも、
 もっと巧妙な、卑劣な罨
 であった。
 二十二歳の無垢な心と
 からだをもった武家娘と
 六十に手のとどく老巧狡
 猾な高利貸し佐兵衛の取
 引きである。娘の敗北は
 当然のことともいえた。



佐兵衛秘蔵の縄で、うしろ手にぎりぎり巻
きに縛りあげられた雪江。

うさぎのようにおののきながら、畳にすわ
る雪江の、その白い貝がらのような耳たぶに
酒くさい息がかかり、気の遠くなりそうなこ
とばが、ねちねちと吐きだされる。

「いいかね、お前さんのからだは、片足首を
上にして、あの鴨居に吊られるのだ。そうす
れば、お前さんの肌にわたしの手がふれなく
とも、その着物の帯から下は、お前さんの足
からすべり落ちてしまう。おわかりかね。こ
れは、わたしの慈悲だよ。なさけというもの
さ。いきなりはだかにむいてしまつては、お
前さんが可哀想だ。だから、しずかに、じわ
じわとぬがせてあげよう。うふふふ……」

背中を猫のようにまるめ、くちびるを雪江
の耳にふれんばかりに近づけて、佐兵衛はし
やべりつつける。

佐兵衛のその、いやな口臭の息吹きだけで
自分のからだは、もう泥のように汚れてしま
つたような錯覚におちいる。

あきらめるのだ、観念するのだ、と必死の
思いで自分にいいきかせ、さされた盃まで、
目をつぶってひと息に飲みほした雪江であつ
た。胃のなかが燃えているように熱いのは、
酒のせいかな、屈辱のためか……。

THAT'S BETTER..RELAX!
I'M NOT GOING TO HURT
YOU... YET!



耐えるのだ、死んだ気になって耐えねばならぬ。今宵ひと夜、自分の身を殺せば、百両の借金は帳消しにしてくれると、佐兵衛は約束したのだ。

重い労咳で病み臥したままの父親久左衛門にかわって、このおぞましい一夜を、どうしても耐えねばならぬ……。

雪江は、うなだれたまま、ひしと両眼をとり、神に祈った。

——なにとぞ、この屈辱を、耐えきる力を、私におあたえください……。

「さあ、そろそろ、はじめましょうかね、お嬢さん」

佐兵衛が、立ちあがった。

ぎくり、と雪江の肩がふるえた。その雪江の表情をみおろして、佐兵衛は、にやりと笑った。

「縄はね、いくらでもあるのだ、雪江さん。床の間の手文庫にはいつている縄は、わざとお前さんの手で取ってもらったが、あれは、お前さんの顔の色をみたかったからさ……」

床の間横の低い棚の戸を、佐兵衛はひらいた。右手を中にさしこむと、すぐさま、ひとたばの縄をつかみだした。

手垢で黒ずんだ縄であった。佐兵衛のてのひらの上にのせられたとき、その縄は異様な臭気を発した。これまでの女のどこを縛った縄なのか。何人の女の肌にくいこみ、しめあげた縄なのか。佐兵衛はその縄に鼻を近づけ、口もとをほころばせた。



「さあ、足をおだし。右でも左でも、どちらでもいい。素直におだし」

佐兵衛は、ひくい声で注文した。

夜はふけている。どんなにひくい声でもひびく。佐兵衛だけの夜であった。邸の外で、また犬の遠吠えがきこえた。

雪江は、いっそう固く身をちぢめた。足をおだしといわれて、どうしてすぐにだせ得ようか。

縛られたまま、石のようになっている雪江の胸のあたり、腰のあたりに、佐兵衛の目がぶえんりよにそそがれる。

掌中にとらえた珠である。どう転がそうと佐兵衛の意のままである。

てのひらを右にかたむければ右に、左にかたむければ左に、珠は思いのままに、美しい光りを発しながら転がるのだ。

「なにも恥ずかしがることはない。さあ、足をおだし。さぞかし、かわいい足だろう」

雪江の左足首を、いきなりつかんで引く。つよく引かれて、横転しそうになるからだを、腰に力をこめて、かろうじて支える。

佐兵衛の手は、雪江の足首をがっちりとかみ、遠慮なく足袋をぬがしにかかる。

「あッ、あれッ」

白い素足が無雑作にむきだされた。

AUNTIE SAYS YOUR
MAIDING IS **AWFUL!**
JUST LAZINESS I'M
SURE!

PUFF! COUGH!
GAG!!



足首に、すかさず縄が巻かれる。必死にちぢめようとする足を、ぐいぐい引っぱりながら縄を巻きつける。

「な、なにをなさいます!」

ついに、畳の上に、どうと横転しながら、雪江はさげんだ。

うす笑いをもらしながら、佐兵衛は無言だった。足首の細いところに縄を巻き終える。

雪江の耳にささやいたことばどおりの遊戯を、これからはじめようというのである。

足首を縛った縄が、鴨居に渡された。佐兵衛の顔が、いよいよ赤くほてった。この高利貸しの手足の動きには、若者のような情熱がこもっていた。

縄が、上から下に、びいんと張った。縄の先端は、佐兵衛の手のなかにあった。

「さあ、引くよ、ふふふ」

雪江は、佐兵衛のことばが、単なるいやがらせでないことを知った。膝を固くして抵抗した。だが、横転したままのからだである。

足にも腰にも力がいらず、雪江は脳髓に焼け火箸を突っこまれたような衝激に目くらみ、全身を硬直させた。

佐兵衛の手ににぎられた縄じりが、一寸引かれれば、雪江の足首は、一寸宙に浮くのである。三寸引かれれば三寸。五寸引かれれば五寸だけ畳から浮く……。

これは、理の当然であった。

三尺引かれれば、雪江のからだは左足だけが上に、それだけ逆にたかだかと吊られるのあった。

「ああ、お、おゆるしを!」

思わず、哀願のうめき声がほとばしった。たちまち羞恥の炎につつまれ、のたうちまわるのだ。

あらわになった肌に、ねばりつくような視線を感じ、夢中になって、もがきにもがく。しかし、もがくことは、いっそう肌をさらす結果になるのだ。上から下に張られている縄が、音をたててふるえた。

佐兵衛の目の色も、ようやくあやしい熱をおびてきた。腰をかがめてのぞきこむ。どこか獣じみた醜怪な格好になってなめまわすのである。

「いや、うつくしい。みごとなものだ。な、なんという美しい肌なのだ。雪のような白さとは、このような肌のことをいうのだろう。う、う、う……」

うめきに似た声を発しながら、しだいに、痴呆的な目の色になっていく。くちびるからは、泡のまじったよだれが流れはじめた。足を宙に吊られて、そりかえっている雪江のからだは、右に左にゆれる。ゆれることはそのまま、苦痛が増していくことだった。

ひしと目をとじてはいるが、自分の恥ずかしい姿態を、雪江は自分の脳裏から遠去けることはできない。佐兵衛の視線が、いまだここにそそがれているかも、わかっているのだ。

——神さま！

と、雪江はうめいた。

脳裏によぎったのは、しかし神ではなく、

父親久左衛門の顔であった。

——父上、おゆるしく下さい！

謝罪のことばが、のどまで出かかる。

一途な孝心からでた今夜の所業だったが、このいまの破廉恥な姿態は、やはり親不孝と呼ばれるべきものにちがいないのだ。

血が熱く逆流し、雪江は絶望にうめいた。

畳から、三尺高く吊られた足首に、ようやく苦痛が襲ってきた。縄が、ぎりぎりときしみながら、皮膚にくいこんでくる。

その足首だけに、雪江の体重のほとんどをあずけている形だった。胸と腕をしめつけて左右の腕を縛っている縄の力も、じわじわと増してきている。

「お、おゆるしを……」

雪江の口からもれるのは、ただその一言だけだった。

「ふふふ。まだネをあげるのは早いぞ。秋の夜は長い。仕事はこれからだよ」

肌のどこかに、佐兵衛の吐息のかかるのを感じたとき、雪江は失神していた。



~~~~~

——意識をとりもどしたとき、宙に吊られていた左の足首は、畳の上に横たえられていた。しかし、いつのまにか着物がぬがされ、素肌の上に、寸分の手加減もなく巻きついて

いる縄目の苦痛に、雪江は息をのんだ。乳房を避けて、その白い円丘の上下に、縄

はすさまじい形相をみせてくいこんでいた。失神しているあいだにぬがされ、またもうしろ手に縛りあげられたのだ。なんの抵抗

もうけず、佐兵衛は雪江を縛りあげたのだ。片足だけを宙に吊って、雪江を羞恥の気絶にまで追いやったのは、あるいはこれも、佐

兵衛の計算のうちかも知れなかった。気を失っているあいだにこの高利貸しは、雪江のからだに、はたして百両の値うちがあるものかどうか、丹念に調べたにちがいないのだ。

「お氣がつかれたかな」

雪江の目の前に、顔じゅうの筋肉をたるませた、佐兵衛の微笑があった。

「起きなさい。いつまでも寝ていると、そのきれいな肌に、畳の目のあとがつく」

佐兵衛は、雪江の肩に手をかけると抱き起こした。そして、ひきずるようにして、雪江のからだを、柱に寄りかからせた。口臭の強い息が、また雪江の顔にかかった。



FIVE WILL GET YOU TEN,  
WHEN I'M THROUGH WITH YOU  
YOU'LL BE A BETTER IF NOT  
THE **BEST** MAID, AUNTIE'S  
EVER HAD!



\*\*\*\*\*

上半身は剥かれていたが、腹部から下は、一枚の腰のもので、わずかにおおわれ、雪江の腰の線をかえてあらわに示していた。洗いだらしてはいるが、白縮緬の清潔な腰のものである。それを一枚残しておいたのは、佐兵衛の慈悲ではなかった。

全部をぬがしてしまうのは、まだ惜しいのである。おいしいたべものは、がつがつたべては味がわからない。まず目で賞味し、そのあとでゆっくりと箸をつけ、舌の上にのせるのだ。

「な、なぜこのように、いつまでも、おなぶりなさるのでございますか……」

あえぎとも、呪いともとれる声音だった。意識がよみがえって、あらわになった自分の上半身の恥ずかしさに、のどくびまでも赤く染めながらも、まだ一筋の気力は残している雪江だった。

「ふふふ。なぜですって？ おとぼけなさっちゃいけません。百両といえば大金。その大金とひきかえだ。そのへんの夜鷹を買うような、安直な工合にはいきやあしねえさ」

佐兵衛は、ふいにあらい口調になって、せせら笑った。手が、ついッとのびた。

「ひいッ」と雪江は、白いのをのけぞらせた。  
(80ページにつづく)





好評発売中！

ショッキング画集

価 800 円 ㊦ 90 円

アメリカSM画の傑作ばかりを選びすぐって一冊  
の本にまとめた豪華版 絶対のコレクションです



THE  
RETURN  
OF

# GWENDOLINE

THAT LITTLE SNIP  
IS LAUGHING AT ME!  
I GOT A GOOD MIND  
TO....

WHAT'S SHE GOT  
TO LAUGH ABOUT?  
COME ON AUNTIE,  
I WANT ANOTHER  
(HIC) DRINK OF CHAM-  
PYAINEY  
(HIC)



★すてきにおもしろい あまとりあ社の出版目録を贈呈いたします  
★ハガキに「裏窓でみた、目録送れ」とだけ書いてお送りください





\*\*\*\*\*

つましい隆起をみせた左右の円丘であった。すきとおるような白さの頂点に、小豆粒ほどのうす赤い乳首がついている。

うす黒く汚れた縄が、そのふもとに三本、四本とくいこみ、品のいい隆起をしめつけて、異様な形にしほりあげている。雪江の呼吸が、せつなくあえていた。

「おねがいです、佐兵衛さま。このようないたずらをなさらず、早く……」  
「早く？」

佐兵衛の目が、悪戯の対象を発見した子どものように、ぎょろりと光る。

「早く、なんだね？」  
「……」

雪江は顔を赤くしてだまった。浪人暮らしをしていても武士の娘。その武士の娘にあるまじき、はしたないことばを口にだしたのである。

「早く、なにをしろというのかね。ええ、お嬢さん？」

意地悪く、佐兵衛がからんだ。

「おねがいです。おなぶりになるのもう、おやめくださいまし」

雪江は、のどの奥で泣いていた。



指が、また、つ  
 いとのびた。みじ  
 かい悲鳴があがり  
 すぐにそれが、う  
 めき声に変わる。  
 齒と齒をかみ合  
 わせ、必死に耐え  
 ぬこうとする。こ  
 の屈辱と絶望のむ  
 こう岸には、きっ  
 と、きつと安楽な  
 憩いがあるにちが  
 いな。汗がなが  
 れはじめていた。  
 巨大な赤鼻が、  
 雪江の白い肩さき  
 にうごめく。  
 「ふむ、いいにお  
 いだ。こいつはま  
 ちがいなく生娘の  
 肌においだ」  
 柱にもたれかか  
 っている雪江の背  
 中が、避けるはず  
 みではずれ、ぶさ  
 まにのけぞった。







ただ、この身さえまかせれば、その一度だけを耐えしのべば、百両は棒引きになると、雪江は思っていたのだ。

大きなまちがいであった。佐兵衛の情熱は一夜で雪江の骨までしゃぶりつくすかのよう

に、執拗につづくのだ。  
「さあ、こんどは片足だけではない。両足だよ。左右の足に、べつべつの縄をくりつけ

る。そうしておいて、思い思いの方向に、べ

つべつにひらく、いいかね。わたしのいうこ

とばの意味がわかるかね」  
「佐兵衛さま！」

悲鳴のような声であった。  
はげしい怒りが、一瞬、雪江の目のなかに

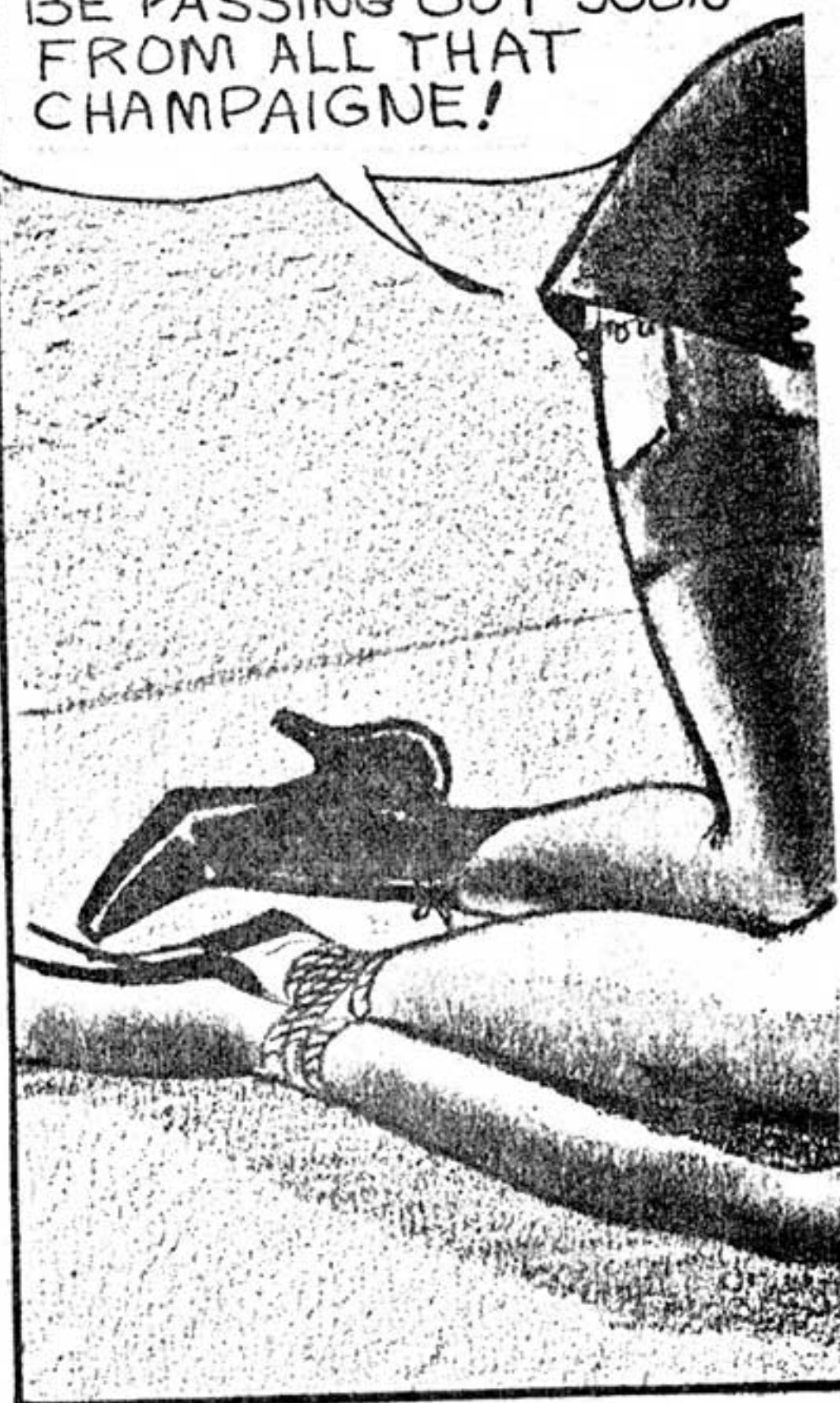
燃えた。しかし、それはすぐに消えて、透明のなみだが、みるまにあふれた。  
「ほかのことなら、どのようなおいつけにも従います。どうか、そのようなことだけは

もう、おゆるしくださいますえ！」  
むせび泣きながらの嘆願だった。

「ふふふ。なんとまあ大げさな声をあげるお嬢さんだ。なんだって？ ほかのことならなんでもする？ うふふふ。そいつはよししたほうがいいな。わたしはね、お前さんが、もっともつと恥ずかしがるような悪戯を、たくさん知っているんだ。こんなのは序の口さ」



PSST MISS GWENDOL  
I'M GOING TO FREE YOU  
YOU WON'T BE HURT  
ANYMORE... THEY'LL  
BE PASSING OUT SOON  
FROM ALL THAT  
CHAMPAGNE!



\*\*\*\*\*

槍の穂さきが、佐兵衛の背中から胸へと、刺しつらぬいていた。

「鬼ノ けだものノ」

槍の柄をつかんだまま、怒声を発したのは久左衛門であった。

佐兵衛を鬼と呼んだが、久左衛門の形相こそ、幽鬼そのままだった。骨と皮ばかりに病みおとろえ、枯れ木のような肩が、ぜいぜいと揺れている。

夕刻、だまって家をあけた娘の身を案じ、もしやと思いをめぐらせて、錆び槍を片手に金貸しの邸までやってきたのだ。娘を案ずるこの夜の親心に、久左衛門はいのちを賭けていた。

娘が、みずから望んで佐兵衛の前に身を投げだしたことは知るよしもなかったが、親の不安は適中していた。

「父上さまノ」

必死に両足をすほめて、雪江がさげんだ。

「雪江ノ」

と、娘を凝視した父親の両眼の周囲に、塗りこめたような青黒いくまがよどんでいた。娘のいましめを解くために、久左衛門はひと足ふみだした。その瞬間、久左衛門ははげしく咳こみ、両手で口をおおった。その指のあいだから、血があふれた。

(終)

ににぎられた。  
「さあ、泣くがいい。吠えるがいい。この邸にねむる下男も下女も、そんなことは先刻承知だ。だれも助けにきやしない。思いきりあばれてみるがいい。あばれば、あばれるほど、たった一枚残っているその腰のものが、ひらひらまくれあがるばかりだから……」

たしかに、そうにちがいがなかった。  
この佐兵衛には、憐憫とか、手加減とかいう心がないのだ。あるのは、旺盛な好奇心と異様な独占欲だけなのだ。

雪江の左足首に、縄が巻かれた。

右足首には、べつの縄が巻かれた。

一本の端は、床の間の柱に――。

そして、もう一本の縄の端は、佐兵衛の手

雪江は、肩を左右にゆすつてもがいた。  
無駄であった。手首と腕と胸にぎりぎり巻かれた縄は、一分もゆるまなかった。腰をおおっている一枚の布は、おそろしいほど佐兵衛のことばどおりになった。

佐兵衛の手の縄が、ぐいと引かれた。たしかな手ごたえがあつて、ひいッと笛のような悲鳴があがった。

そのときであった。

佐兵衛の両手が、ふいに虚空をつかんで、けいれんした。縄が手からはなれ、足が、二歩よろめいた。がつくりと、片膝を畳に折ると、前のめりにのめった。

佐兵衛の胸板から、血がふきだしていた。雪江の足のあいだに、頭から突っぶした。



# 長い悪夢

羽島七郎

水沢ゆかりは、疲れた心身を投げだすようにして、後部座席にうずくまった。

午前二時。追いかみにかかった撮影から、ようやく解放されたのである。

ゆかりは両眼をとじた。まぶたが重たい。ねむっていても、運転手が家まで送りつけてくれる。車に身をまかせてしまえば、もう家についたと同じことである。こころよい睡魔が、ゆかりを襲った。

撮影所の門を出て、二十分も走っただろうか、ふいに、車がとまった。

「どうしたの？」

重いまぶたをひらいて、前方の窓の外に目をやったゆかりは、闇のなかから大股で近づいてくる男をみとめた。

男は、いきなり車のドアをあけると、無遠慮にゆかりの顔をのぞきこんだ。

「水沢ゆかりさんだね？」

「あなた、どなた？ 失礼ね」

「あんたのファンさ」

男は、のしかかるように車にのりこむと、ゆかりの横に坐りこんだ。

そして、運転手の肩を、指で突いた。ふりかえった運転手の顔は、ゆかりのまったく知らない男だった。

「あッ」

ゆかりは息をのみ、背すじにつめたいものが走った。お抱え運転手の西村はどこへ行ったのか？

「おい、れいの所だ。早くやれ」

男は、運転手にみじかく指示すると、ゆかりにむかって、にやりと白い歯をみせた。

「あなた、だれなの。何をなさろうというのよ？」

ゆかりは、悲鳴のような高い声になった。

「しずかにするんだ」

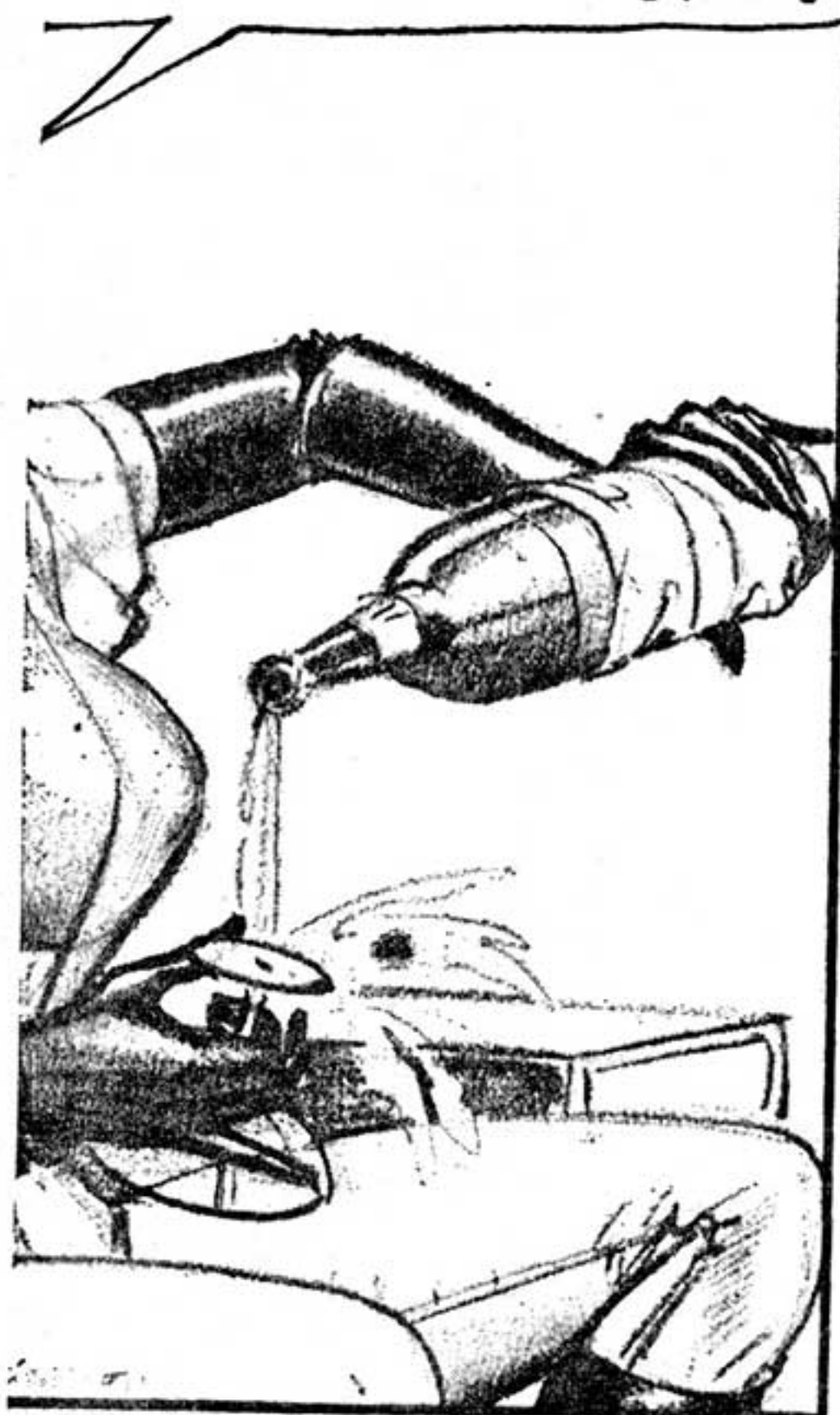
男は、右手に握った拳銃を、彼女の脇腹に押しつけた。ひどく固い感触だった。

映画に使う小道具とはちがう！ 恐怖が、ようやくゆかりの表情を凍りつけた。

「ごめんよ。ちょっと手荒いけどな」

ひとりごとのようにいうと、男はポケットから、白い布きれをつかみだした。

AIN'T YOU HAD ENOUGH?  
HY DON'T YOU PICK ON  
ME BODY YA OWN SIZE?



\*\*\*\*\*





「む、む……」

鼻と口に、いきなりその白い布を押しあてられて、ゆかりは顔をのけぞらせた。

異臭が、ツーンと鼻腔の奥までしみこむ。

意識を失ったゆかりが、シートにくずれる

と、男は拳銃を背広の内ポケットにおさめ、

その手でシガレットケースをとりだした。

車は、深夜の町を疾走していた。

——失われていた意識がもどった。

ずきん、とこめかみが病む。ゆかりは顔を

しかめた。まぶたが重い。頭をうごかして、

周囲をみまわす。うす汚れたコンクリートの

壁があった。天井もシミだらけのコンクリー

トである。壁にも天井にも、鉄輪がはめこま

れている。鎖を垂れさげた鉄輪もある。

強烈なライトがそれらを照らしていて、ど

こか映画のセットじみた光景だった。

ゆかりは半身を起こして、立ちあがろうと

した。あッと声をあげた。ゆかりの両手首は

前で組み合わされ、縄で縛られているのだ。

その縄はコンクリートのゆかを這い、さら

にのびて、天井のふとい鉄の輪までとどいて

いた。

なぜ、なぜ私はこんなところに？……

意識は、まだ、こんとんとしていた。

(88ページにつづく)



THIS DARN  
KNOT IS SO...  
TIGHT... I  
I..CAN'T  
LOOSEN IT!







「裏窓」既刊号各号の売り切れがせまっております

いまのうちにどうぞ！

★本誌最終ページをご参照ください★



猫の鳴くような音で、ドアがひらいた。

三人の男が、そろそろとはいってきただけ。ひとりは、さっき闇のなかから現われた男である。

「なにを、なにをなさろうというのですノ」  
舌がもつれていた。布きれに浸されていた薬が、まだ効いているのだ。

無意識のうちに、全身がくねっていて、ワンピースの裾がめくれ、自慢の長い脚が、男たちの目の下にむきだされた。

「仕事が終わったら、帰してあげるよ。きみを主演に、映画を一本撮るんだ。きみは専属女優で、映画会社はきみを貸してくれないから、少々強引だったが、こうしておいでを願ったというわけだ」

ベレー帽をかぶり、パイプを口にくわえた男がいった。いかにも監督気どりのポーズをつくっていた。

「そろそろはじめようぜ」

ゆかりに拳銃を突きつけた男が、元気のいい声をだして縄じりをつかむと、かけ声をあげて引っぱった。

縄は、滑車のきしる音につれて、いきおいよくたぐられた。ゆかりのくちびるがひらき黄色い声があがった。

いましめられた両手首が吊りあがり、縄が滑車から一直線に張ると、ゆかりは立ちあがりざるを得ない。頭上に縛り合わされた両手首に縄がくいこみ、するどい痛みが襲った。

男は、縄じりを固定させると、ゆかりの前に立った。胸のふくらみが、上下にあえいでいるのを、目を細めてながめている。

「乱暴はやめてくださいノ」

勇気をふるい起こして、ゆかりはいった。

ベレー帽の男が、ゆかりの前に顔を突きだしていった。

「おれが監督の黒沢だ、よろしく」

吐きだしたけむりを、その男は目で追う。

あくまでも、とぼけた男だ。

「やめてノ 冗談はもうやめてノ」

その切実なセリフは、コンクリートの壁を天井に、むなしく吸われた。

「おねがい、やめてくださいノ」

背中のホックにかかった男の指に、ゆかりはのけぞって戦慄した。男の指は不器用にふるえている。

ワンピースは、形のないひとかたまりとなつて、足もとに落ちた。白い肩がむきだされた。艶のあるぬめぬめとした肩だった。

男は、まぶしそうに目をぱちぱちさせた。

恐怖をはねのけて、羞恥がゆかりを襲い、細い胴と、豊かに肉ついた腰がくねった。

「よし、そのへんから行こうぜ」

黒沢監督が、はずんだ声をあげた。

撮影機が回転音をあげはじめた。

「やめて、いやです、いやですノ」

両手を吊られたまま、悲鳴をあげる。

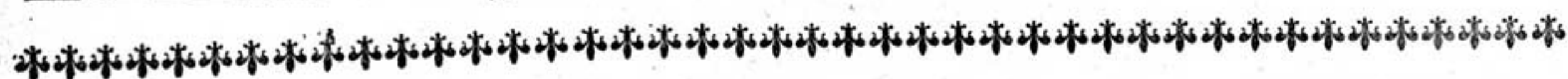
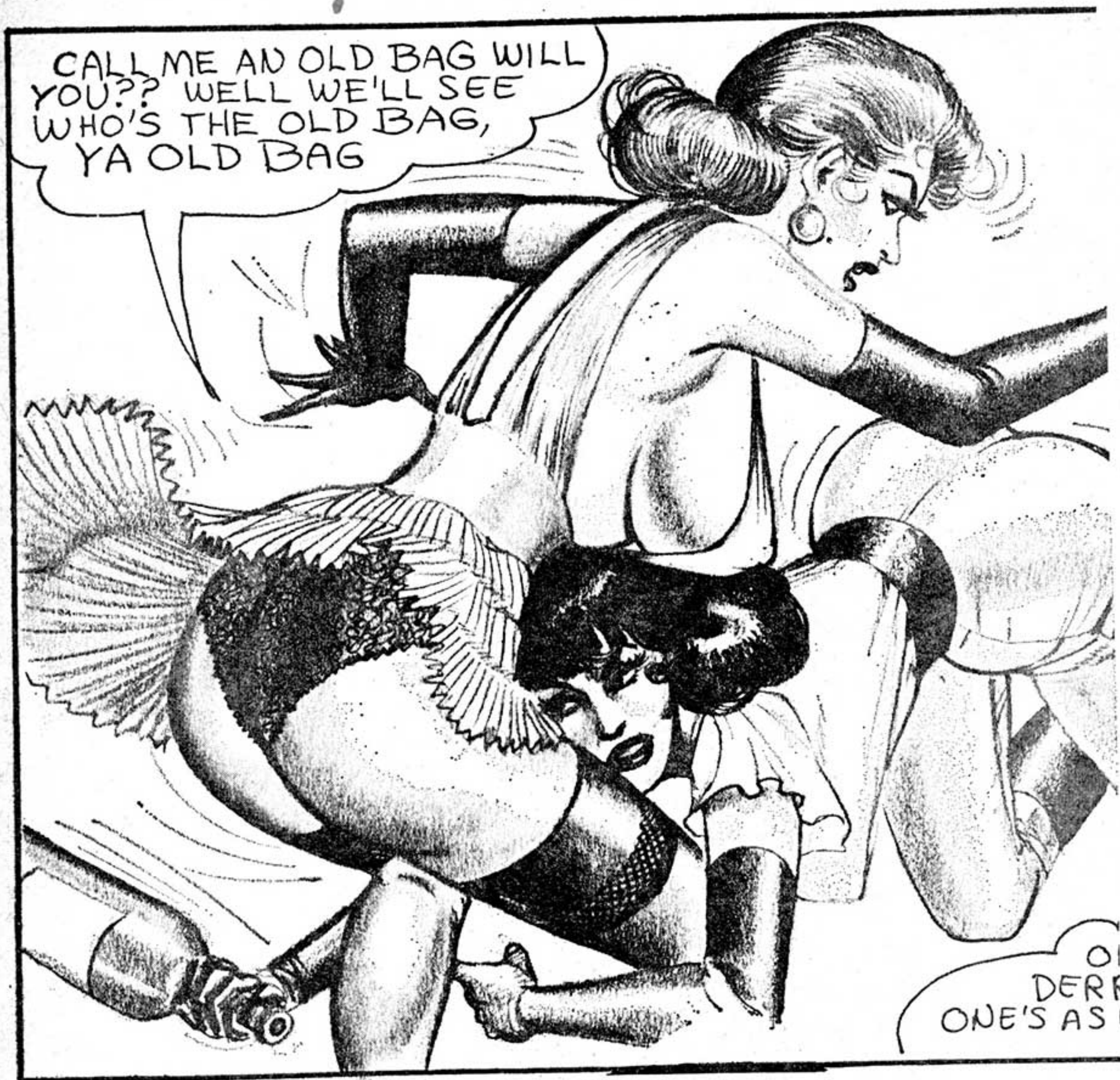
スリッパだけの姿態が、しらじらとライトに浮かびあがった。柔軟にのびきった四肢であった。手入れのゆきとどいている素肌は、ライトを浴びて、なまめかしく光った。男たちの不純な視線を感じて、ゆかりは目の前がまっくらになった。



DE DERRIE...  
!IERER... ER  
GOOD AS ANOTHER!

\*\*\*\*\*





ブラジャーでしめつけた胸が、せわしくはずんだ。頭上に吊りあげられた両手の、腕のつけねがぬけるように痛んだ。腕の内側の白いやわらかい筋肉が、こまかくけいれんした。のびきった両足の膝が、固く合わされて羞恥に抵抗しているのだった。

口を半びらきにしてあえぐゆかりの顔を、カメラは克明になめた。

地下室のゆかは、はなやかな色彩が散乱していた。ゆかりのポーズは、むかしのクリシタンの殉教者を想像させた。両手をたかだかと吊られて突っ立ったゆかりのからだは、神々しいような美しさだった。

ふとももにくびれを残して、くつきりとくいこんだ靴下止めと、長い脚を包んだストッキングに、異様なまでのなまなましさがあった。

男たちの視線よりも、ゆかりには、カメラのほうがおそろしかった。この恥ずかしいポーズが、あのフィルムに刻まれていくのだ。

「さあ、いよいよ、これからクライマックスシーンにはいるぞ」

黒沢監督が力強くさげんだ。



全身の血液が、恐怖と羞恥に凍りついた。手首の縄が解かれた。それは、改めてうしろ手に縛りなおすためだった。

うめき声が、白いからだからほとぼしりてた。縄とともに腕と足が虫のようにくねる。

背中に、たかだかとくくりあげられた両腕の、その先端のしなやかな指がこまかくふるえていた。縄はゆたかな胸に容赦のない荒さでくいこみ、ゆかりの呼吸を封じていた。

「ああッ！」

ゆかりの頬がゆがんだ。

前方から近寄ってくる男の手に、異様な形の器具が握られているのだ。それは皮製の首輪だった。犬の首にはめるもののように、二メートルほどの鎖がついていた。

「な、なにをなさるの！」

父親に叱られる子どものような、おびえた声でた。男は、わしづかみに、ゆかりの髪の毛をつかんだ。

「はなして！ やめてちょうだい！」

ゆかりは顔をふり、肩をふるわせた。男の手は、その抵抗も哀願も、まったく無視していた。のけぞるゆかりの首に、皮製の首輪がはめられた。

皮がのどにこすれる苦痛よりも、屈辱のほうがはげしかった。くちびるをふるわせ、ゆかりは、それこそ犬のようにうめいた。

「なかなか、りっぱなアクセサリーじゃないか。似合うぜ」

黒沢監督が嘲笑した。ことさらにゆかりを侮辱するかのように、その首輪を指のさきでぱちん、とはじいた。

このあいだにも、カメラは軽快な回転音をつづけていた。

首輪からのびている鎖の先端は、壁に取りつけてある鉄輪に固定された。

ゆかりは、皮の首輪をのどに巻かれたまま犬のように壁につながれたのである。

「さあ、つぎのシーンだ」

時間の経過とともに、黒沢監督はますます精力的になっていった。

男が皮の鞭を握った。多少の誇張を混えて大きくそれをふりかぶった。コンクリートに囲まれた室内の、濁った空気を切り裂いて、鞭が躍った。

「おい、美しいめす犬さん。逃げるがいい。この鞭にあたったら、かなり痛いぜ」

男が、インデアンのような奇声をあげた。

びしり、とコンクリートのゆかに、皮の鞭があたってはねた。埃が舞いあがった。腹の底にひびくような音だった。

「やめて、いたずらはもうやめて！」

思わず悲鳴をあげた。男たちのねらいがわかったのだ。鞭を避けるためには、ゆかの上を膝で這いまわらねばならない。縄でうしろ手に縛りあげられ、鎖のついた首輪でつながれているからだ。犬のように這いながら鎖のながさだけを、必死に動きまわらねばならないのだ。

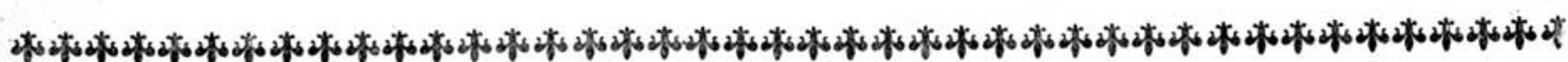
また鞭が、コンクリートのゆかに鳴った。ゆかりのからだは、ぎくんと脅えた。純白だった下着の裾が、塵埃に汚れ、やがては素肌まで汚れていくことだろう。しかし、鞭が肌にあたることはこわかった。

QUIT IT!  
AIR! OOOOO..  
T! I GIVE UP  
EADY!



\*\*\*\*\*





ストッキングの膝は、たちまちのうちに  
すり切れた。鎖が、ぴいんと張って、首輪  
がのどをしめつける。だが、じっとしてい  
ることはたきない。皮の鞭は、ゆかりの前  
後左右に乱暴なダンサーのようにねまわ  
りつつけるのだ。

ときおり、逃げそこなって、まるいしり  
に鞭の先が、ぴしッとあたる。

「ひいッ」

と、みじかい悲鳴をあげて、ゆかりの四  
肢は硬直した。

「それ、まだへたばるのは早いぞ。な  
まけていると、その背中へ打ちおろすぞ」  
ゆかりの耳もとへ、びゅうびゅうと鞭を  
鳴らすのだ。ゆかりは、また手足の関節に力  
をこめて、コンクリートの上を這いまわる。  
首輪がのどにくいこみ、吐きをおぼえた  
が、鞭の苦痛のほうがおそろしかった。

ひたいから汗がしたたり落ち、せいぜい  
とどがうめいた。

「も、もうたすけて、おねがい……」

哀願がかすれる。髪が乱れて、顔の前に  
たれさがった。乳房の呼吸が波のように荒  
く、肩の筋肉が、ぶるぶるとけいれんをお  
こしていた。だが、鞭はまだ、ゆかりの肌  
へ二、三度しかあたっていない。





ALRIGHT! I'VE  
HAD IT! LET UP ON  
ME WILL YOU!?

I HAVEN'T HAD  
THIS MUCH FUN  
SINCE I PUNISHED  
GWENDOLINE!

ゆかの上へ突っ伏し、うずくまったまま動かないゆかりの、魅力的に盛りあがった下半身の部分に、鞭がいきおいよくはねた。

「ひいーッ!」

海老のようにはねあがった。

虚栄も自尊心もかなぐりすて、苦痛をむきだしにしたスターの表情を、カメラはクロージアアップでとらえる。

男たちのからだからも、異様な熱気が放射していた。だれもが、無言になっていた。

十五分間ほどの休憩のち、ゆかりはうしろ手の縄目に、鎖を結びつけられていた。

その鎖は上にのびて、天井の吊り輪に止められている。坐ることをゆるさない格好だった。

立ったまま、がっくりと首をたれていたが意識を失っているわけではなかった。恐怖と羞恥の連続に、ゆかりは疲れていた。

男の手が、ゆかりの両脚から、破れ果てたストッキングをむしり取っても、観念したように動かなかった。

暗い客席に坐った男たちを陶醉させ、同性たちには嫉妬をおこさせた美貌も、屈辱にゆがみ、なみだにぬれるばかりだった。

そして、この孤独な演技は、まだまだつづいた。夜はいつふけるとも知れなかった。



「どうだい、すこしはこたえたかい？」  
 髪を片手でつかみ顔をうわむきにさせておいて、黒沢監督がいった。  
 「この魅力的なからだを、だいぶ撮らせてもらったが、まだ決定的なシーンが不足しているんでね、もうすこし、演技をつづけてもらうよ」  
 「も、もう、かんにんしてください。おねがい！」  
 弱々しい声で哀願する。この男たちには、もう勝てない、降伏するより仕方がないのだ、  
 「駄目だよ。まだまだ趣向が残ってるんだ。ギャラはちゃんと払ってやる。がまんしてくれよ」





黒沢監督は、背広のポケットをさぐると、タバコを取りだした。

「ゆるして、ね、お願いです！」

うわごとのように哀願をくりかえす。

日本映画の代表的美人スターとして、自意識過剰が鼻につき、ファンの人気投票とは逆に、ジャーナリズムではあまり評判がよくない。

その美人で上品ぶった水沢ゆかりが、自尊心をはぎとられての、女乞食のようなみじめな哀願だった。

黒沢監督は、タバコを口にくわえ、ライターをもてあそびながら、いまは醜いほどあわれっぽい顔になったゆかりをながめた。

「その顔と、いまの声を、全国のきみのファンにみせてやりたいな」

陶醉したような表情で、せせら笑うのだ。

ゆかりの目が、かっきりとひらいた。最後の自尊心が呼びおこされ、屈辱の思いが、あらたにわきあがる。

「私、あなたがたの顔を、しっかりとおぼえておくわ。そして、いまにきつと復讐してやるわ！」

唾を吐かんばかりにののしったが、すぐにそれは悲鳴と変わった。

ライターの炎が、ゆかりのあごに近寄ったのだ。

「ごめんなさい、ゆるしてえ！」

黒沢監督は、にやりと笑い、そのライターの火を、くわえたタバコに移した。

「きいたふうなことをぬかすなよ。お前さんはな、いまはおれたちの奴隷と同じなんだ。おれたちはな、しようと思えば、お前さんにどんな恥だってかかすことができるんだぜ」

地下室は、ライトの光線だけではなく、男たちの熱気で白熱していた。

男たちは、みんな汚れた顔をしていた。汗に埃が吸いつき、それを手でぬぐうのだから黒っぽい顔になっていた。目だけが、ぎらぎらと燃えていた。

ゆかりの肌も汗にぬれ、ぬらぬらと光っていた。長い悪夢だった。

左足首と右足首のあいだが、三十センチほどの鎖でつながれた。むろん、両腕は背中にぎっちり縛りあげられたままである。ゆかりのからだは、不安定なものとなった。うつかり歩くと、ころぶのである。歩幅は三十センチの余裕しかない。よちよちと足を交互にだすよりほかはなかった。

壁際に、古びたテーブルが置いてあった。埃にまみれた、傷だらけの古テーブルである。男は、そのテーブルの上に、ゴルフの球を一個のせた。

「歩いて行って、あの球をくわえ、ここへもどってこい。できるだけ早くな。ぐずぐずしていたら、罰はかならず後から加える」

黒沢監督が、タバコをすてて命令した。

助手の男は、こんどは細い竹の笞をつかんで、ゆかりの背後にまわった。

「ゆるして、もう動けないの」

I'M NOT WORRIED  
OR MYSELF! IT'S  
YOU I CARE ABOUT..  
CAN'T STAND TO SEE  
YOU CRYING LIKE  
HIS. YOU HAVEN'T  
STOPPED ALL DAY!







両眼にいったいのあわれみを浮かべて、ゆかりはあえいだ。胸がくるしい。乳房をしめつけている縄は、すこしのゆるみもなく、時間の経過とともにくいこむ一方だった。

「歩くんだ！」

黒沢監督がどなった。

竹の笥が、縄と縄のあいだに突き入れられた。こじりあげた。ひいッと悲鳴がふきあがる。

「あまったれちゃいけねえ。仕事ってものは、きびしいものなんだ」

筋肉のなかに、縄の一本が没した。笥が胸の縄をひと巻きして、こじあげたのだ。

胸の隆起までがゆがみ、左右のかたちが、数秒間変わった。

「う、う、う」

くちびるとあごが、けいれんした。よだれがひと筋、あごを伝わった。疼痛に一瞬息がつまり、ゆかりのわずかな抵抗心が吹きとんだ。

「歩いて行って、あのボールをくわえてくるんだ。ぐずぐずするな！」

ゆかりは、右足から、よちよちと歩きだした。鎖の長さは、三十センチしかない。それだけの歩幅だ。いそぐところぶ。ゆかりは、歯をくいしばった。



鎖と鎖がふれ合い、屈辱的な音をあげた。

からだの平均をとって、よち、よちと歩かねばならない。両手はうしろ手に縛りあげられているのだ。からだの均衡をとりながら、ゆかりは進む。ゆかりはコンクリートである。ころんだら、肌に手ひどい傷がつく。女優にとって、顔や肌に傷のつくことは、死ぬことよりおそろしい。

よちよち、よちよち、臀部が盛りあがり、左右にゆれた。下劣なうごめきかたをした。それをみて、黒沢監督は、にやりと笑う。

「も、もう、駄目！」

足が、とまった。肩で息をしている。背中に固定されている十本の指が、とじたり、ひらいたりしている。苦しいのだ。

「歩け。もっと早く歩くんだ！」

男の声が、ゆかりの首すじにとんだ。

声だけではなかった。細く磨かれた筈が、背後から、しりのまるみに鳴った。

「ああッ、歩きます、歩きますから、ぶたないで！」

うめきながら、また足を前にだす。

汗と屈辱にまみれて、よちよち、よちよちと歩く。肩をふり、しりをふって、あひるのよう歩くのだ。

ようやく、テーブルの前にたどりついた。

腰をかがめて、ゴルフのボールをくわえようとしたが、すぐに、それがむずかしい仕事であることを知った。ボールをくわえるには口をいっぱいひらかねばならない。

それは、恥ずかしいことだった。口を大きくひらけば、顔がゆがむ。汗とよだれにまみれた顔が、いっそう醜くゆがむのだ。

黒沢監督が、ゆかりの背後に寄ってきた。うしろから髪をつかみ、ぐいと引きおこしながらいった。

「もっと大きく口をあけるんだ。気どっている場合じゃねえぞ！」

「い、い、いたいッ！」

黒沢は、あごをしゃくった。すると助手がゆかりの前にまわり、そのふくよかな頬に、指をくいこませた。

「うッ、わ、わ、わ！」

うめいて顔をふった。子どもが蛙の口をひき裂くように、むりやり、くちびるを上下にひろげられたのだ。

きれいな歯ならびの奥で、桃色の舌が妖しい花びらのように濡れてあえいだ。

「よし、おれが球をくわえさせてやろう！」

黒沢監督の手が、テーブルの上のボールをつかみ、ゆかりの顔の前に持っていった。

「わ、わ、わ、ゆるして！」

ゆかりの瞳孔がひらいた。

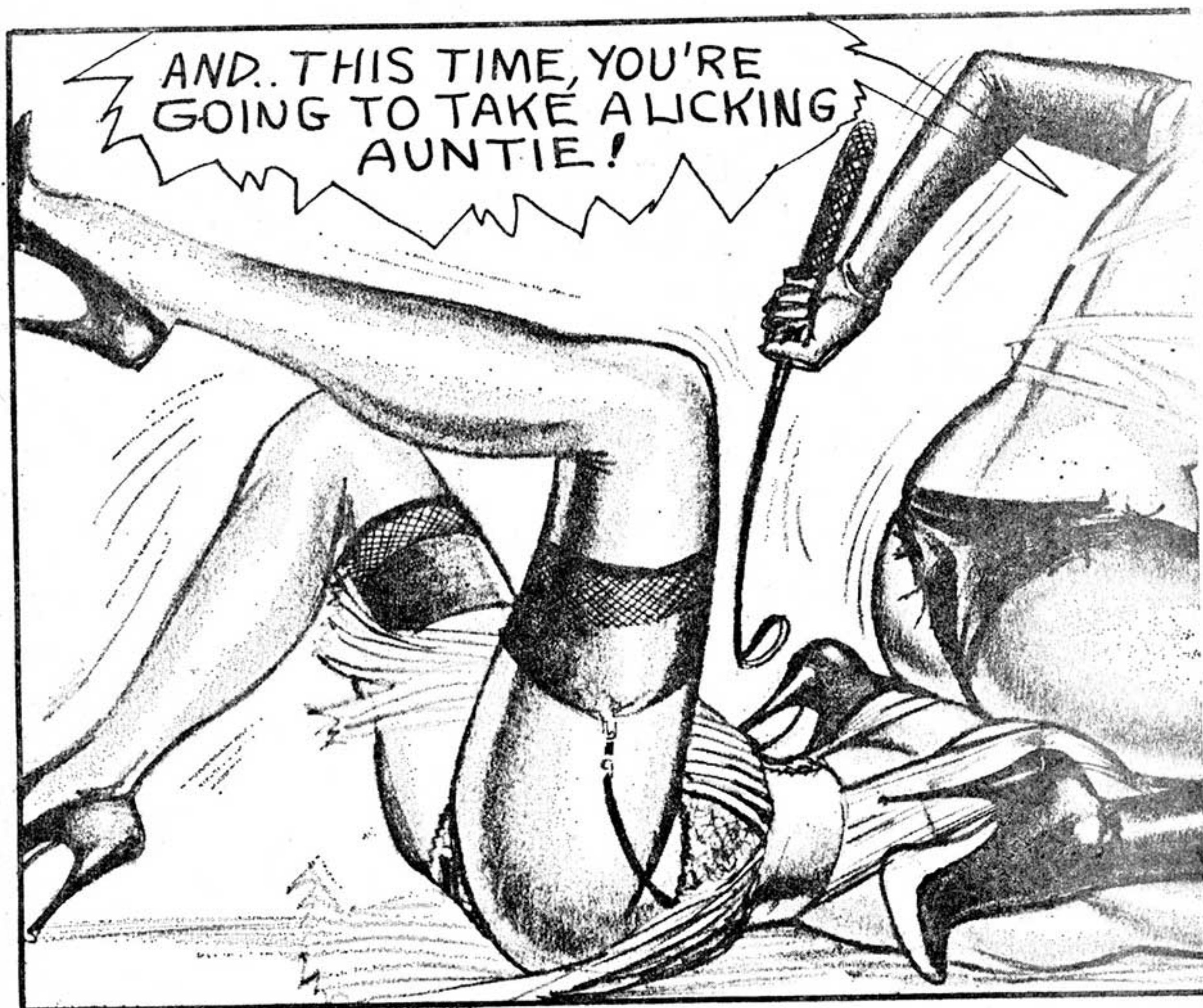
口腔に異物が押しこまれ、ねじこまれた。

さるぐつわの効果があつた。たちまち、よだれがゆかりのあごに溢れた。



\*\*\*\*\*





「これでよし。吐きだしたり、落したりしたら、承知しないぞ。それをくわえたまま、もとの位置にもどるんだ。吐きだしたら、ひどい目にあわせてやる」

ゆかりのひたいに、油汗がにじんだ。

よちよち、よちよち歩きはじめる。鎖が鳴る。ころびそうになる。もし落としたら、この男たちは本当に苛酷な仕置きを加えるだろう。うしろ手に固くいましめられている指が握られ、縄にくびれた胸が、荒い呼吸にあえていた。

瞳孔は、なみだを忘れて乾いた。鼻孔をひくつかせながら、ゆかりはけんめいに歩く。

「早く！ ぐずぐずするな！」

黒沢監督が大声でわめいた。

その声に応じて、男の答がはねかえった。臀部に、ひとときわ鋭く、びしッと鳴った。

「あッ！」

声をあげたとき、ゆかりの口から、ボールがとびだした。

「ふふふ、落としたな。わざと吐きだしたんだな。いい度胸だ。覚悟はいいな」

ゆかりの絶叫は、すぐに消えた。

声をあげる余裕すらない猛烈な攻撃が、急激な速度をもって、ゆかりの肉体に襲いかかったのである。



# ある奴隸の生態

瀬川美岐

「きょうも一日おそばに置いて頂きまして光栄でございます。お申しつけのお仕事は、ぜんぶ終わりました。ただいまからは奴隸でございます。どうぞ、ご存分になさってくださいませ」

私は、あなたのベッドの横にひざまづき、このきまりきった文句をとなえてから、うやうやしく、ひれ伏します。  
あとは、あなたのお心のままなのです。

あなたは百六十三センチ、十三貫五百の豊満なおからだを、中国服ふうに仕立てた真紅のネグリジェに包み、ベッドの背掛けにもたれて、ゆるりとくつろいでおられます。

二十六歳。広い理論的な額と、くつきりした鼻すじとが、やや強い印象をあたえますが深い愁いをたたえた大きな瞳と、いつもぬれたようなつややかな唇とが、はじめてお会いするだれをも魅了してしまうほどの美しさ。

——さてあなたは、私の髪を無雑作につかんで吊りあげます。そして、片頬にあの謎のような微笑を浮かべられ、しばらく私の、仰向けにあえぐ顔をおみつめになります。

今夜はどのようにおなぶりになるのか。どんなご命令がでるのかしら？

私は、おそれと期待におののきながら、あなたのお口もとを仰ぎます。

あなたは、ふと微笑を消し、お手をはなされると同時に、すばらしい的確さで、ピシリと私の額のまんなかを弾きます。たいていは中指と親指で弾きますが、ときに万年筆などお持ちになられ、それで代用されることもございます。とにかく、額を弾かれたときは、ブランドイのご注文なのです。

私は、かしこまって、そのまま一メートルほどさがり、立ちあがって部屋の隅へ参ります。

お好みどおり整えますと、また一メートル手前でひざまづき、あなたのおとりになりやすい位置にまで膝行して捧げます。

あなたは、爪をお磨きになっていらっしやったり、タバコをお吸いになっていらっしやるので、すぐにはグラスをお取りにはなりません。







何もしておられなくとも、知らぬ顔をなさって、いつまでもおだまりになっていらつしやる場合がございます。

私は、捧げ持った銀盃がふるえてくるのを意識しながら、いつまでもひざまづいていなければなりませんでした。

グラスをお手にされると、私はそのまま素肌に浴衣一枚という奴隷ユニホームで、床に端座し、ブランディをおほしになるのをお待ちするのです。

ご寝室である八畳の洋間は、あなたのお好みで敷き物もしくず、冷暖房の設備もりっぱにありながら、こうしたご遊戯をなさるときには、決してお使いになりません。

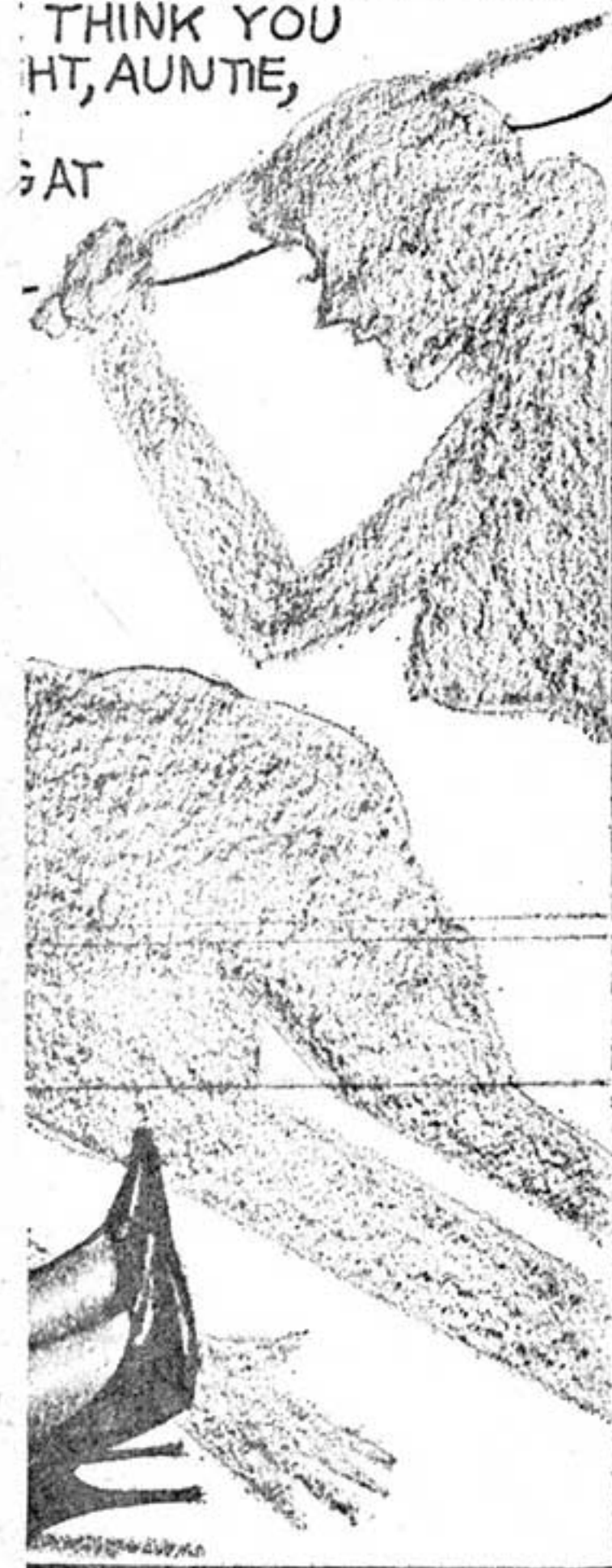
こういう秋の夜、あなたはゆっくりと時間をかけ、私の足腰が冷えきるまで、なにかお考えにふけりながら、アルコールをお飲みになります。

だいたい、お酒にはお強いほうで、日本酒なら三合までは軽く、ハイボールは四、五杯、ストレートでもお召しあがりになります。指で弾かれる場所によってのご注文を、いつかうっかりまちがえて頭から、ビールをかけられたことがございました。



DISAPPOINTED IN YOU  
E! AFTER ALL I'VE  
OUGH STICKING UP FOR  
TRY TO RUN OUT ON  
THINK YOU  
HT, AUNTIE,

AT



適量をすこしお過ごしになられると、気まぐれをおこされるのが、あなたのお癖で、私のからだをいきなり抱きしめられたり、激しく唇を合わせたりにして、私を有頂点にさせるのでございました。

そういうときは、私の口からでる讚美のこぼれを、上機嫌でおききあそばし、その白磁のようなお肌を、惜しげもなく、私の唇におあたえくださいます。

私は、このとくべつの恩恵をねらって、じょうずにお酒をおすすめいたしました。

もちろん、酔いがさらに苛烈さにプラスすることも多くありましたが、とにかく私たちは、これをブランディ儀式と呼び、私の奴隷となる開幕前奏曲ときめておりました。

この儀式のあいだ、あなたはほとんどお口をきかぬことが多く、たぶん私めに、今夜はどんな方法を考えておられるのでしょうか。

ときどきブランディの最後のひとくちを、私におあたえになることがございましたが、その方法もさまざまで、

「お前、残りをお飲みノ」

と、あわててさしだす私の銀盃に、乱暴におのせになるときもあれば、私のあごに指をかけて仰向かせ、一気にのどへ流しこまれることもございます。

もちろんあなたは、私がどんなに努力しても、全然アルコールがからだに合わず、どんなに少量でもすぐまっ赤になり、胸の動悸が激しくなることをご承知の上で、そのような悪戯をなさるのです。

思いおこせば、あなたとのレスボスの関係は、八年も前の学生時代からつづいております。そのころの私の美しく稚い傾倒は、社会人になってからも、こうして、激しくあなたにまつわりつくのです。

豪華な洋裁店を経営し、その仕事に情熱を燃やしておられたあなたは、つぎからつぎへと持ちこまれる縁談を断りつづけてきましたが、ちかごろようやくレスボスに飽きられ、異性との交際に興味をお抱きはじめになりました。

私にはそれが、すぐわかりました。

女性として、人なみすぐれた美貌と才能にめぐまれたあなたが、私のようなものに、どれほど讚美を捧げられようと、満足できようはずはありません。

私は敏感に、あなたにすてられる日の近いのを感じ、ひたすらにご機嫌をとり、犬にでも、奴隷にでも、どんなにみじめな玩弄物にでもなりますから、おそばに置いてくださいと哀願したのです。

あなたの平常の生活は、サディストどころか、もの静かな優雅な女性として、洋裁店にお見えになるお客さまがたはもちろん、大勢の弟子たちからも尊敬されておりました。

無抵抗のふりをよそおっていても、いつすてられるかとびくびくし、執拗な哀願をくりかえす私の姿勢が、いつのまにかあなたを残酷にし、私を思いきり愚弄してみたい気持ちに、あなたを誘導していったのかもしれない。





九月のある夜、通いのお弟子さんたちがみんな帰ってしまったあとで、おとくいさまからの急の仕事を引き受け、あなたと二人きりで、遅くまでお店にいたことがありました。そのとき、あなたはおっしゃったのです。「このあいだ、あなたは、どんなことでもします、奴隷になります、犬にでもなります、だからおそばに置いてくださいって、たしかに言ったわね?」

「ええ」

と、私はこたえました。

「あれ、本気で言ったの?」

「本気です」

私は、チャンスだと思いました。

「本気ですとも。あなたのためなら、死んでもいいわ。いままで以上に私、昼も夜も働きます。だから奴隷にしてください。おいしいけにそむいたら、ぶってもいいわ。そのかわり、一生あなたのおそばに置いてほしいの。そして、できることなら、もっと愛して頂きたいの。お願い!」

私は、あなたの足もとにひざまづき、お靴に接吻いたしました。

ああ、その夜、あなたが私におっしゃった「女王と奴隷の契約条件」を、私はいまでも一言一句おぼえております。



「——奴隷奴隷というけれど、あなたは本当に奴隷というものがわかってるの？ 軽い気持ちで私にそんな願いをするのは、たいへんなまちがいかも知れなくてよ。奴隷なんてものは女王さまの気まぐれで死を命じられても、よろこんで服従することのできる、生きた物質でしかないのよ。」

——学校時代のあなたは、宝塚の男役まがい、ちょっとした人気者だったことは、私もよく知っているわ。でも、ひとたび私の奴隷になったら、そんな思いあがりは、ぜんぶすてて頂いわ。他人の前だけは、いままで通りの親友としての待遇をあたえてあげますけれどね。そのかわり、一度ふたりだけの世界にとじこもったら……。

——私は他人から同性愛者だと思われるのはうれしくないし。一応あなたとも、よいお友だち同志の仲をみんなに通用させたいの。でも、私の家でふたりだけになったら、あなたはゆるされないかぎり、すくなくとも、一メートル手前で私にひざまづくこと。これが第一の条件。

第二に、私の仕事や、生活態度について、いっさい口出しすることを禁ずるわ。第三、私の命令に、絶対服従のこと。いうまでもないことだけど。第四、私の命令に耐えられなくなったときでも、けっしていいわけを言わないこと。ただひたすらに許しを乞うだけ。第五、私の打撃を受けたとき、あなたはでるだけ元の姿勢にもどること。

これはつまり、私のつぎのお仕置きを、すぐ受けられるような姿勢と位置にもどるわけよ。よく昔、軍隊でなぐられた兵隊が、倒されてもすぐまた起きあがって気をつけの姿勢をとらされたわね。よく映画なんかであいう兵隊生活をやっているけど、あれを思いだせばいいのよ。

第六、最高に訓練されたホテルのボーイのように、早く私の行動や心理のこまかいところまでのみこみ、サインひとつで、私の意志の動きにそえるように努力すること。

最後にもうひとつ。私は弱い奴隷はきらいよ。むやみに悲鳴をあげたり、すぐに泣き声をださないこと。

これが、私の奴隷となる七つの鉄則。

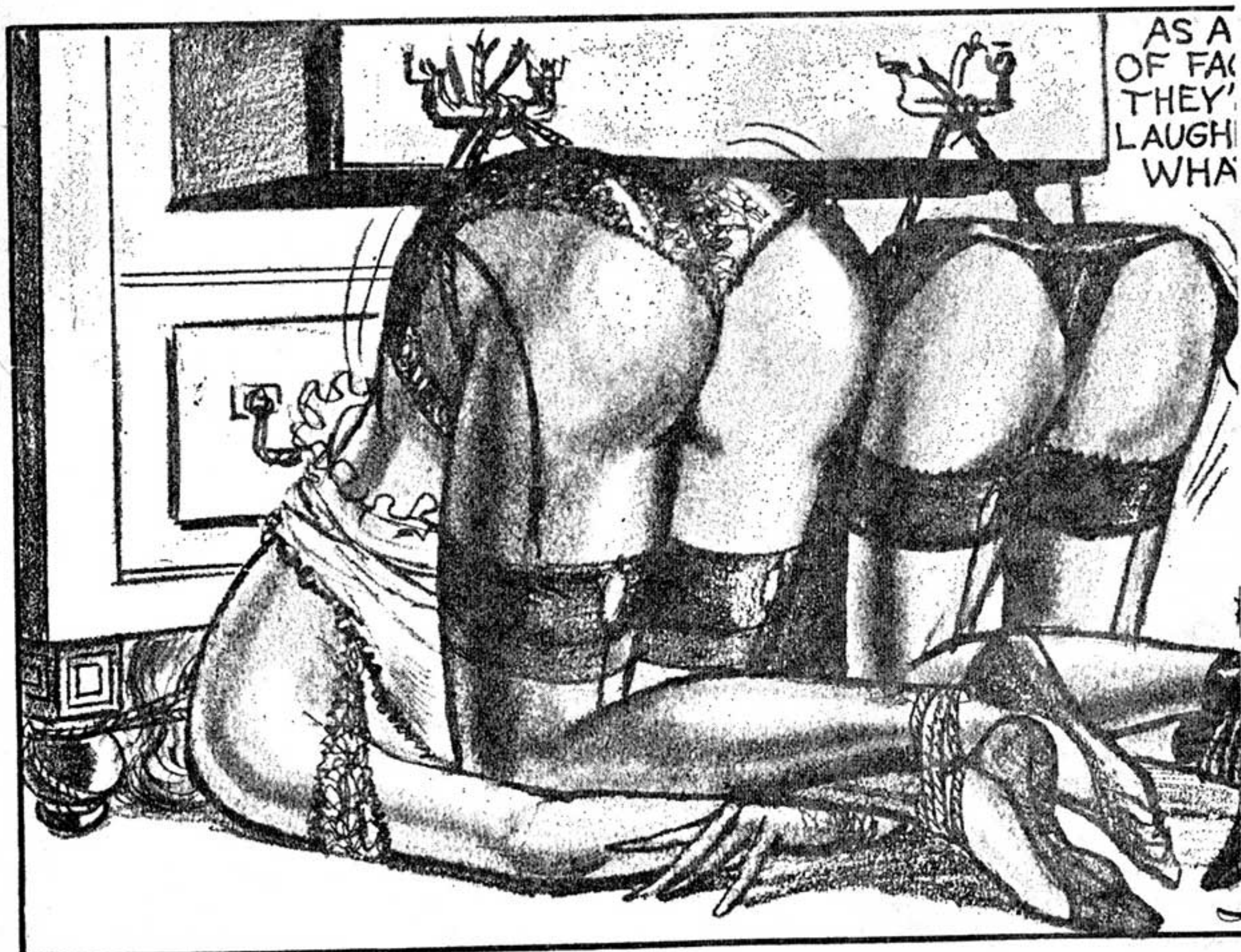
よくって？

いま言ったことに服従すると誓えるなら、あなたの衣食住はぜんぶ私があたえ、ご希望どおり、奴隷として、そばに置くことにするわ。この約束を承知した後で、七つのどれかにそむいたら、その程度に応じて罰することは、もちろんのことよ。その最高刑としてはまさか殺すこともできないから、あなたを私のそばから追放することね。さあ、よく考えてからおきめなさい。あとで後悔することのないように……。

MATTER  
IT I THINK  
RE BOTH  
NG AT US!  
I SAY WE  
CHANGE  
THEIR EX-  
PRESSIONS  
JUST A  
LITTLE!







私だって、あなたがこれほどまでに私を慕ってくれる気持ちは、うれしいと思うわ。私のからだを抱いてあなたがしあわせに感ずるなら、ときどきは抱かせてもあげるし、接吻もさせてあげるわ。

でも、私はその気になれないとき、あなたにそばでうろうろされたら、それこそ、あなたの顔もからだも、めっちゃくちゃにしてやるわ。あなたにMの傾向があるということは、前からわかってはいるけれど、私の本当のお仕置きを受けたら、さすがのあなたもきつとネをあげてよ。

私は、サディストだという自信はないけど人間ひとりを自分の意志で自由にもてあそべるとしたら、こんなチャンスに、多少は、日頃の妄想を実際にためしてみたいと、思わないでもないわ。

どうする？

私は、ぜがひでもあなたが欲しいというわけではないし、このまま先行きはみじかくとも、友だちとしての関係を残したままで引きさがったほうが、あなたにとっても無事ではないかと思うけれど……。まあ、もう一度よく考えてから、覚悟をしてちょうだい」

私は、なかばほうぜんと、そのおことばをきいておりました。





これまで、いたずら半分の私の願いでときどき、私の頬などをお打ちになられたことはございましたが、あなたが、こうまで完ぺきな奴隷をお望みになるとは思いもよりませんでした。

いいかえてみればあなたが、これほどサディスティックな妄想をお持ちとは、不覚にも私、まったく気づかなかったのです。私は内心、そのきびしさにおどろきましたが、私のMも強烈に満足したことでした。私はほとんど瞬時に、友だちの座をすてて、奴隷に身を落とすことを決心したのでございました。



「わかりました、お嬢さま」

私はそういつて、すぐその場のゆかにひざまづき、うやうやしく、あなたのおみあしを頂きながら、おもむろに誓ったのでございます。

「いまから私は、永久にあなたの奴隷としておつかえいたします。ただいまのお申しつけには、絶対に服従いたします。これからあなたを女王さまとお呼びするのをゆるしてください。そして私を、サキとお呼びすてになるか、または、お前と呼んでくださいませ。もし、おしいつけに違背したら、どのような罰にも耐えてみせますから、おそばから追いだすことだけは、どうかおゆるしてください」

するとあなたは、美しいおみあしを、私にゆだねたまま、つめたくお笑いなさいましてこんなことをおっしゃいました。

「まだまだ、あまいわよ。どんな罰にも耐えるって？ そんなことが、どうしていまから言えて？ それは約束できないわ。私はどんな形でも、束縛されるのは、いやよ。おたがいの呼びかたについては賛成するわ。ちょっとおもしろそうだから……」

「はい」

私は、もう一度、わかりました、と申しあげて、おみあしに頬ずりいたしました。

すると、あなたは、

「後悔しないわね？　じゃ、これできまったわ」

と、おっしゃって、足をお引きになりました。そして、改めて右足を、私の後頭部におのせになり、なにも仰せられず、いきなり、私の顔を、ゆかに踏みしめたのです。

「アアッ、アアアッ……」

私は鼻もまがり、唇もめくれるほど、ゆかに押しつけられ、奴隷としての運命を思い知らされたのでございます。

その夜から私は、昼間は洋裁店の若いマダムの片腕として働き、夜は寝室の奴隷としておつかえすることになったのでございます。

昼間の私は、秘書とも小間使いともつかぬいわば雑用引き受け係りでした。洋裁も多少のことはできましたけれど、だいたい手先が無器用なたちで、女らしい仕事は、にが手の私でした。

最初の三日間、私は七つの鉄則のほかに、あなたのこまかいお好みのひとつひとつを、丹念に教えこまれました。

たとえば、あなたのご命令があるまでは、部屋の片隅で何時間でも空気同様にひっそりとひかえていることや、そうしていながらも主人の動きには十分に注意していること。

いざご命令がくだったら、敏速にそのご意

志にそうよう、準備を怠らないこと。心身ともに、常に主人のために提供できるよう、油断のない心がまえでいること。

口のききかた、目の動かしかた、ひざまづいてから膝行するまでの動作、立ちあがりかたに至るまで、いろいろとこまかいご注文をおつけになりました。

ユニホームは、季節にかかわらずパンティと膝までの浴衣一枚と定められました。もちろん、下は素肌のままです。

ここまでは基本的な奴隷としての動作心得でしたが、罰を受ける心得としては、たいへんにきびしい口調でこう言われました。

「鉄則のなかでもいったけれど、私は、弱虫な奴隷は、それだけでも好みに合わないの。私は、いわゆるさるぐつわがきらいなのよ。私はお前の苦しみを耐える表情を、じつくり眺めていたいと思うし、さるぐつわで顔半分がかくれるのは、どうもおもしろくないの。だから、泣き声をあげたり、悲鳴をあげるのには、私はきらいよ。声をあげたときの罰は、お前が想像もつかない方法でやってあげるから、覚悟しているのよ」

私の奴隷としての生活は、いよいよ、こうして開始されたのでございます。(未完)



# 私のコレクションから

森下高茂

「私のコレクションから」——こういう題名で、私が個人的に集めた資料を開陳したらどうか、という編集長のことをきいたとき、私は、とっさに、二つのことを頭にうかべたのであった。

その第一は、かつて「雑誌」や「専門書」が、まったく顧みることのなかった私の集めた純粋な資料が、ようやく出版の対象となったか、という感慨である。

過去において、私は請われるままに、私の所有する資料を出版社や個人に貸してきた。

だが、その結果は、不十分な知識から扱われるために生ずる、妙にエロチックな説明によって、全くその意味が変わって掲載されるか、あるいは、古いことによって価値のある資料が、今日的なものとして扱われるかのいずれかであり、多くの場合、だまっているとその返還さえおぼつかなかった。

ある編集者は、話のついでに、こういうことを私にいった。皮肉ではなく、彼は本気でそう思っているようであった。だから、私の

失望はさらに大きかった。

「こういう切抜き一枚が何百円にも何千円にもなるんだから、いい商売ですね。こんなものは、ぼくらでもちよつとひまがあれば、神田あたりですぐ集まりますよ」

ひとつのものを考えつくこと、方法をみつけること、時間と、場合によっては金を惜しげなく使うこと、撰別の能力、それらのものが具わらずして、一体、資料というものが集められると思っているのであろうか。

私が持っている切抜きのなかでさえ、一片が数万金にも代えがたいものがある。原価計算をすれば、その価はさらに高くなるかも知れない。

こういう事情をよく理解することなしに、この資料を見ることは、ほとんど無意味である。それが、今回、本誌によって、十分に意識された適切な場所を得ることになった——そういう感慨である。

もう一つは、私の現コレクションは、実に第三回目のものである、ということである。

第一回目は、その大部分を、一九五二年に郵送中の盗難に失ってしまった。第二回目は私のおかれていた個人的な環境から、その一万五千点余の全部を某氏に依託しておいたところ、某氏の使用人が、なんと、クズ屋に売り払って、その代金を着服してしまったのである。彼が着服した代金は三千円余だったという。これは本や資料としてではなく、紙クズとしての代金である。数量や目方の大きさがわかり頂けると思う。

その後、私は一時の失望から抜け出て、第三回目の蒐集にとりかかった。しかし、集まってくるものは、第二回目のコレクションに含有されたことのあるものが大部分である。

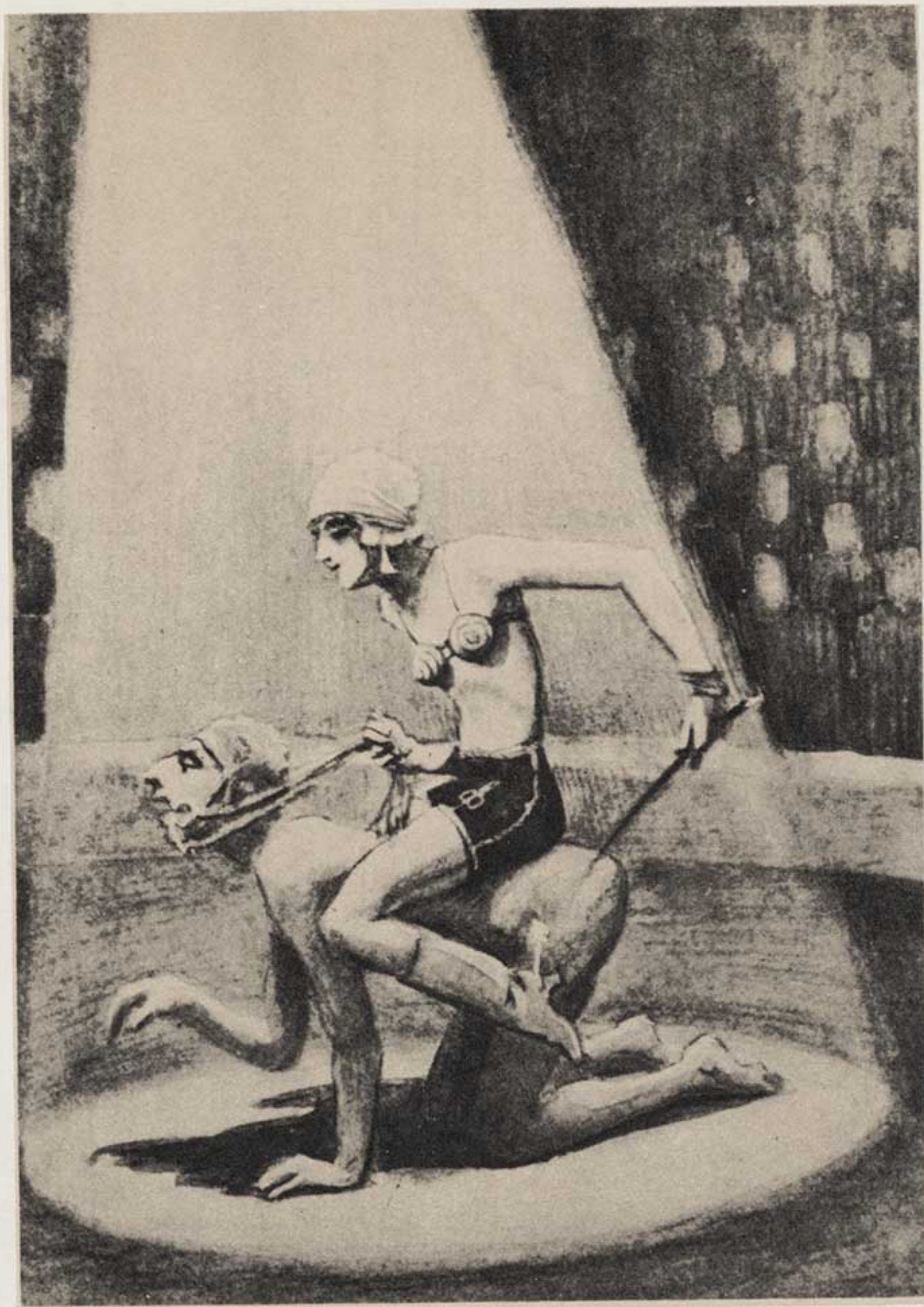
しかも、最近のものは、しばしば誌上で紹介してきた。だから、これから紹介していくものは、一九六〇年以前に公開、製作されたものである。それと、当然一九三〇年代のもののはのぞいて、それ以前は大部分が、印刷や写真の技術が幼稚であるため、こうした技術面からの制約で、ここにご紹介するにしても再転写できないものを省くことをお断わりしておく。

——つぎのオフセットページへつづく



# 私のコレクションから①

森下高茂



## 馬になった男と

### 女騎手のシヨウ

このすばらしい極彩色の絵（残念ながら、このオフセット二色印刷では効果を表現できないが）は、すでにかなり有名であるが、この「私のコレクション」の最初に、どうしても欠かすことのできない一枚である。

私は、この絵を、ある友人の家で最初に見た。それは、一冊の破本になったドイツの書物からであったが、私はその一瞬を忘れることができない。その強烈な印象は、あざやかに私の頭のなかに灼きついている。

表面はつとめてさりげなくその書物に対した私は、一言も声を発することのできない感動に身をまかせていたのである。

その後まもなく、私は同じ絵を、そのころ発行されていた「人間探究」という雑誌で見た。

いま私の手もとにその本はないが、私は、いまでもおぼえている。

その雑誌を発見した新宿の、道端のごくせまい、汚らしい本屋の店さきのこととを——そして、そこに積んであったその雑誌の全部を買い占めてしまいたい、という欲望を、かろうじて抑えていた私の心を——。



バラ色の光明が、その本屋の店先に横溢しているのではないかと、私は自分の眼をうたがったのである。

そして、それ以来、私は何度同じ号のその雑誌を買ったことであろう。他人の手に渡すのが惜しいという、ただそれだけの理由であった。

帰宅するまで、もう一度みたいという誘惑にかられて、電車のなかで包紙を破り、とびらページのつぎの、粗末なアート紙に印刷されたその絵の一部分を、なんと指先でめくったことであろう。

古代エジプト人のような奇異な高い鼻をもった男。妙に鳥の足を思わせる力ない手。女の着ている安手なデザインの衣裳。うしろにぼんやりと見える何十人かの観客。男の恥態を、容赦なくあかるく浮きあがらせている照明――。

そして、意志的で、そのくせどこか弱々し

く、どこか陰性なエロティシズムをただよわせた、うつむきかげんの女騎手。

それに、もちろん、その褐色の長靴。その踵に光っている長い拍車。いっぱいひきしほられた手綱。

こうしたすべてのものが、さながら中央にかかった虹の橋をめぐって飛翔していくような気持ちに、私をさせるのだった。

無名の一画家が、しかも匿名で、好事家の命ずるままに、わずかな支払いと引換えにすべく描いたであろう、この一枚の彩色画は、私のすべてをふるいたたせた。

この絵を通して、私はそのむこう側にある果てしない希望の無人の野の緑のひろがりを見たしかに見た。

私はそのとき、たしかに、すべての感覚、すべての思考が、この一枚の絵のなかに沈潜していくのをおぼえた。

私は、この女騎手の高圧的な感じのする長

靴の硬い胴。やわらかく、不規則にしわの寄ったくるぶし。申しわけのようなハイヒール――そして、おそらくはつめたく、金属的な音を発しているであろう、拍車の、かたくなで無慈悲な感触を感じることがができる。

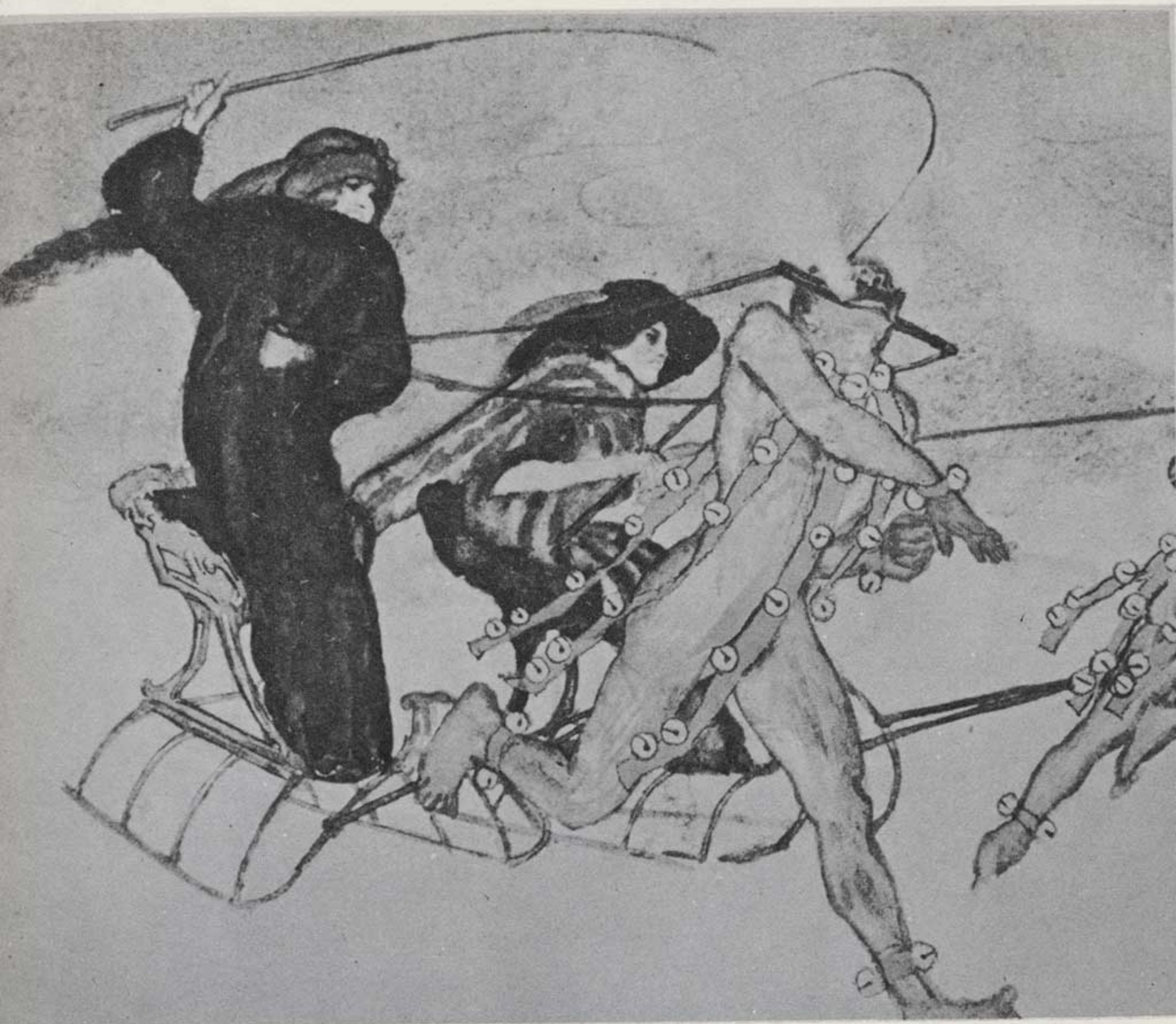
画中の人物は、一瞬にして抜けだして、私に相對するのである。

現在までに、私は、この種の絵を、それこそ何万枚もみている。しかし、この一枚のかもしれない「傑作」の香りは、いっこうに、うすらいでいかない。

動物化願望者の愛を、もつとも普通の形で構図とし、曲馬の馬を、ただ男に変えたただけのこの安易な絵は、作者の心に、何者かが、深いささやきを、魅惑的に吹きこんだそのとくに描かれたものにちがいあるまい、と私は思う。







A・Z画

幻想的な

ソリ遊び（上図）

まぎれもなく、これもマゾヒスティックな願望にこたえるべく、制作された一枚といえよう。

もちろん、前の一枚と同じく原色版になっている。男たちのたくましい筋肉に血がにじみ、女のぬくぬくとした様子と、まったく対照的である。

アイス・フェティッシュをふくむマゾヒストには、またと得がたい一枚である。



## 女調教師（ファラ・モロウ画）

作者ファラ・モロウは、多くのSM画を残している。一説には、前掲AZも彼の変名である、とする物もいる。

たくましい筋肉質の女体。意志的でいながら、一抹の陰をもった紛飾を加えられた女の顔。そこには、一九一〇年代が持っていた特有のコケットリイが、なまなましく息吹いている。マゾヒストのある者は前掲二点のような情景画を好むが、より自由な想像力をもつ

た者は、このように対象となる女性一人の立像を求める。これは、そのよい典型である。観賞者は、その絵の対象として、自分自身の肉体を考える。

絵が、本来の効用をはなれて、特殊な効果のために援用されるよい例である。



Die Dompteuse

Farbige Kreidezeichnung von Fala Moro





## 閨房の調教師

(ベティ・ページ扮)

アメリカ旧ヌートリクス系出版社の写真の一枚である。

これは天然色、というより彩色写真なのである。ベティ・ページについては、多言を要すまい。いわば、アメリカ製のSMフォトに関する「功労芸術家」である。

そのポーズは、いささか作りものめいてはいるが、なによりも美しくのびた姿態と、赤い靴が、この一点の欠点をかくしている。

持っている鞭は長い鞭で、前掲のような乗馬鞭ではない。





## リディア・デ・フェレロ

一九六四年に、わたしたちが持ったもつとも美しいドミナ、それがこの、リディア・デ・フェレロである。

彼女は、カリフォルニアに住み、単なるモデルではなく、異常な執念を、皮革衣裳、長靴に対して抱いている。と、私の得た資料は、はっきりと伝えている。

手に持っている細く長い鞭は、ふつうの乗馬鞭ではない。馬場馬術用の、特別な長さに作られている。

彼女の身にまとうているものは、すべて皮である。腰に敷いているのは、赤皮のレインコート。身につけているのも赤皮のワンピース。

長靴は黒皮の編上げ式長靴。

手袋も、黒い皮である。

皮フェイッシュのまじったマゾヒストには、戦慄的な一枚である。



## 一九〇〇年代のドミナ

(米出版物私家版)

この一枚は、ぐつとクラシックである。

前掲のリディアとベティが、一九六〇年を代表するとすれば、これは一九〇〇年初頭の代表的なドミナである。

長い靴、男ものと同じ硬胴の長靴。絹の靴下。額の上の思わせぶりのカール。

白眼をだしてにらみつけ、見得をきったかわいい輪郭の女性。すべては、古きよき日々のものである。



## 厩当番の給仕と

女主人 (マルクス画)

さきに、女が男をいじめている情景は、かならずしも必要ではない、と書いた。

この一枚は、一九二〇年代の作品であるが、そのへんの呼吸は、にくにくしいばかりである。

長靴もごく一部分しか出ていない。情景も、どうにでも考えられる。だが、この鞍の大きさは、けっして乗馬用のものではない。まさしく、人間に装着する寸法のものである。



## 女装の男を虐める女

「男を征服する女の話」という長い題名のヌー・トリクス系のM系絵物語があった。これはその中のさし絵の一枚である。筆者はスタン

トン。  
女は当世風グラマー。長靴に大きな拍車。  
男のくびをふみつけるポーズ。



すべてはととのっている。しかし、私はこの絵には、満足しない。私はこのスタントンの絵をみているうちに、ふと、小沢征爾の教師であるバーンスティンの指揮する音楽を思いうかべた。

そこには、完全な技術をもち、広いルヘル・トワールをもつ完璧なオーケストラがあるが、そこには「音楽」は存在しないのだ。とくに、ワグナーやシュトラウス、そして

モーツァルトさえもが、彼らの手にかかって破壊されるとき、私たちは芸術を犯すものの首をしめてやりたい、とさえ思う。

公衆の面前で、愛する女が犯されるのを見るときのように、私たちの怒りは爆発する。

同様な思いが、このスタントンをみるときに私たちを襲う。それは、魂を欠いた作品であるからである。そこには歌があるが、歌う者がいないからである。



「裏窓」を毎月確実にお手に入れるために

## 直接購読会員募集



▼三カ月会員： 九〇〇円  
▼六カ月会員：一、八〇〇円  
▼一カ年会員：三、六〇〇円



■いずれも、店頭発売前に直接お送りいたします。送料は、当社で負担します。

■〇月号から三カ月分、とか、〇月号から六カ月分、というふうにはじめの号を、はつきりお書きください。

■住所氏名を正確に、はつきりとお書きください。

■直接購読会員には、写真の無料サービスを行います。

三カ月～三枚 六カ月～六枚  
一カ年～十二枚（手札型）

東京都中野区松が丘2丁目21番

あまとりあ社

「裏窓営業部」

### ■ 裏窓叢書第九集 ■

## 妖奇まんだら秘帖

潮一樹作 小日向一夢絵

■ 11月上旬発売 準備進行中 ■



# たぬき



## 綾川妖司

新一は足りないけれど性質は素直なようだった。そして人懐っこく、若い彼女にすぐ話しかけて来た。けれどみかけだけは彼女より大きな青年である。あまり無邪気にまつわりつかれる時など、淳子は思わず顔を赤らめしてしまうことがあった。

新一が或る時彼女に言った。

「先生、狸に似ているね」

「まあ、狸？……そうかしら」

彼女は心外だった。なるほど彼女は少し色が黒い。けれど狸と言われる程ではない。彼女の皮膚はきめのこまかい艶々とした小麦色である。そして狸のように太ってもいなければ純重でもない。それどころかウエストは学校中の女の先生の中では一番細い。顔だって狸に似てはいない。丸顔だから狐には似ていないが、狐じゃないからって狸にされるいわれはない。そんなことを言われたのは生れて初めてだったので、いかに相手が新一でも少し失礼だと思って淳子は彼の顔を見た。

「どうして先生が狸なの？」

「どうしても……さ。狸だ。……目がそうだ」

「ふーん」

彼女の眼は、狸みたいに凹んだ感じではない。明るく大きな眼をしている。リス見たい

淳子は教壇に上がって、初めて一番後の席に座っている管谷新一を見て「あら、あの子が……」と意外な気がした。というよりすっかり驚いてしまった。色白の端正な顔で身装りも整い、澄ましている一人前の青年のように見えた。立てば小柄な淳子より首一つ位は高いかも知れない。彼女の受持は五年生だったが、彼は皆より二つ年が上で中学一年生の年なのだがそれにしても大きい。そして立派で美しかった。

「可愛そうに」と彼女は思った。主事の松谷先生からも「面倒ですが、よろしく願います」と、精しく話は聞いている。父親は或る大きな製紙会社の二代目社長で、彼は大年取ってからの一人息子だということだ。しかし知能はほとんど一、二年生並、或いはもっと低いということだった。そして親は特殊学級などを嫌って、まあ半分は遊ばせるくらいのもりで、割合に暢気な校風のこの私立の附属小学校に通わせているのだった。



だと言われたことはある。時には我ながらキョトンとしているなと思うこともある。けれど、どうしてもこの私の目が狸に見えるんだろ。とにかくわからない。新一の心に宿った心象は掴めない。

「カチカチ山の狸なんだよ」

「あら、いや先生、悪い狸？」

「そう、悪い狸だよ」

「嫌だね」

彼女は笑った。

初めての家庭訪問だった。

新一の家は変っていた。それは街の中に、大谷石の塀で囲まれた杉山のようなものだった。門から玄関まで砂利をしきつめた二、三十メートルの登り坂が杉木立の間をカーブしている。

それを登って行くと、蔦のからんだルネサンスまがいの洋風の玄関には車返しがある。堂々としているが陰気である。少し薄気味悪くさえある。女子大を出たばかりでお嬢さん氣質の抜けていない彼女にとって「先生」という職業と二人連れでなければ、とてもそんなところに足を運ぶ気にはなれない。しかし同時にそんな家に住んでいる新一の母親のよくな人と先生として逢うのも気が重い。玄関のところであらうと不意に脇

の植込みから、のっそりと人かげが立った。はっとすると、それは新一だった。にこにこしている。彼女は安心して、額に垂れかった前髪をかき上げた。

「お母様は？」

「いないよ」

「あら通知上げといたでしょう。渡さなかったの？」

新一はふふと笑った。

「すぐ帰るんだよ。だからそれまで、僕と遊ぼう。こっち僕の部屋だよ。来てよ」

「でも……。ほかのお家の方、誰かいらっしゃるでしょ」

「いいんだよ」新一は彼女の腕をとった。

「さ、早く」

「待って、そんなに引張っちゃ駄目よ」

建物の横手をまわると洋風の石垣があり、起伏の激しい地形にあわせて階段があり、崩れた像が立っているかと思うと、木立にかこまれた亭のようなものがあり、また青みどろの浮いた池があった。あまり大きくはなかったが深そうで、北欧の童話にでも出て来る悪霊の沼のように見えた。淳子は新一に手を引かれて歩きながらも何か嫌な気持がした。彼女は建築のことも造園のこともわからなかったが、随分と凝っている割合に無秩序で、

混沌としているように思えた。悪く言えば、わからん人の金持がでたらめに思いつくまま作らせた庭のようだった。様式も統一されていないようだった。

「随分、新ちゃんのお家、広いのね」

「うん、あそこ、僕の部屋だよ」

それは母屋とつながってはいるが別棟の十畳程で、さすがに幾分明るかった。

彼女はすすめられるままに仕方なくハイヒールをぬいで、その板の間に上がった。そして机の上にノートや教科書を見つけると、懐しい人に逢ったような気持になった。

「ここで勉強するの？」

「勉強なんか、しないよ」

「まあ、じゃ、なにしてるの、遊んでいるだけ？」

「うん」

「何して遊ぶの？」

「いろいろ、するよ」

「一人で？」

「違う。ケーちゃんと」

「ケーちゃん、て？」

「ケーちゃんはケーちゃんだよ。良子とも遊ぶ。今日は先生と遊ぶんだ」

淳子は腕時計を見る。

「お母様は何時ごろお帰り」



「何時でもいいさ。遊ぼうよ」

淳子はまた仕方がない……。と自分に言い  
きかせた。

「何するの？」

「カチカチ山だよ。きまつてるじゃないか。

僕がお爺さんだよ、先生は狸さ。いつもは良  
子が狸なんだけど、良子はつまないんだ」

「一体、どうするの？」

「狸縛っちゃうんだよ」

「いやアよ、そんなの、先生悪いことなんか  
しないもの」

「したのさ。したことにするんだよ」

新一は立ち上がると、本当に縄を持って来  
た。淳子は、びっくりしている暇もなく掴ま  
ってしまった。そして早速縛ろうとする。

彼女は掴まれた腕をふりほどこうとして、  
思わず真剣になった。どうしようか、と思う。  
なにしろ相手は話してわかる頭の持主ではな  
い。しかも体は一人前で、掴んでいる手は力  
強い。

「ちょっと待って、それじゃカチカチ山して  
あげるから、そんな乱暴しないで」

「ちゃんと、良子みたいにするかい？」

「するわ、するわ。どうしたらいいの？」

「手と足、そろえるんだよ、こういう風に……  
本に書いてあるじゃないか」

「でも、本当に縛っちゃ駄目よ」

「うん、真似ただけだからね」

淳子は仕方なしに、スカートを正して足を  
そろえその上に両手をのせた。新一はぐるぐ  
ると縄をまきつけた。

「さ、それでいいでしょ。その先、先生持っ  
ているから……」

新一はニヤリと笑った。あつと言う間もな  
かった。馬鹿と思って油断したのが間違いだ  
った。新一は巻いた縄をぎゅっと引きしぼり  
馴れた手つきで先を、しっかりと結んでしま  
った。淳子は瞬間、この世界がすっかり変っ  
てしまったように感じた。縛られたのは生れ  
て初めてだった。胸が苦しくなった。

「あら、駄目よ、駄目よ、本当に縛ったりし  
て、いけないわ」

思わず息を弾ませた。

「ふふふ」

新一は嬉しそうに笑った。

「とうとう悪い狸、掴まえてやった」

彼女は少し、もがいた。本当に手も足も動  
かせない。と思うと、急に心細くなった。け  
れど叫んで人を呼ぶのも恥ずかしい。

新一は淳子の顎をつまんで品定めするよう  
に彼女の顔をのぞき込む。淳子は思わず顔を  
そむけようとする。しかし新一はそうさせな

い。

「ふん、可愛い顔しているくせに……悪い狸  
だ」

それから頬ぺたをつつく。

「うん、やわらかくておいしそうだ」

淳子は何とか言おうとするが、新一のお芝  
居は真面目で、とりつく島がない。

「そうだ。早く家へ帰って婆さんに狸汁をこ  
しらえてもらおう」

新一は縛った縄を無造作に引いた。淳子は  
呆気なくあおむけにひっくりかえされた。ス  
カートがめくれる。

「あつ、駄目よ、駄目よ。そんなことして、  
先生、本当に痛いわ！」

彼はよいしょ、とかつき上げた。

「ひーッ」

彼女は我れを忘れて泣き声を上げた。彼女  
は軽々と彼の背にぶら下げられた、手も足も  
痛んだ。

「助けてエ、新ちゃん、痛い、痛い！」

彼女はもがく。

「こら、狸、あばれるな」

新一はのっそりと歩き出した。彼女は目が  
まわるような気がした。部屋が逆さになっ  
てぐるぐるしている。

「婆さんや、今帰ったよ」



すると驚いたことにどこからか声がした。

「あら、お爺さん、おかえんなさい」

淳子は真赤になった。こんな姿にされた自分を第三者に見られるなんて、たまらない恥ずかしさだった。たとえそれが子供であつても、である。

「ずい分大きな狸、つかまえたのね」

言いながら、くすくす笑っている。赤いセーターを着た、三、四年ぐらいの女の子だった。

女の子は小声で言った。

「新ちゃん、これが学校の先生なの？」

「うん、化けていたんだ」

「可愛いじゃない？」

女の子は不遠慮に淳子の顔をなぜまわした。淳子はその顔を見て一瞬ぞっとした。一見、三四年生ぐらいに見えた女の子の顔に小じわがよっていた。醜い顔ではないが、それはたしかに大人の顔だった。二十六七歳、或いは三十に近いかも知れない。そしてその眼には奇妙に悪魔的な頹廢のようなものが濁って濁んでいた。明らかに畸型だった。

たとえ、子供であっても、もしこの女の子に少しでもまともな精神があったら、助けてもらおうと思っていた彼女の望みは打ち碎かれた。精薄の新一よりも、さらに悪いものが

出て来てしまった感じだった。『化物屋敷だわ……ああ大変なことになってしまった』

淳子は新一の背で絶望的になった。

「じゃ、これ狸汁にしておいておくれ、わたしはまた畠に行ってくるからな」

新一は一見無邪気な芝居を続ける。

「はい、はい、じゃその狸、その軒に吊しておいて下さいな」

「よし、よし」

本箱と本箱の間に室内用の鉄棒をわたして吊す用意がしてあるのである。新一は淳子を本当の狸のようにぶら下げてしまった。

「さ、お料理するかね」

小さな女が言った。勝手な筋書きである。

狸は助からない。小さな女は庖丁のかわりに大きな裁物鋏みを出して来た。彼女は必死になって女の眼を見つめた。

「あなた、何なさるの、こんなことして？」

「ふん」と小さな女は笑った。「狸のくせに何さ」

「ああ、この人も氣違いだ」彼女は思った。手足の先はもう感覚を失ってしまった。小さな女は彼女のブラウスを鋏で切り始めた。

「やめて、やめて、……お願い」

「まず、皮をはいで。ほらほら、あばれると身を切るよ」

乱暴だった。スカートも、スリッパもジョキジョキと委細かまわず切っては、びりびりと引き剥いでしまった。

「新ちゃん、ごらんよ、この先生、いい体しているよ。しまっていて、ピチピチしてる」

淳子はもうブラジャーとパンティだけにされて、ぐったりしている。二人はその体を見無遠慮になぜさすって、嬉しそうに笑い合った。

「でも狸みたいじゃないね」

「狸の方がいいかね」

「そりゃ狸がいいにきまつてるじゃないか」

「じゃ狸にしようか？」

「狸にしよう」

「しよう！」

二人はクッククックと笑った。

淳子は下ろされる。もう物を言う氣力もない。とうとうブラジャーとパンティもとられて、生れたまんまの姿にされてしまう。

それから立たされて、今度は横木に万才の形に手をくくられる。

二人は喜々として彼女を狸にする用意にとりかかる。何をするのかと思っているとまずお白粉をといて、彼女のお腹から、胸に分けて真白に塗る。

「ここもかい？」

「そこだけ白くない狸なんて変だろう」



「でも一寸可愛いよ」

「どうだろうね」

二人はちょっと後にさがって眺める。淳子はもう頭の芯がぼんやりして、まともにもものが考えられなくなり、ただ一心に出来るだけ顔をうつむけていた。

「やっぱり塗った方がいいね」

「じゃ塗る」

「……………」

「うまく、つかない」

「ポマードぬって、粉をはたいたらいい」

「うん」

出来上ると二人はゲラゲラ笑う。

次いで背中と手足に濃い焦茶色のドーランのようなものをぬられる。

そして新一が彼女の顔を支えている間に、小さい女がマスカラと眉墨、ドーランを使って眼の下を黒くぬり、頬に三本ひげをかいた。

「ハハハハ」新一が笑った。

「少し狸らしくなったわね」

「見てごらん。ね、先生見てごらんよ」

新一が大きな姿見を持って来た。

「見るんだよ！」小さい女が頬を打った。

淳子はぼんやりと眼をあけた。そして汚された自分の滑稽な顔を見る。なるほどメーカーキヤップすると彼女の顔立ちは狸になる。彼女

は自分の頭の奥でカッと燃え上がるものを感じた。何という屈辱だろう。しかし、どうすることも出来ない。そして何と言っても相手が悪い。運が悪かったとしか、考えようがない。何か夢のようだ。悪夢だ。あり得ないことだった。真裸にされ、その体を彩られるなんて……しかし現実だった。吊り上げられた両手は下ろせない。恥ずかしい体を隠すことは出来ない。

「でも、お腹が小さいね」

「ふくらませてごらん」

と小さい女が言った。

「ねえ先生、お腹ふくらませてよ」

「何が先生よ！」淳子は唇をかみしめた。

「ふくらませるんだったら！」

小さい女が彼女のお尻をつねり上げた。

「つ、つ、」

淳子は逆に、少しでもお腹を大きくすまいと力を入れた。せめてもの反抗である。

「くすぐったら」

それを見て新一が言う。

「よしして！」

淳子は思わず叫んだ。彼女は人一倍くすぐったがり屋なのだ。言われただけで彼女は体中がむずむずした。

小さな女はニヤリとした。

「ふくらませるか？」と、くすぐる構えをする。

「よしして、よしして……いやア」

「ほら、コチヨコチヨコチヨ」

「いやアー！」

「ほら、コチヨコチヨコチヨ」

「助けてエ、やめて、やめて」

淳子は、苦しくて思わずよだれを流してしまふ。

「やア、先生、よだれ流した」

淳子は涙を流した。

「ふくらませるか……もつとくすぐるか。ほら、答えなきや、くすぐるぞ……」

「やめて、やめて、……ふくらませりゃいいんでしょ。……ふくらませるわよ！」

淳子はおこったように言った。癪だったが仕方がなかった。二人はじっと彼女のお腹を見ている。

「馬鹿々々しい！」淳子は恥ずかしかったが恥しいと感じるのも馬鹿々々しい。自ら言いきかせて、思い切ってお腹をふくらませて見せた。

「アハハ」

「もつと、もつと」

「駄目だ、ふくらませたまんまにしとかなきゃ」



「これで一枚とっとうか」

「うん」

淳子はハツとする。新一がカメラを持って来る。彼女は蒼くなった。彼女はそしてにわかに本気にみもだえ出した。

「いやよ。写真なんて、それは嫌よ。やめてお願い」

本気で暴れると、本箱がぐらぐらしはじめた。二人はカメラの用意をしながら見ている。

「小さいけど、狸、わりと力あるね」

「ひっくりかえないかね」

「大丈夫だよ」

三脚をたてて用意が出来る。新一は馬鹿のくせに写真はとれるらしい。カメラも上等なようだった。

「ねエ、お願い。それだけはやめて……」

淳子は真剣な眼で必死に新一の顔を見つめる。しかし新一は見つめられても手応えなくへらへら笑っている。

「さ、お腹、もう一ぺん、ふくらませて」

彼女はぐったりしてしまふ。すると小さい女が近よって耳打ちした。

「すなおにしないと、もっとすごいポーズの写真とるよ」

彼女はどきりとした。仕方がなかった、本当にどうしようもなかった。

「どうなの、するかい」

淳子はうなずいた。狸の顔にされていることが、かえって、この場合のせめてもの救いだった。

「はい。今度は横から……」

淳子は何枚か撮る間、一生懸命にお腹をふくらませた。本当に情けなかった。

「よく撮れたら、先生にも上げるね」

新一が言った。

「でも、まだ、小さいね」

「でも仕方ないさ、この先生、若いんだもの本当に緊っていて、いいお腹……」

小さい女がお臍をつついた。

「先生、お幾つ？」

「ねエ……もう許して……」

「もっとお腹、大きいといいなア」

「無理よ」「空気入れたらどうだろう」

「空気？」「どうやって？」「ポンプでさ……」

小さい女はゲラゲラ笑い出した。

「それ、いいね、やって見ようか」

「うまく行ったら、今度、良子にもしてやろう。僕、ポンプとって来る」

「な、なにをするの？」

「さア、何でしょう。お楽しみだわ……」  
小さな女はクククと笑った。

「可愛らしい狸ちゃん」

「ね、一体私に何の恨みがあるの、こんな馬鹿げたことして……。新一さんのお母様に知れたら。どうなると思うの？」

「さア……どうなるかしら、先生、あなた言いつけるおつもり？ いいわよ、私は狸にされました。写真とられました。……って」

「ひどい。ひどい人ね」

「そうね、ひどい人よね」

「ポンプ、とって来たぞう……」

新一がはしゃいだ声を出す。

「今度は狸も、少しはあばれるかも知れないね」

小さい女は言う、淳子にさるぐつわをかませた。

「うまく、口をひらかせなきゃね」

淳子はもがいたが、無駄だった。二人がかりで腰を思い切り引かれた姿勢で腿のあたりを縛られ、チャールストン型に脚を開かれてくくりつけられた。もう身動き一つ出来なかった。彼女はうめいた。

「少しずつやらなきゃ駄目だよ」

小さな女が言う。

淳子の姿は非人間的だった。されることももう人間の誇りを超越したものだった。そして彼女の心も非人間的になってしまった。も



し人間の心があり、誇りを持っていたら、とても堪えられることではなかった。彼女はまるで他のことを考えていた。あり得ない世界だった。あり得ない世界で淳子の心は軽くなっている。体に入っているのではなく、心に空気が入って行った。

「大分ふくらんで来た」

「面白いね」

「だけどすぐ栓しないと洩れちゃうよ」

それは筋肉の能力以上の圧力だった。彼女はもう自分の肉体が、物体に過ぎないことをほんやりと覚っていた。物体は物体らしく物理的な音をたてる。二人はゲラゲラ笑っている。恥ずかしくも何ともない。恥ずかしいのは二人の方だった。また改めて入れられる。

「あっ」と思った。今度はすぐに栓をされ、テープのようなもので嚴重に封をされた。空気はもう胃に逆行して来ていた。食道を通して、さるぐつわをかまされた口、鼻にぬける。苦しい。

「死ぬに違いないわ」と淳子は思った。

彼女は縛めをほどかれたことに気づかなかった。足もとがふらふらしている。

「狸らしくなったね」

「ほら、しっかり立ってるんだよ」

パチリとシャッターの音。

彼女の真白にぬられたお腹はぶっくりとふくらんでいる。異様な感覚である。とてもじつとしてはいられない。たえず、むずむずしている。とめどもなくおくびが出る。

「よっぱらった狸だね」

「徳利持ったら似合うよね」

二人は笑っている。

「ああ、尻尾つけるのを忘れてた」

「本当だ。馬鹿だね」

腰にしゅろの箒木のようなものが、くくりつけられる。

「さア、これからカチカチ山だ」

「これから？」淳子はほんやりとそれを聞いた。それ以上、何をするんだろう……人ごとのように思った。

「どうにでもしたらいいわ」と彼女は棒をかがされ、それに両手をくくりつけられた。二人にはちゃんとしたスケジュールがあるのである。淳子は自分の背中に何をされているのかわからなかった。マッチの音がした。何か、知っている匂いがした。それが何だかわからなかった。

突然、「さア立って」と言われた。彼女は素直に立った。ボンヤリと棒しぼりにされたまま立っていると二人は、何か期待するように彼女の顔を見ている。突然、彼女は背中に

熱さを感じた。次ぎの瞬間それが突き刺すような痛みになった。

「つうーッ」

彼女はさるぐつわの中でうめいた。お灸だったのである。

シャッターの音がした。突然の熱さに我れを忘れて飛び上がった瞬間を撮られた。

しゃがみ込もうとすると腰の間の尻尾が邪魔をした。けれどじつとしてはいられない。

二人は喜んで手をたたいて見ている。淳子は涙を流して苦悶しながら踊った。

彼女は自分も、もう気が違ってしまったと思った。そして床に倒れ、そのまま泣き出した。

「さア今度は泥舟だ」

「もう、やめて……」彼女は願った。口の中で繰返えした。神様でも悪魔でも、何でもいい、助けてほしかった。

「やあ、狸が泣いてらア」新一は明るい声で床にはった淳子を足でこずいた。

「さア、立て、狸、こんどは泥舟に乗るんだぞ！」

小さな子が、しゃがみ込んで淳子の顔色を見る。

「ちょっと本当に大分参ってるようよ。良子と違って、この狸、はじめてだから……」



「いいさ、どうせ狸だもん、死んだっていいのさ」

「本当に死んだら困るわよ、またいつか、つづき、したらいい」

「いやだい！」

新一はにわかに狂暴な眼つきになった。

「さては、お前も狸なんだな、おケーに化けてるんだな」

「違う、違う、私は兎よ、いい兎よ」

「本当か！」新一はじっと小さな女の眼をのぞき込む。

「いつかみたいに、松葉でいぶしてやるぞ」  
「御免、御免、やるやる。先生にはちょっとお気の毒だけど……」と小さい女はニヤニヤした。

「本当いうと私もやりたいのさ」

二人は淳子を庭に引立てた。

悪霊の沼に似たあの池だった。池には古材で作った筏のようなものがある。それが泥舟のつもりらしかった。淳子はガタガタとふるえ出した。二人は淳子を仰向きに筏の上に乗せた。水は冷くなかったが、腐って不気味だった。髪が水に滲り、体がぶかぶかした。

仰向いた彼女の眼に、黒い杉の梢にふちどりとされた空が、濃い水色に暮れかかっていた。ポチャリ、ポチャリと間の抜けた水音がして

いる。淳子はもう無抵抗だった。ああ、もうそれで私は死ぬのだ……と思った。

狸の顔にされている淳子の顔はそれでもやはり、滑稽だった。

「狸の舟は泥の舟エ……」と新一が叫んだ。とたんに筏をくくっていた縄がほどかれ、ばらばらになり、淳子は沈んだ。

けれど空気の入った彼女の白いお腹がすぐにポツカリと浮び上がった。小さな女は淳子がかつがされている棒についた縄をたくみにさばいて、彼女を池中引きまわす。苦悶するのだが、やはりどこか間の抜けた狸の顔が暗い、青みどろの池に浮いたり沈んだりする。新一が棒で白いお腹を突つく、狸色にぬられ靴下をはいたようにも見える淳子のすらりとした脚が激しく水をはねかえす。

そしてやがて、彼女の裸身は動かなくなつた。

「とうとう退治した」と新一は言う。

「これで、おしまい」

淳子が一度眼をさましたのは、管谷家のどこか一室だったに違いない。

けれど本当にはつきりと意識をとりもどしたのは三日後で、病院のベッドだった。

その間何がどうなったかわからなかった。

だれもが曖昧なことしか言わなかった。彼女も曖昧なことしか言わなかった。

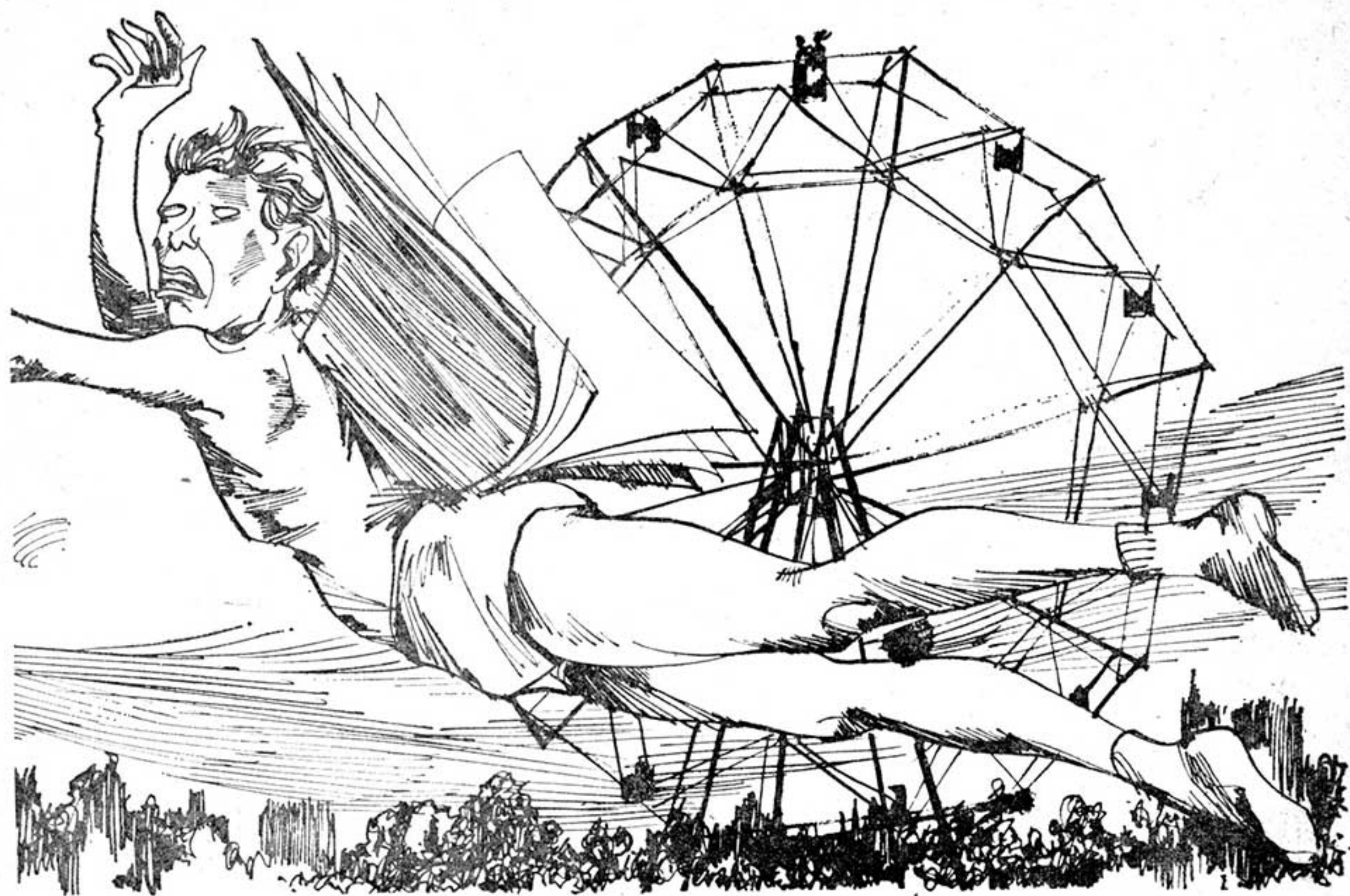
とにかく悪夢だった。彼女はそのまま学校はやめてしまった。しばらくはほんやりしていた。

けれど若い淳子にとって、この事件は、それほど深い傷痕を、身にも心にも残さなかった。

そしてまた、他の学校に勤めるようになったが、それ以後は彼女のことを狸に似ているなどと言う者は、一人も居なかった。けれど彼女は時折鏡をのぞいて「私、矢張りどこか狸に似ているかしら」と思うことがあるのだった。







1

足の裏の皮膚はゴツゴツして、堅かった。少しきつくかんでも、彼女にはこたえないようであった。

ほくはその間、何度も顔を上げては、森本佳子の顔色をうかがった。彼女はソッポを向くように視線をそらしていたが、表情から読みとれるものは何もなかった。しゃぶったりかんだり、舌が足の裏のゴミやよごれで、いいかげんしょっぱく、そしてひりひりするまでなめ回したが、相手の反応がないということは、つまらないものである。とにかく、意味のないことに、夢中になっているという、味気ない徒労を感じるのであった。

「足の裏をなめられると、気持ちがいいでしょう？」  
上目づかいに尋ねた。

森本佳子は、ほくの口もとに足指を差し伸べた格好のままであなずいた。

「どこをなめられると一番気持ちがいい？ 指？ 土踏まず？ 何かと？」

この問いによって、相手側からの確証が得られるはずであった。

「そうきかれても——」

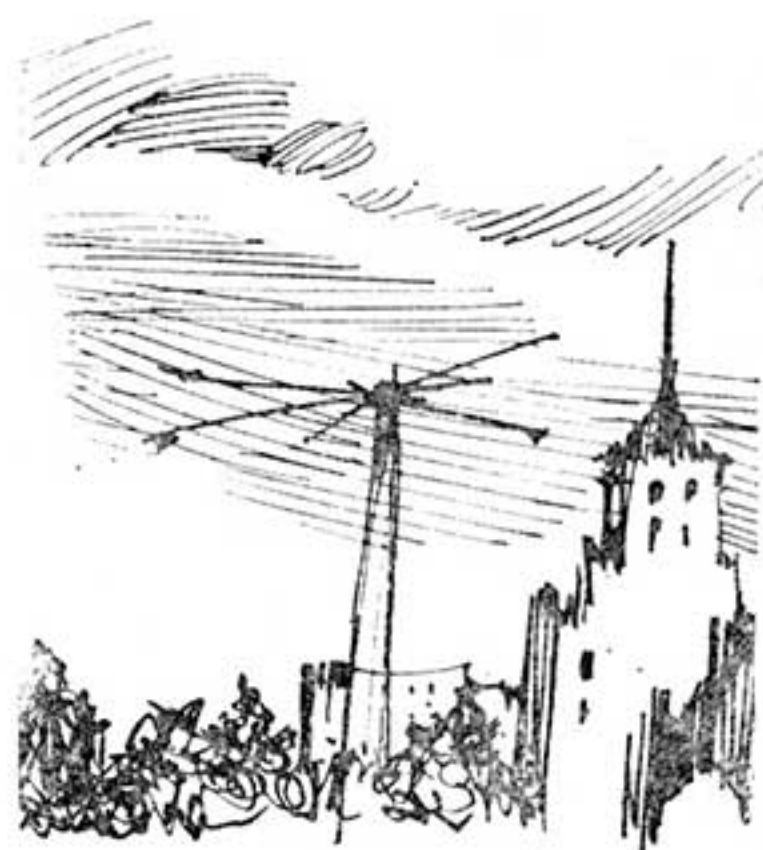
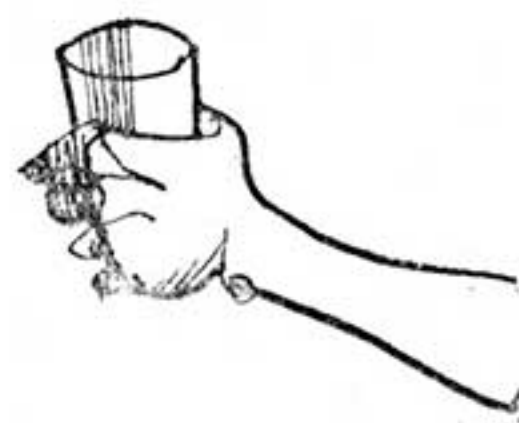
少しのためらいののち、彼女はあきらめたように答えた。

「ここらあたりを吸われると、気持ちがいいわね」

彼女が自ら指し示したのは、指の根方のほうであった。

指と指の間に舌を入れて、同時に二本の指を吸われるのが気持ちがいいと、だれかが言ったことがある。森本佳子の場合には、少しその場所が違っていた。多少の個人差というものは、やはりあるも





# ああ、Mの心は奔放に 夢々をもとめて飛躍する

水尾 究

江 渕 晃 夫 絵



のなのであろうか。

ともかく、森本佳子の応答によって確証が与えられた。ほくの作業は、決して無益な徒労ではないのだ。

足の親指の腹を歯でしごくとき、キュッキュッと、小気味よく音がして、つやつやしいきれいな肌がよみがえるのであった。なまめかしく血色が浮き上がってくるのである。唾液に濡れるとハンケチでふき、そしてまた歯でしごき上げた。足の裏は、しばらくの後にはその全体が赤ん坊のもののように、美しい光沢を持つに至るのであった。

だが、森本佳子の様子には、なんら積極的な意志の表示みtainな反応は見られなかった。

次第にじれったさがほくの心の中で増していった。四つんばいになり、口と舌を忙しく動かしながら、かかとからふくらはぎ、そして、上の方へ進んでいった。いきなり期待が大きくふくらんだ。スカートすそがほくの鼻先をよぎり、そしてほの白くその中に沈んでいた。ほくは奥の方から漂ってくる臭いをかいだ。それは常に、スカートの中に、こめられている臭いであつた。羞恥と共に漂ってくる臭いであつた。ほくはその臭いの中に、のめりこむように顔を埋めるのであつた。ほかに何もなかった。ほくは臭いだけを求めていた。

と、不意に森本佳子は、飛び起きるように立ち上がった。迫いするほくをはねのけるように、そしてきつく拒んだ。

「それ以上ダメだわ」

その一言が強く響いた。

「どうして、——これ以上、何もしないし、する欲もない。正真正正



銘、これだけだよ。あなたの臭いがかきたい」

「でも、やはりダメ」

彼女は身づくろいをし、ぼくを避けて遠くにすわった。

ぼくは疲労を感じた。扉がしめられたことを感じた。その扉は、確かに開きかけていたのだ。ついさっきまで、それはヒクヒクといれんするように、或る期待と不安とおのきの中で、風に揺れるように揺らいでいたのだ。ところが、森本佳子は、ハッと意識づいたように立ち上がった。扉はしめられた。

「今さら言っても、ムダかもしれない。でも笑われたっていい、お願いだが、このぼくの顔の上に、すわってくれないか。またいで、腰をおろせばいい」

「とてもわたしには——」

「だったら、このコップに、一杯だけでいい、取ってきてくれないか。ぼくは渴いているんだ」「……………」

「だったら、なぐってくれよ。ひっぱたいってくれよ。力いっぱい、思う存分——」

それは泣き声にも似た哀願だった。森本佳子は、細い、トゲトゲしい横顔を見せてすわっていた。堅い拒絶の意志を見せてすわっていた。

## 2

ふたりはだまって歩いていた。足元から次第に暮色が漂い始めていた。

チラチラ横目で森本佳子の横顔を盗み見ながら思うのであった。「この女は、水分がない。あまり渴きすぎている。トゲトゲしすぎ

る。ぼくは、こういう女をまで、女として、なぜ選ぶ気になったのであろうか」

やせて、頬骨が出た女の顔が、女装をした男の顔に思えたりした。ふたりはだまって歩いた。あきらめきれないものが、底によどんでいた。

「遊園地にでも、行ってみませんか」

改まった調子でぼくは言った。

「そう、行ってみましょうか」

ぼくらは切符を買って中にはいった。季節はずれのウィークデーしかも夕暮れ近くで人影はまばらだった。池があつて水藻が浮かんでいる。園内の木立ちは濃い下闇の中から、うっそりと立ちはだかっていた。

日ごろはウォーターシュートで人気を呼ぶ池の周囲にも、四、五人のまばらな人しか見えなかった。

ぼくは空を見上げた。暗くなった中空に、地上からのライトを浴びて、ゴンドラがゆっくり回転していた。全く無人のままのように見えたが、気を付けて見ると、それでも二組の男女が、ゴンドラに乗っていた。

「へえーっ、これでも切符売ってるのかしら」

ぼくは振り返って彼女を誘った。

「乗ってみようか」

「ええ」

ふたりは切符を買って乗り込んだ。台の上で、アルバイトラしい学生風の若い係の男が、ふたりで付き添うようにゴンドラの扉を開いて乗せてくれた。オルゴールの、ゆっくりとした旋律に合わせるように、ゴンドラもゆっくりと動いた。外はすっかり闇であった。



その中で、チカチカと人家の灯がまたたき、少し離れて都心の方角の空が夕焼けのように明るんでいた。

徐々に徐々に、ゴンドラは高く上っていった。そして、支えの鉄骨がキシキシとなった。不気味な気がした。カゴの中に、森本佳子とぼくと、ふたりだけであった。

人一倍高所恐怖症のぼくが、なんでゴンドラになぞ乗る気になったのか、それはスリルを求める気持ちと、そして今一度、森本佳子とふたりだけの、機会を持ってみたかったからであった。

ゴンドラが、ゆっくりときしりながら、ゆらぐように夜の闇の中に上り始めたとき、恐怖に襲われた。下をながめても、広い園内の照明のあるところ以外は闇であった。下が見えないことは救いであった。目のくらむような高さがわからないだけ、そのこわさを実感しないで済む、と思ったのは一時の安堵にすぎなかった。

見えない、ということとは、かえって不安を増した。下をのぞくことがこわかった。その高さは、無限大の高さのように思えた。できるだけ、遠くに目を走らせた。

園内の、うっそりと静まった木立の梢が、影絵のように、重なり合って一団の濃い影を成す、その向こうに、街の灯がきらめく砂粒のように見えた。

ぼくは恐怖をしいて平静に装い、彼女と対した。森本佳子は寂しい笑いを洩らしていた。

「あなた、こわくないですか？」

「こわいわ」

同じリングの幾つものゴンドラは、大抵無人のままに揺れていた。だが、その二つには男女のカップルが寄り添うように乗っているの

が見られた。

リングはゆっくりと大きな腕木の回転につれて回っていた。上を見ると、頂上はまだ高かった。下からのライトを浴びて、そこだけが浮き上がって見えた。

風が出てきたようであった。顔にひんやりと当たった。ゴンドラが左右に揺れた。横波に揺れるボートのように、揺れるのであった。

「あんなところまで、まだ上るのね」

見上げて森本佳子が言った。リングの頂上のゴンドラには、ふたりの男女が乗っていた。風に女の髪がなびいていた。それがライトで切り抜き写真のように、バックを黒にして浮かび上がっていた。

「やけにゆっくり回るんだね」

そういつて笑いでごまかした。頂上の男女は、頂上から下降していた。ぼくは彼らがうらやましかった。あの頂点がどんなにこわいか、それをぼくらは、今から味わいに上らねばならないから。

「下が見えないのは、かえってこわいわね」

そう言っただけに火をつけた。わずかな虚勢が、あやうく均衡を保って、手がかすかにふるえた。

「高いところって、わたし、割に平気なほうだけど、外が見えないとかえってこわいわ」

森本佳子は、はすかに顔をそむけて、ゴンドラのはるか上の方に目を上げていた。

そこは回転リングの頂上であった。星が光って見えた。見ると吸いこまれそうな気がした。彼女は夜風に気持ちよさそうに横顔を吹かせ、いっこうにこわそうな様子には見えなかった。

ぼくは人一倍、高い所はにが手だった。デパートの屋上の、金網





の手すりからのぞいているだけでも、どうかすると足がふるえた。一度、子供の時分、高い所から、下に向かって小便をしたことがある。あの時の頭から血がいちどきに引くような、恐怖が今もって忘れられない。

細い筋をなし、はるか下方に落ちる点滴が、思わずもぼく自身を

吸いこみそうにフツと気をひくのであった。強い催眠術のように、ぼくの自由は奪われて、そのまま下に落下しそうであった。

高所恐怖症のぼくが、そのことのために、かえって高い所に、人一倍あこがれを持ち、そのスリルのために、高い所に上りたがるのは不思議であった。



ぼくは空中ケーブルが好きであった。プールの飛込台から飛び込むのが好きであった。飛行船や気球にのって、どこまでも高く上ってみたいと、思ったりした。

「正直言うと、ぼくはこわい。だけど、やめられない」

ゴンドラが風に揺れた。ぼくは身をかがませ、彼女の両ひざをだいた。そのまま、ずるずると、彼女の足元に頭の方からからだを埋めていった。

森本佳子は、そういう奇妙なぼくの様子を冷静に見守っていた。

せまいゴンドラの中で足を自由に動かすことはできなかった。

「そんなことなさるの、みっともないわ」

ただ彼女はそういったただけだった。ぼくは窮屈にからだを折り曲げて、無理にもその足元へ、もぐり込むようにした。ひざをだき、スネにほおを当て、ズルズルとおしまいには、靴の上にひたいを当てた。

こわいのか、そのこわさがぼくを引きつけるのか、何にもわからなくなってしまった。

### 3

「さよなら」

というと、「さよなら」とことばを返し、森本佳子は去っていった。それだけの縁だとぼくは思った。それ以上、彼女に期待するものはなかった。

だが、一週間ほどすると、ぼくはまた彼女を呼び出す気になった。

彼女は、早大の学生である。女子大生に対する、子供じみた夢が、ぼくの中には根強く残っていた。

森本佳子は、呼出しに応じて、約束の場所に現われた。

「よく来てくれましたね」

「何となく——」

自然な言い方だった。だが、退屈しきった人のような、惰性的な響きにも聞きとれた。

喫茶店に落ち着いてから、改めてただしてみた。

「ぼくがマゾヒストだということを、十分知っていてつき合って下さる、それがふしぎだ」

「どうしてですの。ずい分おもしろい人も居るものと、興味がありますわ」

「だったら、ぼくをあなたの奴隷にして下さい。ぼくの女王になって下さい」

「考えたんですけど、やっぱりそれは無理のようですわ」

「なぜです。むずかしいことなんか、ないじゃありませんか。生きた大の男を、自分の思いどおりに扱える、こんな愉快なことがありますか」

「でも不自然ですわ。なってくれといわれても、はいそうですか、といって、直ぐになれるものでもないですね」

「そこところがわからない」

ぼくは不満そうに口をとがらした。

「あなたが、最後まで、剛さんのままでいればよかったのよ」

森本佳子の一言は、雷のような響きを伝えた。

白痴に近い馬鹿者の剛、剛のままでいればよかったのだ、と。なぜぼくはうかつにも真相を早々に打ちあけてしまったのか。

うそならうそで、うそを押し通してくれることを、女は心に望むのか。





ぼくが剛のままでいたら、事はどこまで進行したであろうか。ゴンドラのように揺れながら、ただふたりだけの秘密をかかえつつ、それは無際限の高みへと上がったであろうか。ぼくはその目のくらむような高さがこわい。

ぼくらは行く所もなく「歌声喫茶」に入った。一階も二階も、むせ返るような若い青年男女の体臭でいっぱいだった。

「爆発する青春のエネルギーを——」

と、司会者のたくましいからだをした若い男が、マイクであいさつをした。

——爆発するエネルギー、健康な山の唄。

——若者たちは目を輝やかして、司会者のリードの中に、一団とって溶け合っていた。

「ここには、よくいらっしゃいますの?」

「いや、以前はね」

あいまいに笑って答えた。

「わたしは初めて——」

とりすましたように、森本佳子は、冷たい表情を浮かべていた。大声でわめくように歌っている、会場の若者たちを、冷静にながめていた。

「この女は、若いのか、年とった女なのか」

森本佳子のどこにも、みずみずしい若さや、若さからくる、あの吹き出るような香ばしいパッションのかおりをかきとることができなかった。

その色のさえないやせた横顔が、女ではなく、やせた男のもののように見えたりした。気の重い時間が流れた。それでもぼくは、そ





の気の重さに抵抗していた。彼女との、はるかに拒たった拒離を心で感じながら、ほくはひとりになる恐怖を思うと、このまま彼女と別れる気にはなれなかった。

「このところを吸われると、気持ちがいい」

と言った、彼女のあの時の心情を、どこまでも追い続けるとどこまで行くか、それを思うと彼女と別れることに心残りを感じた。

森本佳子は、何が目的で、ほくをマゾと知りながら、つき合う気になったのか。アルバイトのためか、何かの打算のためか、それをどう判じるべきなのか、判断に迷った。

「お前はわたしの奴隷にちようどびったりね、といってくれませんか」

最後のころみだった。ムダとは思いつながら、もう一度念を押すように言ってみた。

「普通につきあってもいいんでしょう」

ボソリと彼女は言った。それが最後だった。完全に、どこかで行き違いが生じていた。

ほくはだまって立ち上がりながら、声をかけた。

「出ませんか」

外では、夜の街に、ネオンの灯が明るかった。

#### 4

マゾヒストは、女の好みについて大変せいたくだ、ということは何度も書いた。

その点からいえば、森本佳子は、初めから食い違いがあった。ほくの好みに合う女ではなかった。それを最初に感じていながら、ほ



くはそれでも彼女を追った。

まずそこに、女が居るからMを感じるのか、Mを感じるから女を求めるのか、どちらがいったい先なのか。少なくとも森本佳子の場合、女が後でMが先であった。

Mがひとりで歩いて、女の実体ははるかに遅れてついてくるものであった。そこに妥協が行なわれた。妥協という言葉で表わすのが適当であるか、どうかはわからない。

マゾヒストは空想家である。不足の部分を、空想の奔放なイメージで埋め合わせるのだ。空想の部分を必要としない、理想の条件で女が出現するか、およそ不可能事に近いのだ。

所詮、理想は理想、現実には現実なのである。

理想は男性のものであり、現実には女性の側からもたらされる。

話は話としてわかるけど、実際の問題となると——、といってシリゴみする女の心というものは、現実という状況の中に埋没するだけをお願い順応主義者のそれである。なぜ高く現実の状況を飛び越えるべく、あの旺盛な好奇と冒険の心が、彼女らの心には訪れないのであろう。

高所恐怖症の心でもって、なお遠く、高く、はるかな高所への夢と期待に駆られるべく、マゾヒストの心は懊悩する。それはより男性的な、心理的冒険主義の裏付けによって生かされ育てられる。

マゾヒズムは男性のものであって女性のものではない。女性におけるマゾヒズムというのは、現実状況の認識を、図式的に確認するだけの手続きにすぎないのではないか。それは空想的部分に扉をおろし、自己の正常な状況に、心おきなく安んずる閉鎖的性格のものである。

男性のマゾヒズムは、現状打破を願う心が、根本的な態度として

まず存在する。

自己を白紙に還元することで、そこに独自の全く新しい秩序を再構成しようというものだ。男性的な、冒険主義の所産なのである。でなくて、それをマゾヒズムと呼ぶことにほくは抵抗を感じる。

「美しい人が不人情で、とうがんの水ぶくれのような古賀さんが善良な君子——淡泊なはずの山嵐は生徒を扇動し、生徒を扇動したのかと思うと、生徒の処分を校長に迫るし。いやみてねりかためたような赤シャツが存外親切で——」

と夏目漱石の《坊ちゃん》の一節にある。また、

「議論のいい人が善人とはきまらない。やりこめられる方が悪人とは限らない」

全く転変としてきわまるところはない。Mだと思われる人が存外だし、Sだと思われる人が案外Mだったり——

きらいなはずの森本佳子のタイプに、すばらしいM的感動を覚えたり、好きなはずの某テレビ女優が、突如として退屈なデクの棒に覚えたり、心というものは、どうしても移ろいやすく定まるところがないのであろう。S的性格をはっきり持っている森本佳子が存外やさしかったり、しとやかであるはずの某嬢が案外Sであったり、ネオンの目まぐるしい光彩の綾に眩惑されて疲労する。

森本佳子との接触がとだえてから一年半、それはもう、既に過ぎ去った過去のものとして忘れ去ってしまった。

或の日、机の引出しにしまっておいた膨大な手紙の束を整理してみた。思いがけず森本佳子の手紙が出てきた。その何通かの一通を開いてみた。それにはこう書いてあった。

『水尾さんのお考えになっいていらっしやることは十分わかりますし



又、消極的ながら賛成もいたしますが、いざ実際にうつると、どうしていいものかと迷ってしまいます。

一回二時間、それも私のいわば簡易生活的なアパート暮らしの場においては、タケシさんに言いつけてやってもらう用事といっても本当にタカがしれています。毎週やってもらっていることの内容をちょっとお知らせしてみましよう。

お部屋の掃除くつみがき、アイロンかけ、お茶の用意とそのあとかたづけ。これくらいのお仕事なら、私があらためて注文をつける必要もないくらいにタケシさんはやってのけます。

そうして、こうしたかんたんな用事のくり返しのうちに、どうやって水尾さんのおっしゃる調教のムチや、あるじの威厳を、タケシさんにうえつけていったらよいか——ということです。ムチをふるうチャンス、威厳をしめす雰囲気、そういったものに欠けた場で、どうやって積極的に主従のつながりめいたものをつくっていったらよいか——これまでの私の感想では、そういったことはおおよそ不可能に近いんじゃないかって気がいたします。

情況からかけはなれて、威厳をしめそうとすれば、悪くすれば単なるヒステリーに終わってしまいそうな気がするのです。

水尾さんのご主旨が、よくわかるだけに、ほんとうにむずかしいことになってしまいました。

私の考えがかわったことといえば、タケシさんを一人前の人格に近づけようとする努力よりも、人とはちがったタケシさんの特殊性をすなおに認めることのほうが、むしろかしこいやり方だと悟ったことです。人道主義がかった温情よりも、むしろ非情になることですね』

美しい奇麗な文字であった。原文そのままそれは意を尽くした名

文だった。森本佳子の卓抜なカンの上さを表わしていた。ぼくが彼女と同じ年ごろであったころ、このような文章は決して書けなかった。

「ムチをふるうチャンス、それにふさわしい雰囲気——」とは、言い得て妙である。確かに彼女の言うとおりであった。カン所を、本能的にはつきりとつかまえているのである。

ぼくは森本佳子に再び会いたいと思った。戦前のフランスの名画《舞踏会の手帖》の女主人公のように、過去を再び我が胸に、の、ロマンチックな郷愁めいた感情とも合わさって、ぼくはすぐに手帖をめくって、森本佳子の所番地を捜し出し、電話を試してみた。彼女は幸いに以前の所にずっと、そのまま住んでいた。

ぼくらが会ったのは、四谷駅の近くの喫茶店だった。そしてふたりで場所を変えて食事をした。大学を卒業して、社会人になった森本佳子は、学生らしい地味な服装から、がぜん一変して、原色を主にした大胆な色どりの服を身に付け、色めがねをさえかけていた。

ぼくはしいて、話題をMの方に向けようとしたが、彼女は触れたがらないようであった。それより、仕事のこと、結婚のこと等に話題は集中した。

ぼくは、彼女の手紙に恋をし、現実の彼女はもう既にその地点にとどまっていなかった。言わず語らずのうちに了解がありそのまま盛り上がりもなくふたりは別れた。

その後ずっと、彼女とは会わない。





続・乱世呪縄伝

# 妖異 蝙蝠 城

潮

小日向  
一樹  
繪





## 犬丸最期

「う、ううっ」

鼻腔をいっぱいひらき、息をあえがせる左弓のからだに、犬丸の眼が粘りつく。

微妙なうごめきを凝視しているのだ。犬丸は左弓の屈伏を待っている。

「い、いぬまる——」

と、左弓の咽喉から、ひからびた声が出た。

「どうやら、参ったようだな、左弓」

顔をあげた犬丸が、左弓を覗きこむ。

「どうだ、女房にしてくれと頼むか」

手を伸ばして、ふくよかな肩を、ぐいっと握りこんだ。

左弓が反り返る。欲望を満身に噴かせた犬丸が、左弓の上にのしかかろうとした時である。

かすかな人の気配が、犬丸をぎよっとさせたのであった。

聞こえる秘めやかな呼吸音は、只者ではない。犬丸は骨張った顔を、蒼黒く引き緊めて左弓から、そろりと離れながら、山刀を引き寄せた。

薪木が弾けて、炎のゆれる音のみが、静かな夜気を裂く。

「だ、だれだ」

犬丸の叫び声と同時に、小屋の戸がぎいっと鳴ってひらいた。

冷たい風のみが流れこんで、炎の揺れ動くばかり。

小屋の中に侵入して来る人影はない。小屋の外に誰れかがいるのだ。

犬丸はぎよろりと瞳を動かしした。

思い切って足を踏みだしてみたが、淡い月光を浴びた熊笹の茂みと灌木の林が眠っているばかりに見えた。

「腑に落ちねえ」

呟いた瞬間、ぬっと黒い影が立ちあがったのである。

音もなく四つの影が、たたずむのを、犬丸は息を詰めて傍観するのみだった。

「うぬ等はなにやつだっ」

犬丸の叫びに返ったのは、沈んだ陰気な声であった。

「腐乱佗の忍び者、天鬼」

続いて同じような声音が響いた。

「地鬼」

「水鬼」

「火鬼」

腐乱佗の名が、犬丸の背筋に恐怖をはしらせた。老人達から聞かされた腐乱佗の陰惨な

物語である。

かつて、山の主権を争って、彼等に叩きめされた白蛇一族にとって、それは死神の集団と同じであった。

「死ぬがよい、山乱波」

天鬼が、呪詛の言葉を犬丸に送った。

四人の忍びの手が、いっせいに宙に躍った。放たれた四条の光茫が、犬丸に集中する。山刀はいたずらに空を切ったのみであった。

断末魔の濁った呻きが夜気に消えると、犬丸のからだは重心を失って、ふたつに折れるように地面に沈んでいた。

鋭利な、細い錐に似た手裏剣が、胸に二本両眼にそれぞれ打ちこまれていた。

四人の忍者は、屍から、それぞれの獲物を抜き取って視線を合わせた。蒼白な異相が、同じ意味の笑いを刷いている。

「小屋の中に女がいたな」

と、天鬼が言った。

「見逃せぬ獲物よ。館に運ぼうぞ」

地鬼が答えるのを待ち兼ねていたように、水鬼と火鬼が屍をまたいで歩きだしていた。

## 疾風救わる

鴉谷の闇を源三郎の吊るされている松に向って、次郎丸が懸命に足を進めていた。背に



は源三郎の太刀を用意よろしく負っている。

傾むいた日の下を、松にたどりついた次郎丸は、身軽く枝にぶら下がって、源三郎に向って呼んだ。

「おじさん、生きているかい」

薄れていく意識の中に、名を呼ぶ声を聞いた源三郎は、失いかけた気を取り戻そうと、頭を激しく振った。

その拍子にからだがぶらりと揺れて、縄が肉を噛んだ。源三郎は呻きながら、双眸を懸命に睜いた。

「だ、だれだ」

「生きているんだね。俺だよ、次郎丸だ」

「俺を助ける心算か」

源三郎には答えずに、次郎丸は猿のようにすると枝を渡った。源三郎の頭上に来ると、谷底を見下ろした。

「高いな。それに、鴉の畜生が沢山いやがるなあ」

呟きながら、腰に巻いてきた太い縄を解いた。

縄を持った次郎丸は、両脚で枝を抱くと器用に逆さにぶら下がった。

そして、手にした縄を源三郎の腰に括りつけて、身を起こすと片方の縄尻を、自分の乗っている枝にしっかりと結びつけた。

「いいかい。手を縛っている縄を切るよ」

「よし、頼むぞ」

次郎丸は山刀を抜いて、まず源三郎の上半身を締めつけた縄と藤蔓の網を切りにかかった。鋭い刃は雑作もなく縄も網も切断していく。縄が切れると同時に、源三郎を吊った縄が力を失って、からだがずるっと下りるのだ。それを次郎丸が仕掛けた縄が源三郎を見事に支えている。源三郎は自由になった腕に力をこめた。

「よじ登れるかい。俺が引っ張るからあがるんだよっ」

と、次郎丸の声にはげまされて、源三郎は必死に縄を掴んだ。総てを振り絞って、指先を動かす。

不自由な姿勢のまま、次郎丸も懸命に縄をたぐっているのだ。ようやく、腕が枝に伸びた時、源三郎は眼のくらむような疲労を感じていた。

暫くして、老松の根もとに倒れて、息を弾ませている源三郎を、次郎丸が安心しきった面持で眺めていた。

「次郎丸、すまなかった。お前にはこれで危い所を二度も助けられたな」

礼を述べる源三郎に微笑して、  
「これはおじさんの太刀だぜ」

と、背負って運んできた太刀を、源三郎に渡す次郎である。

「おじさん、左弓さんを助けておくれよ。おじさんを助けにきて犬丸に捕まったんだぜ」

源三郎は苦い表情を浮かべた。

左弓のために鴉谷へ吊られて、すんでの事に命を落しかけたのだ。と言っても、救ってくれた次郎丸の頼みを、無下には断りもできぬ。

「あわてるな、次郎丸。まだからだ動かぬわ」

「早くしてくれよ。犬丸の奴は、この近くにある木樵小屋にいるんだ」

せき立てられて、やむなく源三郎は太刀を杖にして腰をあげた。もう、次郎丸は先にとっと歩いていく。

「次郎丸、夕姫はどうなったか知らぬか」

と、清純な夕姫の美貌を脳裡にかすめさせて、源三郎は次郎丸の背に訊いた。

「白蛇様の生贄になるって女の事かい。おいらはよく知らないよ」

左弓の救出に夢中なのか、次郎丸の返事はすげない。左弓の口からなら、夕姫をどうしたのか判るだろうし、左弓と夕姫を交換する方法もある。

源三郎はふらつく足を踏みしめて次郎丸を



追った。

灌木の林と熊笹の茂みの彼方に、ちらちらと赤い炎の色が見えた。源三郎は軒の傾斜した小屋に眼を据えた。

「犬丸のいる小屋はあれだな」

「うん、あの小屋だ」

源三郎は太刀を背に負うて下げ緒を結ぶとさすがに、びたりと定まった歩調で、

「危いからな。ここから離れるなよ。判ったな」

言い置いて小屋に近寄った。

と、源三郎は漂っているかすかな血臭を嗅いで視線をこらした。確かに屍がひとつ横たわっていた。これが犬丸である事は、すぐに判った。

「おじさん、腐乱佗の忍び者だよ。奴等は人を殺す時には、必ず眼を狙うと爺さまが言っていた」

次郎丸はどす黒い戦慄を覚えたのか、ぶるっと肩を震わせた。

その頃――

白蛇一族の群れから、蟹丸と鷹丸のふたりが、麓の里に向って走っていた。

犬丸から、鷲部竜元が夕姫に十枚の黄金を褒賞として出す事を聞いた羅沙婆は、欲の皮

を突っ張らせたのだ。

犬丸を先廻りして、ひとり占めにする気になったのである。

夕姫を竜元の手勢に渡して、黄金を犬丸に分けてやらずに懐に入れる心算であった。

婆にも心配があった。白蛇一族の儀式の生贄に使った事を竜元に知られると、領内から追い払われるか、悪くすれば一族を殲殺されるかも知れぬ。

もし、そうになったら、総てを犬丸にかぶせる狡智があった。

婆は先祖伝来の眠り薬を嗅がせて、夕姫を睡らせ、軀を拭い、有合せの小袖に包んで、鷹丸と蟹丸の戻りを待った。

夜明けに近い時刻、ふたりは駈け続けて帰ってきた。

「婆さま、麓の村には坂部剛玄と言う侍大將が陣を張っておったのじゃ。わし等の話を聞いて、すぐお連れ申せと言うたぞ。褒美は夕姫と引き換えじゃそうな」

「よし、すぐ出立じゃ。案内しや」

婆は曲っている腰を伸ばした。

やがて、急造の輿に睡らせた夕姫を横たえさせて、婆をふくめて五人が里に向って山を降りた。

犬丸の死んだ事を知らぬ婆は、犬丸の現わ

れるのを恐れて足を急がせるのだ。

坂部剛玄の手勢はこの附近を搜索しているらしく、松明の光が至る所に見える。

麓の村落には、こうこうと篝火が燃えて、張りめぐらされた幔幕からは、絶え間なく雑兵や騎馬武者が殺気立って出入りしている。この村落に置かれた本陣を中心にして、かなり広い範囲に軍兵を投入しているのだろう。「うぬ等はどこへ行く」

一行の前に槍が突き出された。

険しい視線が、かつがれている輿に集中する。羅沙婆がしわがれた声を振りあげる。

「白蛇一族の者じゃ。夕姫さまをお連れしたと坂部剛玄さまに伝えるがよい」

すでに命令が達せられていたのか、婆の言葉を聞くと、雑兵のひとりが松明をかかげて先に立った。

剛玄の陣は村落の名主の家である。早くも剛玄が部下の武者を従えて待っていた。

夕姫を乗せた輿に、中の年老いた武者が走り寄って顔を覗きこませた。

「確かに夕姫さまに違いござらぬ」

うなずいた剛玄は、背後の武者に命じた。「その方どもは輿を運ぶのじゃ」

言い置いた剛玄に、婆が狡猾な笑いを、しわだらけの顔に浮べた。



「姫さまにお薬を差し上げましたのじゃ。それでお睡りなっていないさる。所で恩賞の黄金十枚を下され」

「婆、うぬ等は、姫をどこから連れてきたのじゃ」

「犬丸と申す野伏りがおりましてな。そやつが夕姫さまを掠ったと広言を吐いて、わし等一族の耳に入れましたの」

得体の知れぬ老婆と男達に、剛玄は不気味なものを覚えた。

白蛇と呼ばれる剽悍な山乱波が領内の山獄に出没している噂は聞いてはいたが、眼にするのは初めてだった。

「そして、犬丸と申す野伏りはどうした」

「ひひひっ」

と、婆はかん高い笑い声を立てた。

「あの世へ旅立たせましたじゃ」

犬丸が屍と化している事を知らぬ婆であったが一族の運命を左右する場合には生命を奪う覚悟も決めていた。

「我等は無事に姫を城へお届けすればよい。褒賞の黄金十枚取らせるぞ」

剛玄は腰の袋から、十枚の黄金を握みだして、汚れた掌に落すと、

「但し、姫についていらぬ流言を口にすると容赦なく首を刎ねる。よいな」

威嚇的な言葉だったが、竜元の狂気じみた嫉妬を警戒して、剛玄は考えていたのであった。

### 執念忍者

黎明に近い時刻――。

蝙蝠城の奥深い驚部竜元の寝所には、まだ短檠の炎が幾つもゆらめいていた。

睡れぬのであった。

夕姫が無事に到着するまで、さすがの竜元も安心できぬのである。夕姫未着との情報の水加月玄信の耳に入れば、和睦はたちまち流れて、玄信は兵を起してくるかも知れないのだ。

竜元は胸の底で、くすぶり続ける不安を、吐き出そうとして鈴香を苛いなむのであった。

その夜も鈴香は深更から、飽く事のない竜元の手で呻かされ、すすり泣かされるのであった。

寝所には蝙蝠翼ノ櫓から、竜元の愛蔵する道具が運ばれていた。

平鬼以下の忍び者達が理由もなく消え失せてから、警備に不安を感じた竜元は蝙蝠翼ノ櫓に足を踏み入れる事をやめた。寝所をそれに代えたのである。

鈴香の呻きが、絶え間なく流れていた。

素肌一枚の小袖をまとってはいるのであるが、その布地は眼に浸みるほどに鮮やかな真紅なのである。

緋の燃えるような小袖が、鈴香の白い肌を更に際立たせて、大輪の緋牡丹を思わせた。

これは竜元の好みの衣装なのであった。

奇妙で微妙な動きをからだにうねらせて鈴香はあえいでいた。

後手に縛りあげられた上半身に縄は深々と喰いこみ、縄尻は新しく杉戸に作られた鉄輪に結びつけてあり、鈴香の動きを制していた。鈴香はつまさきで立たされているのだ。

拡げられたからだの間に、変てこな道具が置いてある。高さが四尺ほどのふたつの台にまるい棒が通してあり、鈴香はそれをまたがされているのであった。

ちょうど木馬責めを思わせるのだが、木馬責めのように肌は傷つかぬのだ。つまさき立つと、わずかに腰から棒が浮く高さなのである。しかし、長い時間つまさきで立ち続けられる訳はない。

鈴香の脚が疲れて腰が落ちると、言いようのない屈辱感が棒の存在を知らされる。上体を固定されているので、棒から逃がられないのである。



「く、くるしい。お許しを」

鈴香が幾度めかの哀願を口にする。

どことなくその声に、あまえた響きが残るのは、すでに竜元に馴らされてしまった証拠であるのだろうか。ぬめやかな肌は、滲みでた脂汗に光って、短檠の光を柔かく弾いていた。くびれこんだ縄のために、つきでた乳房が、妖しい香りを漲ぎらせて激しく揺れている。四肢が精いっぱい力をこめて張り、身を支えている指さきが桜色を呈している。

竜元は双眸を充血させて、鈴香の全身を凝視しているのだ。

「ああっ、ああ」

もはや、疲れ果てた脚は重みを支える力を失ったのだ。

がつくりと鈴香がうなだれる。棒が喰いこみ、つまさを浮かせていた。それでも、身の傾むくのを、鈴香は必死に片足で防いでいる。

白と赤の悶える光景。鈴香の妖麗な肢体は竜元の焦慮を、発散せしめるのに充分であった。

「も、もう、お許しを。耐えられませぬ」

うわ言のように呟く鈴香の髪を掴んで、うなだれた顔を起こしながら、竜元は醜怪な息を吐きつけた。

「まだ許しはせぬ。夜が明けわたって、夕姫は無事との報がくるまでわしは睡れぬのだ。

そなたはわしの飼犬よ。主が飽きるまで泣き叫んで相手をせねばならぬ」

鈴香の眉がわずかに震えた。

「くるしい、助けて」

「忘れるな、鈴香。わしは水加月玄信の妹を妻に娶る。と申しても、そなたは絶対に手離さぬ。こうして、いつまでも、わしを楽しませるのだ」

竜元は鈴香の髪を、杉戸の鉄輪からのびている縄にぐるぐると巻きつけた。

顔をうつ向けられぬように固定されて、鈴香のなめらかな咽喉が、びくびくと痙攣した。

「もうひと踊りやってみせい」

と、竜元は短檠から火皿を下ろして、鈴香の浮いているつまさきの下に置いた。炎がゆらりと指をなめた。

「ひいーっ」

鋭い悲鳴を噴きあがらせ、鈴香の脚がはねた。指先が黒くすすけている。

「あつい、やめて、お許しをっ」

炎を避けようと脚をあげると、重心が狂ってぐらりと棒の上で揺れた。

仰向いた顔を歪めて、鈴香は必死にもがく

のだ。それは苛酷で妖しい踊りなのである。白い脚がびよんびよんと跳ねて、緋の小袖を巻きつけた裸身がくねった。

と、その時であった。

寢所から一間をへだてた廊下に、宿居の武者の聲が響いた。

「殿、お目覚めでござりまするか」

その声を聞いた竜元は、表情を一変して火皿を短檠に戻して立ちあがった。夕姫についての報せだと直感したのである。

「用を申せ」

「はっ、坂部剛玄どのよりの伝騎、ただいま夕姫さま御無事との報にござりまする」

「よし、使い番に会おう」

さすがに、喜色をあふらせて、竜元が杉戸の外に消えた。

と、いままでどこに潜んでいたのか、暗い天井に向いた鈴香の眼に、黒い影が舞い降りてくるのが見えた。

面を掩い包んだ布から、覗いている蒼白な異相はまごうかたなき平鬼のものであった。

鈴香の身を平鬼の双眸が、めらめらと醜惡な欲望を立ち昇らせて這った。

「お、お前さまは」

「なかなか艶やかな踊りだったな」

平鬼は竜元と鈴香の痴態を眺めていたので



ある。鈴香の髪を縄から解き払う平鬼に、息を弾ませて必死の響きをこめた女の言葉が飛んだ。

「夕姫さまが取り戻された事を聞きましたでしようね。お前さまは失敗したのです。約束はどうしたのです」

鈴香は、失望と恨みをこめた視線を、平鬼の冷やかな顔に注いだ。

「誰れか知らぬが、我等の隠し砦の存在を知った奴が夕姫を横からかすめおったのだ。やむを得ぬ仕儀よ。だが、俺は約束通りに夕姫は掠ったぞ。今度はお前が約束を果たす番だぞ」

「いやです。お前さまの方こそ約束を破ったのです。この肌はあげられませぬ」

と、平鬼が面を覆った布の中でにやりと笑った。

不気味なおののきが鈴香の背をかすめた。おのが身は自由は失って、平鬼の意のままになるのだ。

「俺は約束に固い男よ。執念深い餓えた狼と変らぬのだ、お前をこれから我等の館に運んでいく」

叫ぼうとする鈴香の口を、平鬼の掌がぴったりと閉ざした。

「お誂え向きに、お前は縛りあげられて、運

ぶに雑作はない。竜元には夕姫と言う美女がある。お前を頂いても不足はあるまいて」

低くしゃべりながら、平鬼はふところを探った。

夕姫の口にはめた声封じと呼ばれる防声具を左手に握った。まるい木の玉が鈴香の唇と歯を割って押しこまれる。平鬼は通してある革紐を首の後でぎゅっと結んだ。

「ぐ、ぐうっ」

平鬼は鋭い手裏剣で杉戸の鉄の輪に、鈴香の上体を固定させている縄を斬り捨てた。そのまま、かつぎあげると同時に両脚を縮めて息を吸った。

と、みるや、その黒い影は軽々と女を負うたまま欄間に貼りついていった。

恐るべき忍びの術であった。

すでに、忍びこむ時にはずしてある天井板を指で押す。板はすぐに動いて、ぽかりと暗い空間がひらける。

猫よりも巧みに、平鬼は天井裏に消えていった。さすがに手練の忍者である。

屋根をかすめて、蝙蝠ノ櫓から手鉤の付いた忍び縄を垂らすと、鈴香を肩にのせたままするすると城壁をすべりおりた。

そこには板を噛ませた馬が待っている。城の中から盗みだしておいた馬である。

鈴香を鞍上に投げあげて、平鬼はひらりとまたがると、強く馬腹を蹴っていた。

馬蹄の響きが残っている頃――。

竜元は坂部剛玄からの報告に安心して、寝所に戻った時、眼をうろたえさせた。鈴香の姿が失せているのだ。

縛められた鈴香が、ひとりで逃げる筈はない。

狼狽した竜元は、杉戸の鉄輪から垂れている縄が、鋭利な刃物で一断されている事に気づいた。しかも、見覚えのある手裏剣が杉戸に鈍く光っている。

「平鬼め、やりおったな」

はっとして顔をあげた竜元は、天井の黒い穴から、平鬼が侵入して去った事を知った。如何に忍び者とは言え、女を背負っては逃げきれまいと、竜元が思ったのは不覚だった。

「誰れかおらぬか」

竜元の絶叫に足音が駆け寄った。

「青沼左近介参上」

すぐに声が竜元の耳に届いた。

「急ぎ城内を固めい。平鬼めが鈴香を掠いおった。蝙蝠ノ櫓に駆けつけよ。相手は忍びじや、ぬかるな」

命令を怒号した竜元はふと不安を覚えた。警戒嚴重な城砦に忍び得る平鬼、彼ならば



夕姫を靈光寺から榮々と奪い去られる。

もし平鬼が、それを果していたなら、ふたたび、この城に潜入して夕姫を捕えるであろう。

竜元は、もはやじつとしてはいられない。佩刀を握むと、自ら指揮するべく寢所を出た。早くも狩りだされた数名の武者が、竜元の身辺を守るために殺気を漲ぎらせて集まっていた。

竜元はおのれへの苦い怒りを感じていた。

## 腐乱佗の里

蒼黒い沼が異様な臭気を放っていた。

魚も棲み得ぬような泥気を孕んだ沼であった。水面には灰色のもやが垂れこめて、妖鬼の潜み住むような奇怪な光景に満ちた沼である。

沼の中央には水草の掩い茂った島があり、そこに古びた館が建てられて、岸と島を結ぶ通路には、一本の巨木の丸太が掛けられてあった。

腐乱佗の里なのである。

沼の中にある館は強力な砦でもあった。敵の襲撃を受けた場合、丸太を落とせば敵の接近を容易に防げる。

沼に踏みこめば、たちまちに動きは失われ、飛道具を喰らって、いたずらに血を流すのみであった。しかも、沼の中には夥しい蛭がいた。

この陰鬱な地に住む忍者の一族は、驚くべき事に平家の血をひいていたのである。彼等平家公達に仕えた忍びを先祖に頂き、平家滅亡の後には一族の血を守ろうと、この地にたどり着き館を建てた。

以来、彼等は忍びの法を、生きる糧として暮してきたのであった。

彼等の先祖はそれぞれどこかに女を求めて子孫を残した。ひとりずつ男子を生ませ、乳を離れるや里に運んで忍者としての修業を積ませるのが掟であった。つまり、ひとりの忍者はひとりの忍者を残して一生を終えるのである。

平鬼の名を継ぐ者が頭領となつて、もっとも秀れた忍者たるべき酷烈な習練に耐えねばならぬのだった。

いま、里にたどり着いた平鬼は、馬を沼の近くで捨てると、鈴香をかついでまたすたすたと丸木橋を渡った。すると、茂った茅の中からぬっと老人が立ちあがった。

この腐乱佗に生き残っている唯一の老人であった。

老人の務めは終日、草むらに隠れて見張る

事である。老人はくすぶつた景色の中で、鮮やかな真紅の小袖に、落ちくぼんだ眼を止めた。

平鬼の名を譲った、かつての頭領で、いまは老鬼と呼ばれる老人は、しゃがれた声を投げた。

「その女は何者じゃ」

「鈴香と申す鷲部竜元の女。今日よりこの平鬼のもの」

「ほう、女ばかりを館に運ぶとはもう」

と、不快の色を剥いた老鬼を、平鬼はじろりと一瞥して訊いた。

「老鬼よ、女の獲物があつたのか」

「うむ、天鬼どもが鵜谷の辺りで若い娘を拾ってきた。山乱波かも知れぬわい」

老鬼は答えながら、平鬼の肩にかつがれている鈴香を見詰めた。

馬の背で揺られ続けた鈴香は意識を喪っていた。声封じの木の玉を噛まされ、長い時間を馬で揺られてはたまらず、悶絶するのも当然であった。

老鬼はまた唇を塞ぐと、叢に溶けこむように消えてしまった。

館の広間には四人が車座に酒をくみ交していた。広間の柱には一人の女が縛りつけられていた。左弓である。



木樵小屋で犬丸に責められてから、縛られ通しだった左弓も、さすがに疲れ果てて、鈴香同様に意識を濁らせている。

四人の視線が、入ってきた平鬼と、肩から床に転がされた鈴香に集中する。

「これは、驚部竜元が牢人者から奪い取った女でござるな」

と、一同の中で、もともと年若い火鬼が、驚きと畏敬で眼を睜いだ。

警戒嚴重な城中から引つ掠ってきた頭領の技倆と豪胆さに舌を巻いたのである。

平鬼は顔を掩っている布をはずしながら自慢気に笑った。

車座に加わって、木椀に酒を注がせながら左弓を見た。

「おぬし等が拾ってきた女はあれか」

「左様、山乱波の仲間割れか、掟に反むいた罰か、若い男に捕われていたのでござるよ。」

我等四人、そやつを仕止めて連れてきたと申す訳で」

と、地鬼が酒を唇にしたたらせて、動けぬ左弓を振り返った。

「山育ちとは申せ、美しい娘でござるよ」

一気に木椀を乾した平鬼が、配下の顔を見廻して、厳しい口調で言った。

「隠し砦を誰れか見た奴がおる。山乱波の者

かも知れぬ。あの娘が山乱波の一族なら、隠し砦を見付けた者の話を聞いておろう。おぬし等は先ずそれを訊きだせ。我等の秘密を知った人間はこの世に生かしてはおけぬのだ」

四人はうなずいた。

酒の醒め果てたような面々を見渡し、平鬼は鈴香を抱えると広間を出て奥へ向った。

鈴香が横たえられたのは、館の奇怪なる一室であつた。

沼の上に張りだされた部屋で、胸のむかく臭気が床から立ち昇っている。黒ずんだ板が張りめぐらされ、湿気を吸ってじめついている。

部屋の半分は格子で仕切られて、ひとつの牢となっていた。

意識を取り戻された鈴香は、まず鼻をつく臭氣に眉を寄せた。

それが、いつも平鬼の肌から漂いでる異臭と同じものだとして、おのれが彼等の館に運ばれた事をはっきりと悟った。

声封じと称する防声具の木の玉を、口中に含まされている鈴香は、こめかみが鈍く痛むのを覚えて呻きを低く洩した。

「気がついたようだな、ここが我等の生まれ育った館だ」

と、平鬼が鈴香の耳に言葉を吹き寄せた。

竜元に縛られたままの姿である。まるで白い肩、くびれこんだ縄にふくれ歪んだ乳房。燃えるように赤い小袖が割れて、むきでたなめらかな腹と、より合わせた太腿が、女の豊醇な香りをおびていた。

「この館に近づく者はいないのだ。どのような泣き叫ぼうとかまわぬが、声封じを噛まされてお前さんの顔は美しい」

平鬼は手を伸ばして、鈴香の顔を自分の方に向けた。

「う、ううっ」

粘り唾液が、唇を光らせて垂れているのが鈴香の羞恥を煽った。

「この部屋はな、呪縛の間と申してな。我等の敵に地獄の苦しみを与える場所だ。見るがよからう」

それは血も凍る恐怖に満ちた部屋である。

天井の梁には滑車が噛んだ鎖を垂らし、片隅には締め木、奇妙な形に組み合わされた責め具。竹の根を焦がして作られた鞭、鋭利な金串、鋭く背を削った木馬。

壁に設けられた棚には、肌を痛める目的の荒々しい縄。操り責めに用うる羽毛や、責め薬でも入っているのか、幾つかの壺。あらゆる拷問の道具が陰惨な影を落としていた。

「これ等の責め具は、先祖伝来の物ばかりな



のだ。男であろうと、女であろうと、責めるには骨は折らぬ」

平鬼の異相には残忍な喜悦が、じんわりと蒼く拡がる。

鈴香の胸は息も止まりそうであった。

毎夜のように加えられた竜元の汚辱には、血の臭いはなかった。

それに対して、この腐乱佗の拷問部屋には、血と死の臭気が冷え冷えと垂れこめていたのだ。

ここには想像を絶した世界が存在しているのだ。眼の前に立っている異相の忍び者。感情を喪った双眸には、哀願も助けを乞う声も受けつけぬ冷酷非情な光のみが沈んでいた。

鈴香はあえいだ。口の中が乾き切って、咽喉がぜいぜいと鳴った。がちがちと震える歯が、声封じに当って音を立てた。

「恐しいのか、鈴香」

と、平鬼は生きた心持もせぬ鈴香の顔を覗いた。

ふいに静寂を引き裂いて悲鳴が響いた。

平鬼はにやりと笑って、広間の方角に眼を向けた。

広間――。

天鬼と地鬼と水鬼と火鬼が異様な熱っぽい息を吐いていた。

四人の中央に左弓が仰臥させられていた。肌を隠す何物もない身を、手足を大の字なりに拡げられているのだ。

両手両足は思いきり開かれ、それぞれに巻きつけられた縄は広間の四隅の柱に結びつけられていた。しなやかな身は、責め続けられた疲労の跡も残さずにみずみずしい。新鮮な果実のような乳房とくびれた胴、鮮烈な羞恥が、左弓をほの紅く色づかせていた。

「お、お前たち、誰れなのだいっ」

さすがに野性の娘である。おのれの惨めな姿態に負けながらも必死に叫んだ。

「我等は腐乱佗の四鬼と申してな」

と、天鬼が粘るような口調で名乗った。

腐乱佗、白蛇一族も戦って敗れた酷烈な忍者の群れ。

その恐しさは死神と変らぬ事を、左弓は羅沙婆から教えられていた。彼等に近づいてはならぬと言う鉄則すらあるのだ。

「私をどうするだえっ。縄を解いておくれ。」

こんな目に合わされる覚えはないよっ」

「ふふ、気の強い娘よ」

地鬼が鼻を鳴らした。

「うぬは山乱波の娘か」

「そうだよ、白蛇の左弓じゃっ」

「ほう、白蛇一族の娘か。昔は我等の敵だっ

たな」

四人の瞳蒼い炎を噴かぬばかりにきらめいていた。

平鬼の命令を実行するのだ。隠し砦の秘密をあばいた山乱波、白蛇一族の者なら隠し砦を発見し得る可能性がある。

「左弓とやら、訊ねる事を素直に答えれば、縄を解いて帰してやろう。白蛇一族の中で、腐乱佗の隠し砦を覗いた者がおるだろうな」  
問いかける天鬼の横合いから、猛り立った火鬼がわめく。

「申せ、隠し砦を知った奴は生かしてはおかぬのだっ」

左弓は思い当った。

腐乱佗の隠し砦の存在を知ったのは疾風源三郎である。源三郎はそこから夕姫を救いだしたのだ。源三郎はそこから夕姫を救いだしたにちがいない。

源三郎は偶然に隠し砦を発見した。その事を告げれば、四人の忍者は源三郎の命を奪いに行くだろう。鴉谷に吊られている筈の源三郎を移す事は雑作もない。

左弓は源三郎と共に死ぬ気で唇を結んだ。まだ鴉谷に源三郎が吊られていると思ってい



「左弓、隠し砦を見つけた奴がおる筈だぞ」

と、地鬼がぶあつい唇を歪めて言った。

四人のうちで、もっとも残酷で、好色な男である。四肢を拵げた左弓を粘っこく凝視するのだ。

「知らぬ」

左弓は短かく答えた。地鬼が狼のように齒を剥いた。

「知らぬか」

と、その言葉を待っていたかのように地鬼は足をあげた。革で作られた忍び足袋をはいた右足が、ふつくと盛りあがった左弓の胸にのせられた。

「く、くっ、くう」

咽喉を反らして、左弓が濁った呻きを犬のような顔で噴いた。

内臓を引きちぎっていくような苦痛が襲ってくる。

「隠し砦の下方に谷があるのだ。その辺りに確かにうぬ等の群れが住んでおる。うぬ等がもっとも臭いのよ」

「こ、ころせっ」

左弓は叫んだ。

おのがあさましい姿もさる事ながら、この苦痛と屈辱から逃がれるには、死ぬより他にはない。

見下ろしている八つの眼に、獣の悦びが滲みでるのを見て、左弓はのがれられぬ魔神を前にした心持だった。

「望みなら殺してもやる。だが、ひと思いと言ふ訳にはいかぬ。じわじわと蛇の生殺しだな」

「ち、ちくしょう——」

「ふっ、責め応えのある娘よ」

地鬼の言葉に、熱い涙が左弓の閉じた瞼から、こめかみを伝わって床に垂れ落ちた。

### したたる凝脂

暗く陰惨な拷問部屋に、あえぐような呻き声が波紋を拡げていた。

鈴香であった。

なめらかな凝脂をのせた肌に、これはまた無情な縄が喰いこんでいたのである。

黒い針のような毛をよりこんだ縄が、すでに知覚を失った両腕を背に折り曲げて、高々と括りあげていた。

胸を巻き締めた縄のけばだった鋭い毛が、ふくよかな乳房に刺さってちくちくと痛む。

縄は更に鈴香のくびれた胴体を巻いており、縄目をくぐった先端は、鈴香の双臀の溝に没して、すべやかな腹部を縦に縛っていたのである。異様な縄はからだ中の柔らかな皮

膚を苛酷に責めていた。

すんなりと伸びた足首に至るまで、鈴香は全身を縛りあげられているのだ。熊縄責めと称する腐乱陀忍法の拷問のひとつだった。

わずかに首を動かすだけで、からだ中を締めつけている縄の毛が、肌に突き刺さる。

鈴香は身じろぎも許されない。このまま、床を転されたら、あまりの苦痛と羞恥に発狂するかも知れぬ。縄に熊の毛をよりこんで、独得の効果を得るべく考案された責め縄なのである。

鈴香は鼻腔を精いっぱいにひらいてあえいでいた。口にくわえさせられている声封じが、声のみか呼吸までもとめかねないのである。

平鬼はすでに血をのぼらせて、薄く色づいている鈴香を凝視していた。

肌の下にひそむ脂肪、まるで骨がないように折れ曲がる手足。

ぬめぬめとした輝きを放つ肌。

竜元を有頂天にならしめた美しさは、平鬼をがっかりと捉えていた。

蝙蝠城の密室で、かいま見た鈴香の苦悶のさまを、いまおのれの手で演じさせている悦びは、平鬼を格別な心持に誘っていた。

平鬼は、やおら足をあげて、鈴香の胸を踏



んだ。

ぐるぐるっと動く充実した感触。平鬼はゆつくりと足をこじった。

「ぐうっ、くくっ」

鈴香の咽喉が泣いた。

裸身が反り返ると、小波の拡がるように、

異様な熊縄の苦痛が寄せてくる。

「どうだ、この熊縄責めは、女を泣かせる拷問よ。この縄で気の狂うた女もいる」

平鬼は鈴香の恐怖をそるすように言った。

この縄で長い時間縛られていると、やがては皮膚が破れて血が噴きだす。弾けた肉に喰いこむ痛さは耐えられぬのだ。隠形の道で鍛え抜いた忍者ですら、そこまでに至ると余りの拷苦に屈伏すると言う。

「まだ応えはすまい。お前は驚部竜元に馴らされた女だからな」

「く、くうっ」

ごろりと反転させられて、床上に伏せられた鈴香の四肢が縮んだ。

うなじの後で固く結ばれている声封じの紐を平鬼が解いたのである。

木玉をくわえていた唇はひらかれたままであった。

床に落ちた木玉は唾液を吸って黒く変色していた。頬には革紐の喰い入った跡が、くっ

きりと赤く刻みこまれて、赤い糸を引いていた。

「この縄を解いて。約束は果たしまする」

鈴香は悲鳴に似た声をあげた。

沼のいやな臭気が、鈴香を嘲笑うように、

胸の底にまで浸みこんでくる。

「お願い、お願い申しまする」

平鬼の白く濁った双眸は、冷酷にじっと鈴香を見詰めている。

鈴香はこの異様な死人のような忍者に、絶望的な憎悪を感じていた。

すでに竜元に対する復讐を喪った鈴香にとって、残されたものは平鬼への憎しみしかない。

「縄を解いて、私はお前さまの意のままになりまする」

憎悪と恐怖は別であった。

鈴香は美貌をよじらせて叫ぶ。黙念と見下ろしている平鬼には、人間ではない不気味さが漂っている。

「お前を縛めている縄は解かぬ。許しもせぬのだ。お前はそのままでよい。俺が勝手にお前のからだを意に従わせる。それが腐乱佗の忍者が教えられた道よ」

「許して、お願いです。平鬼さまっ」

「わめけ、根限り泣くのだ」

革足袋に包まれた足が鈴香の上ののった。

「いや、やめて」

ゆつくりと力をこめて、平鬼は肉の丘陵をゆすぶる。

「い、いやあ、ひいっ」

鈴香が悲鳴をちぎらせた。

きれぎれの悲鳴と哀願が続く。

「驚部竜元の責め方と、腐乱佗忍法の熊縄責めを比べた心持はどうだ」

「う、う——」

鈴香の横顔が、黒ずんだ床に貼りついて、くつきりと浮かんでいる。

肌の隅々までが薄紅色に染められて、息を呑むほどの美しさを漲ぎらせていた。

「私を、私をどうするのっ」

「さて、どうしようかの」

と、平鬼は骨張った頬を歪めた。

「もう、許して。耐えられませぬ」

その時——

静寂を破って絶叫が響いた。女の凄まじい苦痛の声であった。

「聞こえるであろうな。あれは、白蛇族と申す山乱波の娘を、俺の配下が苛いなんているのだ。我等は女の悲鳴が大の好物でな」

鈴香を恐怖のどん底に落としこむ決定的な平鬼の言葉だった。



やがて――。

平鬼は、ほっそりとした足首の縛めをほどいた。新しい方法を考えたのであった。

平鬼は一条の竹鞭を手に取った。土中にあ  
る根を掘りだして、火にあぶって脂を抜いた  
節くれた鞭だ。

平鬼は鞭の先端を、鈴香の顎の下に差しこ  
み顔をあげさせた。

「立て、立って歩くのだ」

冷たい平鬼の命令。非情な双眸が鈴香をね  
め据えている。

「た、たてませぬ。縄を解いて下さいまし」  
自由になっているのは足首のみである。太  
腿から上は括り合せているので、容易に立つ  
事はできぬ。

平鬼は鞭をひゅつと鳴らした。

「立て、立つのだ。この鞭で皮が破れ、肉が  
裂けるまで打たれたくないのなら立てい」

鈴香は必死であった。

膝を曲げて上半身を持ちあげる。

顎を使って上体を起こそうとするのだ。そ  
の動作によって、腰部を縦に縛っている縄が  
ぎゅうっと、締まって鈴香はあえいだ。鼻腔  
からは火のような息が洩れる。

「どうしたのだ。この鞭が喰らいたいのか」  
耳もとで鞭が音を發した。肌に受けたら、

どれほどに痛いであろう。

思っただけで、鈴香は懸命に起きあがろう  
とする。太腿を縛り合わされているので、両  
膝が割れず身を支える事ができぬ。鈴香は足  
を空しくもがかせていた。

「許して下さいませ。立てませぬ」

哀れみを乞う鈴香。屈辱にまみれたおのれ  
がたまらぬ。

「立たぬのか」

平鬼の声が威圧的に聞える。

「ああ、立ちます。待って――」

叫んではみたが、いたずらに膝が床に軌む  
のみだ。

しかも、つまさきがすべって倒れそうにな  
る。

平鬼の視線が、こんもりと盛りあがったふ  
くらみに注がれていた。

喰いこむ縄のために、微妙なうごめきを見  
せる肌が妖しい艶めかしさをたたえている。

気の狂いそうな衝撃が鈴香を襲っていた。

不自然な動作のために、両膝の間を縛ってい  
る縄の存在が、鈴香を惨めに苦しめる。あえ  
ぎ脂汗をしたたらせ、悶えながら必死に立ち  
あがろうとする鈴香。

何度も失敗しては、耳もとで空気を裂く鞭  
音を聞きながら、ようやく立った鈴香はびっ

しよりと汗に濡れていた。

立ったとて許される訳はない。

新しい責め苦が待っているのだが、いまの  
鈴香は、平鬼の意のままに動くよりやむを得  
ない。

「立てるなら歩ける筈だな。この部屋の中を  
三度まわってみろ。ぐずぐずすると容赦はせ  
ぬ」

言いざま、左鬼は鞭を斜めに振った。

「ひいつ、あ、あるきますっ」

節くれ立った鞭が、鈴香の豊満な肌に鳴っ  
たのだ。

「歩かぬと臀が腫れあがるほどに鞭を喰らわ  
すぞ」

「あ、あ、あっ」

縛められた身を鈴香は妖しくくねらせるの  
だ。

括られている太腿のために、両足は思うよ  
うに動かぬ。

まるで幼児のように、鈴香は脚をよちよち  
と進めるばかりである。

その姿をおのれの眼で見るだけで鈴香は屈  
辱の底に沈むのだ。

意のままにならぬ足の運びが、実に効果的  
である事を鈴香は思い知らされるのだった。  
「どうした。遅いではないか。それでは日



暮れてしまふぞ」

平鬼の言葉が、鈴香の耳に痛いほど突き刺さる。次に来るものを予想しただけで、全身が硬張るのだ。

鞭が鈴香の胸に鳴った。

「ひいーっ」

呪われた黒い熊縄が、鈴香の総てを灼きつくすほどに、柔肌を噛み続けるのであった。

## 蝙蝠城

腐乱佗の里から数里をへだてた谷。

疾風源三郎は、次郎丸と共に、白蛇一族の部落に入って行った。

一度は鴉谷へ吊るした源三郎が、ふたたび現われた事は大きな驚きであった。

いまだかつて、鴉谷へ吊るされた者で、生還し得た者はなかったのである。

白蛇一族の男女は、畏敬の眼で源三郎を迎えるほどであった。もっとも驚愕のひどかったのは羅沙婆であった。

「お、おぬし、生きていたのか」

源三郎は、婆を凝視したまま、右手をゆっくりと背の太刀の柄に伸ばした。

斬られると思った婆は、奇声をあげて飛び退った。

「わ、わしを、斬る気かえ」

「斬ろうと思ったが、命だけは助けてやる。

その代り条件がある。夕姫を俺に渡すのだ」

「夕姫はおらぬわ。もはや驚部竜元の所じやよ」

「うぬが売り渡したのだな」

源三郎は、婆の襟を掴み、ぐいぐいと締めあげながら言った。見守っている白蛇一族も手を出し得ないのである。

「ゆ、ゆるしてくれ。その代り、左弓を、左弓を、左弓をやるで——」

「左弓は腐乱佗の忍者に捕われたぞ。犬丸は殺された。婆はどうする気だ」

どんと胸を突かれて、よろめいた婆は、さすがに源三郎の言葉に色を失った。

孫娘を宿敵であった腐乱佗に捉われた驚愕である。

「相手は白蛇一族も敵わぬ忍者の一団だ。助けだす気なら手を借さぬでもないが」

と、源三郎は声もめ婆を見詰めた。

「どうせいと言うのじゃ」

「驚部竜元に一泡吹かせるのに、力を貸してくれるなら婆に加勢しようぞ」

羅沙婆は落ちくぼんだ眼で、源三郎を眺めてゆっくりと一族に視線を廻した。

その瞳が源三郎に戻ると、しゃがれた声を張りあげた。

「よし、おぬしの言う通りにしようわい。砦も判ったろうの」

と、婆は黒い舌で唇をなめて、源三郎に言った。

「腐乱佗の里までは、わし等の足で一日はかかる。奴等は半日もかけずに走りおるがの。

白蛇一族の中で腐乱佗の里を知っておるのはわしだけじゃわい」

俊敏な山乱波をして舌を巻かせる忍者なのだ。確かに強敵に違いない。

やがて——。

白蛇一族の中から、もっとも精強な十人の男が選ばれた。

猿丸も鷹丸も蟹丸も選ばれ、狙矢を背負った者と、大きな壺をかついだ者とに分けられていた。

かつがれている壺は三つ、その中には猛毒を持つ蝮や縞尾蛇が入れてあるのだ。

これ等の毒蛇は羅沙婆に飼い馴らされて、奇怪な強力なる武器のひとつとなっているのであった。腐乱佗の忍者に対する白蛇一族の戦法である。

部落を出発した隊列の先に羅沙婆が、確かな足取りで進んでいく。

同じ頃——。

山からはるかに離れた蝙蝠城をめざして、



坂部剛玄の隊も進んでいた。

荒涼たる丘陵にそびえる城砦に、隊列は曲がりくねった道をのぼっていく。

赤地に白く、百足を染め抜いた旗差物を翻えした騎馬武者の背後に、夕姫をのせた輿が続いていた。

得体の知れぬ山乱波の部落で、おぞましい儀式の生贄にされた悪夢の一夜が、まだ夕姫の心を閉ざしていた。

隠し砦から助けてくれ、山乱波に捕われた疾風源三郎と言う牢人者は、どうなったのであろうか。

すでにこの世にいないかも知れぬ。夕姫は精悍な面影を思っ、胸も張り裂けそうであった。

眼前に大きくなる黒々とした蝙蝠城。

天守閣はなく、四方に櫓を配した城は、黒一色に塗りつぶされて、夕姫に陰惨な印象を与えるのだった。

夕姫は、不吉な想念が拡っていくのを押さえきれなかった。

隊列は城の中に入った。

蝙蝠の旗印を立て、黒い甲冑に揃えられた竜元の親衛隊が、夕姫を迎えるために居並んでいる。

蝙蝠の黒備えと水加月玄信麾下の精強な騎

馬隊も一目を置く剽悍な部隊である。

夕姫は輿の中から、従って来た武者や侍女の姿を探がした。

いずこにも見えぬのだ。

その時、隊列が止まり、輿が地面に下ろされて、馬を捨てた剛玄が膝を折った。

「殿でござる」

夕姫は並べられたはきものに足を置いて、すらりと立った。

黒備えを分けるように、ひとりの武者が、ゆっくりと歩み寄ってくる。

骨の張った顎に濃い髯を密生させ、視線を

遠慮会釈なく夕姫の美貌に据えつけていた。

竜元と知って、夕姫は身を固くした。

「驚部竜元じゃ、ようござった」

「夕にござりまする」

竜元の眼が類いまれな美貌から、抱き締めれば折れそうな、ほっそりとした身を、粘りつくように眺めまわすのだ。

まるで裸身を見られたような眼差で、夕姫は面を伏せた。

「噂にたがわぬ美姫、水加月玄信殿よりの見事な贈物確かに頂戴仕る」

竜元は奇妙な微笑をたたえて言った。

やがて、夕姫は館の奥深い一室に案内されると、従って来た剛玄に向って、気になる事

を訊ねた。

「剛玄殿、私の従者達はどこにおりまする」  
武装もいかめしい剛玄は、鋼鉄のように表情を微塵も動かさずに答えた。

「拙者には判り申さぬ。いずれ、殿よりご説明致しまする。ごゆるりと、ご休息下さい」

剛玄は一礼すると甲冑を鳴らして立った。

夕姫は確かに疲れ果てていた。

蛇責めの衝撃や、奇怪なる老婆にいたぶられた身は、まだ鈍く痛みを残しているほどだ。

それに反して神経は張り詰めていた。

昨日まで敵であった城に、妻となるべくきた夕姫にとって、唯一の心強い味方は、従っていた数人の武者と侍女達であった。

と、老女がひとり、次の間から冷やかな声を投げた。

「姫さま、殿のお越しにござりまする」

夕姫が顔をあげた時、すでに竜元は部屋の中に踏み入っていた。

「姫、苦勞をさせたようじゃの」

改めて竜元は、白い芙蓉の花を思わせる夕姫の美貌に見入った。

鈴香の緋牡丹のような華かさと異った、生しい魅力が竜元を満足させるのであった。



「お訊ね申す事がござりまする」

「なんだな、婚礼の儀は明日と定めたが」

「兄、玄信が従わせてくれました者共はいずれにおりましようか」

竜元は視線を反らして、表情を難しいものに変えた。

「誠に気の毒ではあったが、姫の警護が果せぬと、一同腹掻き切って詫びおった。さすがに玄信どのが家来じゃ」

「それで、女達までも——」

「うむ」

と、竜元は重々しくうなずいた。

「驚部領内での不首尾はわしの責めじゃ。姫よ、許してくれい」

うつ向いた夕姫の肩が震えている。涙を落とすまいと耐えているのだ。

竜元の言葉は、まったくの嘘であった。

狡猾な彼は、夕姫不明の情報が、玄信に届く事を恐れて、従者達を密かに暗殺したのであった。

もはや、蝙蝠城で夕姫がどのような目に合おうと、玄信に報告は達しない仕組になっていた。

竜元は、手を血で汚した甲斐があったと思つた。

この美しくおだやかな姫を、意のままに飼

い馴らしていく悦び。

明日の夜は、先ず例の蒸し風呂で悶えさせてくれよう。

「姫、疲れたであろう。今宵は早よう睡るがよい」

言い捨てた竜元は、控えている老女に、眼を配した。

老女は無言のまま、夕姫の傍にぴたりと座を占めるのであった。

## 悪魔の館

沼の臭気が立ちこめる、腐乱佗館の拷問部屋に朝の光が流れ落ちた。

ふたりの女が転っている。

鈴香と左弓であった。

苛酷で巧妙な拷問に疲れ果てた左弓と、平鬼の独自の責めに玩弄されて、息も絶え絶えの鈴香は、縛められたままの身を横たえて睡っていた。

ともに疾風源三郎を愛している事も知らずに、意識を喪ったかのように動かぬ。

陽光が白い肌を浮びあがらせていた。

忍法にかなった縄目は、時刻がたつほどに厳しさを増して、ぎりぎり肉に喰いこむのだった。

鈴香は熊縄で縛られ、左弓は銅線をよりこ

んだ想像を絶するほどに強靱な縄で括られていた。

牢獄は逃亡を防ぐ意味で、沼の上に張りだしてあり、ひたひたと揺れる水音が聞こえる。

万が一に、縄目から脱けてでも、底無しの沼によって逃げられはせぬのだ。

立ち昇る冷気が肌身に浸みこみ、ふたりは睡りから覚めた。

「お、お前は誰れだえ」

と、左弓が口をひらいた。

「私は里人から白蛇と呼ばれる山乱波の娘で左弓。奴等に鴉谷の近くで捕まったのさ」

さすがに野性の娘である。

左弓の声は強い響きを持っていた。

鈴香も顔をあげた。

「私は泉州堺の生れで鈴香と申します」

名前を聞いた途端、鈴香に対していた左弓の眼がきらりと光った。源三郎の許婚だと知っていたのである。

「お前は疾風源三郎の許婚だね」

死んだように動けなかった鈴香が、その言葉に、縛められた身を左の方にずらせた。

「どうして源三郎さまを知っているのです」

「私が命を助けてやったのさ。それに私は源三郎にこの肌を許したのだよ」



勝ち誇ったように左弓は言った。

運命とはまったく皮肉であった。

悪魔の集団と交らぬ腐乱佗の館で、源三郎をめぐるふたりの美女が、自由を奪われた身を向かい合せているのである。

左弓と鈴香は、息を潜めてお互いの姿を凝視するのであった。

と、沈黙を破ったのは、かすかな四人の男の呼吸の音であった。

天鬼、地鬼、水鬼、火鬼が、いつの間にか、牢獄の中に立ち並んでいたのである。

「左弓、口が利けるようだな。ひと責め、隠し砦を見た奴の名を訊ねようか」

陰惨な声を響かせたのは天鬼であった。

「知らない、知らないよ」

張り裂けるような左弓の絶叫が、牢獄の壁にはねた。

水鬼と火鬼が左弓を引きずる。

昼間には平鬼の手で、鈴香が凝脂をしたたらせた拷問部屋に、左弓が苦痛の叫びをほとばしらせようとしている。

平鬼と老鬼も、姿を現わした。

拷問部屋の壁には、二間ほどの間隔を置いて、四個の滑車を取り付けられていた。

左弓に向かって平鬼は白く濁った双眸を据えた。

「隠し砦を見付けた者の名を聞こう。おとなしく吐いてみるか、それとも、痛い目に合ってみるか」

注がれる平鬼の視線に、左弓は浸み通るような恐怖を感じながらも、山乱波の血をひく気性の烈しさをむきだした。

「隠し砦など知りませぬ。知らぬものが白状できるものか」

平鬼は左弓の言葉を聞くと、咽喉を鳴らし、笑い、やれと言う合図に首を振った。

「これからお前の悲鳴をたつぷりと聞かせてもらおう。それから、ゆっくり白状させるのも悪くはあるまい」

どのような拷問が待っているのか、さすがの左弓も脅えた双眸をわななかせた。

四人が左弓の四肢を押さえると、平鬼が後手首の縄を解き始めた。

縄目を許されても、がっちりと掴まれた身は微塵の動きもできぬ。

左弓の両手両足首に縄が巻かれ、それぞれが四個の滑車に通された。

縄が引き絞られると、滑車は軌んだ音を立てて廻る。その動きにつれて、左弓の両手両脚が横に拡がっていくのだ。

「う、ううっ」

左弓が烈しく首を振った。腋から横腹にか

けて鋭い痛みが這いまわる。

手首に巻かれてある縄が、肌に喰いこんで火傷を負ったようにひりひりと灼きつく。

肱の関節と肩の関節がばらばらになりそうなのだ。朝の陽光を浴びた肌がもがく。

「こ、ころせ。ころせ」

左弓の唇から、絶叫がほとばしった。

四人の忍者はかまわずに縄を絞って滑車を廻し続ける。

軌んだ音が、骨をこすり合わせるように聞こえる。

鈴香はあまりにも凄惨な光景に息を詰まらせた。顔をそむけ、眼を伏せた鈴香を、ちらりと見た平鬼が近寄った。

手をのばして顔を左弓に向け、親指で鈴香のこめかみを強く押さえた。いや応なしに瞼がひらくのであった。

「見るのだ。左弓の苦しむさまをな」

平鬼の声が、陰気に響いた。

左弓は無残なほど変形していた。

両手は逆八文字の形に拡げられ、すでに指先は血の色を失っていた。筋肉と骨がいまにも、音を立ててちぎれそうだ。左弓はぎりぎりと軋む関節の呻きを聞いた。

両脚はほぼ水平にひらいていた。太腿の付根がはずれそうな感じだ。のび切った膝も、



ひき吊るように痛い。

「どうだ、苦しそうだろう。お前もあのよう  
に両手両脚を拡げてやろうか」

と、平鬼は鈴香の顔を左弓に向けて言う。

おのれの身までが、砕けそうな思いで、鈴香  
は臉をふさぎたい。だが、こめかみを押さえ  
た平鬼の指は、それを許さぬ。

「こ、ころせ、殺しておくれっ」

左弓が、絞るような悲鳴を噴かせた。

縄はびいんと張り、左弓のからだは黒ずん  
だ塗を背にして、大の字に浮かんでいる。地  
鬼が烈しく顔を振って、苦しむ左弓の前に立  
つと、どんよりと濁った双眸を動かした。も  
つとも残忍で、もつとも非人間的な男であ  
る。

「もつと縄を絞ってやろうか。その美しいか  
らだが縦に裂けるほどにな」

あまりの苦痛に声もでぬ左弓に地鬼は非情  
な声を浴びせる。

「我等の隠し砦を見た奴は誰れだ。そやつは  
どこにいる」

「う、ううっ」

返事の代りに左弓の唇から呻きが洩れる。

「まだ白状する気にならぬようだな。おい、  
脚の縄を絞ってやれ」

地鬼は、水鬼と火鬼のふたりに言った。

滑車がぎりつと鳴って、針の束を突き刺す  
ような痛みが、脳髓を掻き乱した。

天鬼が奇妙な道具を地鬼にほうった。

それは木で作られたふたつの輪であった。

内側には鋭い歯を刻んでいる恐るべき責め具  
なのだ。輪は自由に割れるようになってい  
るが、鈴香は一見しただけで、乳房の痛む思  
いにかられた。

「く、くうっ」

左弓の上半身が震えた。

地鬼は乳房にそれぞれ責め輪をはめてしま  
った。喰いこんだ輪のために、乳房はくびれ  
て奇怪な形にふくれあがる。

「く、く、く——」

言葉にならぬ呻きだけだ、左弓の唇から流  
れる。

地鬼は狡猾な悦びを刷いて、大きな掌でそ  
の枷を包みこんで力を加わらせた。

「ぎえーっ」

凄惨な絶叫が噴きあがった。地鬼の握りこ  
んだ輪が更に縮んだのである。歯は深々と柔  
らかな肉に喰いこみ、ちぎれるほどの痛みを  
ふりまいた。やがて、木で作られた歯ではあ  
るが、鋭い先端は肌を破って肉をえぐるであ  
ろう。

鈴香は寒気が全身を粟立てるのを感じた。

眼前でひとりの娘が、飽く事のない悪戯の生  
贅として、死に至るかも知れぬ拷問を受けて  
いるのだ。直視するには耐えられぬ、余りに  
も凄惨な光景であった。

地鬼の冷徹な顔を左弓は必死ににらんだ。  
無表情に動かぬ相貌が膜を張ったようにしか  
見え。左弓の意識が濁り始めた証拠だ。

「隠し砦を見た奴はどこにいる。そろそろ吐  
いてはどうだ」

地鬼がまた掌を正面に向けて伸ばした。

瓢箪のように変形し先端は充血して赤い。

「く、く、くう」

からだ中に拡がる苦痛が、左弓の顔を歪ま  
せた。

「か、か、かくしとりでを——」

と、かすれた声が流れでた。

「隠し砦を見た奴は誰れだ。どこにおる」

「疾、疾風源三郎、鴉、鴉谷——」

がっくりと左弓の面が垂れた。地鬼が髪を  
掴んで覗きこむと舌を鳴らした。

「ちっ、悶絶しおったわい」

平鬼は、ゆっくりと視線を鈴香に注いだ。  
疾風源三郎の名を聞いた鈴香は驚きに蒼ざ  
めていた。

この影のような忍者達なら、必ず言葉通り  
に源三郎の命を奪うであろう。



源三郎がいかに手練の剣士であろうと、五人の忍者を、総て倒して生き残る事は、不可能である。

「疾風源三郎か」

と、平鬼は呟いた。

「妙なものよ。疾風源三郎はこの女の許婚。竜元の手勢に殺られた筈だが、どうやら生きているらしい。どうだ、嬉しいか、鈴香」

平鬼が、にやりと笑った。

いっせいに男達の眼が鈴香のからだに集った。もはや、左弓は気を失って、残っている鈴香に、彼等の興味が注がれたのだ。

鈴香は、新しい恐怖が胸をよぎるのを感じた。

左弓の凄まじい拷問を目撃したばかりなのだ。

「ふふふ」

と、平鬼が低くこもった笑い声を立てた。

老鬼だけが、能面のような顔で、鈴香を凝視していたが、ふらりと腰をあげた。

## 腐乱佗潰滅

黒ずんだ沼から漂ってくる臭気に、羅沙婆を先頭にした白蛇の一团がとまった。

陰惨な、色彩を喪った光景に、さすがの山乱波も息をひそめた。

沼の中にある島に建てられた館を、疾風源三郎は凝視した。

「婆、これが腐乱佗の本拠か」

うなずいた羅沙婆は、さっと手をあげて、左右に振った。

男達は婆を中心にして散開すると、いずれも身を低くして沼をうかがう。鳥の声すら聞こえぬ不気味な静寂があるばかりだ。

婆は、弓を引き寄せた。

「向こうへ渡るには、あの丸太橋を渡らねばならぬのじゃ。沼に足を踏みこめばとうてい助からぬ」

婆の言葉から、源三郎は草の中に、何かの仕掛けがあると見た。

無策にあの丸太を渡れば、たちまち敵の手に命を落とすであろう。

と、羅沙婆はかつがれてきた二個の壺を下ろさせると、なにやら呪文を唱えはじめた。

壺の蓋をはずすと、おびただしい数の蝮や縞尾蛇が、這いだしたのである。

源三郎も、その気味悪さに総身に寒気を感じた。

ぬらぬらと鱗を光らせた蛇群は、草の陰を音もなく這って、するすると沼の中にすべり落ちていくのだ。

源三郎は羅沙婆の用意した戦法が、白蛇一

族特有のものである事を知らされたのであった。

いかに練達の忍者であろうと、これほどの毒蛇を避け得る事は至難の技だ。しかも、周囲は底無しとも言える沼である。

と、その時である。

葎の中から、ぬっと立った人影があった。老鬼である。

それに向かって、羅沙婆は矢を放った。

苦もなく老鬼はそれを交した。

「ゆけ、猿丸、鷹丸」

と、婆の絶叫と同時に、ふたりは風のように丸太橋に向かって走った。

「推参」

と、老鬼がしゃがれ声を放ってかまえた。

枯木のような手が、宙を二度ほど撫でるかに見えた。

手裏剣を投じたのである。

白い光茫は二筋も猿丸と鷹丸が声もなくのけぞって沼に落ちた。

恐るべき手練の技であった。

「矢を射ろ、射ち続けるのだ」

叫びざま、源三郎は背の太刀を抜きながら丸太橋を駆け上った。

手裏剣が飛ぶ。

源三郎の太刀が、それを跳ねあげると、婆



の放った矢が老鬼の胸へ突き立っていた。

老鬼は矢を浴びたまま、橋を護るために源三郎の前に立ちはだかった。源三郎は大きく太刀を振り下ろした。

老鬼が断末魔の呻きと共に、倒れるのを見届けた源三郎は、鋭く空気を裂く音を聞いたのだ。

数条の手裏剣である。

丸太橋に伏せた源三郎の背を、わずかにかすめて手裏剣は水音を立てた。

館から、ふたりの忍者が突撃してくる。

水鬼と火鬼であった。

彼等は忍び刀を振りかざして、叢に駆けこむと同時に、異様な絶叫をほとばしらせた。

毒蛇が一勢に踊りかかったのである。何匹かを斬って、踏みつぶす間に、幾匹かの蝮は咽喉や足や腕にぶら下っていた。

源三郎は、慄然たる面持ちで、ふたりの忍者を見詰めた。

水鬼と火鬼は全身に蛇をまつわりつかせたまま、源三郎に向かって突進した。僅か数歩の所で毒が廻ったのか、ふたりは転った。

水鬼と火鬼の絶叫を、平鬼は冷たい表情で聞いていた。

敵がどのような攻撃を行ってくるのか、水鬼と火鬼は犠牲となって突進したのである。

「蛇だ、蝮と縞尾蛇じゃ」

外をうかがっていた天鬼が、低く言った。

「白蛇族の奴等よ。山乱波どもめ」

地鬼が、口惜しげに呻きながら、平鬼に顔を向けた。

頭領の命令を待っているのである。

「煙硝を投じて火を放つのだ。蛇は火があれば恐れて近づきはせぬ」

いささかも驚かぬ表情で、平鬼が言った。

「しかし、奴等に橋を押さえられては逃げきれませんまい」

と、天鬼は眼を館の外に注いで言った。

さすがの忍者達も、底無しの沼に踏みこんでは脱出が不可能である。

「案ずるな、奴等も多勢ではない。毒蛇を使うのが、何よりの証拠。橋を奪い返すに雑作はあるまい」

平鬼は、無表情に答えた。

壁には手脚を拵げたまま、左弓が意識を失っている。

鈴香は天井の梁から吊り下げられてからだをだらりと垂れていた。

すでに悶絶したのか、がっくりと首を落として、かすかにあえいでいた。

残った三人の忍者は、眼を交した。まず、地鬼が走りでた。

廊下を駆けぬける足もとに、蝮の褐色の肌がまつわる。

頭を踏み砕き、忍び刀で斬り払って、地鬼は館の外に降りて視線をめぐらした。

山乱波もさる者である。姿も見せずに隠れていた。

沼に屍ふたつ浮いているのは、老鬼が倒した鷹丸と猿丸だ。葦の間には老鬼と水鬼と火鬼が横たわっていた。

身を低めた地鬼は、至近に殺気を感じて飛び退った。

びゅんと、矢が対岸の叢から、地鬼めがけて飛んだ。

斬り落として、続けざまに速射される矢に備えようとした地鬼は、不覚にも傍に潜む殺気への配慮を失っていた。

躍りでた源三郎の太刀が、唸りを生じて襲いかかる寸前、地鬼は辛うじて身をのけぞらせた。

傾むいた姿勢のままで、館の屋根に逃がれようとする地鬼の背を源三郎は深々と一颯した。

転がり落ちた地鬼の胸に尖光が沈み、朝の陽光の中に血が霧のように散った。

その時である。

館の一端から炎が走りでると、地面をなめ



はじめたのだ。炎は太い線となって、黒煙を噴きあげながら、源三郎と山乱波達を包みこむ。

天鬼の試みた火遁の術であった。煙硝の袋を空へ投じて、こぼれ落ちた煙硝に火を点ずれば、たちまち炎は火薬を伝わって走るのだ。

「うあーっ」

ひとりが絶叫をあげてのけぞった。全身を炎が捉えたのだ。

源三郎と羅沙婆が、敵の姿を館の屋根に認めた。

婆は引きづめに矢を射る。

天鬼は矢を避けるために、屋根を転がりながら、下方の敵を攻撃すべく身をずらした。刹那、掌がちかつとうずいた。

はっとする天鬼の眼に螭が映った。屋根にまで這いのぼっていた毒蛇に気づかなかったのだ。

「くそっ」

呻いて螭を投げ捨てた天鬼の足に、ぬるりとからみついた縞尾蛇が齒を立てた。

天鬼は死を覚悟した。そのまま立ちあがった天鬼に、羅沙婆の射る矢が吸いこまれるように刺さる。

「腐乱佗の頭領の死にざま、見届けい」

わめき終えるや、天鬼は屋根から高く跳んだ。

黒い塊りとなって、臭気を漂わす水面に落ちていった。

飛沫が消えると、沼は天鬼を呑みこんで静まり返った。

平鬼に、逃げる事を告げるための絶叫であった。

ひとり生き残れば、腐乱佗の血は継げるのだ。平鬼は拷問部屋の床板をはいだ。沼に張りだして作られてある牢獄の下は沼の水がよどんでいた。

平鬼は、ふたつの裸身を、じろりと眺めて呟いた。

「殺しはせぬ。その代り俺は必ず奪い返す」  
平鬼は忍び刀を抜き、刀身を手に提げると鞘を口にくわえた。鞘には穴があけられているのだ。

平鬼は全身を泥と水の中に沈めた。鞘を利用して呼吸を助けながら、驚くべき技倆で沼を隠れ進んでいった。

館に群っている蛇を、蟹丸が背負った壺に始末しながら、源三郎と共に左弓の姿を求めた。曲りくねった廊下は、まるで迷路のようであった。蟹丸は壺の中に蛇を見つけては投げこむ。

「あそこだ。女の臭いがする」

蟹丸が源三郎に言った。

陰気な暗い部屋の中へ踏みこむ。

源三郎は、そこに展開している、あまりに凄惨な光景と、竜元の手にあるものと思いこんでいた鈴香を発見して、息を呑むのであった。

両手両脚を思うさま広げられて、意識を失っている左弓。

同じように異様な縄で縛りあげられた鈴香が吊り責めに揺れている。ふたり共死んでいない証拠には、ふくよかな乳房が息づいている。

「ひでえ事をしやがる」

あわてて、蟹丸が左弓の縛めを解きにかかると、源三郎は鈴香を抱え下ろすと、耳もとで叫んだ。

「鈴香、しっかりせい。俺だ、源三郎だぞ」  
うすく目がひらいた。

かすんでいる視界の中に、夢であろうか、源三郎の顔が覗きこんでいたのである。

「源三郎さま」

鈴香は、縛められた肌を震わせた。

「あ、あの男はど、どこだよ」

意識を取り戻した左弓が、蟹丸に向かって恐怖を漲ぎらせた声をほとばしらせた。



「誰れだ。まだ隠れている奴がいるのか」

鈴香の瞳もわなないている。

「平鬼だよ、腐乱佗の頭領だよ」

「頭領は天鬼と名乗って沼に落ちて果てた」

「違いますっ」

と、鈴香は源三郎に言った。

「頭領は平鬼、鷲部竜元に仕える忍者です」

強敵はまだ存在していた。

いずれ竜元に復讐せねばならぬ源三郎は、

平鬼とたたかわねばならぬであろう。

源三郎は、闘志が全身に噴きあがってくる

のを押さえきれなかった。

## 受縛の肌

祝言の仕度として、夕姫は奇妙な蒸し風呂

に立たされていた。

肌には白絹の浴衣をまとったのみである。

無理矢理に蒸し風呂に入れられた夕姫は、こ

こに至って、鷲部竜元が邪悪な意企を秘めて

いる事を知った。

床に敷き詰められた簀の子から熱い蒸気が

もうもうと舞いあがる。

熱気が立ちこめて、夕姫の肌には汗がした

たり始める。

白絹は汗を噴いた肌べったりと貼りつき、薄紅色に彩られた裸身がすけて見えて美

しい。

と、ぎいーっと重く戸が軋んだ。

夕姫の眼が驚愕にみひらかれた。

竜元が姿を現わしたのである。しかも、右

手には布をよって作った縄の一束を掴んでい

る。

夕姫は襟もとを押さええて後退った。

竜元は下帯を締めたのみである。

「恐れる事はない。そなたはわしの妻じゃ」

竜元は髯の密生した頬をにやりと崩した。

たちまち、むきだしのたくましいからだに汗

でてらてらと光る。

「お願いでございます。ここから出して下さ

りませ」

夕姫の背が壁に当たった。

もはや逃げる余地はない。竜元の手にある

縄の目的を知って、夕姫は熱気の中であえい

だ。

「盃は交わさずともそなたは妻じゃ。夫の命

に従うが妻であろう」

「こ、このような場所で何をなされます。恥

をお知り下さりませ」

夕姫は必死であった。

人形のように美しい姫が、羞恥と恐怖に全

身を硬くして、哀願するさまは、竜元の血をぞくぞくとさせる。

縄の束を、ゆっくりと解いた。

「恐れるな、取って喰いはせぬ」

竜元が近づくと、夕姫は唇をわななかせて

逃げようとする。

白いほっそりとした手首を、竜元の指がひ

っ掴んだ。

「お放しを、お放しを」

夕姫の顔が壁にこすりつけられた。両腕に

折り曲げられたのだ。

竜元の大きな掌は、楽々と、ふたつの手首

を捉えて、雑作なく縄を巻きつかせるのだっ

た。

「いや、いやです」

縄を上を絞られて、両腕を引かれながら夕

姫が叫ぶ。

汗の滲んだ咽喉を廻った縄が、下へ下りる

と胸の上をぎゅっと締めつける。力まかせに

縛られて、息の詰まる思いで夕姫は呻きなが

らおとがいをつきだす。

「なぜ、このような目に合わせるのです」

竜元は、顔中を歪めるように笑った。

「姫、この竜元はな、美しい女子を縛めて自

由にするのが好きなのだ」

夕姫は、熱気に頭がぼろろとするのを、こ

らえられずに壁によりかかった。ずるずると床に崩れ落ちる。熱い湯気が、



絹の浴衣を通して肌に届く。汗は更に噴きでて、からだは水を浴びたように濡れている。咽喉は乾いて呼吸も苦しい。

くびれこんだ縄に、白桃の隆起が浮きあがっている。色づいた肌が、布の下からすけて見えるのが艶やかであった。

「み、みず、みずを」

「ふふ、水が欲しいのか」

竜元は水槽から手桶で汲みあげた水を夕姫の顔の前につきだす。

咽喉の乾き切った夕姫が、唇を近寄せる寸前、竜元は手桶を引いたのだ。

「水が欲しければ、裸にしてくれとわしに頼むのじゃ」

夕姫は屈辱に唇を震わせた。

いかに水が欲しいと言っても、自らの口でそれを乞うことは誇りが許さぬ。

「そ、そのような事は」

「申せぬのか、申さぬならこうしてやる」

いきなり、竜元は手桶を夕姫の頭上に傾むけた。

「ああっ」

乾きをしめしたい水は、無情にも頭から床に流れ落ちてしまう。

「恥ずかしがらずともよいわ」

竜元の手が浴衣の襟に伸びた。

縛められたからだで抵抗はできぬ。ずるりと襟が割れて、ぬめぬめと光る胸があらわにされる。

羞恥と熱気に、全身が然えるようだ。渴きは咽喉を痛めつける。

「お願いです、水を、水を」

「頼むのか」

竜元は水槽から、改めて手桶に水を汲み、ごくごくと飲んでみせる。夕姫はあえぎながら、竜元に這い寄る。

「私にも水を、水を下さりませ」

竜元は赤く充血した眼を、足もとに呻いている夕姫に貼りつかせた。

「そうしてくれと申すのか」

「そ、それは」

口ごもる夕姫は、竜元は征服の悦びを満喫するのだ。

「頼まぬなら水はやらぬ。咽喉はますます乾いていく。からだ中の汗を絞り取ってやるのだからな」

竜元は、夕姫の顔の前で手桶を振る。

水音が気の狂いそうな渴きをあおり立てる。

蒸し風呂の熱気で、汗は絶え間なく流れるのだ。まどっている浴衣は、絞れば滴を垂らすであろう。竜元の上半身も汗の玉をまつわ

らせている。もはや、耐え得る限界ではなかった。

屈辱にまみれようと、咽喉の渴きと熱気から助かりたい。

夕姫はあえぎながら唇を動かした。

「水を、水を」

「頼むなら水をやる」

恥辱の涙が、頬汗と共に伝わった。

やがて夕姫は竜元の狙い通り、自ら屈伏の言葉を口にしたのだ。

狡猾な竜元の奸言であった。類いまれな美女の誰れも手折らぬ無垢の肌を、おのれの前でむきだす緊張に竜元の胸があまうずく。

夕姫の思考力は、水を一刻も早く飲む事に集中していた。

「お願い、水を飲まして」

竜元が、手桶を夕姫の前に据えた。

羞恥も忘れて、まるで犬のように、夕姫は手桶に顔を突っこみ水を飲むのだった。

舌を鳴らし、顎を濡らして、咽喉の渴きをいやす夕姫を凝視する竜元の眼が蒼く光っている。

くびれた夕姫の胸を締めている扱帯を解きにかかる。汗で濡れた扱帯は解きにくい。

「ああっ、いやっ」

夕姫が必死にあればようとする。



竜元は苛立つて、むずと夕姫の柔かな咽喉を踏み据えたのだ。

「う、ううっ」

思わず呻く夕姫、竜元のつまさきが息を詰らせて、動きを封じようとする。

抵抗すれば竜元は足に力をこめる。

白く柔軟な咽喉はつぶれて、夕姫は仰臥したまま、身じろぎも許されない。

恥ずかしさに舌を噛み切って死にたい。しかし、簡単には死ねぬ夕姫だった。水加月領の運命を背負っているのだ。

蒸し風呂の熱気が夕姫の氣力を濁らせる。

竜元の手が動くのを、肌を感じながら、なすがままに任せていた。

後手の縛めが解かれ、自由になった腕は感覚を喪ってどうにもならない。

まとっていた浴衣が、片袖ずつぬがされて、むかれていくのを、夕姫は赤児のようにじっとしていた。

もはや、抵抗を失った夕姫を、竜元は改めて縛り直していく。

両腕を思い切り折り曲げて、思うさま縄を巻きつけて絞りあげる。乳房はくびれてつきだし、熟れた小梅に似た先端が愛くるしい。床の簀の子に横たわって、あえぐのみの夕姫。

熱気で薄紅く染まり、全身は汗でぬらぬらと光っている。

「千沙」

と、竜元は背後の戸に向かって怒鳴った。顔を覗かせたのは、夕姫に付き添っている老女である。

千沙は手に持っている異様なものを、竜元に差しのかけて戸を閉ざした。

竜元の顔は朱を塗ったようである。

高貴な花を思うさま踏みにする征服感がつきあげてくるのだ。それは強烈な悦びであった。

竜元は、手に持ったものを、ゆっくりと広げたのだ。それは鹿革をなめして作られた奇妙なある種の下帯であった。それを夕姫にはかせようと言うのだ。

そこにいるのは、すでに豪族の血を持つ娘ではなかった。

美しい生きた人形にすぎないのだ。竜元の意に従わねばならぬ奴隷なのである。

「下帯の締め具合はどうじゃ。よい心持であろうが」

と、竜元は夕姫の羞恥を、あおり立てるように、言葉でまずなぶるのであった。

夕姫は無駄とは知りながらも、必死にくねらせる。

その姿は蜘蛛の巣に捕われた哀れな蝶の動きを思わせた。もがいている白い蝶を、貪欲な蜘蛛が糸を生贅に巻きつけて、罅りつくそうとする光景であった。

## 下帯ぐつわ

それから小半刻後――。

夕姫のからだは、奇怪な蝙蝠翼ノ櫓の上部にある、竜元の愛用する秘密の部屋に運ばれていた。

鈴香を含めて、幾人かの女が、呻きのたうった部屋である。

すでに櫓の外は宵闇が煙って、幾つもの短檠が用意されていた。

床に敷き詰められた然えるような緋毛氈に、横たわっている夕姫は輝くばかりの白さで浮きあがっていた。

竜元の姿は、意外にも見えぬ。

代って、千沙と呼ばれる老女が、夕姫の傍に膝まずいていた。化粧箱をたずさえて、夕姫の汗を拭い取り、全身に白粉をはたき、髪をくしけするのだ。

「姫さま、お口をおあけなされ」

丁重だが、冷たい声音で、千沙が命じる。「いやです、なぜこのような縛めを受けるのです」



「お殿さまは、このようにして女子を可愛がるのでござります。姫さまがいらぬ言葉を申されて、お殿さまの御不興を頂かぬよう千沙がして差しあげます」

「いや、いやです」

夕姫は、唇を閉ざし、齒を懸命に噛む。

老女は両手で夕姫の咽喉を包んだ。親指がおとがいの下に、ぐっと喰いこむ。

異様な痛さに夕姫の齒が、おのれの意志に反してゆるむ。すかさず、老女が化粧箱から箸を取りあげて、さっと齒を割った。

「可愛らしいお口」

と、千沙はにたりと笑った。

並んでいる真珠のような齒の奥で、ぬめぬめとした舌がおののいている。

千沙は化粧箱の中から、小さく切った布を幾つもつまみだして、まるめては夕姫の口の中に詰めこみ始めた。幾つも押しこまれて頬がふくらむ。声はもはやでないのだ。

しかも、布片はさらさらした感触を拡げて、吐き気を催すほどである。

「む、む、むうっ」

「姫さまは美しいお方、このような猿轡がお似合いです」

意地悪気に眼をぎよろつかせて、千沙は夕姫の顔を覗きこむ。

羞恥に血が火照る。老女の取りあげた長い布は、白さを喪って灰色に汚れ、異臭すら放っているのだ。

千沙は汚れ果てた布を、夕姫の口に二巻きして、老女とは思えぬ力で絞めあげてうなじの後で結んだ。むっとするいやな臭いが、夕姫の鼻腔から胸の奥へ浸みこみ、息を詰まらせた。

「ほ、ほ、ほ、いかがでござります。姫さま、その猿轡は使い古したお殿さまの下帯でござりますよ。よい香りが致しましょう」

老女は、にたにたと唇を歪めて笑った。

夕姫は、気が狂ったかのように激しく首を振った。猿轡をはずそうと、頬を緋毛氈にこすりつける。

「おや、おいたがすぎましようぞ。姫さま」

千沙は、夕姫の艶やかな黒髪を掴み、ぐつと後へ引いた。

「う、ううっ」

頭髮の引き抜かれるような痛みに、夕姫の咽喉が反り返った。

千沙は、髪を後手の縄目にくぐらせて括りつけてしまった。顔は動かせず咽喉を反らせて、仰向いたままである。

「むう、うっ」

猿轡の奥で、夕姫は切なく呻いた。

咽喉が詰まって、呼吸ができぬ。精いっぱい息を呑みこめば、猿轡の異臭が容赦なく流れこんで、屈辱感をあおり立てるのだ。

「姫さま、これでおとなしくなさいますね」  
千沙の言葉に、瞼を閉ざして、耐えている眼から涙が垂れ落ちた。

「お泣きなされる事はありません。今宵は楽しい御婚禮の夜、涙をお殿さまに御覧に入れてはなりません」

陰険な視線を、夕姫に這わせて、老女は言った。

無抵抗のまま横たわっている美女を、めちやめちやに苛いなんてやりたい欲望を、くすぶらせているのだ。

「く、く、う——」

汚れた猿轡の下から、苦痛が洩れる。

仰向かされた首筋が硬直して痛い。背中にまわされた両手の指が、夕姫の胸中を現わすかのように固く握り締められていた。

ふくよかな肉づきを盛りあがらせた双臀に、喰いこんでいる鹿革の下帯が惨めだった。

「お化粧が終わりました。姫さま、鏡を御覧なされませ」

千沙は化粧箱から手鏡を取りだすと、夕姫の顔の前につきだした。恥ずかしいおのれの姿を見る事ができようか。



夕姫は臉をふさぐ。千沙の唇が、引き吊った。

「さ、御覧なされませ」

言いさま、千沙は手を伸ばして、はめられた革の下帯を掴んで、ぐいと揺すった。かすかに軋んだ革は、柔らかな肌にめりこむ。耐えられぬ触感が夕姫の脳裡に這いのぼった。

「む、むうっ、くっ」

夕姫は眉を寄せて咽喉を震わせた。

めくらめくような羞恥が、磨きあげられた白磁の肌を火照らせた。

鼻腔がふくらみ、灼けた息を吐く。千沙は執拗に手を動かしていくのだ。

「眼をおあけなされ」

「く、くうっ、うう」

口中一杯に詰めこまれた布片は、舌を押しやって息もできぬ。

鼻腔をひらき、頬をくびらせた猿轡の下で、唇をあけようとする。臭気が浸みこみ、千沙の意のままに扱われる夕姫であった。

涙をたたえた眼で鏡を見る。おのれの屈辱にまみれた姿が、全身を熱くした。

抵抗する気力のなくなった事を確めた千沙は、夕姫の固縛していた黒髪を、後手の縄からはずした。

張り詰めた神経がゆるんで、がっくりと首

を垂れる。夕姫は緋毛氈に頬を押しつけて嗚咽を洩らした。

千沙が化粧箱を片づけ終わると、竜元がゆっくりと現われたのである。

白綸子の寝衣をまとして、酒の臭いを吐き散らして緋毛氈を踏んだ竜元は、夕姫の姿態に眼を細めて髯の生えた相好を崩した。

「化粧は終わったようだな。千沙、鏡の間に案内してやれ」

と、竜元は千沙に命じた。

千沙は夕姫の縄尻を掴むとぐっとたぐり寄せて言った。

「お立ちなされませ」

夕姫は両膝を使って懸命に立ちあがった。意の通り動かぬと、どのような報復を受けるか、すでに思い知らされて、従順な家畜と同様であった。

鏡の間とは、畳が十枚ほど敷ける部屋であった。驚くべき事は、周囲を大きな四枚の鏡が取り巻いている事であった。

南蛮渡りの大鏡である。

「千沙、用意してあるな」

竜元の言葉に、千沙は置いてある漆塗りの手箱の蓋を払った。

中身は縄の束と、擦り責めに使用する鳥毛と、柔かな穂を持つ幾種類かの筆である。

竜元が縄を掴み取るのを、夕姫は恐怖の眼差で凝視する。

「坐るのだ。これから、そなたを、ゆっくりと楽しむのだ」

「う、うう」

夕姫は、猿轡の上から覗いている双眸に、哀願をたたえて竜元を仰いだ。

四つの鏡には、縛められた惨めな姿が鮮やかに映っている。

夕姫は柔腰を崩折れさせた。

千沙は竜元の命令を待つのか、部屋の一隅にひかえていた。

並べられた短檠のほあかりが、鏡にきらきらと光りを拡げていた。

竜元の持った縄は、絹でよられたものであった。

絹縄で女のふくよかな肌を縛ると、不思議なほどに深々と喰いこむのだ。夕姫のために竜元が用意させたのだった。絹縄をくびれた胴へぎゅっと巻きつかせた。

ぶっくりと腹がふくれて、艶めかしい髪を浮かべた。竜元は縄をくぐらせた。

夕姫はおとがいをつきだして、猿轡の中で呻きをあげた。

床に突っ伏して屈辱を耐える夕姫を竜元は戦慄的な悦びで、ぎらつく眼でねめ廻しながら



ら老女に命じた。

「脚を組ませて縛れ」

千沙は手箱から新しい縄を取りだすと、夕姫の足もとにうずくまった。

ほっそりと形のよい足首を掴むと、合わせている膝を力任せにひらいて、あぐらを組ませるようにして括った。

舌を噛み切って果てようにも、口中に押しこまれた布による屈辱的な異臭を放つ猿轡で、自害の手段は封じられていた。

「責め枷を運べ」

と、竜元はまた命じた。

千沙は次の部屋から、両手に木の枷を持ってきた。

長さが五尺ほどで巾が五寸ある厚い板の枷が二枚。

手の入る部分はまるく、くり抜かれている。はめこむと動かなくなるように、金具が装着してあるのだ。

この手枷をはめられると手はまったく動きを失ってしまうのだ。

竜元と千沙は、この手枷を夕姫にはめるべく後手の縄目を解き始めた。

## 嗚咽姫

短襟のほあかりが、輝きを増していた。

鏡の間はきらきらと光りを弾き、妖しい美しさをかもしだしている。

白百合の香ぐわしさを漂わせた美姫は、無惨な姿にされていた。

両手は枷をはめられ、頭上に逆八文字の形にのびていた。白くひそやかな腋がさらけだされて、匂うような若草が柔らかな翳を落とすしていた。

「姫、これから竜元が可愛がって進ぜる」

動く事のできぬ夕姫の傍に、竜元はどっかりと腰を据えた。夕姫は眼をふさいで、胸をあえがせるばかりだった。

「千沙、先ず羽毛から始めるぞ」

竜元の指図通り、千沙は手箱の中から、美しい雉の羽根を取りあげて竜元に渡した。

この優しい羽毛がどれほどの効果をあげるのか、夕姫には判らぬ。

擦り責め、それは血の匂いも鞭音もない拷問だが、若い女にとって、これほど苦しいものはない。

「そなたのぬめ肌は見事なものじゃ」

竜元は頭上に伸びて、拡げられている夕姫に視線を注いだ。

羽毛を、そろりと、柔らかな部分に動かした。

たった一擦したのみで、夕姫の上半身が、

びくりと震えた。

竜元は、羽毛を丹念に動かしていく。

「く、くうっ、ううっ」

猿轡から濁った呻きが噴きあがる。

両手の指が握り締められたり、ひらかれたりするの、擦られる辛さを、如実に現わしていた。

夕姫は、顔を左右に激しく振る。

眉を寄せて、必死に耐えようとする。

「く、くうっ、くくっ、くら」

夕姫は、瞼を塞いで嗚咽の声を洩らした。

竜元は勝ち誇った表情を、骨張った顔に浮かべて、さすがに昂奮に汗を額に滲ませていた。

「これから、そなたを花嫁にしてくれよう」

あぐらに組み合わされた、夕姫の脚を抱えた時に、閉めきられた戸の向こうから千沙の絶叫が響いた。

戸をあけて、ぬうっと立った影は、腐乱佗の頭領平鬼ではないか。

「無礼な、なにに参ったのだ、平鬼」

竜元の怒声に、平鬼は死神のように蒼い面に、冷たい微笑をかすめた。

「水加月玄信に鞍替えするつもりでな。土産代りに夕姫を持参したい」

平鬼は、静かに腰の忍刀の鞘を払った。



## 悪の末路

竜元は、本能的に死の恐怖を感じた。

櫓の周囲を護っている武者を呼び集める間はない。

相手は影のように神出鬼没の忍者なのだ。

竜元は顔を歪めたまま、ずるずると後退した。不意の侵入者に備えて、手槍が長押に掛っている。

「死ね、化物」

竜元はわめくと、身を躍らせて長押の手槍を掴んだ。

千沙が転びながら、平鬼の足に抱きつく。

「くそっ、婆め」

平鬼は、逆手に持った忍刀を、千沙の咽喉に一閃させた。

声もなく血を噴いてのけぞった千沙。

同時に、竜元が手槍を突き出す。

鏡をめぐらした部屋は、竜元に不利であった。平鬼の黒い姿が、果してどこにあるのか、素早い動きに竜元は迷った。

「てえーい」

あせった竜元の手槍が、ひとつの鏡を突き割った。

次の刹那、平鬼の影が竜元の手もとに躍りこみ、忍刀の先端を深々と胸へ刺しこんだ。

「無、無念——」

かっと双眸を睨いた竜元が、平鬼を凝視し続けた。

白綸子の胸に血が滲みでる。

静止していた竜元は、平鬼の手が刀身を引き抜くにつれて、手槍を掴んだまま、鏡にぶつかり、ずるずると崩れていった。

ふたりを屍に化さしめた平鬼。

血の臭いが、むっとするほどに立ちこめている。

「姫よ、このままで暫く我慢して頂こうか。

この方が逃げるに都合がよいのだ」

平鬼は言い終わると、千沙の帯を解いて、小袖をはぎ取ると、夕姫のからだをくるりと包んだ。

女の白い肌は凝脂に光って、闇の中でも見える。

平鬼は、恐怖に意識を喪いかけた夕姫を、肩にかついだ。

勝手知ったる蝙蝠ノ櫓である。

平鬼が櫓の屋根に立ったのは、それから数十秒ほどの後であった。

手鉤の付いた忍び縄が、石垣に沿って垂れている。

平鬼は、片手で身を支えながら、夕姫をのせたまま、するすると猿のようにすべり落ちる。

た。

夕姫を水加月玄信の城へ運び、竜元の死を告げる。

玄信は、すかさず兵を動員して、鷲部領を席捲して蝙蝠城を陥し入れるだろう。

平鬼は思うがままの恩賞を得られるだろう。

と、その時、平鬼は夕姫を地面に横たえ、と、二間の距離を跳躍して忍刀を抜いた。

太刀を背負った牢人者が佇立していたのであった。

「うぬは何用あってうろついておるのだ」

平鬼は、低く問いかけた。

「おぬしは城の者か。城の者ならば斬り捨てろぞ」

牢人者は昂然と言った。平鬼の顔に凄惨な微笑が浮かんだ。

「なぜ城の者なら斬るのだ。理由を訊こう」

「城主竜元をあの世に送らねばならぬのだ」

平鬼は、微笑を消して双眸を細めた。

「無駄な事よ、竜元は俺がすでに殺ったわ」吐きだした平鬼に、鋭い女の声が飛んだ。

「その男が腐乱佗の頭領じゃ」声は左弓であった。



竜元を斬るために、蝙蝠城に忍びこむ寸前だったのであった。

「いかにも腐乱佗の平鬼よ」

言いざま平鬼の忍刀が半円を描いて源三郎の面上を襲う。鞘走った太刀が、鏘然たる響きを放った。

「疾風源三郎見参」

源三郎は、太刀にかまえた。

平鬼が腰を低めて、短かい刀身を空へ差し伸べた。

ふたりは凝固したように動かぬ。

「竜元は間違いなく俺が斬った。安心して地獄へ行けい」

と、平鬼は唇の端を引き吊らせた。

両者の距離は約十間、息も凍る一瞬。

左弓が山刀を抜いて頭上にかざした。

力をこめて平鬼めがけて投じたのである。

静はその行動でたちまち破れた。

白い光茫を引いた山刀を、平鬼は上半身をのけぞらせるや、左弓に向かっておのが忍刀を投げ返した。

「う、うっ」

忍刀は、左弓のふくよかな胸を貫ぬいた。

その瞬間を捉えて源三郎は地面を蹴った。

すでに武器のない平鬼は、驚くべき早さで源三郎の頭上を飛び越えた。

源三郎はこれを予測していた。

平鬼の脚が地面に触れる前に、源三郎は反転していた。

勝ち誇った平鬼が、ふところの手裏剣を源三郎に投ずる寸前、その蒼白な異相が驚愕に歪んだ。

じやりっと頭骸骨を斬り砕く音が、陰惨に響いた。

源三郎の太刀は、平鬼の額から鼻梁まで見事に割っていた。

平鬼は双眸をまだ意外な結果を信じられぬとばかりに睨いたまま、草の中に、ゆっくりと崩れ落ちた。

源三郎は、左弓を抱えあげた。

闇の底で死を迎えようとしている野性の娘は、凄艶なほどに美しかった。

きらきらと光る眼が、源三郎と見詰めていた。

顔が白く浮きあがっているのは、もはや血の気がないのであろうか。

「左弓、しっかりせい」

左弓は、すでに言葉を口にする力を失っていた。

源三郎は黙って両手で冷たくなっていくからだを、ぶあつい胸に抱いた。

左弓の唇が、かすかに微笑んだ。

「左弓、左弓——」

がっくりと垂れ落ちた頭が重かった。

夕姫を助けた鈴香と次郎丸が、その場に駆け寄って、声もなく立ちすくむのであった。

明け方——。

左弓の屍をはるかに山を望む丘に葬って、

源三郎達は二頭の馬を水加月領めざして疾駆させていた。

一頭には源三郎と夕姫、一頭には次郎丸と鈴香である。

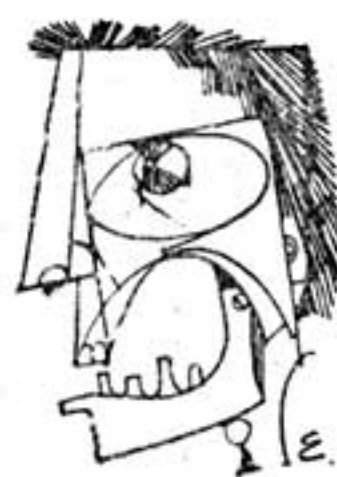
風を巻いて走る二騎の馬蹄が、暁前の闇を破って、かっかっとな野面に響く。

悪夢の世界を、一刻も早く脱出するかのよう、二騎は走り続けるのであった。(終)





# 夢の楼閣に生きる男



森 本 愛 造

普通、サド・マゾヒズムの系列とは考えられていないものの一つに、露出症と呼ばれる一つの傾向がある。

傾向、と私が特に断るのには、それ相応の理由がある。露出願望というものは、純粹にそれだけでは病氣とは言えない。むしろ、ありふれた人間心理の一つの具象であって、それではアブノーマルとさえ言えないからである。

男が、その肉体を誇る、女がその肉体を以って異性を呼ぶ、そのこと自体は花が咲き、

虫が花を飛び交い、犬が発情期に性器を誇示して異性に対するのはきわめて正常なことであらう。だから、もし露出願望そのものをアブノーマルというなら、花も鳥もまた獣も魚も全部アブノーマルということになる。

そういう露出願望も、それが、特別な形で表現されたり、意想外の時と所で発現されるとき一般にいうアブノマリティを持つに至る。その場合、最もはつきりしているのは、*「無理に裸にされる」*又は*「裸でいなければならぬ環境に置かれる」*という受動的な情感を

伴うマゾヒスチックな場合である。もちろん*「性器を誇示する」*、*「異性が自分の露出行為を見て吃驚する」*という傾向の情感と伴うものは、サジスチックな傾向を持っていると考えてよいであろう。

従って、他の場合にそうであるように、再びサド・マゾヒストはここで芸術家である。彼等にとって最も重要なのは「露出する行為」そのものではなくて、その行為に至る過程、それも主として、心理的な起承転結なのである。その意味で、ここに示す一例は、非常に



興味深いと思われる。

当人は今年三十九才になる一会社員、日常生活の他の分野では正常すぎるくらい正常である。

二児の父であり、妻は可成りの上層階級の出であつて、彼自身も非常に有名な旧家の出身である。経済的には非常に豊かとはいえないまでも、中流の上位の生活を維持するのは苦勞もいらない。いわば恵まれた環境にある人である。

妻は八つ下の三十一才。彼は或る大きな車輛会社に勤めている。その会社は斜陽族の子弟が多いので有名である。元来旧公卿が集まつて作った会社である。

彼は、その記録によれば、一九四二年或る右翼関係の出版物の中の一節（筆者注、この書物の題名は今もって不明である）によつてマゾヒスチックな傾向を自覚した。

『米英国民は、有名な奴隷制国家の末えいである。彼等米英人が、黒人奴隷に対する態度というかやり方は、牛馬に対するよりもひどいものであつた。たとえば、南部の一州であるミシシッピ州では「アングルトム的小屋」以上にむごたらしい実例は枚挙にいとまがない。』

『夫人は、或る日、何等の落度もない黒人とその娘を呼びつけ、丸裸になる事を命じ、目の前で、父に娘を犯させた。その後に、近親を犯したという罪で二十五回、主人の面前をも顧ずに猥雑な行為をしたという科で三十回淫行に耽つて仕事を放棄したという理由で二十五回。合計八十回の鞭打を受けさせた。その黒人を鞭で血だらけになるまで打たせられたのは、同じ小屋の奴隷であつた。女主人はベランダの前でこの鞭打ち刑を実施させ、自分

分は高級なシェリーのグラスをなめながら、黒人の叫びや、血の飛び散るほどの鞭の音を終日楽しんだ。その後二カ月もたたないうちに、女主人は同じ黒人を牧場につれてゆき、牛と交尾させた。このとき、彼女はついてゆき、大木の根のところに腰を下ろして、黒人を励ますために牛馬を追う時の太い鞭で、黒人の裸の身体を打ち続けた。また、或る時は働きの悪い黒人奴隷を一行に並べて鞭で打つ時間に——この刑罰は毎日時間を決めて一定の場所で行なわれることになっていた——椅子とテーブルを持出して、その阿鼻叫喚を眺めながら茶を楽しんだ。この思い付きが気に入ったらしく、しばしば近隣の夫人連を茶の時間に招き、所刑の場所に棧敷を造つて、一同で茶を飲み、干菓子をつまんで、談笑し

ながら、黒人奴隷が男女を問わず丸裸にされ地上に打った、四本の杭に手足を繋がれて、大の字に地上にうつ伏せになって長く太い鞭で、牛馬に対してさえ行なわれない情容赦のない懲罰をうけるのを眺めた。さらに、後に至つて、その棧敷は一棟の小さな低い櫓に変わった。そこには優に十八人の客が坐つて処刑を眺めながら、茶や食事を楽しむことが出来たという。』

『更に違ふ或る農場主は、七五〇人余の黒人奴隷を抱えていたが、その中三七人は、主人のための性的玩弄物として購入されたものであつた。彼は、この三七人の中から、毎日七人乃至十人を選び出し、互いに同性の愛戯を演じさせた。また来客には、その中の三、五人を付けて、寢屋における接待に供した。彼等は互いに密告制度を設けられていたので、当夜の接待の良否は、直ちに主人に伝えられ最も拙劣なまた不熱心は奴隷は、意識を失うまで、河馬革で作つた鞭で、同僚から打たれねばならなかった。また、最も熱心にかつ丁寧に接待につとめた女は、主人に飼犬のように首に鎖をつながれて、農場の巡回に伴をさせられ、どこでも、いつでも主人の命ずるところで全裸になり、黒人男子の多数の前や



同性の多数の前で自慰行為をさせられた。主人はそれを眺め、たまには巨大な犬をけしかけ、鞭を使って、そのあわれな女を打ちのめしたりするのである。』

『売買のために市場に送り込まれた男女の奴隷は、男女の買手によって身体のすべてをくまなく調べられた。眼や鼻、口、耳はもちろんのこと、手や足の力を試すためには、特別な仕掛けが考案され、実用に供されていた。足力の計量には、無限キャタピラのようなものがあり、黒人はその上を全速力で走らせられた。そして、自発的は走力が計られた後、買手が売手のいずれかが、必要と考えればその背面から鞭を当てて、力いっぱい走らせた。その時の力が一応記録されて、後日の売買の時に参考とされた。こうした事は決して一部で行なわれたのではなかった。人によっては男女奴隷を全裸にした上、性器を詳しく調べた。もちろん奴隷によつては、その時にいちじるしく発情を示すものがあつたが、それらは牛追い鞭で血まみれになるまで打たれるか、さもなければ、淫乱癖の女に買われてやせさらばえるまで、女に奉仕せしめられ、ついには重労働を課せられ、監督に鞭で打ち殺されるような目にあうことが多かった。女子にして然りであつたから、米英人の男子に

して、当時米国南部に居住していた者の多くは、かくのごとき百鬼夜行の中に生活を営み奴隷の生血を吸って巨富を積んだといわれても仕方がなからう。ここに上げた諸例は、空想の産物ではない。F・クーパーなる当時の雑誌記者が克明に報告した記録によつて言っているのであるから、実態は更に恥ずべき神をおそれざる実情であつた。』

こういう記述は、当時はいくらでもあつた。その目的は英米に対する敵意を喚起することであつたが、読者の中には、こうしてその一部を抜き書きしてまで熱心に読みあさった者がいたのである。かれらは決して米英憎悪のために読みあさつたのではない。ただひたすらに本能的なサド・マゾヒズムへの希求によつて、執念深く探し読みしていたのである。この事と裏書きする好例が、ここに挙げる人物の日記にある。

「一般に流布され、かつ信じられている噂によると、米軍は進駐後全日本の青年男子を集めて去勢するそうである。彼等は神風特攻隊による襲撃に手を焼いて、このような狂気じみた民族は、断種すべきだと考えたに違いない。女性は断種せず、すべて奴隷として彼等

の愛玩用に連れ帰り、黒人の代りに使用するという事である。近所では、若い女性の疎開が始まったが、この何一つ残っていない国土の奥深くかくれていて何の幸があろうか。しかし、人々は、真剣に今婦女子の避難を考えしている。一軒おいて向う側の代議士は、兵庫の山奥に妻子を出発させたという。今日立寄つて友人は、断種とは「フクロ」を切取るのか、陰茎を切取るのかと、散々論議していった。私たちの一番の関心事は、フクロなら快感が失われないが、陰茎がなくなると、性の楽しみが一生奪われてしまひはしないかという事である。

若し、そんな決定をする軍医の側に若い米軍の兵士や看護婦が居るとしたら、彼等は一体どんな気持で、その決定を感じ取るであろうか。いや、彼等にとつて、有色人種の去勢などは、牛馬の烙印のごとく全く事務的なことなのであろうか。

一方、僕は変な想像を繰返してみた。僕達が整列させられているところに、若い米看護婦を伴つて、軍医か、或いはその助手が現われる。彼等は大きな鞆を持っており、それを、僕たちの前の粗末な机の上にどざりと置く。僕達は、どういふ事が始まるのかと片唾を呑んでいる。



彼等は、その中からいろいろな器具を取出す。

ハサミや、メスや、そういうものである。一番前に並んでいた男の両腕をMPがぐいとかんで机の前に連れてゆくと、看護婦が手早くうしろ手に手錠をかける。両足をまとめて太いロープでしばる。彼女は事務的に彼のズボンを下ろし、中のものをつまみ出す、ゴムか皮の手袋をはめた看護婦の手。軍医が鋭いメスを取り出して、看護婦に渡すと、彼女はすばやく切りおとす。血が、だらだらと地をそめる。看護婦は、指先で切り取ったものをつまんで、机の上の金魚鉢のようなガラスの容器にばい、と投げ込む。次ぎの男が観念して連れて来られる。彼女は同じ動作をくり返す。

いよいよ自分の番になる。自分は決して発情しまいとするが、看護婦は無情に僕の意志を挫いてしまう。逃げようと身を引くと、ぴしりと彼女の平手打ちがほおをなぐる。ぐいと彼女の手に力が入り、苦痛もなく、去勢は完了された。僕は、失なわれてしまった性の楽しみが、いまはこの見ず知らずの外国女性の指先でふるえているのを見る。血が抜けてゆくのか、頭がくらくらして来る。……僕の頭は、こんな物語りを考えながら、心の底では、僕を去勢するために現われる目もと

の涼しい異国の女性をまち望むのである。おかしい。たしかに、考えるべきではないことも知れぬ。意を決して、この横暴な米国の支配に対抗すべきなのかも知れぬ。或いは、軍がひそかにかくした兵器で、彼女たちをなぎたおすべきかも知れぬ。だが、一方で、僕の心の中には、そんな勿体ないことは出来ない、という考えがあるのである。”

一九四〇年、瓦礫の中に豊富な物資とおびただしい兵器、航空機、自動車をもって上陸して来た、この国に取っては最初の外国兵を迎えて、人々の考えは千々に乱れた。或る人々は渴望し、或る人々は恨みを千載に残して自殺した。また多くの人々は、無為に毎日をすごしていた。だれもが、どうなつてゆくのか、どうすべきかを知らなかった。多くの知識人の頭の中でさえ、空想はその翼をうしなっていた。八月九月と、天を覆うものさえ持たない我々にとって、有史以来の酷暑と思われる夏の日がつづいた。草や木が、かつての勝利の日々に感動を示さなかったように、いまもまた無表情に風にそよいでいた。あの意味では、それらのみが、心なきもののみが、あくまで生を享樂していたのかも知れなかった。

その混乱と、疲弊の中で、彼はたくましく

想像する。

“去勢はしないらしい、だがかれらのクラブでは、日本人の女性によるエロシヨウをやっているらしい。女たちは丸裸で腰をくねらせて踊らされるのだそうだ。

時々、女の兵隊まで見に来ているそうである。そんな時はいっそう、はずかしい思いをするそうである。女の兵隊の中には、遠くから大声で叫び、笑いこけるものもいるそうである。

中には、サジストもいるかも知れぬ。かれらは、きつと一八〇〇年当時の奴隷を使った遊びを思い出しているだろう。男女の交合を見せ物にするという趣向は、支那や欧米では古い歴史を持っているという。ローマ時代でさえ、一度に三十組の男女奴隷にさまざまな姿で交合せ、かれらの淫猥なうめきをききながら、時々鞭を与えつつ、飲食を楽しんだという。いまは、もっと人間が気取りを失っている時代である。だからきつとかれらは、もっとひどいことをさせるに違いない。

一方では、女のお伽をさせる男を募集しているそうである。女たちにいろいろと試されたのち、大体五、六人の女が一人の男を共有するそうである。男達はフクロを切取られ、連



日のように女の前で自慰をさせられ、ついには血のようなものが出るようになるまで続けさせられる。

そのあげく、固型化する薬液を注射されてしまふ。もう快感も何もないはずだが、やはり日がたつと、いくぶんの快感がよみがえるそうである。

彼女たちは、ゴムホースを鞭の代りに使う。

中には乗馬好きな女が居て、馬用の鞭も使うそうである。たくましい若い男が、全裸にされ、一番みっともない姿のまま、女の手で唸る鞭の命ずるままに、犬のようにチンチンをさせられたり、投げ与えられる食物をはいずって食べたりさせられるのであるから、もう身も心もないであろう。

だが、そんな話をきくと、僕の心はいつもそんな募集を、どこでやっているのかとさがし求めるのである。

何ということであろう。何という恥ずべき想像であろう。だが、僕の本能はふしぎな激しい求心力で、僕の想像力を駆って同じような状景を思い出させるのである。

彼は、こういう記録を数多く残している。実際、彼はそのような目には会わなかった。後になって彼はこうかいている。

「今日、初あて、知り会った米兵と一緒にこれらのクラブにいった。自分がみじめであった。シヨウは、何の変哲もない普通のストリップ・シヨウだった。あまりきれいとはいえない女たちが、煽情的なポーズをとるだけで義理にも、シヨウなどといえるものではないはずだが、それでも拍手喝采するのだった。何本かのカン入りビールで久し振りに酔った僕は、彼に送られて家に戻ったが、もうろうとした頭の中では、時代は大きくずれて、戦前、車で送り迎えされていた高官が微く含んで、帰途につくときのような気分であった。」

時代は大きく変りつつあった。彼自身も変っていった。学校も変わり、考え方も変わった。ただ変わらないのは、彼のひたすらな願望であった。

「初めのうちこういう女郎屋でさえ、まったくの中で事を始めるのはいやだった。僕は何度も電灯をつけるように頼んだ。そのたびに何等かの追銭が必要だった。」

その中に、僕は気付いた。一人の女ではだめなのだということである。

乱交、その野卑な言葉が僕の心をかすめた。しかし、乱交ではなかった。もう一人はただ

見ていればよかった。よかったのではなく、見ているだけでなくてはならなかった。

この方法で実行をつづけているうちに、僕は或る非常に変なことに気付いた。

それはちよつと一般に理解はされない種類のことであった。しかし、こういう記録をとどめておくという事自体が、決して他人に理解してもらうためでない以上、そのこともまた等しく書きのこすべきにちがいない。その変なこと、というのは、実に僕の心理的、肉体的満足が、かならずしも異性の肉体を必要としないということである。

第三者の存在がそこに確認されることによって、自分の昇進度は急激に増大する。実験してみないと気がすすまぬので、僕はある日一人の女に何もせず注視するように命じて、その目の前であらゆる自慰を行った。そのことだけでは、さほど期待したほどの効果はなかったが、その無智な女が、「変なひとね、あんた」と、呟いた瞬間、僕は絶頂感が津波のようにおし寄せるのを感じた。

これが、倒錯というもののなのか。これが変態というもののなのか。もし、そうだとすれば、もしこれが、人達が唾するように言いすてる倒錯というものなら、僕はその中に沈んでゆ



かねばならない。この甘い、この適度の若さを含んだ甘美は、この世のものとは思えないからであった。このヴィナスのような魅力は麻薬が人を捉えて離さぬように、すでに僕の身体にも心にも洗礼を与えたのだった。”

長い回り路の末に、私達は彼がついに祭壇への扉を押し開こうとするのを知る。彼は屋根裏に近い貧しい娼婦の無智な微笑の中で、いまや、ゆっくりと、しかし力をこめて、もう一つのかくされた世界の窓を開こうとしている。

街の喧騒も、物売りの声も、支那ソバ屋のチャルメラも、すべては消えうせていたに違いない。ここには、きわめて東洋的な思考の系列が、悠然とその永遠を象徴するかのように、静かに、しかも物凄い迫力で彼を包み、彼を押流し、そのふところにかき抱こうとする。

「提示することは獲得することである。排泄は吸血である」

古い、それこそ古い時代に賢人の頭を通った、この人生の叡智は、再び一九四七年の一日本青年の夜に訪れたのである。

彼のつづく記録は、更に読み方によっては神話風の傾向をおびてくる。

“女にも飽きた。何人変えてみても、そこにはわずかに異なる筋肉の収縮度、違った顔、違った声があるだけである。

古語に言う「後宮の美女数十万」は現代には不可能であろうか。”

と書くとき、彼の心ははるかに或る計画を望見している。それは再び東洋風な思考で具体化し、色彩的な実行々為へと彼をかり立ててゆく。

“古い婦人靴はリング箱に、一杯で何と二千円であった。

僕はそれを磨き、美しく並べた。自分は床に伏して、ぐるりと見まわすと、その二十六足の婦人靴はまるで、生きた女性がいいてでもいるかのように、かすかに動くではないかと思わせるのだった。”

ここに、魔法のごとく、彼の新世界が開かれる。それらの生命なき靴はよみがえり、その持主の生命をもって生きる。その持主は、彼の知る限りのすべての女性である。

夜半に近く、靴墨と、古い皮革の臭気は、司祭の揺らす香臭から立ちのぼる香焼にも似ていた。二十六人の美女は、彼を囲繞してかたずをのむ。彼女達のとぎすまされた好奇心が、彼の裸身のすべての部分を刺激する。

彼は思うが故に、彼の後宮を存在させるのである。それは、おそらくはおそるべき精神の集中であろう。それはおびただしいエネルギーの集中であろう。まさしく、それゆえにこそ、数十人の美女はよみがえり、談笑し、身体をゆり動かし、そして声高く笑うのであった。

“僕は手を伸ばして、彼女等の一人の足を掴もうとしてみた。その靴には、何もないはずだった。僕自身何も中につめこまなかったのだから。だが、僕は背筋を硬くし、そこに走る冷たいものを身に泌みて感じていた。

その靴には肉が入っていた。それはだれかによつて「はかれていた」のである。”

この事件は、すぐに解明される。彼自身は入れなくても、売主は、つま先に紙をまるめて入れておいたのであった。しかし、その発見の後にも、依然として彼はこう書く。

“その入れた紙に気付かなかったこと。半無意識にまさしく、誤りなく、その靴に手を伸ばしたこと。これは一体何と説明したらよいのだろう。神意か。偶然か”

彼の露出願望は、このように寝室で創造さ



れた方法によって、更に洗練されていった。彼はこの他にもいろいろな方法で自分を試した。事実、公衆の中での露呈行為そのものをも体験した。その後には彼は、自信を以ってこう書いている。

“実際の生きた女は僕に満足を与えないようだ。彼等は単なる肉ばさみにすぎぬ”

今夜もまた、彼は妻子の想像を絶するひそやかな美女との逢う瀬を楽しんでいるに違いない。彼の眠れる美女群は、彼の命令一下むくむくとおき上り、一斉に彼の方へ歩み

## 見たもの聞いたもの



胸の魅力から足の魅力へ——というのが今秋のパリ・コレクションの特徴だという。そ

より、憧憬と魅惑とをもって彼を見守るのである。時代は変わり、かつて彼の夢想した血なまぐさい米国は姿を消した。街にはベントとロールスロイスがうつらなっている。人々はうまき酒を求めて、街をさまよう。一九三六年私達の、幼い希望をあえなく潰したオリンピックが、無理矢理強行されようとしている。人々は平和に酔い、そして明日を忘れていく。去勢への怖れに出發した彼の夢想は、いまや人々とは離れて、豪華な平和をむさぼっている。

れほど今度は“足”の美しさを強調することに工夫をこらした作品が多数出品されていたようだ。その代表的なものがパンツとストッキングであるという。

パンツと言ってもスラックスという感じのもの、またスポーティなものだけにかぎらずイブニング・ドレスにまで、それが取入れられているというから、熱の入れ方はさっしがつこう。いっぽうストッキングは、ここ一、二年流行したブーツに代る登場で、ジャージー、漁網のようなネット、ツイードなどさまざまな布を用い、中にはセーターとお揃いの模様づけまで見られたとか。

現代マゾヒズム文化時評（本誌三九年五月

“若し、僕が後宮の美女にひまをやらうと思う日が来るとしたら。”

彼は、つかれたごとくそう書く、  
“きっと、何人かは悲しむにちがいない。”

夢の楼閣は、それが不完全であるうちは、有体の物の前に光りを失う。しかし、一旦、それが完成されたとき、そのシステムは、有体の力をひしぎ、九天の空高く、強固なその実体をそびえさせるものである。

号）で、森下先生がとりあげたデザイナー、カルダン氏の店でモデルのひとりとして活躍した松本弘子女史の語るところによれば、洋服を着かえる時間はなんと四十秒。お化粧を直す余裕はなく、そのうえ今年の夏はパリもすごい暑さで、アイラインは汗で流れ、狸みたいな顔でステージに出るから観客は「かわいそうに」と同情の声だったとか。はなやかなパリ・モードの裏にチョッピリSムードが感じられる。

なおモデルもトランジスタが大もてで、十四歳の少女を出演させた店があったとか。大きいモデルは“馬”と陰口をたたかれたとは興味ある話だ。（省）



(前号まで)

# ゴルドンの記憶

②

阿麻哲郎  
江淵晃夫・絵



▼わたし（阿麻哲郎）は航海士上島氏を通じ、美しい女予言者サレアを、その日本公演中に知る。上島氏はゴルドンの古文書をわたしにあずけ出航したが、航海途上で煙のように消え、またゴルドンの古文書の本当の持ち主相馬博士に会う寸前、博士は行方不明となり餓死体が発見される。

▼以前上島氏に案内された新宿のバー・エテルナに博士の怪死事件とのつながりをかぎつけ、流しの男に探りを頼んだが、男はかえってホステスのとりことなり九州の山中で変死体となり発見される。こうしてゴルドンの古文書をあずかったために、わたしは事件にまき込まれ、しかも古文書を何者かに持ち去られる。

▼その犯人とおぼしき女性と偶然に出会い尾行したところ

ろ女はアフリカ学術調査隊、西司郎の留守宅に入る。そこで有尾人とナゾの女を目撃し、前二つの殺人は女性による犯行ではないかと考える坂崎警部を伴い、翌朝ふみ込んだが無人家となっている。そのころエテルナの常連小林春吾がたまたまホステスたちに拉致される。

▼事件のカギと見られるクロレラ、相馬博士の胃袋から発見されたKB物質について研究者中村教授は、恐しい反世界へ入るカギではないかと推察を下す。また上島氏夫人美美子のまわりにもナゾめいたものが漂っている。九州の山奥で下半身ゴリラ男に変ほうした小林春吾が助けだされたが記憶喪失である。そして西司郎の行方不明という新しい情報のさなかに、秘密裏に中村教授が作りだしたKB物質を飲み、阿麻哲郎は反世界へはいる。



## 豆ゴリラの正体

薄いヴェールが一枚一枚すべり落ちて、ようやく何やらの輪郭が明瞭に浮かび上がるうとしていた。思いもかけない形が、はっきりと浮かび出るのであった。

中村教授は、わたしの持参した古めかしいキューバの地図を描き込んである獣皮紙を手にする、とたんに目を輝かした。

「君、これをどうして手に入れた？」

例のヒョウヒョウとした、すっとほけた風情は見られなかった。せっかちに勢こんで、息をゼイゼイはずませていた。

わたしはつい、そこでうそをついてしまった。

「それが不思議なんです。自分でも全くわけがわからないです。いつのまにか、これがポケットにはいつていたんです」

教授には悪いと思いながら、つい本当の心当たりのことについては、言いそびれてしまった。それを言うと、当然、芙美子とゴリラ男のことについて触れねばならない、そのことがちゅうちょされるのであった。芙美子をかばい立てする気持ちから、抜けられなかった。

「知らぬ間にポケットにはいつていたんだっ

て？ おかしなこともあるもんじゃな」

中村教授は、それ以上深くは尋ねなかった。ただ、もう夢中になって、獣皮紙に見入っていた。

「ちょっと待ってくれよ」

そう言いながら、いったん奥へ行つて、部厚いノート類を一束かかえ出してきた。

教授は、ノートと首つびきで、獣皮紙を、ト見、コウ見して、没頭した。

「おい、阿麻君、こりや、大変じゃぞ、上島君がこの世にもどつてきとるんじゃ」

突然叫び出すように中村教授は言った。まるでアワを吹かんばかりの興奮振りだった。わたしは、そのことを聞いても、今さら驚くこともなかった。一つのカンで、既にそのことを推察していたからであった。

しかし、中村教授にしてみれば、相手がこの驚くべき事実、あまり反応を示さないのが、物足りないらしく、ひざを乗り出して、せっかちに言った。

「上島君は、ゴリラ男になっちよるんじゃ。そして君、何と、細君の芙美子さんのところに居るといふんじゃ」

「ゴリラ男になって、芙美子さんのところにですって？」

教授から断定されると、さすがにわたしも

あわてざるを得なかった。自分のカンがあまりに適中しすぎて、そのことにあわてたのであった。

「そんな皮肉なことがあるでしょうか。まさかと思えますね。第一、いくらゴリラ男に変わっていたとしても、芙美子さんがあんなに愛していたご主人ですもの。わからないはずがありません。どこかにご主人の感じつてものが、あるはずですよ」

何かムキになって芙美子をかばおうとする気持ちが押えられなかった。

「そう言ったってな、君。ここにこうして書いてあるじゃけに。いたずらにしては手がこみすぎてる。信じる以外手がなかじやないかな」

意地悪な目付きで教授は言った。

教授の説明によると、それは古く、南太平洋諸島間に伝わる古代土語による文字で、それを読み解くと、そうなるというのであった。

「こんなむずかしい、奇怪な文字を読み書きできるものが、今の日本に幾人いるじやろ。これは、不遇の死を遂げられた相馬博士以外には、このわしをおいてほかには居ないはずじゃ。まちがいやいたずらでできることじやなか」

教授の目がキラキラ光った。



「しかし、なんじゃな。皮肉なことをやるもんじゃな。ゴリラ男になって芙美子さんのところとはな」

中村教授はにが笑いを浮かべたが、わたしにしてみるとそれほどではなかった。大変なショックだった。芙美子さんはこのことを知っているのだろうか。まさか、知るはずはない、そう思うはかなかった。

サレアからおくられた豆ゴリラ男が、夫の上島氏であると、どうして考え及ぶことができたであろうか。知らぬとは言いがた、芙美子は今では、ゴリラ男を全くの愛玩物、というよりは、玩弄物にしきっていた。

そこまで徹底した関係にあると、わたしは知らなかったが、それにしても、あの豆ゴリラ男が、実はあなたの夫です、と、教えてやる勇氣はどうてい出そうになかった。

わたしが芙美子を愛する気持ちと、彼女に疑惑を感じる気持ちとは矛盾しなかった。それは車の両輪のように、互いにつながり深まった。

上島芙美子は、その夜ベッドの上で目を覚ました。まだ夜中であつた。顔を向けるとベッドの下に、ゴリラ男がまるくなってうずくまっているのが見えた。

小声で、

「おしっこ」

と声をかけた。

ゴリラ男は反射的にハッと身を起こし、ベッドのすそに寄つた。床に引きずる尾っぽが緊張のためビリビリふるえていた。

芙美子はからだをずらし、ベッドのすそに両足が垂れるあたりまでさがつた。パジャマのすそがはだけていた。

その両足の間に、ゴリラ男は下からもぐつて顔を出した。

「いつも言うようだけど、こぼしちゃダメよ」下腹部の緊張がほどけ、心地よい放尿の快感が彼女の心を安らかにした。

「どうやらこぼさなくて済んだようね。次第にうまくなるようね」

そういつて、芙美子は短く笑つた。この便利さが不意に、とってもおかしなことに思えたからである。

その時不意に、例の忘我状態が訪れた。自分が自分でなくなる瞬間であつた。

彼女は、スツクとベッドの上に立ち上がった。その時、彼女の全体の印象が、突然のように一変した。神々しいまでの、強烈な美しさが一つの雰囲気として、一枚の膜のように彼女を包んだ。

その状景を見たとき、ゴリラ男は畏怖したようにコウベを垂れた。

「おお神さま」

低く人間のことばでつぶやいたゴリラ男の様子にも、常と全く違った状態が見られた。月の光が窓からさしこみ、紫色の海底のような、波にゆらく淡い光彩となつてたゆたっていた。

### 箕輪祥子

わたしは人ごみの中で箕輪祥子の後姿を見かけた。よっぽど声をかけようかと思つた。ところが、妙なひっかかりでそれを思い止まつた。いつも彼女を見るととき感ずる、いつかどこかで見たようなといった、あのもやもやとした印象からであつた。

彼女は山手線に乗って代々木で降りた。そして広い通りを、坂道のほうへ降りていった。それが邸町の細い小路に来て思い出した。そこはいつぞやの事件のときの、西司郎教授の留守宅があるあたりの一画だつた。

そして長い間、思いつかないままにいた、箕輪祥子に関するひっかかりも瞬間に氷解した。

「そうだ、そうだったのか！」  
その意外さと、今まで気づかなかったウカ



ツさが、大変くやまれて、自分ながらおろかしく思われたのであった。

箕輪祥子は案の定、西司郎宅にはいなかった。

門の内側に竹やぶなぞが見える土塀に冠木門の古風な家——アフリカに學術調査隊の隊長として渡ったはずの、しかもそのまま行方がしれなくなった京大の西教授の家であった。

門の表札に、行書体で「西司郎」とあった。

坂崎警部を陣頭に、怪しい女と、赤レンガ造りの中でリンチに会っていたゴリラ男とのナゾを突きとめるため、急ぎよ乗りこんだ時はすべてが終わったあとであった。家も小屋も無人のまま異常はなかった。もちろん、ゴリラ男も女たちも居るはずはなかった。警察では半信半疑であった。それをご注進に及んだ阿麻哲郎の、何かの錯覚ではないかと不審のテイであった。

それでも、事情が事情のタメ、時々は所轄署から見回りの署員が派遣されたり、また、西司郎の所在があいまいで、その行方が疑問視されたとき、一時は特別の調査班が、家宅の徹底的な再調査を行なったが、その後は、ずっと無人のまま放置されていたのであった。

箕輪祥子は、その西司郎の家に姿を消した。彼女が、ゴルドンの伝説にからまる古文書を、わたしの下宿先からだまし取っていった女だった。

くぐり戸に手をやると、戸は何の雑作もなくあいた。わたしは思いきって内側へ踏みこんだ。足下の玉砂利がザクリとなった。その音を避けるため前栽の植込みの間をくぐっていった。

この潜行のようすは、全くこの前の時と同じ状態であった。

和洋折衷の三十坪ほどの無人の家を、わたしは大胆に庭先から一巡した。

樹間に例の赤レンガ造りの小屋が建っていた。箕輪祥子は、確実にこの中にいるはずであった。鉄輪の取手がついている頑丈なとびらをそっと押してみた。かすかにきしってとびらは内側へ開いた。中は暗く、家畜小屋のようなおいがした。全くこの前のときと同じ状態であった。わたしは緊張しながら、足さぐりで進んでいった。すぐ間仕切りの壁にぶつかった。

通気孔みたいな小窓から、この前わたしは異様な光景を見せられたのであった。ひとりが箕輪祥子で、彼女がムチを手に、ゴリラ男

を責めているところであった。それにもうひとり、声だけは聞こえるが、姿がその小窓からはよく見えぬ位置に、別の女が居て指示を下していた。おごそかな、権威を持った命令口調であった。

今回もわたしは、その時と全く同じ状景が壁の内部で展開されているような気がした。わずかにふるえながら、そっと内部をうかがった。この前のときは、内部には明かりがあったが、今回は薄暗いままだった。そしてそこには、なんら人の気配はなかった。

わたしは中仕切りの戸を開いて中へはいった。へやの内部には何の異常もなかった。有尾人のゴリラ男はもちろん、箕輪祥子の姿はなかった。かつて一〇番への急報で今井、中園の両警察官が調べた時のまま、カビくさいにおいがムツともっているだけで、異常はなかった。

不思議だった。箕輪祥子はどこへ消えてしまったのか。彼女はほかのどこにも行くはずはなかった。この内部以外のどこへ行ったというのだ。

わたしは子細に内部を見て歩いた。薄暗いとはいっても、大体の様子はわかった。暗い隅々を見るには、マッチを何本かつけること



で目的は達せた。うず高い反古の山と、ボロボロの書類や書籍のたぐいを見ただけであった。これ以上捜すところもなかった。

わたしはあきらめて帰りかけようとしたとき、床の上に小さなサカズキが一つ、水をたたえて置いてあるのに気がついた。よく蹴とばさずにいたものと、思いながら腰をかがめた。

サカズキの水面が光って見えた。怪しい澄明さで、のぞくとサカズキの底に砂粒が一つ二つ、コロコロとした感じに見えた。フット魅入られたような、一種の酩酊状態を味わった。と、瞬間、わたしはいつのまにか、全然違った、別の場所に立っていた。

そこは、既に西司郎宅の小屋の内部ではなく、どこか山深い森林の中であった。

「今日は四名しか居らんのか。箕輪君はどうした」

中村教授は、やせた背に両腕を回して背後に手を組み、コツコツと実験室の中を歩き回っていた。

教授の研究班員は箕輪祥子を初め、女子学生五名が全員だ。五名はよく歩調がそろって一名でも欠けることは、今までほとんどなかった。ところが、小沢麗子の顔はあったが、

肝心のリーダー格の箕輪祥子の姿が見受けられなかった。

「どうしたんでしょう。風邪でもひいたのかしら」

小沢麗子もげげんそうだった。だれもが箕輪祥子の欠席の理由を知らなかった。

「まあ、いいからみんな、そこにすわんなさい」

もうそういうとき、教授は例のすつとほけた、ヒョウヒョウたる風ほうにもどっていた。

一同は、箕輪祥子のことを、そう深く気にはしなかった。

「ところで」

と、机を前に教授は背を丸めてアゴを突き出した。

「みんなの協力で、KB物質の抽出に成功、いよいよ事件の解決も目前に迫ってきたんじゃないが——」

せき払いをして、テレクさそうな笑いになった。

「困ったことにはな、ちょっとときまりが悪いが、言わにやなるまい」

もう一度せき払いをした。

「実験がくせになって、わしは麻薬患者のようにな、おしっこを絶やすことができなくなつたんじゃない」

沈黙があったが、やがてクスクスと笑う女子学生たちのしのび笑いが起こった。

「でも愉快だわ」

言ったのは小沢麗子だが、その意味がすぐに一座に行き渡って、奇妙に上気したような上ずった雰囲気は産まれた。

## ゴルドネス

わたしはそこがどこだか、皆目わからなかった。深い森があり、近くに瀬音が高く聞こえた。

下草は露に濡れ、ズボンのすそはすぐにその露のため、しめった。下草は深く道もなかった。午前か午後か、もう時間の観念もなかった。いちおう元の場所に目印の高い棒を立て、ともかく瀬音のする谷のほうへ降りていった。

顔や手足が、小さな傷だらけとなった。すり傷、切り傷と、それでもガムシヤラに降りて行くと、やっと沢のふちへ出た。

けわしく、そして美しい沢に、水が澄明におどるようにして走っていた。

「いったいここは、どこなんだ」

思いながら必死に何かの手がかりを得ようと、あたりを見回したとき、どういうギョウコウか、釣りをする少年が、岩伝いに沢をこ





ちらへ上ってくるのに出会った。

服はドロまみれ、顔や手足は傷だらけ——少年はびっくりした表情で一時サオを、溪流に手放しかけた位であったが、やっとおちついて、

「おじさん、遭難でもしたの」

と心配げに、無邪気に問いかけてきた。

そこでわたしはむずかしい顔をしながら、

「いや、そんなわけでもないが、それよりきみ、この川はなんだい」

少年はげんそうに、

「知らないの。この川、杖立川じゃないか」

「杖立川！」

口にして思い出した。小林春吾が半分ゴリラ男にされかけて、炭焼の河津倉蔵に助けられたところである。

まだある。一年以上も前、流しの男が変死体となって発見されたのもここだった。

瞬間にめぐる回り燈籠のように、すべてがあわただしく回った。

わたしはこの地がどこだかわかると、思いついたように、すぐ今度は元来たヤブを登り始めた。最初の場所にもどるためであった。

「おじさん、どこ行くんか」

少年の声に返事もせず、夢中だった。







長い時間がかかったように思われる。そしてやっと元の所にたどりついた。目印に立っておいた、長い棒はそのままだった。

棒を引き抜いたとき、わたしは発見した。小屋の中で見たのと同じサカズキだった。朽葉の下から現われたのであった。不思議なことに、あのときと同じように、水が張ってあった。こぼれることもなく澄んでいた。その底に光る砂粒を見つめるうち、わたしはすでに、もうその場には居なかった。

実際、サカズキの水は不思議だった。水であるには違いないのだが、傾けてもこぼれなかった。その底に砂粒があつて、見つめるうち不意とわたしを光のように運び去った。

西司郎宅の小屋の中から、熊本県の阿蘇郡杖立川へ、そして、さらに奥多摩秋川溪谷へと運んだ。

そこは秋川の奥の洞くつの中だった。底は凸凹の岩盤で、それを伝う地下水のしずくに濡れていた。わたしは腹ばいに伏したまま、目の前の意想外な光景に打たれていた。

明かりを中心に、若い女性たちが寄りつどっていた。その中に箕輪祥子の姿がまじっていた。見れば、エテルナのマダムの顔もありルミもキクも、みんな居るではないか。

「KB物質の抽出に、成功したっていうわけ

ね」

マダムの声であった。横顔が凄艶に光って見えた。

「そうね。どうやらみんな、大挙して、われわれの世界に乗りこんでくるようね」

「危険はないかしら——」

「大丈夫よ。おもしろいくらいだわ」

だれともなく何人かで答えた。

「中村教授はどうするの」

またマダムが口を開いた。

「彼、予期したとおり、中毒になったわ。もうおしまいよ。あの中毒は、コカやモヒよか

強いからね」

箕輪祥子の声であった。

「だけど、こっちにとっては、こんな痛快な中毒ってないわね。女性にとっては万々歳だわ」

わたしには、大体のことがこれら一連の会話からわかってきた。

「いよいよサレアの公演が始まるわ」

ルミだった。顔は見えぬが、洞くつの天井に当たって、はね返ってくる複雑な人声の音響のエコウの中から、正確に聞き分けることができるのであった。

「今度の公演に、わたしたち、ゴルドネス様が拝めるかしら」

「まさかね」

「でも、そんなこと、ありそうよ。ゴルドネス様はわたしたちの神さまですもの」

「絶対神だわ」

——ゴルドネス、ゴルドネス、神さま、わたしには、それが何だかは遂にわからなかった。

## サレアの舞台

サレアの公演が始まった。空前絶後の盛況であった。コマ劇場はその前日から、入場を待ちわびる客に二重に取り巻かれた。そして三重、四重とふくれ上がり、ついには、機動隊の出動で整理をせねばならないほどとなった。観衆は何も知らなかった。しかし、何かが起こることを予感していた。

二階正面の報道関係者席は、もちろん記者やカメラマンでいっぱいだった。開演前の一時は、なかなかぎやかなものであった。

「世の中は、今や宇宙時代であるというのにまだまだナゾは多いね。いや、いっそうナゾは深まる一方、サレアがそれだ。廿一世紀の奇蹟ってやつかね」

頭のはげた、相当年ばいの新聞記者だったが、年がいてもない興奮しきった調子でしゃべりたてていた。





「不思議な事件が多すぎたからな。相馬事件以後、何も解決しておらんからな。これとサレアとがどんな関係にあるか、当局では、ちゃんと目星をつけてるらしいんだ」

原稿紙に鉛筆で、何やらなぐり書きしながら若いほうの記者が答えた。

「おい、あそこを見ろよ。お偉方がズラリと来てるぞ」

なるほど、目立たずに両袖に分散はしていたが、舞台に近く、坂崎警部の精かな顔が見られた。八木、長沢刑事も人目をさけるように、一般観客の中にまじっていた。

「おい、スタート」

テレビのほうの係が大きな声でどなった。ストップウオッチの針がコチコチと回って、やがて低いブザーが場内に鳴って、開演であった。

幕の上がるにつれて、軽いタッチでドリーブのコッペリア——これは以前と同じであった。コミックなダンスをまじえ、火の輪の踊りとか、密林の溶岩といったタイトルの、土人の原色的な激しい踊り等、みな以前と同じであった。体戯や曲芸や魔術等々、みな同じであった。

さて、問題はゴリラ男を責めさいなむ、という問題の場面であった。



これも、舞台設定は全く以前と同じであった。まず照明は真紅である。背景はジャングル、曲はコルサコフの組曲シェヘラザード、シンバッドの航海。

いよいよゴリラ男が現われる。それは中肉中背の割にはっ所りしたゴリラ男であった。彼はそれでもたくましく、声をあげてジャングルの夜の神に向かって吠え立てる。

突如音楽がやむ。トロトロと単調なドラムがひびく。すると左右の袖、正面の背景の三方から、黒いトカゲの皮をまとった女たちがいつせいに踊り出てゴリラ男を取り巻く。いっさいが無言のうちに進行する。

狩をする女たちだ。ゴリラはつかまったのだ。

女たちは、地面に低く打ち込んだ杭に、ゴリラ男を縛りつけた。杭は頭の方と、足の方とにある。その二本の杭に、頭と足のそれぞれを縛られ、ゴリラ男は地面に仰向きに固定された。

女たちは、勝利の踊りを踊りながら、高く足拍子をとって、ゴリラ男のからだ中を踏んで回った。

そこに口上がはいった。これも以前のことと同じである。

「皆さん、これからいよいよ特別のお楽しみ

ショウ、ゴリラ男責め殺しの場面に移りますが、これは女性の皆さま方、特別飛び入りの番組でございます。

どうぞ我と思わん勇ましい日本の女性の皆さま。ストレス解消の意味からも、ドシドシご出場なされ、ここにおりますゴリラ男を責めていただきたいのであります。

このゴリラ男は、女性に責められるために生きていけるようなもので、全く不死身なのであります。

だから、踏もうと蹴ろうと、なぐろうと、それはご自由です。ここに道具が一そろい用意されてございます。棒からムチから短剣、槍まで、彼は心臓と頭部以外ならば、どこを突いても斬ってもかかってでございます。血が流れましても、傷はたちどころにいえ、全く元の体力にもどるのでございます。

もし女性の方で、彼を責め殺された方がありましたなら、賞金一千ポンドを呈上させていただきます。

ゴリラ男は人間ではないので殺人罪にはなりません。どうぞご遠慮なく、どしどし勇敢な大和撫子さん方のご出場をお待ちします」

あらかじめわかっていたことはいえ、この口上は、またひとしきり場内の興奮を呼んだ。

「大変な人気ですわね、先生」  
箕輪祥子が、中村教授の耳もとでささやいた。

彼女は何食わぬ顔で、中村教授の付添いとして場内にいた。教授は箕輪祥子の秘密を少しも気付かぬテイで、例のとおりゆうゆうとトボけた表情で、この混雑と興奮の場内を見回していた。

「阿麻君がいないようだが、どうしたんじやろ。あれほど熱心だったサレアの舞台だというのに」

納得のいかぬ面持ちで首を振った。

「先生、わたし出てみようかしら」

不意に箕輪祥子が言った。

「ショウに出るって？」

「そうです。わたしなら、あのゴリラ男を殺せそう——」

ひとみがキラキラ光った。

何か、妖しい残酷心が、火をふく感じだった。

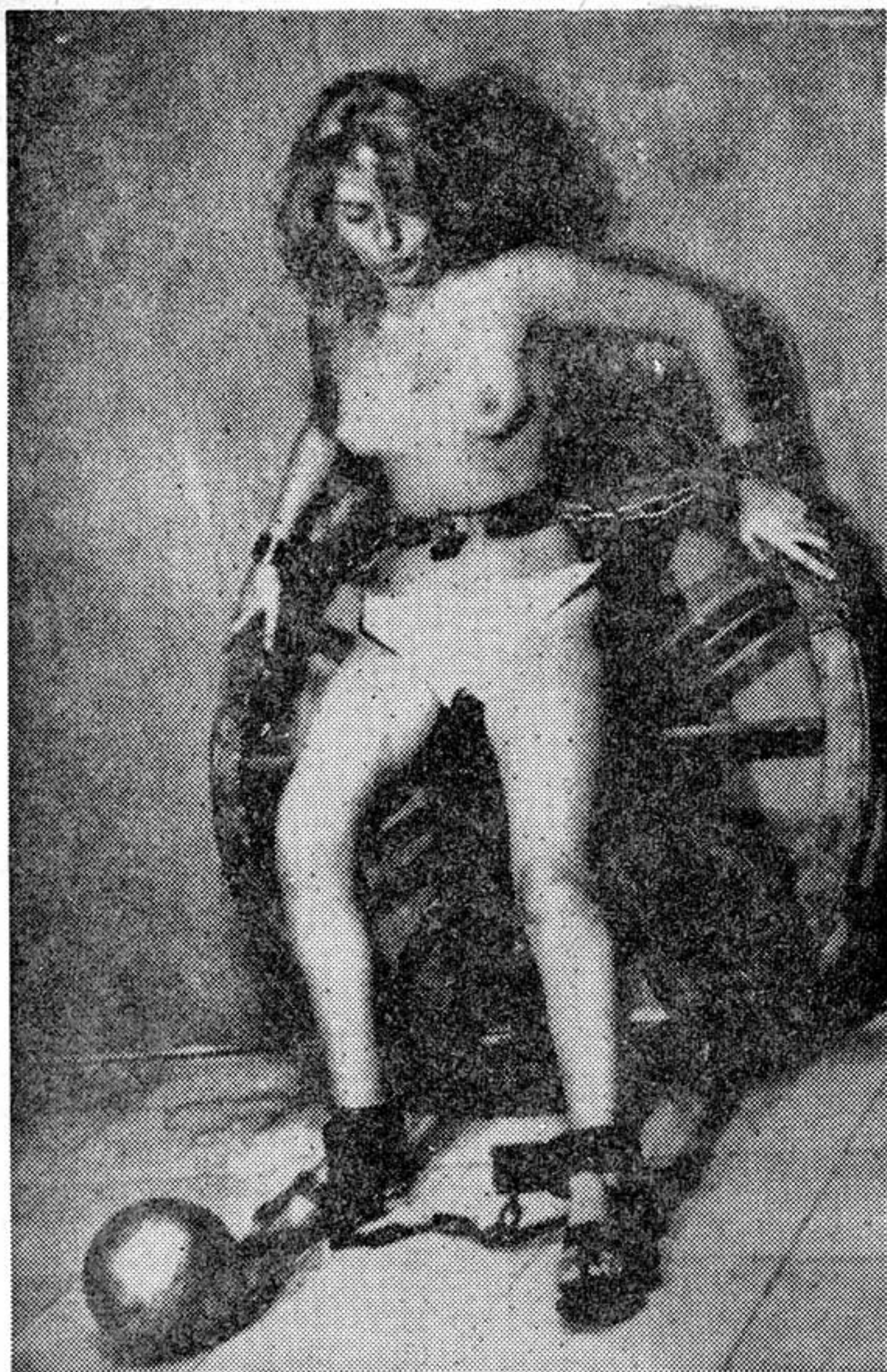
(次号完結)



あるドイツ・フィルム

# 車と踊る美女

写真 西独・フェニクス商会  
文 藤 見 郁



## ① S M イ ズ ム

上映時間わずか二十分ほどの「短編映画」である。

筋というほどの筋はない。一種のショウ映画ともいえよう。そして、このショウ映画をつらぬいているのは、もちろん、世界共通のS M イ ズ ム で、それ以外の何物でもない。

S M プームに便乗しながら、S M イ ズ ム とは似ても似つかぬ（といっては酷か）映画の多いちかごろ、こういう映画は、やはり故郷のように安心して見られる。映像のなかに、安心して溶けこんでいけるのである。

わたしたちにとって、いちばん不愉快なのは、S M イ ズ ム を 獵 奇 的 に ち ら つ か せ な が ら 安易なまねごとに終始している、ちかごろの作品群である。



## ② M 的ムード

さて、このドイツ製の八ミリ映画「車と踊る美女」の女主人公は、まさしく美女で、しかも若々しい肉体をもち、容貌にも姿態にもどこことなくM的な陰影を思わせるムードがただよっていて好ましい。SM映画のヒロインなんて、一応の美人で縛られるのをいとわない女なら、だれでもいいと思われがちだが、けっして、そんなものではない。M的ムードという、複雑でデリケートな体臭をもった女性を採用しないと、ほとんど失敗する。

## ③ S 役とM 役

二人の美女が登場する。一人は手に鎖や手足枷、枷などを重そうに持っている。一人はパンティをつけただけの裸体。この二人が、S役とM役をやる。M役の女は、おとなしく胸に鉄製のベルトをはめられ、錠をかけられる。胸ベルトの両脇からは、鎖がのびていて、左右の手首の錠につながっている。



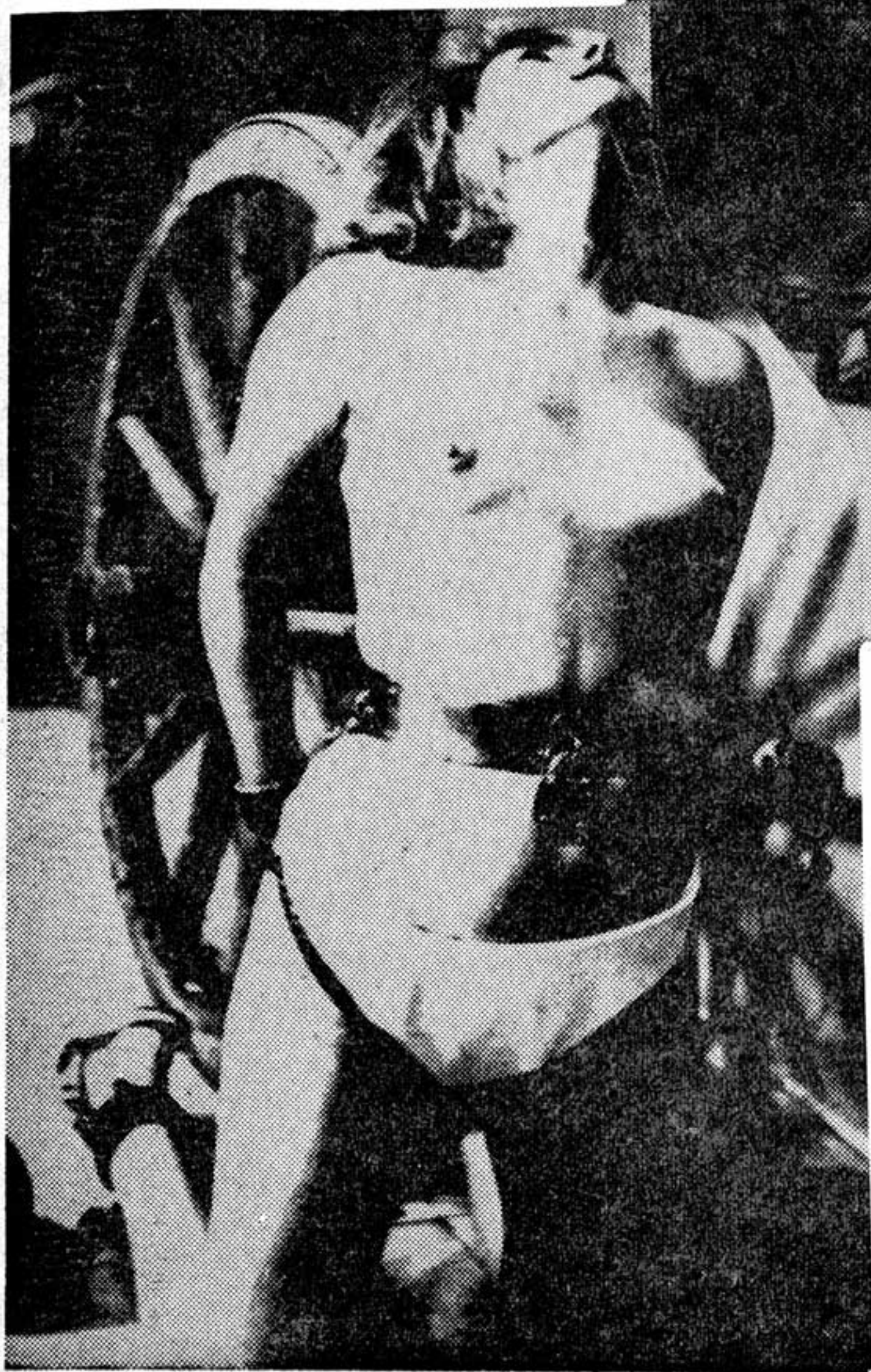
#### ④ 鉄ベルト

鉄のベルトが、腹部の筋肉をしめつけて、それが大写しになるところは、なまなましい圧力を感じさせる。鋼鉄みたいな固いもので肉をしめつける、という感覚は、やはりヨーロッパ的で、わたしども黄色人種には、どうもそれほど感銘はないのだが、それでも、ヒロインの絶望的な苦悩の演技が巧みなのでぞくりとくるものは、たしかにある。



#### ⑤ 車輪

足には足錠、その鎖の先には鉄の丸い玉をくくりつけられたヒロインの、苦悶のおどりがすこしつづくと、またS役の女が現われてM役の女の両手を、車輪の内側にまわして、錠でとめる。ヒロインは、車輪を背にうしろ手に固定された形になり、せつなげな悲鳴の表情になる。無声映画だから、悲鳴は音にでない。声のない苦悶の顔にも、一種異様なM的ムードがある。





## ⑥ 鉄仮面

車輪にうしろ手に固定されて悶えるこのシーンが、いちばん長く、また迫力もある。あごをのけぞらし、胸をねじまげ、両手の鎖を鳴らしての大熱演である。

両足のひざをゆかにつけ、中腰になったままおどり、乳房がぶるんぶるんゆれる。

カメラは、情熱的にけいれんするヒロインの肉体に焦点を合わせて、克明に移動する。

とみるうち、突如として、ヒロインは車輪

から解放されていて、こんどは、鉄のマスクをかぶせられている。

このへんが、劇映画でない悲しさ。なんの起伏も必然も説明もなく、画面は突然変異をおこす。

この鉄のマスクなんてしろものは、どうもわたしども日本人には合わない、と思うのは私だけであろうか。

むろん、一種の枷具にはちがいないのだがせつかくの美女の顔に、こんな不細工な鉄仮面をかぶせるとは！

目は口ほどにものをいい、ということばがあるけど、この殺風景な鉄仮面は、その目までおおっている。

顔に細工をするのなら、やはり布のさるぐつわが、いちばん情緒があって、好ましいと思うのは、私の個人的な趣味にすぎないのだろうか。

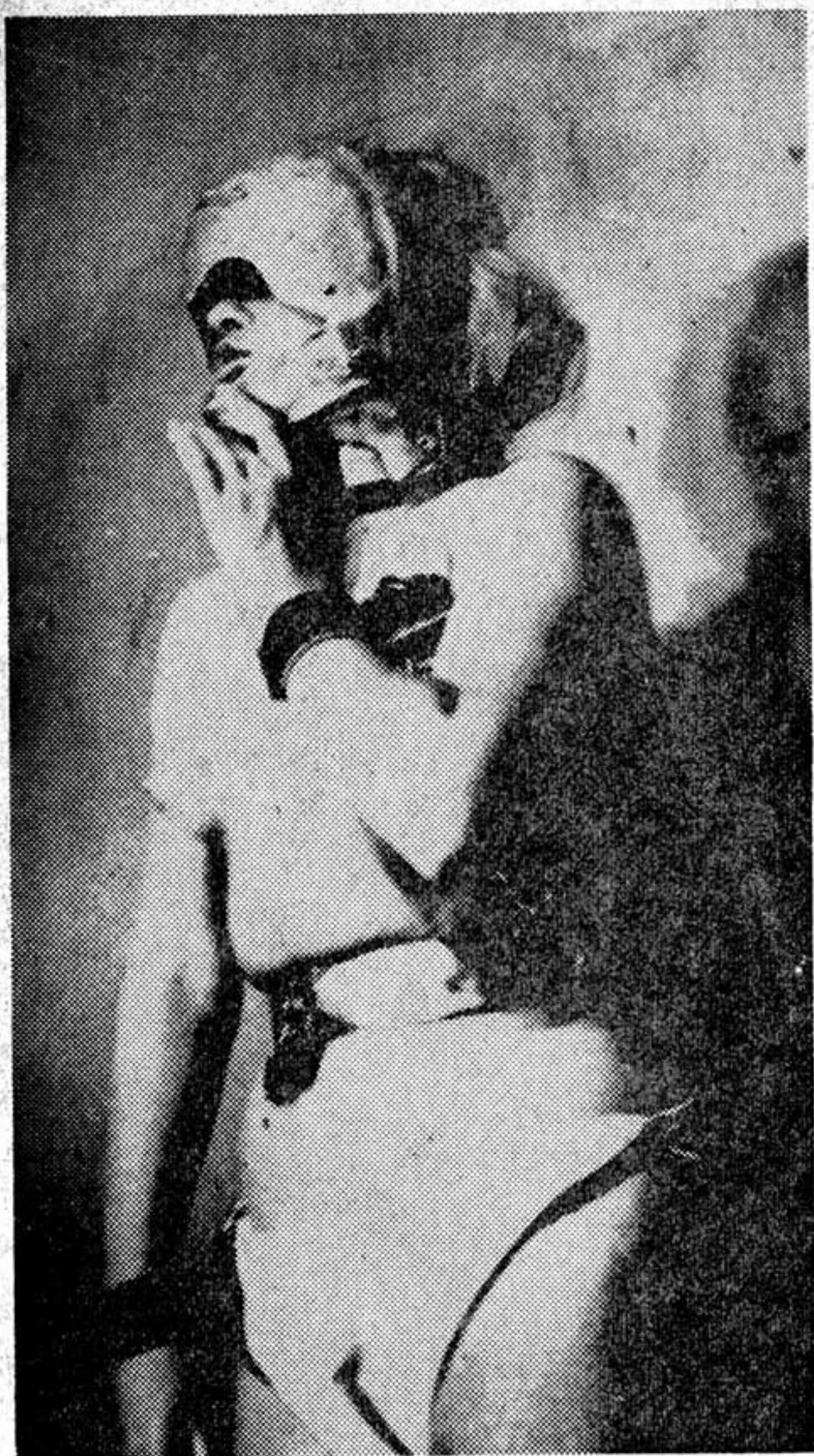
日本には日本の共産主義があるように、SMイズムにも、やはり日本独自のSMイズムがあるようである（とはちとオーバーか）。

日本独自のSMといえば、こういう、いわばクライマックスシーンだけの映画が、アメリカやヨーロッパには、非常に多い。というが、日本では非常にすくない。

日本において、好事家がきわめて個人的に製作されているSM映画には、かならずといっていいほど、ドラマとしてのストーリー、起承転結がある。

そのドラマが、たとえどんなに稚拙な、単純な、通俗的なものにせよ、とにかく、ヒロインがその危機におちいるまでの必然が、準備されているのだ。

これはおもしろい現象だと思う。日本人はいかなる場合においても、詩を忘れず、ドラマを忘れず、情緒、風情というものから脱けきれない。愛すべき国民性だと思う。



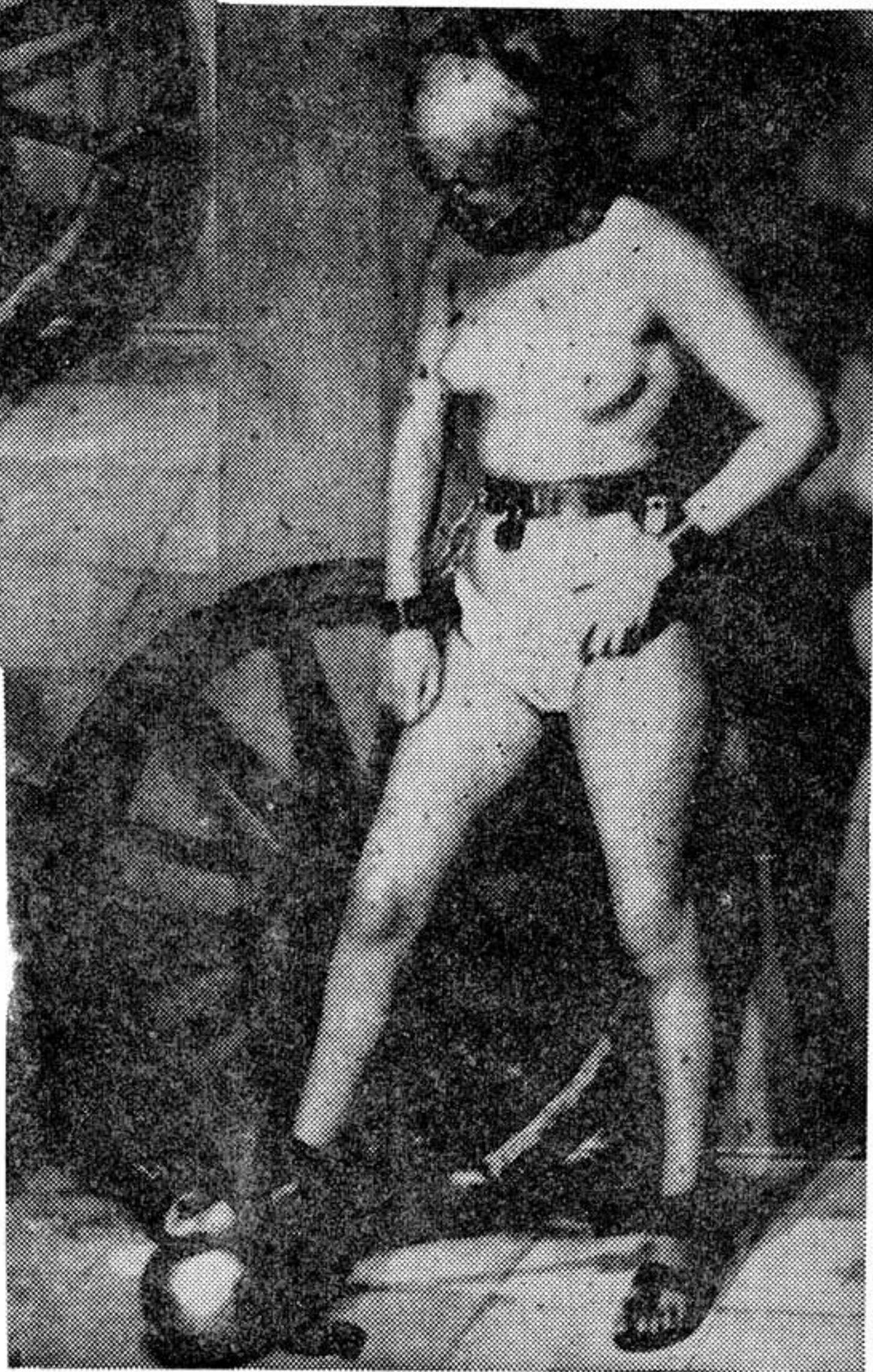
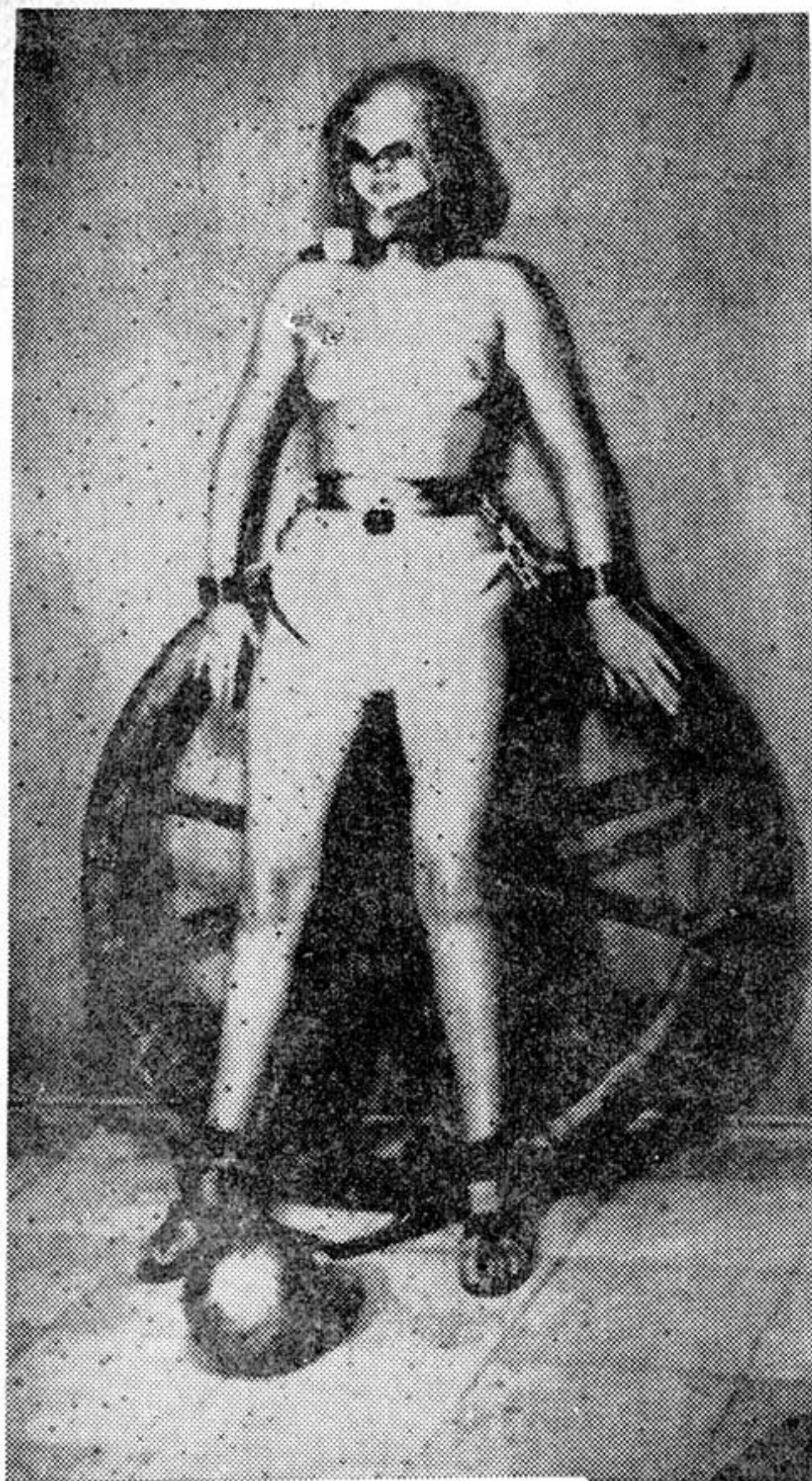


## ⑦ 汗と躍動

鉄仮面をかぶせられた女は、またひとしきり、いろいろと身をくねらせる。

重そうな鉄の玉をひきずって、室内をあるいたりする。そのときの臀部の躍動を、カメラは執拗に、なめるように追いかける。

乳房の谷間に、汗がながれはじめる。女の口が苦しげにひらいて、息がハアハアと吐きだされる。ごろごろと横になってころげまわる。演技と真実のさかいがつかなくなる。



## ⑧ みせてあげたい

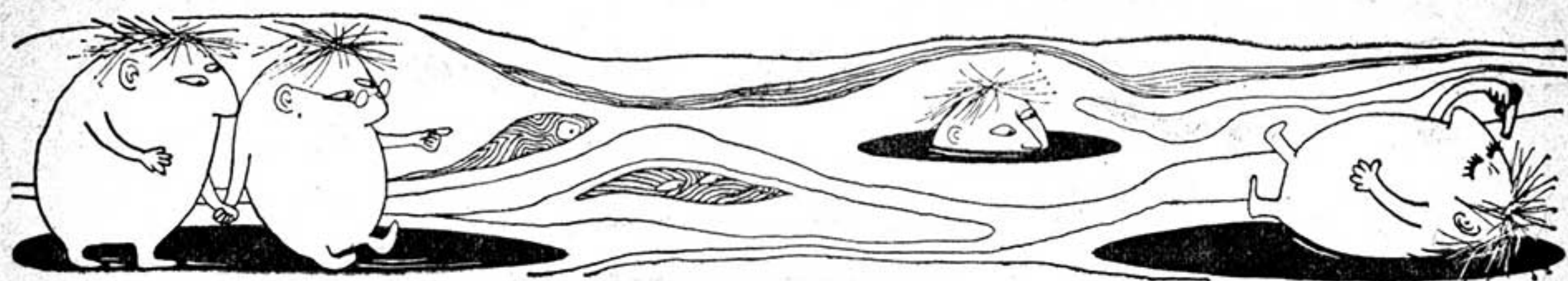
なんののかんのと、いろいろ勝手な批評をのべたが、結局は、おもしろい映画である。ひきあいにはだしては悪いのだが「白日夢」なんぞよりは、よっぽどおもしろいのである。

そして、こういう映画を、本誌の読者にみせてあげたいと、いつも思うように、見終えたあとで、また思うのである。ひとりだけみるのは、もったいないと思うのである。









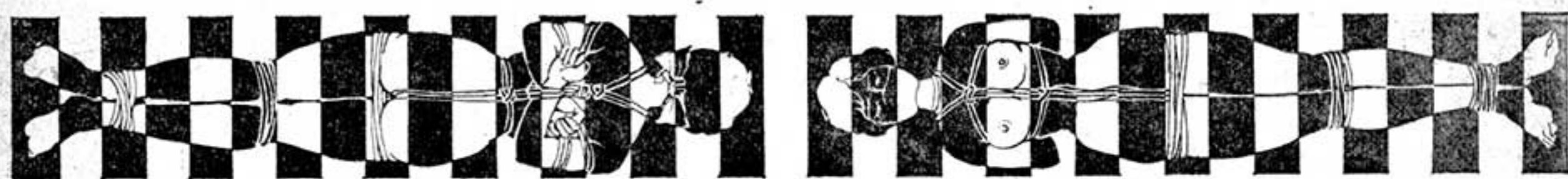
★ 裏窓既刊号総目録 ★

|          |         |              |            |          |            |            |            |
|----------|---------|--------------|------------|----------|------------|------------|------------|
| ○<br>〃   | 四月号     | 淫祠邪教特集号      | 価一二〇円 千一八円 | ●<br>〃   | 五月号        | 天変三日月秘文特集号 | 価一二〇円 千一八円 |
| ○<br>〃   | 三月号     | 伝奇小説特集号      | 価一二〇円 千一八円 | ○<br>〃   | 六月号        | あぶちつく小説特集号 | 価一二〇円 千一八円 |
| ●<br>〃   | 二月号     | ぜんぶ売り切れました   |            | ●<br>〃   | 七月号        | あぶちつく小説特集号 | 価一二〇円 千一八円 |
| ○三五一年一月号 | 陶酔小説特集号 | 価一二〇円 千一八円   | ●<br>〃     | 八月号      | ぜんぶ売り切れました |            |            |
| ○<br>〃   | 十月号     | あぶちつくすとおりい特集 | 価一二〇円 千一八円 | ●<br>〃   | 九月号        | ぜんぶ売り切れました |            |
| ○<br>〃   | 十一月号    | 倒錯小説特集号      | 価一五〇円 千一八円 | ○三六一年一月号 | 新装判(以下同じ)  |            |            |
| ○<br>〃   | 十二月号    | 妖美小説特集号      | 価一二〇円 千一八円 | ●<br>〃   | 二月号        | ぜんぶ売り切れました |            |
|          |         |              |            | ○<br>〃   | 三月号        | 価一五〇円 千一八円 |            |
|          |         |              |            | ●<br>〃   | 四月号        | ぜんぶ売り切れました |            |
|          |         |              |            | ○<br>〃   | 五月号        |            |            |
|          |         |              |            | ●<br>〃   | 六月号        | 価一五〇円 千一八円 |            |
|          |         |              |            | ●<br>〃   | 七月号        | ぜんぶ売り切れました |            |
|          |         |              |            | ●<br>〃   | 八月号        |            |            |
|          |         |              |            | ●<br>〃   | 九月号        |            |            |
|          |         |              |            | ●<br>〃   | 十月号        |            |            |
|          |         |              |            | ●<br>〃   | 十一月号       |            |            |
|          |         |              |            | ●<br>〃   | 十二月号       |            |            |









## 武智映画について

### さまざまな反響

——「白日夢」につづいて武智鉄二氏が企画・監督した。この恥知らずな題名（注・紅閨夢）が物語るように、製作態度も無責任きわまるもの。セリフもしゃべれないシロウトが画面をウロウロし、料理屋や喫茶店のコマースヤル場面がひんぴんと出、どのような興味でこの映画を見ようとする人にも、くだらなく腹立たしい愚作である。

だが、このような作品にも、ある種の「芸術的価値」を強弁する武智氏には、何をいおうと通じまい。配給会社の松竹に強く訴えたのは、このような作品を配給することは、社会がこれまで映画会社に与えてきた信用、社会と映画会社との「無言の約束」に対する重大な裏切りである、ということだ。（以下略）朝日新聞夕刊「新映画欄」から——。

つづいて、同じく朝日新聞の八

月二十一日付文化欄には、映画評論家岩崎昶氏の「城戸松竹社長への手紙」と題した、まっとうからの批判文をのせている。

「——（前略）紅閨夢を見ている間、私の想像はスクリーンのむこう側にたえずあなたの顔を見ていました。その顔は『白日夢』で何億とかもうけ、『紅閨夢』でまた何億とソロバンをはじいてホクソ笑んでいる満足した企業家の表情を——不思議にも——浮かべてはいません。何か気に染まないような淡いような表情を浮かべています。それは、定年で学校をやめた漢文の先生が、けなげにも（？）ヌードダンサーかコールガールになっただけの娘の働きて、家計をささえてもらっているときの表情です。（略）」

などなどと、武智映画に対する風当たりは、このところ、ますます強い。

ところで、当の武智先生は、「——いろいろな偏見や批判がこの作品に対して向けられているが

この絶対的な大衆支持という現実への分析なしでは、真の評価も批評も成立しないと思う。（略）」

（雑誌「文芸」九月号より）

と、あいかわらず、意気おさかんである。

映画批評家や社会評論家は、顔をしかめて、いろいろ否定的なこトバをのべつらねるが、たしかに一般大衆観客の「声」というものは、あまりわれわれの耳にとどかない。

現実に自分のふところから入場料を払って客席に坐り「白日夢」や「紅閨夢」をみた一般観客と、お金をださなくても、封切り前の映画を、いばって見ることできる先生がたとの断絶は、たしかに存在するようだ。

ところで、ここに「近代映画」という映画ファン雑誌がある。舟木一夫や三田明や西郷輝彦や、吉永小百合や、そういう人気スターの写真が満載された雑誌である。その十月号に「セクシー映画のコーフン度」という記事が掲載さ



# 裏窓タウン

れている。座談会形式になっていて、出席者はどうやら若い映画記者らしいのだが「白日夢」をみた後の、卒直な感想がのべられている。

きわめて体験的な、卒直な発言が多く、お年寄りの先生がたの感じ方とは、だいぶひらきがある。その点に非常な興味をおぼえたので、すこし長いけど、引用させていただきます。

## (前略)

**K子** あたしがショックをカンジたのは、路加奈子が電気コードを両腕にまきつけられて電流を通されるシーン。ゾクゾクしちゃったワ……。

**C** 軽度の電流というのはショックというより快感があるらしい。路加奈子の苦痛と快感の時じつに顔が、女性のセックスのクライマックスの時の表情にそっくりだものね。電気マッサージでオナニーをする時代になったのだから、あのビリビリとするこまかい震動に映画をみている女性の中にはエク

スタシーをカンジるひともいるんじゃないのかね。

**K子** とにかく、自分が責められているような気がしたことだけはたしかよ。

**C** 「紅閨夢」はカラーになったので期待したんだが、白黒で撮った「白日夢」のあのモヤモヤとしたセックス感度はうすらいだね。映画はいい、これは芸術作品だ。

**D** 主演の柳美那もカクゴをしていて、鼻の中に絵具をつめこまれたり、ハダカの全身に油と絵具を塗られるシーンもあるが男の妄想でお風呂の中に沈んでいる柳美那を足でさぐるシーンがある。このシーンには、さすがにハダカも平気な柳美那がネを上げたよ。

**C** しかし、ブルーフィルム（エロ映画）じゃないんだから、「白日夢」だって映倫と審査拒否事件を起しながら、なんとなくパスしている。「紅閨夢」だって同じケースじゃないのかな。

**K子** ただ、このセンまではギリギリ撮ってもいいという限界がは

つきりしてしまったわネ「白日夢」で……。

**C** それも、そのものズバリではダメなんだ。やはり、前後のストーリーに必然性がないと。

**A** 武智鉄二が大胆なセクシー・ムードを撮ったのは、やはり、映画界にカツを入れたことだね。これが五社の大監督では二の足をふんでしまう。だから「白日夢」を見た監督やプロデューサーが「ここまでエロチシズムが表現できるならもっと前にやればよかった」と残念がっていた。

**B** エロと残酷は、江戸時代から興行にも取り入れられて、ガッポリと儲けているのだから……。

**C** ズバリと聞いちゃうけどK子さん、女性でもやはりエロチックなシーンに興味を持つ……。

**K子** そりゃ私たち女性だって、男性と同じ人間じゃないの。だからハッキリいっておくけど、女性だってエロには大へん興味を持っているわ、ただ、そんな顔をしていないだけよ……。





**B** ヌードなんかみてどう……!?

**K子** ちょっとや、そっとのヌードなんてまずへっちゃらよ。だってお風呂屋へ行ったら、みんなオール・ヌードじゃないの。それが意外にほかの女性をカンサツしているのよ、『あの人より、私のお乳リッパだワ』『ウワー、なんてチャミングなからだなんでしょう』なんて心の中でつぶやきながら、鏡の中の自分の肉体にみとれていてる人がほとんどよ。

**C** 女性には自分のハダカを鏡に写して、その美しさにコーコツとするナルシズムというのがあったよ。

**K子** そうなの、だから、まず映画のハダカシーンでも、まずアラ探し。それが、ほぼ完成品に近い美しさだったら、美術品を見るような気持で観賞するってわけ。

**A** なかなかズルイな……。

**K子** だって女性に男性みたいにどんなハダカでもいいってわけにはいかないもの。

**B** なるほど……。

**K子** でもね、女性には同化作用が男性よりズツと強烈ですからネ。

映画のヒロインと自分とをガッチリ一体にさせてしまう芸当なんか朝飯前なのよ。だから、強姦シーンなんか、男の人よりも、もっと身体の奥底で受け止めてしまう傾向があるの。自分が犯かされている気持になるよ。

**C** ある心理学者の説によると、女性の99パーセントは、自分が強姦されたいという欲望をもっているということだね、よろめきの浮気だって同じじゃないかな……。

**K子** だから「赤い殺意」の強姦シーンを見ていると、いつの間にか自分が強姦されているような錯覚にとらわれ、ちよつとしたエクスタシーを感じる人もいるわけなのよ。

**A** それは男性だって逆なことがいえることじゃないかな、中年すぎの男性にきくと、もちろん性経験のベテランなんだが、やはり映画を見ていて強姦シーンがいちばんコーフンするというからね。

**K子** それに男性より、女性のセックスはいんびなところがあるとと思うの。女性のセックスはどうしても受け身だし、待つ、待つ、待つ状態は、裏を返せばいんびな期待っていうことなんだから。

**C** チーツとも知らなかった……。

**K子** いわば、いつも心の、身体の一部に、いんびな期待を抱いているわけだから、映画のセクシームードには弱いのだよ。実は男性よりグリーンと鋭敏な反応をしめすものなのよ。

**B** 犯されたいというのは女性が男性に征服されたいという欲望なんだよねえ。

**K子** どちらかといえば、いじめられたい欲望なのよ。だから「白日夢」のあの変態的なベッド・シーンなんかにはゾクゾクしちゃうのよ。

**D** そうすると、女性にとってもセクシー・ムードは歓迎なわけなんですぬ。

**K子** 充たされぬ欲望を感覚的に充たすことができるということだ



# 裏窓タウン

女性にとってもエロ万才よ。それに、こうした映画は成人向きにきまっているし、テレビと違い子供たちと一緒に見るもんじゃないもの。

——というような次第で、まことに勇敢にして、ホントの発言ばかり。

映画をみてマユをひそめている先生がたが、こんな記事を読まれたら、いっそう、なげかれることだろう。

ホントのことを言ったり書いたりと風あたりのきびしくなる時代に、こういう、どちらかというと、ミーハー映画ファン（ゴメンナサイ）むきの雑誌に、ホントの発言がのるといことは、いささか痛快である。

いろいろ騒がれたが、武智映画そのものは、本誌の読者の目からみたら、どっちにしても、たいしたものではない。本誌のほうがスゴイという意味ではなく、真のSM感覚とは、だいぶ遠い性質の映画だからである。

ともあれ、古今未曾有の興行収入をあげ、コールガールとののしられ、東京都の青少年育成条例の通過に力を貸し（結果的にはそうなってしまった）いろいろとにぎやかな話題をまきちらした映画であった。

（藤見郁）

## 「日本拷問刑罰史」の映画化

新東宝という映画会社は、ごく一般の映画ファンのあいだでは、もう「つぶれた」ということになっているが、製作をしていないだけで、まだ社名はちゃんと残っている。

さて、その新東宝で、こんど、「日本拷問刑罰史」なる映画を企画、製作するという。

原作は、本誌でもおなじみの名和弓雄氏の同名の本。

日本史上にあらわれたさまざまな処刑のありさまを再現しようという、奇想天外な映画である。

まず、戦国時代では、反逆した武将に対する「串刺し」や「ノコ

ギリ引き」の刑。

江戸時代にはいると、キリシタンに対する「木馬責め」「水磔」のほか、白洲で自白強要を目的とした「ムチ打ち責め」や「石抱き責め」。

金沢藩で行なわれたという、罪人をつるして三つに寸断する「三段切り」なんて殺伐なものや、白洲を離れ、老中の許可を得て拷問蔵で行なわれた「つるし責め」や「駿河問い」など。

また、営業方針にそまぬ遊女に加えられた「水責め」や「ぶりぶり」「指切り」などという私刑も登場する。

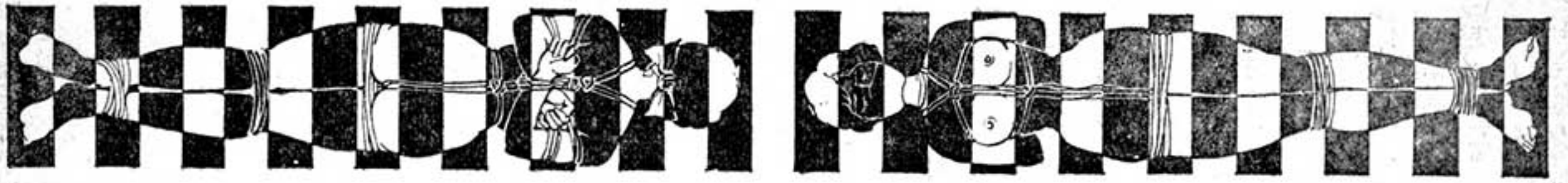
「いっさいの犯罪と残酷な行為と決別する願いをこめて、過去の拷問と刑罰の史実をひもといてみたい」

というのが、製作監督の小森白氏の意図。なるほど、物も言いようである。

シナリオも記録映画ふうに、拷問のさし絵入りで作られている。

映倫の意図を打診するため、審





査前に脚本を提出したところ、絵を見てびっくり仰天した映倫委員が、

「これは、われわれの審査の対象外の作品だ」

と、まったくとりあわなかったという。これと同時に提出した、拷問図を配したポスターも、いっさい使用禁止になった。

そこで製作者側では、とりあげる角度を変えて、改めて映倫の本審査に提出する予定だというが、これは、至極当然なこと。

「白日夢」が大ヒットし、「紅閨夢」も興行成績をあげたからといって、内容になんの救いも詩情もない拷問刑罰史の実録を映画にするなんて話は、いささか狂気じみている。

エログロをやればヒットするか——という考え方の浅さ、無知さかげんも、ここまでくると絶望的である。

なんのドラマも盛りあがりもなく、拷問刑罰ばかりを、めったやたらに見せられて、なんのSM的

感興がわくものか。吐きけをもよおすだけである。

SMイズムというものが、今日どうしてこのように都会人の心理のなかに浸透しているかという人間性が求める本質的なものほかに、やはり、そこには、今日的な美がただよい、詩情が感じられるからである。

美も詩情も感じられないSMはもはや、人間に愛されるSMではないのである。

なにも、こんなに大上段から、拷問刑罰史を撮らなくても、もっとおもしろく、もっと観客によるこぼれ、だれをも納得させ得るSM映画のネタが、本誌の既刊号を二十冊ばかり読めば、いくらでもころがっているのに……。

たとえば、つらい勤めに泣く吉原の遊女の生態をごくリアルに描き、クライマックスにそれこそ念入りの責め場をもってくれば、すくなくとも、生きた人間を三つ切りにする映画よりは、観客にアピールするはずである。

SMをテーマにすることは、エロを扱うよりも、さらにさらにむずかしいという事実を、映画製作者たちは知らなければならぬ。

(松)

## 日活映画

### 「砂の上の植物群」

前号のこの欄でくわしくお知らせしたとおり、吉行淳之介の小説を、池田一朗、加藤彰と共に、中平康監督が脚色。

化粧品店のセールスマン伊木一郎(仲谷昇)は、若死にした父と現在の妻(島崎雪子)の仲をうたぐっているが、妻は頭から受けつけない。

マリントワーの上で知り合った少女(西尾三枝子)と、伊木はかんとんに結ばれ、その少女から、「私の姉をひどい目に合わせて」とたのまれる。

バー「鉄の槌」のホステスをしているその姉京子(稲野和子)はいわゆるマゾヒストで、伊木はしだいに、彼女の肉体におぼれてい



# 裏窓タウン

く。

パウル・クレーの幻想的な絵から与えられるイメージを生かして中平監督はさまざまな表現法を使いわけ、ムードを盛りあげること

に苦心さんたん。

さて、姉の京子にふんする稲野和子は、いかにもバーの女の陰影を身につけた妙に不健康な美人でなるほど、マゾヒストとはこんな感じの女か、と観客を一応カンシンさせる演技をしめす。

シナリオのとおり、三回にわたって「縛って、縛って」とうめき声をあげ、文章で読むほどおかしくはないが、そのかんじんの縛りのシーンが、きわめてあいまいではっきりしない。

製作者側で、先にその部分を切ってしまったのか、それとも映倫で切ってしまったのか、わざとはじめからあいまいにしたのか、どちらにしても、原作もシナリオも読んでいない観客には、このかんじんのシーンが、きわめてわかりにくく出来あがっている。

伊木が旅館の一室で、さきに姉を縛ってねかせておき、そこへ妹をつれていく、というクライマックスシーンで、姉の手足が、ゆかたの紐で縛られているのが、一瞬うつされる。よくはわからないがどうやら逆海老の形に縛られているらしい。

同じそのシーンで、妹がセーラー服の上から荒縄でぐるぐる巻きに縛られているショットが、二度ばかり、伊木の幻覚としてうつされるが、これも二分の一秒ぐらいのみじかさ。目にとめるひまもない。最近の世情に、必要以上におびえているようすが、ありありとうかがわれる。

俳優はみんなうまいのだが、妙にもやもやした、とりとめのない映画で、そういう意味では、原作の味を、巧妙に映像化している。とりわけ笑わせてもくれず、たのしくさせてもくれず、興奮させてもくれず、いらいらしているうちに一時間三十五分が経過してしまふという映画。

SMシーンを目当てにいくファンは、よほど空想力のゆたかな人でないと、失望はまぬかれない。

(豊)

## ニューヨークの 男色お巡りさん

「週刊文春」にこのところ毎号連載している戸川昌子女史の「耳年増艶ピツ」は、かなりきわどい話題を、女史自身の体験と混ぜ合わせながら、達者に書いて、なかなかおもしろく読ませるが、九月七日号の「外国のおまわりさん」なんて項は、アブチック・コントとしても傑作。

A氏というレッキとした会社員が、社用でニューヨークへ行く。(A氏はむろん日本人)ところがこのA氏は男色の大家で、昼間の勤務が終わると、ゲイのたまり場として有名な某地区へ行く。そして、その冒険談は、こんなぐあいになる。

「いる、いる。ずらりといふんだな、ゲイが……。舗道にもいるし





バーにもいる。東京の公園なんかの事務所（公衆トイレ）の比じゃないね。いい躰をしてるのがジーパンなんかを無造作にはいて……それで、ぼくは向うにいた間、毎晩その附近へ目の保養に行きましたがね」

A氏がゴクと唾を飲みこんだのが目に見えるようである。

「それでどうしたの。目の保養だけでなくて、アバンチュールも楽しんだんでしょ、白状なさい。プエルトリコかなんかのいい子を見つけたんでしょ」

「いや、実はね、ぼくが勇躍交渉に入ろうとすると、案内役氏が、その前に一言注意しおくと言うのです」

ほかでもない。アメリカは日本と違って、そのことに関しては宗教上、道徳上、非常にやかましい。特に未成年者をしかじかのことで相手にさせたとなると、体刑とのことである。したがって、特にポリスマンの取締りには気をつけよ。日本でもっぱら未成年の若者

を相手にしているA氏は大いにあわてたとか。アンダー・スタンド。わかったか、よろしい。しからば、ゆけ！

——という次第で、A氏は緊張に体をこわばらせながら広場を横切って行ったのである。そしてベンチのかたわらに立っている氏好みの少年に声をかけた。

「ハロー」。十四、五歳か、金髪で、口のまわりに生毛が光っている。ツーと言えばカー。A氏の流暢な英語が十分に通じたそうである。

さて商談がまとまり、肩を並べて歩こうとすると、なんと後に制服のポリスマンが立っている。こわい顔をして、警棒で掌を叩いているではないか。A氏の躰から血がひいた。先ほど案内氏から言われた言葉が頭にこびりついていく。一瞬、これで彼の生涯はメチャクチャになると思ったそうだが、頭に浮んだのは故国の妻子の幸せそうな顔。

と、いちちはやくA氏の青ざめた

顔をのぞきこみ、心配の種がうしろのポリスマンにあると事情を察した金髪の少年が、

「ドント・ワリー、ミスター（心配したもうな）」

と言ったそう。

「ヒイム、トウ（奴もそうだよ）」  
おわかりですか。くだんのポリス氏もまたゲイだったというのである。

何となく嬉しくなるような話ですね。さすが本場だけの事はある、フム、と感心しているとA氏「ぼくのやはりその方の友人なんですかね、お巡りさんを恋人に持ちたいという悲願を立てているヤツがいるんですよ。交番の前をウロウロしたり、夜中にわざと歩いて不審尋問を受けたがったりしているんですよ、やはり日本ではね……なかなか思うようにはいかないらしいですよ」と嘆いた。

——というコントだが、アメリカにおけるホモの話題のすぐあとに、すかさず日本の実話を継ぎたしてまとめたあたり、戸川昌子女



# 裏窓タウン

史の手腕は、随筆家としても、なみなみならぬものを感じさせる。お巡りさんを恋人に持ちたいという男性は、本当に、かなり実在するのである。

(青)

## あるレスビアン

### 夫婦の悲劇

他人の悲劇を、興味ある、などと書いては、いささか不謹慎だが「週刊現代」九月十日号にでていた「女と女が結婚式を挙げてからの一年間」という記事は、まことにアブノーマルであり、興味ある内容であった。

姫路市内でも指おりの資産家で知られる森田家(注・旅館業、地主)の長女、美沙子さん(27)がその「世にも奇妙な結婚式」をあげたとき、さすがの市民たちも顔を見あわせるだけだった。なかでも彼女が幼いときから「チャン」といって相談をもちかけていた、市内坂元七、キャバレー「白蟻」経営者の堀越安治さん(59)の表情は複雑だった。

「美沙子が結婚したいねん、と、わしに仲人を頼みにきたとき、実際のところ返事に困ったよ。そりゃあ、好きあっていれば結婚しても悪いことはない。が、そのあいだで百合という、歴とした女やから問題や。男装(タキシード)と女装(ウェディング・ドレス)の結婚式は、なんといってもオーバーやからな」

——というのが、この「夫婦関係」の発端で、相手の百合という「花嫁」は二十歳。

二人は、自宅を改造して、ゲイバー「禁だん」をひらく。

レスビアンとゲイバーの組み合わせなんて、まったく事實は小説よりも奇である。ところが二人の「事業」も「結婚」も、わずかに年たらずで崩壊する。

「あの二人の仲が睦まじかったのは、結婚一カ月まで。バーを開いてからは毎晩のように夫婦喧嘩でしたからな。つまり、ヤキモチを妬きあうんですな。ダンナ(注・美沙子さん)の同性愛という性格

は姫路でも有名やから、結構、同病のファンがいて、バーへ遊びにきよる。その連中の相手をダンナがしていると、女房(注・百合さん)が怒りますんや。挙句の果てに百合さんは店を飛びだして、男と浮気して朝帰りする。と、こんどはダンナがカンカンに怒って、とっ組みあいの喧嘩や」(バー「ルドン」のKさん)

——という毎日になってしまうのである。

現在、そのままの粘りつくような状態にあるらしいが、姫路市というのは変わった町で、彼女たちのように、晴れて(?)女同志で夫婦になったカップルが、なんと十二組もあるというからオドロキである。

東京のような大都会でなら、二十組や三十組は、そくさに数えられるのだが。

(青)



## 耽美芸術グラフ第一集

についての

読者からのおたより



▼耽美芸術グラフ第一集、本日入手。なかなかの力作ぞろいで、初秋の一夜を充実して過ごした。オールグラビアというのは、たしかにボリュームがある。いたずらにページ数を増すだけのようないいかげんな絵や写真がないのは、さすがである。緊縛にウソがないのがいい。まず、コレクションに耐え得る一冊だった。落合龍二凄艶画集は、氏の實力を十分に発揮したもので、美少女の哀愁にみちた表情がよろしい。この抒情味と金井行雄氏の凄絶の写真は、他のところでは得がたいものである。沖涉二氏の小品集は、いろいろと

凝ってはいるが、どうも緊縛感にとぼしい。だれかも賞めていたが、中川彩子氏の「吊り蔵」は、最高の責め絵である。(東京・Q生)  
▼「耽美芸術グラフ・第一集」受領しました。本誌九月号で広告を拝見して知りましたが、なにせ千円という高価のため、まずまず誌上で内容をあらかじめ知ってから、などと思っていました。やっぱり手にしてみないと、なにか損したような気分がぬぐいきれず申し込んだ次第ですが、いざ手にとってみて、やっぱり購入してよかったと思いました。「グラフ」に関する感想は、十月号で読者諸氏の言っておられることとおおよそ同意見で、ここであらためてうんぬんする必要ありませんので省略いたしますが、「グラフ・第二集」に対する希望意見を少々。本誌読者コーナーにおいても、しばしば拝見するように、次号には少くとももう十ページ、日本調フォトをとり入れてくださるようお願いしたいと思います。本誌にお

いても言えることで、最近号では本年二月号の「着物シリーズ」に始まり、四月号の金井行雄氏の作品、五月号では「にほんがみ」等で大いに満足しましたが、オフセットページであったのがいかにも残念。「グラフ・第二集」ではぜひともグラビアページに再現していただきたい。その点で、第一集では金井行雄氏の作品だけなのは残念でした。全体を総合してみても、ヌード・ファンにはかっこうの作品と見ましたが、小生のごとき時代もののファンのこともどうかお忘れなく。その他、中川氏の絵も相かわらず迫力あるものですが、せっかくの時代調を背景にしながらヌードであること、女の容貌のバクくささがどうもいけません(逆に考えれば、そのバクくささやヌードが若いファンに魅力なのでしようが)。いろいろ勝手なことを書きましたが、右ご考慮のうえ、「第二集」を刊行されんことをねがいます。(東京・ちゃん助)

▼速達、拝受しました。今回の第一集は小生前々から渴望していたものがようやく実現された思いで愛読者諸兄姉ともども同慶にたえません。久しぶりに見る鬼頭先生の力作や、なんといっても小生を驚喜させたのは、「グラフ」前半を飾る新人モデルのボリュームある素肌に食い入るような縄目の迫力でありました。他に、かつての「裏窓」誌上でおなじみの、谷まりもさんの肉感ゆたかなフォト等なつかしく拝見いたしました。金井行雄先生の作品など、評判のようですが、ヤセッポチのモデルを小生はあまり好みません。フォト(絵にしてもそうですが)では、なんといっても、豊かな素肌の緊縛感ある作品が最高で、その点で今回の「耽美芸術グラフ」は小生をして大いに満足させていただきました。まずは右お礼まで。(神戸市 R・O生)

▼「耽美芸術グラフ・第一集」期待にたがわぬ写真集でした。ここにお礼申しあげます。また貴誌独特のムードあふれる緊縛写真集に



# 耽美芸術グラフ 第一集

定価

千円

送料とも

## 内 容

### ■ 写真集 ■

滝の女・石の部屋  
密室・絶望の風景  
金井行雄作品集・  
さるぐつわ・縄目  
凝固

### ■ 絵画集 ■

落合竜二凄艶画集  
沖渉二特選傑作展  
中川彩子・女奴隷の檻  
中川彩子・吊り蔵  
鬼頭暁時代妖美画集  
羽仁京志傑作選

▼ながいあいだお待ち致しました。洗練されたセンスと伝統を誇る裏窓が、そのスタッフの総力をあげて、ここに、S写真と責め絵を豊富に掲載したグラフを発行致します。  
▼このような写真絵画集の発行は、数年前より愛読者のみなさまからご要望を頂いておりましたが、このたび、ようやく刊行に至った次第であります。  
▼書店では発売いたしません。  
▼厳重に密封して、個人名でお送りいたします。安心しておまかせください。  
▼お申し込みには、住所とお名前のほか、かならず年令を明記してください。▼二十五才未満の方には、お売り致しません。未成年者は、絶対にお申し込みにならないで下さい。  
▼お申し込みは――

東京都中野区松が丘2の21

久保方 藤見 郁

加えて、中川、沖、鬼頭、羽仁、落合諸先生の個性味ある画集は、絵画ファンにとっても見ごたえのある作品集と見うけました。写真ではなんと言っても金井行雄先生のものが最高で、きれいごとでない背景、容赦のない緊縛感等は、他の写真作品とくらべて、まさしく本ものと思われれます。他にも鏡を背景にした作品に非情な緊縛感のあるのを見ましたが、作品の芸術性？がある程度迫力を弱めているように見うけられました。私が思うところ、いったいに金井先生の作品の迫力は、うそのない緊縛もさることながら、ほとんどの作品に見られる猿ぐつわのせいではないかと思うのです。絵画においても同様で、落合先生のカット絵等も注意して見れば、随所に猿ぐつわが見られるはずで、それが、先生の絵のやや弱々しさをおぎなっているのではないのでしょうか。金井先生、落合先生、今後とも一そうのご活躍を期待いたします。

(石川県・NOTO)

▼「耽美芸術グラフ」本日入手いたしました。なにぶんにも千円はちょっと考えさせられました。先月号の読者のお手紙でオールSものということを確認しましたので思い切って申しこんだところ、案にたがわず本誌のように無駄ペーシのないところがまず気に入りました。新人モデルのフォトは、評判どおりの量感で大いにけっこうですが、欲を言えばもう少しムードに合った表情がほしいところでした。私はむしろ「裏窓」本誌でおなじみのモデル嬢諸姉のペーシの方に魅力を感じました。その点では金井行雄氏のフォトが一番で、いかに美人でもアツケラカンと縛られているのはいかにも興奮め、無表情の方がまだ好ましいと思います。絵画作品中では中川氏が最良。  
(愛知・中京生)

■この欄に掲載しました方には、手札型S写真一枚をお送りいたします。



## 顔のない女



### 令 卷 八

ときだったつけ」

加古は暖かく湿った女の掌に唇を持って行  
きながら言った。

「おっしゃらないで——いや」

男の唇が更に首筋の方に伸びてくるのを避  
けながら、千秋は細い声で言った。

「女が男に裸をさらけ出すのには二つの場合  
があるそうだ。女が男に献身的な愛——いや  
奴隷的な愛かな——を捧げているときと、そ  
んな男の眼があろうとなかろうと何の違いも  
ないといったような、全然無関心なときと。  
僕の場合はどっちかな」

この女はおれのものだという安心感がこん  
なことを言わせるのである。

「亭主の方も、よく我慢しているな。もう結  
婚して三年にもなるんだろう」

「あの方はあなたみたいに不良ではありません  
んもの」

千秋は、男の腕の中で身をもがいた。

長い睫毛が影を落としているなめらかな頬  
から白い首すじにかけてはじらいの色が匂い  
たった。くびられた乳房や二の腕の繊細な皮  
膚が縄にこすれてけば立ち、充血しているの  
がいたいたしかった。

不意に加古が腕の力を抜いた。千秋はもが  
いていた力があまって畳の上に仰向けに放り

「君は結婚してからまだ一度も亭主に素肌を  
見せたことがないそうだね」

加古が、後ろ手に縛りあげた千秋を前に置  
いて言った。

白い陶器のような沈んだ輝きをおびた千秋  
の背すじが、乱暴に掛け渡された麻縄の下で  
ピクリと動き、あらわなうなじが加古の方に  
向いた。

「どなたにお聞きになりましたの」

「本人からさ」

揶揄するような口調でそう言うと、加古は



出された恰好で転がった。

あわてて脚を締め、不自由な上体をひねって俯向けになろうと畳の上にもがいている千秋を、男は手をたたいてはやした。

「ようし、今夜は僕のことを死ぬほど好きだと言うまで、いじめ抜いてやる」

そう言つて、加古は麻縄を二本取り出すと腰を深く折つて、尺取り虫のように畳の上をいざつてゐる千秋の足首を別々に縛りつけはじめた。

加古の意図を知つて、千秋は悲鳴をあげ哀願を繰り返した。引きしまった足首に容赦なく縄が喰ひ込んだ。

千秋の膝が、こめた力のためにぶるぶる震えた。

「ああ——」

噛みしめた千秋の唇がほどけて屈服の吐息を吐き出した。

のけぞつていたあごの力が脱け落ちて、頭がぐくりと畳に落ちるのを見て、男はニンマリと笑った。かすかな抵抗が間においては縄に伝つてくる手ごたえを楽しみながら、彼はゆっくりと時間をかけて縄を引きしほつていった。

加古は女をこうするのが好きだ。女が全く自由を奪われて観念している図が好きなの

だ。入念に本縄で縛りあげられた千秋の姿、しなやかに引きしまった素肌の急所々にキツチリと縄目が食い込み、いわば縄でしっかと肉体を包み込まれたような恰好になつて細首をうなだれている千秋の姿を見ると、むしやぶりついていきたいような、いとおしきにつきあげられる。

そんな姿にした上で、あらためて縦縄をかけたり、あぐらをかかせたりすると、彼はもう自分が春風に誘われて空中を浮遊しているような気分になつてしまうのだ。

それが良人に素肌さえ見せたことのない女だと思つと、加古は狂気に近い喜びすら感ずる。和服で街を歩けば誰しも振り返つて見る程の女が、自分にだけはその和服のしとやささをかなぐり捨てて、並の女の決して許さないことまで許し、羞恥の姿を曝すのと思うと男性としての能力を失つた彼でさえ、優越感ではち切れそうになる。

千秋が、なぜ何不自由のない家庭を離れ、善良な良人にそむいて自分だけに自由を許すのか、加古は深く考えて見たことがない。唯その事実がありさえすれば彼のコンプレックスに対する補償として充分なのだった。

加古は、あられもない恰好に縛りあげて畳の上に押し転がした千秋を、手なれた責め道具の羽根で責めた。

「どうしてあの男に肌さえ拝ませてやらないんだい」

「どうして——いやだからです」

千秋は押し拡げられたまま身動きもできない体を精一杯よじつて羽根先を避けながら、とぎれがちに答える。

「男の方は見たがるだろう」

「わたしがいやと言え、それ以上無理強いはしません。——いやつ、よして……そんなこと……」

羽根の微妙な動きに、千秋は胸をあえがせる。羽根が軽やかに触れると、その部分の皮膚がくすぐったさに耐えられないかのようにヒクヒクうごめいて無言の笑いを見せる。

「すると、こんな真似なんか、とてもじゃないが見せられないというわけだな」

「あつ、いや」

一瞬のけぞつて、こらえ切れずにあげる女の悲鳴が、男にはなまめかしい媚態のように思える。

「あの男だつて、こんなふうにして君を叩かせたい筈なんだが、よく黙っているな」

「そ、それは……わたしにかくれて……読んで……読んでいたのよ。ああ、お願いですから、ちょっと待って……」



「いいよ」

「それを、わたし取りあげて捨ててしまったの。それから——」

「それから？」

「すっかりわたしに逆らわなくなっちゃいましたわ。妙におどおどしてしまつて」

「君自身がこんなことしてて、大変な猫っかぶりだな」

「でも——あの人に、そんな本なんかを読んでもらいたくないの。なんだか、わたし自身のこんな恰好を見られていような気がするんです。それがたまらない」

「へえ、そんなものかね」

「ああ、いやです。そこを——そこを触らないで……」

加古は、あられもない呻き声をあげさせながら、妙な女だと思った。

千秋の良人は、加古の友人である。妻が自分に肌を見せないことを告白するほどの親しい友である。それだけではなく、二人は共通のあまり公にできない嗜好を持つ、その道の友でもある。

だから、今千秋から聞き出した良人とのことぐらひは、本人からすでに聞き知っていた。それを知りながら、なお自分に許していることを良人に許さないのはどうしてなのか。こ

の道だけはどうにもならないのかな、と加古は満足感に溺れた。

羽根の動きが激しさを加えてきた。

千秋は絶え間のない攻撃に翻弄されつくしていた。

呻きが一瞬とだえて、白いあごをのけぞらせ、上半身だけは加古から逃がれようとするように身をよじった。加古はそれを引き戻しては、更に新たな攻撃を加えていった。

千秋の肌は、しっとり濡れた輝きを帯びはじめている。

「こんなところを、彼に見せてやりたいよ」返事がない。上を向いてとがっている乳房の谷間の向こうに、のけぞったあごが激しくあえいでいる。

「おい、本当に見せてやろうと思っているんだぜ」

軟体動物のように伸び切っていた千秋の四肢が、強い刺激を受けたように収縮して、白いあごを見せていた頭が男の方を向いた。

「冗談をおっしゃらないで」

まだ熱っぽいうるみを残した眼が、睫毛の陰で光った。

「冗談じゃないさ。このあいだ、本を読んでいて、急に思いついたんだ」

男は真顔だった。千秋は信じられないとい

った面もちで、男の得意げな顔を見上げていた。

「どんなお話なんですの」千秋は抑揚のない声で言った。「でも、その前にこの縄を解いて。こんなじゃ、ゆっくりお聞きできませんわ」

加古は千秋の手足の縄を解いて、話が開けるような姿勢に起こしてやった。

千秋は、脱ぎ捨てられていた着物を肩にはおり、縮めた膝を加古から遠去けるようにして、冷めかけた胸を抱いた。

「なんでも王朝時代のフランスに実際あったことで、かなり有名な話らしいんだ」と前置きして、加古はその話というのを始めた。

当時、パリの宮廷に蕩児の名をほしいままにしている美貌の公爵がいた。公爵のねらうのはきまつて身分の高い上臈ばかりで、侍女のような端女などは、どれ程美貌の誉が高くても、公爵の獲物となる名誉は得られないのだった。

ある時、公爵が、しとめたさる美しい高位の貴婦人と喋々喃々の添臥をしていたとき、当の貴婦人の良人が朝の挨拶に、公の寝室に伺候するという事件が起った。主君の身边間近かに伺候できるということが当時の寵臣の特権だったから、こんな事が起るのもさして



珍らしいことではなかったのである。ところでくだんの公爵は、並の情夫なら驚きあわてるところを、さすがに蕩児の名をほしいままにするだけあって、少しもさわがず、とっさの間に大胆不敵な一計を案出した。傍にふせていた美女の顔を布で覆い、残る体だけをあらわにさせたままにして、添臥の床のそのさまを、伺候した良人に拝ませようというのである。

公爵の部屋に導き入れられた良人は、勿論この有様を眼にして仰天した、が同時に主君に示された親愛の情に深い喜びをも覚えた。だから、女の顔の布を外したりしたら即座にお前の命はもうという固い禁令を下されなくても、それに違背する恐れは毛頭なかったわけである。

こんなふうにして、公爵は、この美しい体を、そちはどう思うとか、体の細部を指して、ここはどう、あそこはどうと、良人に何度も尋ね、その上直接肌に触れさせたり、添臥の床の事までこと細かに話し聞かせたりした。良人の方はただ恍惚となつて、主君の愛人の後光のさすような肌をおしみもなく拝ませてもらったことに、ひたすら恐懼満悦するだけだった。こうして、その良人は最後までそこにさらけ出されている女が、自分の妻の

それであることに気付かなかった。――

「妻の姿を隈なく見知っていたら、いくら顔を隠していたって、いくら自分の女房だとも気が付いたろうにね」

加古は語り終つて、したり顔の批評を加えた。

「だから、時々自分の女房のからだを眺めるのも悪いことじゃないというわけさ」

「そのときの奥方の気持ちは、どんなだったかしら」

千秋はじつとうつむいたままきいた。水の底にあらわれた泡が水面に浮かび上がって、フツと消えてしまうような言い方だった。

「さあ、どうかな。勿論びくびくはしていたろうさ。姦通は良人の成敗にまかされていた時代の話だからね。しかし、すごいスリルを味わったんで、良人が帰ってから公爵と前よりも猛烈に抱き合ったんじゃないかな」

加古はいっぱしの心理学者ぶって笑った。

顔の筋肉をたるませて腕を伸ばしてくるのを千秋は体をよじって拒んだ。

「で、どうなさろうとおっしゃるの」

千秋は乱れた髪の陰からすくいあげるように男の顔を見た。

「御亭主に、この話の間抜けな良人の役割を演じていただくというわけさ」

千秋は頬をこわばらせ、さむ気でもするかのように、羽織った着物の胸元を固く抱きしめて聞いていた。

「どうだい、面白いじゃないか。亭主は念願の美女を拝める。もちろん毎日添臥している女房とは知らずにね。君はこの上ないスリルを楽しめる。そしてこの僕は公爵のように、この喜劇、いや悲劇かな、を楽しく拝見する。まさに一石三鳥じゃないか」

加古は自分の発案の素晴らしさを誇った。

千秋はしばらくの間、黙って男の得意そうな顔を見つめていた。

「よろしいわ」

硬い表情の奥で眼をキラと光らせたが、千秋はあつけなく承諾した。

「ほんとかい」

加古の顔が笑みくずれた。よもやこれほど簡単に千秋が折れるとは、うぬぼれやの彼も思っていなかったのである。承知させるにはひと汗もふた汗もかかせてやらなければならまいと、ひそかに思っていたのだった。

再び腕を伸ばしてくるのを、じゃけんにふり払って千秋は言った。

「どうやってするつもりなんですの」

「細工はりゅうりゅうさ」

加古は座を立つと、戸棚の奥から古びた桐



箱を持ち出して来た。蓋を取ると古い樟脳の匂いが立ち昇った。中には紫の袱紗に包まれたものが入っている。

加古は、勿体ぶった手さばきで、袱紗を解いた。

「あら」

思わず千秋は声をあげた。およそ加古の持ちものとしてはそぐわないものが中から現れたからである。

「能面さ。小面といって若い女の面なんだ。

どうだ、悪くないだろう」

加古は面の耳にあたる個所を両手の指でつまむように捧げ持って、千秋に示した。

「いいわね」

口の中で言って、千秋は能面に視線を吸いつけられていた。

能面の若い女はほおえんでいるようでもあり、泣いているようにも見えた。口元は笑っているでも、眼には常にあきらめに似た無表情が宿っていた。眼と口元の表情の不均衡が見る者に妖しい戦慄を与えずにはおかない。元は真白だったのだろうが、時代の古びが胡粉にみがきあげられた象牙のような底光りを与えている。

「死んだおやじの趣味でね。相当な値打ちものらしい」

加古が面の角度を変えるたびに、やや受け口の、軽く開いた、どす黒くも見える朱の唇が微妙な陰影を見せてほおえみ、哀しみ、そして泣いた。その表情は生きていた。と同時に、底知れぬ死を思わせる冷たさがあった。

「いいわね」

千秋は、再び嘆息するように言った。

「これをかぶってなら悪くないだろう」

千秋はゆっくりうなづいた。

「さっそく実験とゆこうじゃないか、え？」

こう言って、加古はすばやく千秋の肩から着物を剥ぎ取った。彼女は逆らわなかった。

再び、今度は本縄で念入りに縛りあげられてゆく千秋を袱紗の上に置かれた小面が、哀しげな笑みをたたえて見上げていた。

鈴屋は、縛られた女というと、すぐその後ろ姿が脳裏に浮かぶ。友人の加古から、丁度いい女が手に入ったから、君も縛ってみないか、と誘われたとき、最初に頭に浮かんだのもそれだった。更に加古が、女は顔を見られるのを嫌がっているから、顔に面をつけているよ、と断わったので、女の背中のイメージは一層強くなった。

鈴屋にしても、時間をかけて努力さえすれば、前向きの女を脳裏に浮かばせることは決

して不可能ではないのだが、彼の前にふと立ち現れる女は、常に彼に背を向けて、後ろ手に縛られた体を神妙にうなだれているのだった。

長い髪を結い上げて、ほっそりしたうなじを剥き出しにしている点も、ヘア・スタイルの流行に関係なく、常に一致していた。

加古がその道の実践者であることは、かねてからよく知っており、その点で先輩としての尊敬さえ払っているのだが、今度のような誘いを受けたのは最初のことだ、鈴屋の期待は不安にまで高まった。優しくはあるが、どこか自分としっくりゆかないものを持っている妻の千秋の傍にあって、鈴屋は罪悪感にさいなまれながらも、幻の女の白い背肌を、夜の毎の夢に見た。

女は後ろ手にくくしあげられた体を、いつもやや横坐りかげんにして、彼に背を向けていた。豊かに張った臀部が、みずからの重みでひしゃげたような形になり、その陰に珊瑚色に充血した足指をのぞかせている。

深い陰影の刻み込まれた二つのししむらの割れ目がふととぎれると、左右に靨のある腰椎のあたりから、背すじが次第に明瞭なくほみを見せて、しなやかにたわみながら伸びてゆき、やがてそれが上方に消えるあたりに、



珍らしいことではなかったのである。ところ  
でくだんの公爵は、並の情夫なら驚きあわて  
るところを、さすがに蕩児の名をほしきまま  
にするだけあって、少しもさわがず、とっさ  
の間に大胆不敵な一計を案出した。傍にふせ  
っていた美女の顔を布で覆い、残る体だけを  
あらわにさせたままにして、添臥の床のその  
さまを、伺候した良人に拝ませようというの  
である。

公爵の部屋に導き入れられた良人は、勿論  
この有様を眼にして仰天した、が同時に主君  
に示された親愛の情に深い喜びをも覚えた。  
だから、女の顔の布を外したりしたら即座に  
お前の命はもうという固い禁令を下されな  
くても、それに違背する恐れは毛頭なかった  
わけである。

こんなふうにして、公爵は、この美しい体  
を、そこはどう思うとか、体の細部を指し  
て、ここはどう、あそこはどうと、良人に何  
度も尋ね、その上直接肌に触れさせたり、添  
臥の床の事までこと細かに話し聞かせたりし  
た。良人の方はただ恍惚となつて、主君の愛  
人の後光のさすような肌をおしみもなく拝ま  
せてもらったことに、ひたすら恐懼満悦する  
だけだった。こうして、その良人は最後まで  
そこにさらけ出されている女が、自分の妻の

それであることに気付かなかつた。――

「妻の姿を隈なく見知っていたら、いくら顔  
を隠していたって、いくら自分の女房だと  
気が付いたろうにね」

加古は語り終つて、したり顔の批評を加え  
た。

「だから、時々自分の女房のからだを眺め  
るのも悪いことじゃないというわけさ」

「そのときの奥方の気持ちは、どんなだつた  
かしら」

千秋はじつとうつむいたままきいた。水の  
底にあらわれた泡が水面に浮かび上がって、  
フツと消えてしまうような言い方だった。

「さあ、どうかな。勿論びくびくはしていた  
ろうさ。姦通は良人の成敗にまかされていた  
時代の話だからね。しかし、すごいスリルを  
味わったんで、良人が帰ってから公爵と前よ  
りも猛烈に抱き合つたんじゃないかな」

加古はいっぱしの心理学者ぶつて笑つた。

顔の筋肉をたるませて腕を伸ばしてくるのを  
千秋は体をよじつて拒んだ。

「で、どうなさろうとおっしゃるの」

千秋は乱れた髪の陰からすくいあげるよう  
に男の顔を見た。

「御亭主に、この話の間抜けな良人の役割を  
演じていただくというわけさ」

千秋は頬をこわばらせ、さむ気でもするか  
のように、羽織つた着物の胸元を固く抱きし  
めて聞いていた。

「どうだい、面白いじゃないか。亭主は念願  
の美女を拝める。もちろん毎日添臥している  
女房とは知らずにね。君はこの上ないスリル  
を楽しめる。そしてこの僕は公爵のように、  
この喜劇、いや悲劇かな、を楽しく拝見す  
る。まさに一石三鳥じゃないか」

加古は自分の発案の素晴らしさを誇つた。

千秋はしばらくの間、黙つて男の得意そう  
な顔を見つめていた。

「よろしいわ」

硬い表情の奥で眼をキラと光らせたが、千  
秋はあつけなく承諾した。

「ほんとかい」

加古の顔が笑みくずれた。よもやこれほど  
簡単に千秋が折れるとは、うぬぼれやの彼も  
思っていなかったのである。承知させるには  
ひと汗もふた汗もかかせてやらなければなら  
まいと、ひそかに思っていたのだった。

再び腕を伸ばしてくるのを、じゃけんにふ  
り払つて千秋は言つた。

「どうやってするつもりなんですか」

「細工はりゆうりゆうさ」

加古は座を立つと、戸棚の奥から古びた桐



箱を持ち出して来た。蓋を取ると古い樟脳の匂いが立ち昇った。中には紫の袱紗に包まれたものが入っている。

加古は、勿体ぶった手さばきで、袱紗を解いた。

「あら」

思わず千秋は声をあげた。およそ加古の持ちものとしてはそぐわないものが中から現れたからである。

「能面さ。小面といって若い女の面なんだ。

どうだ、悪くないだろう」

加古は面の耳にあたる個所を両手の指でつまむように捧げ持って、千秋に示した。

「いいわね」

口の中で言って、千秋は能面に視線を吸いつけられていた。

能面の若い女はほおえんでいるようでもあり、泣いているようにも見えた。口元は笑っている、眼には常にあきらめに似た無表情が宿っていた。眼と口元の表情の不均衡が見る者に妖しい戦慄を与えずにはおかない。元は真白だったのだろうが、時代の古びが胡粉にみがきあげられた象牙のような底光りを与えている。

「死んだおやじの趣味でね。相当な値打ちものらしい」

加古が面の角度を変えらるたびに、やや受け口の、軽く開いた、どす黒くも見える朱の唇が微妙な陰影を見せてほおえみ、哀しみ、そして泣いた。その表情は生きていた。と同時に、底知れぬ死を思わせる冷たさがあった。

「いいわね」

千秋は、再び嘆息するように言った。

「これをかぶってなら悪くないだろう」

千秋はゆっくりうなづいた。

「さっそく実験とゆこうじゃないか、え？」

こう言って、加古はすばやく千秋の肩から着物を剥ぎ取った。彼女は逆らわなかった。

再び、今度は本縄で念入りに縛りあげられてゆく千秋を袱紗の上に置かれた小面が、哀しげな笑みをたたえて見上げていた。

鈴屋は、縛られた女という、すぐその後ろ姿が脳裏に浮かぶ。友人の加古から、丁度いい女が手に入ったから、君も縛ってみないか、と誘われたとき、最初に頭に浮かんだのもそれだった。更に加古が、女は顔を見られるのを嫌がっているから、顔に面をつけているよ、と断わったので、女の背中のイメージは一層強くなった。

鈴屋にしても、時間をかけて努力さえすれば、前向きの女を脳裏に浮かばせることは決

して不可能ではないのだが、彼の前にふと立ち現れる女は、常に彼に背を向けて、後ろ手に縛られた体を神妙にうなだれているのだ。

長い髪を結い上げて、ほっそりしたうなじを剥き出しにしている点も、ヘア・スタイルの流行に関係なく、常に一致していた。

加古がその道の実践者であることは、かねてからよく知っており、その点で先輩としての尊敬さえ払っているのだが、今度のような誘いを受けたのは最初のこと、鈴屋の期待は不安にまで高まった。優しくはあるが、どこか自分としっくりゆかないものを持っている妻の千秋の傍にあって、鈴屋は罪悪感にさいなまれながらも、幻の女の白い背肌を、夜の毎の夢に見た。

女は後ろ手にくくしあげられた体を、いつもやや横坐りかげんにして、彼に背を向けていた。豊かに張った臀部が、みずからの重みでひしゃげたような形になり、その陰に珊瑚色に充血した足指をのぞかせている。

深い陰影の刻み込まれた二つのししむらの割れ目がふととぎれると、左右に腰のある腰椎のあたりから、背すじが次第に明瞭なくぼみを見せて、しなやかにたわみながら伸びてゆき、やがてそれが上方に消えるあたりに、



彼の好きなうなじが、うつすらと頸骨のかげを浮かせてうなだれている。

固く梳き上げた豊かな黒髪の毛根のひとすじひとすじが、蒼みをおびた皮膚の下に消えてゆくのが透けて見えるほど、その肌はきめこまかく白かった。あらわな耳朶のうしろに刻み込まれている、妙になまなましい皺のあたりから、一方はまるいあごから頬へと次第にほんのりと色づいてゆき、一方は急にしつとりと深みのある白さを増して両肩の方になだれてゆく。そこらあたりの精妙な色彩と曲線の交錯が鈴屋の描く幻のポイントだった。

後ろ手に縛り上げられているのだから、肩の肉はやや盛り上がり気味になっていて、平素のなだらかな線は見られないかも知れない。しかし、それはそれでよかった。両腕を逆振じにして吊られているために、肩胛骨の周辺の肉が盛りあがって凹凸の影を作り出しているのも、緊縛された女の無言の苦痛をあらわしているものとして好もしかった。それと同じことは、くくり合わされて固く握りしめられた指や、二の腕にくつきりと影を刻み込んでいる縄の跡についても言えた。そしてそこから女の肌は、緊縛をのがれた下半身へと、急速に自由と柔軟さを取りもどしなから、息をのむほどのみごとさで、くびれた腰

へとすぼまってゆき、そこで一旦せかれた流れが、やがてゆったりとした厚味をもって拡がり、再び床にひしがれたしむらへと消え去ってゆく。

これが鈴屋の、雑誌や写真から得た縛られた女のイメージの総決算だった。彼のステイックな美学は、縛られて悶える美女のなまめかしさ、そそるような哀訴、呻き声、鞭のうなり肌を染める鞭あと、羞恥の極を責め抜かれる女のあがる動物的な悲鳴などのようなダイナミックなものには一切無縁だった。

彼もかつては想像しうるかぎりの最も淫靡な責めを空想しようと努めたことがあった。それはまことに容易なことだった。男なら誰しもそれは容易な筈である。先ず背を向けている女にこちらを向かせる。女が一糸もつけていないのは言うまでもない。両手は頭上に吊るすなり、高手に縛りあげるなりする。

体を二つに折りたたむのも意のままである。がしかし、その次に来るものは、責めというよりは、愛撫に近いものになることを、彼は発見した。愛撫の過程を微細にイメージ化することは不可能である。彼は直接的な欲望をイメージ化することのしらしさを知った。

それにくらべれば、背中はその豊かな広さ

の中に無限ともいえるイメージの宝庫を隠し持っていた。ひそやかに息づく背肌は、彼をまどろみに似た、満ち足りた静けさへと誘い込んでくれる。

こうして、幻の女は彼に背中だけを見せるようになり、遂には、その美しい面輪すらも恥じて彼に見せないようになってしまったのである。だから、彼の幻の女は顔を持たない。そして、吸いついてくるような肌のぬくもりも、鼻孔にまつわって甘く誘いかけてくる体臭も。

想像は時に現実より一層現実的であるという。しかし鈴屋の場合は、その幸福な例外といえた。なぜなら、彼の前に立ち現れた現実の女は幻の女に完全に重なりあい、現実は幻によって美化され、幻は現実によって、より強固な現実性を獲得したからである。それほど加古の「手に入れた女」は鈴屋の幻の女に酷似していた。

幻の女と同じく、その女もやや横坐りになって、蒼白い蛍光灯の明かりに光る白い背中を鈴屋の方に向けていた。背肌全体が匂いたつようだった。ほのかな体臭にまじる石鹸の清潔な香りが、ともすれば幻の世界にのめり込みそうになる鈴屋を、現実の重みに連れも



どすのだった。

女は全体に想像していたそれより、ほっそりとした体つきだったが、それでいて引き締まった肌の底に確かな手応えを感じさせる肉づきを持っていた。ことに、少しよじったようなウエストのくびれの細さから横に拡がる腰まわりの豊かさが見事だった。

後ろ手に縛りあげられて、固く握りしめられたこぶしの中で、美しくマニキュアをほどこした形よい爪が、掌にしっかりと喰い込んでいた。左手の薬指に金の指輪がはまっていた。そのほっそりとした手首を重ね合わせて、麻縄が容赦のない非情さで、幾重にも巻きついているのだ。

ひそやかに匂う石鹸の香と結婚指輪と、それらをひっくるめて厳しく喰い込んでいる麻のロープと——これらは鈴屋の空想にはないものだった。

女はときどき鈴屋の視線の重みを耐えるかのように身じろぎした。そのたびに背すじが微妙な動きを示し、肉の厚い桜色の耳たぶに吊るした耳飾りの真珠の玉が、かすかな光のゆらめきを見せてふるえた。

鈴屋は吐息とも嘆声ともつかぬ声を、かすかにもらした。女の背中は、彼の眼の前一米もない所にあるのだった。

傍で鈴屋の様子を観察している加古の表情は、鈴屋が女に気を奪われているのをいいことにして、意地悪い満足感にゆがんでいた。ときおり、意味もない薄ら笑いが、頬のあたりをかすめては通り過ぎるのだった。

「どうだ、君の方に向かせようか」

加古が問いかけるのに、鈴屋は黙って首を横に振った。

そのまま女を凝視し続けている。

女の背中と、それを見つめる男の背中と、この二つの背中を加古は軽い嫉妬の眼で眺めていた。女が千秋であることに気付かれたのではないかという不安が、ふと脳裏をよぎった。が、それは情人であることの甘いスリルを新たにかきたただけで、すぐ消えた。

「空想の女とくらべてどうだい」

加古がまた口をはさんだ。彼は鈴屋の幻に描く女のことを、かねがね聞き知っていたのである。

「幻を見ているようだ」

こう言いながら、はじめて鈴屋は女から視線をずらして加古の方を見た。

「病膏盲だな。君には幻だけが現実なんだ」と加古はからかった。

「幻は現実より美しくて自由だからね。そして、この現実が幻のように美しい。全く君の

好意には感謝するよ」

女の梳きあげたうなじの両側で、耳飾りがかすかに揺れた。

「触ってもいいんだぜ。なんなら、そこに縄尻が十分あまっているだろう。君自身それで好きなように縛り足してもかまわない。この女も相手が変わって、かえって喜ぶかもしれない」

「いや、遠慮しておこう」

鈴屋の言葉も待たずに、加古は、女の黒く濡れたような髪をわしづかみにしておさえつけ、後ろ手の所で長くあまっている縄尻を取って、上の方に引きしぼった。

面のかげで押し殺した呻き声がした。男の力の下で、それをはね返そうとするかのように、女の背中全体が硬直した。縛られた手がさかねじにされて、一層盛り上った肩の筋肉が苦痛を訴えて痙攣した。

鈴屋は、加古が女の体に新たな縄をかけはじめた時から、熱病のように自分を侵しはじめた衝動と戦っていた。しばらくはそれを何とかおさえても、ちよつと気をゆるめると、めまいにおそわれたような感覚に自分が奪い去られてしまうのだった。手にした縄尻が、そのめまいから彼を救い出してくれる唯一の導きのように思われた。かすかに縄に力を加



えただけで、その反対の端にある白い肉体は緊張し、ふるえとおびえともつかぬ手こたえが縄を通して伝わってくるのだ。

鈴屋は縄にそれ以上の力を加えたい衝動に幾度となく突き上げられ、幾度となくそれを耐え抜いた。その結果生ずる事態が、彼には予測できなかったからである。しかし、それが彼の今日までの間に築き上げたステイックな美学を完全に粉砕するものであることだけは確実に予測できた。その想像が彼にめくるめくような衝動と恐怖を与えるのだった。

決定的な何かが起らないままに粘液質の時間が過ぎていった。三人はその粘液の中に固縛されたように、三様の姿勢を崩さずにいた。

突然、鈴屋の眼の前で女の背中が、粘液を振り切るように身じろぎした。崩れていた膝が再安定した位置を求めるように徐々に動き始めた。それと同時に、女の体が眼に見えない抵抗にあらがうような運動を繰り返しながら、こちらに向きを変え始めた。

鈴屋も、そして加古さえも、息をのんでこの緩慢な女の動きに眼を奪われていた。

次第に、女の背中がななめ向きになってゆき、それと共に、背後にまわされた腕の陰から、縄で上下をくびられた乳房の側面が、あ

えぎなげくかのように激しく起伏する腹部のひろがり、視野に入ってきた。腿から膝への豊かな筋肉の伸びが、体をずらせる動作のたびに、緊張し弛緩した。

斜めにこちらに向きなかつた姿勢になって、女はそれまでうなだれていた顔を、ゆっくり起こしていった。異様な静けさをたたえた小面が徐々にその表情をあらわしてきた。はじめ、それは悲しんでいるかのようなだった。が、やがて冷たい無表情をたたえたかと思ふと、ほんのわずかな角度の変化で、あきらめをこめた微笑に変貌した。

「ああ——」

鈴屋が身をすさるようにして息をのんだ。うがたれた瞳が彼の視線を吸い込むようにほおえみかけるのだった。

面の表情は更に微妙な変化を見せた。それは次に何が来るか予測できない変化だった。笑ったかと思えば泣き、哀しんでいたかと思えば冷たい無関心にかえる。ただひとつ、うつろにうがたれた瞳孔にだけは常に底知れぬ哀しみの色があつた。それは見る者の心に喰い込む視線でない視線を持って、呪縛の糸を吐きかけてくるようだった。

呼吸が苦しくなつて、鈴屋は視線を落とし

死んだ顔と生きた肉体。この二つのものの強烈な対比が、鈴屋を異様な興奮に巻き込んだ。

死んだ面が生きていて、生きて血の通った肉体が、醜悪な死を思わせるのだ。だが、いまこの面を引き剥いだとし、それでもなお肉体はこの醜悪な死を続けるだろうか。

鈴屋は極度の緊張で細い銀線のように張りつめた視神経をこらして、この奇妙な存在を見つめた。

女は悲しげな表情を浮かべたまま、縛られてそこに居た。あえぐような呼吸のたびに、今にも音をたてそうに、縄が乳房の上下にくびれ込んで、その薄い肌がはち切れんばかりに引きつった。そして女の顔は悲しげなほえみを、わずかにかしげている。

加古は、千秋が自分の意志でこちらを向きはじめた時から、彼女とその良人との間に眼に見えない糸のようなつながりが生じたのを感じていた。それは細く今にも切れそうに思えたが、その実、千秋を縛りあげている縄よりも強靱であることが次第にわかってきた。加古は、鈴屋にあの間抜けな公爵の家臣の役割を演じさせる計画が、この眼に見えない糸で阻止されたのを知った。

鈴屋が女を妻の千秋と知る筈がないことに



は確信があった。しかし二人をつなぐ糸が何であるかを遂に知り得なかった。知り得ないままに、加古はその糸が次第に濃くなってゆき、やがて二人を繭でくるむように覆いかくしてしまふのを呆然と眺めていた。

「ときが来たようだね」

と鈴屋は、おだやかな声で、妻の千秋に言った。千秋は静かにうなづいた。

深夜だった。寢室の淡いスタンドの明かりの中で、千秋の頬が冴え冴えと白かった。

二人は、しばらくお互の顔をじっと見合っていた。

「加古の家での君は美しかった。素晴らしかった」

鈴屋は、深い感慨をこめて言った。

「どうしてわたくしとおわかりになりましたの」

その声にわるびれた風はなかった。

「君の手だ。手の爪だった」

その手が、きちんと坐った膝の上に組まれてあった。千秋はそれをそっと眺めた。

「結婚指輪だけははめたままでいましたの」

「それより爪の方が僕には強い絆になっていたわけだね。君の美しい肌を見せてもらえなかった僕は、いつも見られる爪に全体の美し

さを想像していたのだ」

「申しわけありません」

加古が見たあの糸が二人のまわりにキラキラ輝いていた。

「僕たちは妙な夫婦だな」

良人が「だった」と過去形を使わなかったことが千秋の胸にしみとおった。

「愛するというのは妙なことだ。ことに僕のような変った男にとっては」

鈴屋は独り言のように言った。

「僕はこれまで姦通した妻をこらしめるために、縛ったり鞭で責めたりする小説をいやという程読んできた。そして、妻に裏切られた良人の怒りに同感していた。ところが、いまではそんな小説がみんな嘘っぱちのような気がする」

千秋の睫毛の上で、涙の玉がゆれて光っていた。

思い切り泣いてしまいたかったが、それができなかった。加古が不能者であることを良人に訴えたかったが、そのようなことで自分の罪が軽くなる筈もなかった。また、自分が心の底では良人を深く愛していたことを告白することも、今更言いわけがましかった。そんな言いわけの数々は、加古の家で小面の陰から訴え続けていた自分の純粋な思いを壊す

ことだった。今はただひたすらに、厳しい懺悔の気持ちでいたかった。良人のすべてを包む大きな愛に抱かれていたかった。そして時がきたら——その時はきつとくるに違いない。

「僕も妙な男だが、君も変った人だ」

千秋ははにかんだ。

「あの小面をつけたとき、わたくし生まれてはじめて本当に自由になったような心持がいたしました。それまでは、気付かずにかに縛られていたのですわ」

これが千秋の口にした唯ひとつの申し開きだった。

「僕も顔のない女を見過ぎていたようだ。今夜から、千秋に顔のある女になってもらうかな」

鈴屋は誘いかけるように笑みを浮かべた。

「はい」

千秋はすつと立ち上がって天井の明かるい方の電灯をつけると、何のためらいも見せず、帯を解きはじめた。





愛読者のみなさまに  
お知らせとおねがい



い。そのかわりに、おもしろい小説を二つでも三つでもよけいにのせてくれたほうが、読者に対しても親切ではないか」

というようなご趣意のおたよりを、たびたび頂きます。

そこで編集部としても、この際今月号から、この思いきった編集方針を決定した次第です。

ごらんのとおり、本号から、グラビアとオフセット色紙ページをやめることにいたしました。

そのかわりに、本文ページを増やし、全体のページ数は、以前と同じ量になっております。

グラビアやオフセットの写真ページは、直接読者の視覚を刺激して、昨今の社会情勢にふさわしくない——というのが、おおよその理由です。

現今の社会情勢については、いまさらご説明するまでもなく、読者のみなさま、すでによくご存知のことと思います。

愛読者のかたがたからも、「最近のような中途はんばな写真ページなら、いっそ無いほうがよ

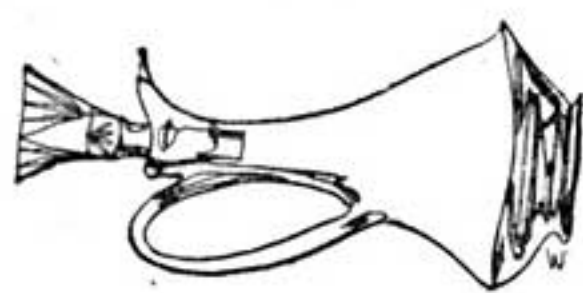
い。今後、小説、読み物を中心にこれまでよりも、いっそう強力なSM文芸誌としての態勢を固め、単なる趣味誌に墮さず、文学性と文献性を兼ねそなえた、異色ある月刊誌として発行していく方針です。

ご不満も多くあることと存じますが、以前に変わらぬご愛読を改めてお願いいたします。

読み物面での充実をはかるためあたらしく原稿の募集をいたします。下段の要領をおよみくださいまして、なにとぞご応募くださるよう、お願いいたします。新人の作品を、積極的に掲載していく方針です。

裏窓編集部

## 原稿募集



つぎの要領で、あたらしく原稿の募集をいたします。ふるってご投稿ください。

▼創作（四百字詰め原稿用紙）25枚まで

S・Mその他を主題とした小説をお寄せください。新鮮味ある異色小説をお待ちしております。

▼告白体験記……………20枚前後

真実の告白、得がたい体験記をもとめます。だれにも言えない告白を、原稿紙にぶつけてください。

◎掲載させていただいた作品には、相応の稿料を掲載後二ヵ月以内にお送りいたします。

◎原稿は第五種郵便になりますから五十グラムごとに十円の郵券を貼り、開封にして投函をおねがいたします。

▼原稿の送り先は――

東京都中野区松が丘2の21

あまとりあ社  
裏窓編集部





読

者

コ

1

ナ

1



★ここ二、三日台風のせい、いく分すごしよくなっておりませんが、残暑の連続で編集部の皆様大変なことと思います。十月号拝見しました。先月抱いた期待通り、巻頭画集があるのでよろこんでいます。今後も継続して下さい。どうもむずかしい世の中になったもので、私などのような女体好みは、さびしい限りです。北園透一朗氏が「パノラマ島秘譚」を中絶される気持ちも、また、氏の作品後記にでてくる編集部の方々の気持ちもよくわかります。「さんねんでくやくして怒りたくなる」のは、氏ばかりではなく、全国数万の読者であり、また編集部自身であると思います。この困難

な時機を、いかに切り抜けるかが、今後の大きな課題だと思います。私たちは、この反動的世相に失望します。圧迫された雑誌の出来ばえに失望します。しかし、失望しながら、この次を期待しています。そういう中で、今月号の潮一樹氏の「乱世呪縄伝」は読みごたえがありました。すこしストーリーが飛躍しすぎている感じで、転々とする物語りに途惑いながら、それが一応まとまっており、しかも随所に織りこまれたシーンが、ほどよい刺激をあたえてくれます。八月号からはじまった大型小説の連続掲載は、きつと多くの読者から歓迎されることと思います。表現の制約もいろいろ

★このらの投稿はハガキで結構ですからご自由にお書きください。

★今月換載しました方には、12月号および、S写真をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所、氏名はお書きください。（読者コーナー係）

あることでしょうが、時代小説では、せめてこのくらいのもものは維持して欲しいものです。グラビア、オフセットのページには、今後いよいよ発表に制約が加わることでしょう。なにしろ写っているのが生身の人間なので、視覚による刺激が多めで、（本当はそれほどのこともないと思いますけど）そういう点がお年寄りたちには問題にされるのでしょうが、女体美を追い求める意味からでは、縄や鎖がただからまっているだけでは、どうも物足りないのも、当然といえます。先日東京の友人から、都条例のことを知らされましたが、それによると、引用文中に使う文字、言葉、描写まで制限

が加えられているようで、一体そういうことで、まともな表現ができるものかとおどろきました。今後は無味乾燥な文章か、伏字の多い文か、とにかく戦前から戦争中の暗黒時代を思いださせます。いやな時代になったものです。（京都・光谷東穂）

★私は「裏窓」の熱心な読者というわけではありません。しかし、今までのこの雑誌を読んだ経験から、少し批判してみたいと思います。私の考えでは、この雑誌を永く購読している人は少ないと思います。というのは飽きがくるからです。最初は珍しい世界を見たさに読みますが、書いてあることがたいして変らないために、どうしてもそうなるのです。SMの世界を描く雑誌ですから、それもやむを得ないかもしれませんが、何とかしてほしいと思うのも当然の成り行きでしょう。そこで、欠点と思うものをあげてみます。

①ユーモアのないこと。サドの作品をご覧ください。彼の作品には、そのサディズム追究の厳しさが生んだ、ハタ目にはコッケイと思えるような場面がたくさんあります。だからこそ、再読に堪えるし、立派な芸術品と





# 読者コーナー



しても通用するのです。また逆に、軽快にフンワリと描けないはずがありません。たとえば、本誌八月号の「ある幸福なロバのものがたり」のように。私はこの作品をSM小説に新しい境地を開くものとして、高く評価したいのです。ところが、大半の作品は読んでウンザリさせられます。またか、と思うものが圧倒的です。これは、作者がSMを追求しよう、開拓しようという意欲をもっていないためであり、その世界にただ単に迎合しているためであるから、と考えます。いったい、作者に書く意欲があるのか、とお聞きしたいものです。

②描写が急すぎて、雰囲気欠けること。これは作者が、SM世界を把握していないためだと思われまふ。そのために、SM的行為なるものの描写の連続となり、それでSM世界を描いたように見せかけているのです。

× × ×

以上が私の思ったところですが、これについて、作者および読者諸氏の考えをお聞きしたいと思ひます。(横浜・M氏)

★謹啓、残暑なおきびしい折から、貴誌ますますご発展の段、

大慶に存じあげます。先般申し込みました「耽美グラフ」昨日速達便にて拝受いたしました。小生がごとき小官吏にとりましては、千円は決して軽からぬ額ではありますが、幾度も観賞させていただき、久しぶりの満足を得ましたこと、ここに御礼申しあげます。次に次号に希望するところは、本誌「裏窓」にご執筆の諸先生方の画を主体とした「耽美芸術グラフ・第二集」を刊行されるのを、願う次第です。(北九州・不知火生)

★拝啓、現代のような世評の中で、親愛なる「裏窓」を続けておられる飯田先生以下編集部の方々のご苦勞をお察しします。十月号、まずほめる方からいきますと、表紙が秀逸でした。草木の緑の中の女体の白は私の理想のものです。特にカラーの緑がきれいに出来ていた。今後この線をお願いします。「現代の魔女裁判」には感銘を受け、また、啓発されるところ大でありました。東京都という破廉恥な怪物が、どれだけの悪をなしてきて、また、これからなそうとしていくのか。今のままでは完全に逆コースをすすんでいるので「乱世呪縛伝」潮先生ばん

ざい！もう何年ぶりの久しぶりの快心作です。それに、小日向先生の絵がまたすばらしい。次から次へとクライマックスシートの連続、ほんろうされる美女たち！とても一度に読むのはもったいなくて、五、六度にわけて読みました。次が待ちどおしい！潮先生にはタンマリはずんであげてください。次に文句の方を言わせてもらいますとまず「パノラマ島秘譚」がなくなることだ。北園氏は「さんねんで、くやしくて……」と書いておられるが、それは、我々読者こそです。いろいろ事情もあるでしょうが、ぜひ、本誌上に復活させるよう、くれぐれもお願ひします。まだまだこれから作品です。見せものにされたら、器具を使わされたりして、屈辱に悶え泣く美香の姿を、私たちに見せてくださるよう、切にお願いいたします。それから「グエンドリン物語」とかいいう、アメリカの下手な漫画は何事ですか？私たち日本人には、あんなグロテスクなものには性に合いません。あの絵のおかげで、せっかくの「煩惱繩」がメチャメチャです。とびとびになった上、一葉のさし絵もなく、アメリカ

漫画とのチャンポンで、完全にアウトです。このような題材なら、落合先生に恥じらう雪江のいじらしい姿を描いていただきたら、それこそピッタリして申し分なかったのに、と思うと残念でなりません。アメリカ式グロテスク漫画も悪いとは言いません。ただ、時代小説とならば、今のせるようなことだけは、今後やめてください。写真について言うと、既刊八月号の「夜の踊り」および「美貌の檻」がすばらしかった。日本の女性乳房が小さくてイカさない。小笠原純子さんなど特にそう。顔とからだ、二拍子そろった人を探してください。それから、いろいろと勝手なことばかりならべてすみませんが、堂昌一、中島喜美、喜多玲子の各先生に再登場してもらえないでしょうか。そして、このすばらしい雑誌をいつまでも(また決して妥協せずに)続けてください。

(大阪市・金太)

★拝啓、速達いただき入手いたしました。「耽美芸術グラフ」用紙、仕上がり等申し分ないと思っております。しかし、写真のみでなく、それぞれの画家の作品を挿入されてあることは、





# 読者コーナー



大歓迎するところです。中川彩子、鬼頭、羽仁、落合、沖涉二氏等の作品は、いずれもそれぞれの長が認められます。「第一集」とありますので、おそらく二集、三集とご企画のことと思っておりますが、失礼ながら小生の思うところを以下記しますから、悪しからずお願いいたします。絵画の方で、各氏それぞれの風格なり長があります。小生が疑問に思いますのは喜多玲子氏の作品が少ないことです。御社発行図書の装訂などよくやっておられるが、愚考するところ同氏の画風はなかなか現代好みの作品をものされるように見ております。それから、中島喜美氏の作品もまたけんな責風景でありまして、小生の非常に好むところです。やはり作家によって古代風、グラマ―風等、それぞれ長と見られるのですが、中川氏の作品は小生引きつけられました。写真について立派な作品と思うのですが、欲をいえばもう少し縛りのバラエティが欲しいと思いました。同一縛りでポーズの異なったのもけっこうですが、そのようにも思いますのと、何としても縛りのフニキからいって

ボリュームということには欠かせないことでしよう。この点からは半裸、台所のシーンなどやや不足を感じます。体裁、装訂は簡素でけっこうです。むしろ、このような方がコレクションとして好都合でもあります。価格も小冊子として高いようにも思われますが、企画の苦心、写真絵画、用紙等その内容よりすれば、それだけの価値はあるものと思います。小生は貴社発行の「裏窓叢書」全巻拝読したものであります。最新七集の「大利根柔肌草紙」は文と言ひ、絵と言ひ、既発行のものでは小生としては一番よかった、と読後思っているものであります。何かとご多忙のところへ拙文をいたし恐縮ですが、御礼かたがた記しました。あしからず願います。

(東京・鳥山子)



## 編集後記



ということとは、はつきりいえません。

▼「裏窓」を支えてくれる作家、画家の諸兄姉とおつき合いを願っていて、いつも感謝することは、マニアとしての度

▼人一倍悩み、欲し、よろこび、悲しむことのでき得る人種。いいかえれば、人間としてのデリケートな弱点をもつとも多く持ち合わせている人種には、この上もなく平和的な、文化的な人間臭を感じます。

が強ければ強いほど、その精神の純粋度が高いということ

▼「裏窓」を愛してくれる人種は、いざ戦争というとき、もつとも役に立たない人でしょう。これは断言できます。

▼卑俗を憎み、安易な妥協に情せず、俗悪不純な精神を軽蔑します。その反面「我こそSMの本流なり」という意識が強く、編集部としては、その点での妥協性の調整にひと苦労しますが、とにかく、読者をもふくめてSM派には、「愛せずにはいられない」人間的魅力を持った人が多い

だから、戦争をはじめようとするとする人々にとっては、やはり「裏窓」の存在がおそろしいのでしよう。デリケートな人間性をより多く持った兵隊なんて弱いにきまっています。▼このような編集後記を書くことのできる雑誌の編集者であることに、私はいささかの誇りを感じます。

(飯田)



# 裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の  
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる  
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区松が丘2丁目21番振替東京55408あまとりあ社宛

## 39年(十月号) 三〇〇円

### ◎オフセットページ

|               |            |
|---------------|------------|
| 画集・わがままなお姫さま  | 江潮 晃夫      |
| 妖美術傑作集        | 沖 涉二       |
| 輝やける女性        | 北米・フェニクス商会 |
| 憂いのポーズ(フォト)   | 猪島 昌也      |
| 鞭を待つポーズ       | 落合 竜二      |
| ★グラビアページ      |            |
| 誰かくる足音        | 吉田 久       |
| 輝やける女性        | 北米・フェニクス商会 |
| 縄のたわむれ        | 吉田 久       |
| 「白日夢」におけるSM性  | 藤見 郁       |
| 読者評論・現代の魔女裁判  | 邦枝 克平      |
| パノラマ島秘譚・5     | 北園透一朗      |
| 乱世呪縛伝         | 潮 一樹       |
| 踊り子。ヨッコ       | 光谷 東穂      |
| 体当たりマゾヒズム論・28 | 水尾 究       |
| アメリカ絵物語       |            |
| グエンドリオン物語     | ジョン・ウイリー   |
| 奢れる女神への祈り・7   | 森本 愛造      |
| 煩惱繩           | 矢桐 重八      |
| 絵物語・冷血        | 文・祖父江 新    |
| 絵・落合 竜二       |            |
| ゴルドンの記憶・19    | 阿麻 哲郎      |

## 39年(九月号) 三〇〇円

### ◎オフセットページ

|                     |            |
|---------------------|------------|
| 画集・女王様的一天           | 秋吉 密       |
| 特集・アメリカ雑誌に現われた悲運の女達 |            |
| 妖美術傑作集              | 沖 涉二       |
| ★グラビア・洞窟            | 吉田 久       |
| 特集・激しい女             | アメリカの公刊誌より |
| アメリカのメンズマガジンご紹介     | 編集部        |
| 柵のある道(フォト)          | 吉田 久       |
| 花氷(はなごおり)           | 八巻 令       |
| 月が見ていた              | 三巻 俊       |
| その日死すべし             | かびや・かずひこ   |
| 続・海底王国の女囚(山田彬弘絵)    | 南郷京助       |
| 腹切り残酷史譚・4(鬼頭晩絵)     | 夏川浩一郎      |
| 絵物語・直次郎出奔           | 文・井村 錠     |
| 体当たりマゾヒズム論・27       | 水尾 究       |
| 黒竜党の最後(東桂史・絵)       | 潮 一樹       |
| 山のホテル               | 村山 省一      |
| 汚辱極楽神の国             | 淡路 周五      |
| ゴルドンの記憶・18(江潮晃夫絵)   | 阿麻哲郎       |
| ○読者投稿・クライマックス場面集    |            |
| 海のみえる部屋(豊田みのる)      | 加木れい子      |
| 勤王党の女問者(古正英生)       | 宗方 八郎      |
| 奴隷市の娘(鬼頭晩)          | 遠井待夫       |
| その他                 |            |

## 39年(八月号) 三〇〇円

### ◎絵物語

#### ある幸福な

|                   |          |
|-------------------|----------|
| 女術部屋              | 文・馬場 弘二  |
| 華麗なる行進            | 絵・江潮 晃夫  |
| 悲鳴と音楽             | 絵・羽仁 京志  |
| フォト・夏のたそがれ        | 絵・鬼頭 晩   |
| 未封切り映画のなから        | 猪島 昌也    |
| 男が女になるまで          | 編集部・編    |
| ★グラビア・夜の踊り        | 吉田 久     |
| 美貌の檻              | 吉田 久     |
| コレットの微笑           | 北米・フェニクス |
| 貴婦人の散歩            | 編集部・編    |
| 月ノ輪群盗伝(小日向・夢・絵)   | 潮 一樹     |
| パノラマ島秘譚・4         | 北園透一朗    |
| 小品傑作集             | 絵・沖 涉二   |
| 高嶺の花              | 大垣 昌     |
| 絵物語 女体運搬人         | 文・祖父江 新  |
| 海底王国の女囚(山田彬弘・絵)   | 南郷 京助    |
| 体当たりマゾヒズム論・26     | 水尾 究     |
| 奢れる女神への祈り・6       | 森下 高茂    |
| クライマックス場面集        | 駒井たまき・他  |
| ゴルドンの記憶・17(江潮晃夫絵) | 阿麻哲郎     |

## 39年(七月号) 三〇〇円

### ◎絵物語

#### 不幸な娘の

|                   |          |
|-------------------|----------|
| ひとりとこと            | 文・下須 畜男  |
| フォト・黒い妖精          | 絵・秋吉 密   |
| 海のあらくれ            | 絵・猪島 昌也  |
| 地下室二景             | 絵・羽仁 京志  |
| あるレスピアンズム         | 絵・沖 涉二   |
| ★グラビア・鎧と女         | 落合 竜二    |
| フォト作品集            | 吉田 久     |
| SとMのうたげ           | 藤沢 修     |
| フォト・黒い靴下          | 北 好夫     |
| アメリカの公刊誌ご紹介       | 編集部・編    |
| 傲慢と屈従             | フェニクス商会  |
| 指名された女(山田彬弘・絵)    | 九十九郎     |
| パノラマ島秘譚・2         | 北園透一朗    |
| 絵物語               | 文・祖父江 新  |
| セント・レディ学院         | 絵・落合 竜二  |
| 小品傑作集             | 絵・沖 涉二   |
| 南北戦争画集            | 絵・鬼頭 晩   |
| 習作小品集             | 絵・松尾 悦三  |
| 老若抄(東桂史・絵)        | かびや・かずひこ |
| 奢れる女神への祈り・5       | 森本 愛造    |
| ファンタジア・マゾヒスティカ    | 八巻 令     |
| クライマックス場面集        | 久慈たかね・他  |
| ゴルドンの記憶・16(江潮晃夫絵) | 阿麻哲郎     |



39年(六月号) 三〇〇円

○オフセットページ

文・祖父江 新

絵物語・コンドルの楽園(絵・落合 竜二)

密室の砂丘(フォト) 吉田 久

ある夜のバーで 絵・沖 涉二

ドイツ民族博物館資料より フュニクス

フォト作品集 藤沢 修

洋画の中のアブ・シーン集 スチルより

★グラビア・大の絵(フォト) 吉田 久

スクリーン・クライマックス集 編集部編

マゾヒスチック・スチル集 編集部・編

傑作フォト集 猪島 昌也

アメリカ新着フォト集 北米・フュニクス

パノラマ島秘譚・2 北園透一郎

戦後の妖美な眺め(山田彬弘・絵) 間野 嶺

○小品傑作展 絵・沖 涉二

曲切り念者(東桂史・絵) かびや・かずひこ

腹切り残酷史譚(鬼頭晩・絵) 夏川浩一郎

濡れ花(落合竜二・絵) 松山 省一

ゴルドンの記憶・15 阿麻 哲郎

○読者投稿・クライマックス場面集

赤い月の夜(秋吉富・絵) 赤木 恵介

女すりお蝶(古正英生・絵) 五所 章

暗黒街の掟(豊田みのる・絵) 東島かおる

腐れ土蔵(小日向一夢・絵) 義川 源

39年(五月号) 三〇〇円

○オフセット

文・矢部 定三

和装美礼讃 絵・岩田 吉夫

◎沈思のひと(フォト) 吉田 久

◎時代妖艶画選 鬼頭 晩

◎姫君受難・三景 古正 英生

◎アメリカの公刊誌・ご紹介

◎ジャンケルの襲撃 悪魔教の女

◎馬上の麗姿 密林の女奴隷

★グラビア・山参道 吉田 久

★乳房を飾る男(絵物語) 文・パール・島

★時代妖美画選 中島 喜美

パノラマ島秘譚・1 北園透一郎

哀愁文芸評論 安東 泉

○読者投稿・特集

狼火の部屋(沖涉二・絵) 多賀 満

お雪地獄(古正英生・絵) 丸亀 忠史

本郷大五郎の不満(山田彬弘・絵) 三津井弓雄

海賊船の女たち(豊田みのる・絵) 北村仙也

白い鬼(秋吉富・絵) 三枝喜久治

竜四郎妖姫(東桂史・絵) 潮 一樹

蛸(なめくじ) 村山 省一

黄金草の宿(落合竜二・絵) 豊中 夢夫

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵) 阿麻 哲郎

○小品傑作展 沖涉二・落合竜二

39年(四月号) 二五〇円

◎時代絵物語

文・庄内 裕司

さみだれの死 絵・小日向一夢

◎妖美画個展 山田 彬弘

◎時代妖艶画選 鬼頭 晩

◎和装の女性美・四態 都築 峰子

◎フォト(玩具・訓練・協演) 金井 行雄

★グラビア・天守閣 吉田 久

★スクリーン・クライマックスシーン集①②

★フォト集(モデル・榛名リエ) 藤沢 修

続・スクリーンに躍る 藤見 郁

ロマンと幻想

アラビアの城・10(鬼頭晩・絵) 北園透一郎

翻られた稚児(東桂史・絵) かびや・かずひこ

四作家競作同一題名小説

美女と毒薬 円城寺 達

志村清太郎

井村 錠

松山 省一

葬送行進曲(都築峰子・絵) 八巻 令

背骨の曲った娘たち・2 岐阜須三夫

地下室の檻(山田彬弘・絵) 杉野平太郎

白蛙教のいけにえ(古正英生・絵) 野呂 久

三人のモデル(秋吉富・絵) 赤木 恵介

お島とお紋(豊田みのる・絵) 九谷竜太郎

39年(三月号) 二五〇円

幻想絵物語・奇怪な動物園

文・志村 基治

絵物語 絵・秋吉 密

ある晴れた日の公園で 文・祖父江 新

◎妖艶女態四景(画集) 鬼頭 晩

◎光と影の哀歌(フォト) 吉田 久

◎和装絢爛(フォト) 北 好夫

★グラビア★榛名リエ・パレード 藤沢 修

★奢れる女神のポーズ六態 編集部・編

★アメリカの公刊誌ご紹介 編集部・編

★吊り鉤(フォト) 吉田 久

スクリーンに躍るロマンと幻想 藤見 郁

海の復讐鬼(東桂史・絵) 潮 一樹

背骨のまがった娘たち(中川彩子・絵)

多ア坊のこと(山田彬弘・絵) 北野 竜一

体当たりM論(江淵晃夫・絵) 水尾 究

アラビアの城⑨(鬼頭晩・絵) 北園透一郎

マゾヒズム画廊 フュニクス商会

手だれの死者(東桂史・絵) かびや・かずひこ

きつねづら(小日向一夢・絵) 井村 錠

奢れる女神への祈り② 森本 愛造

サド裁判・茶番劇の俳優たち 安東 泉

ゴルドンの記憶⑫(江淵晃夫・絵) 阿麻 哲郎

39年(二月号) 二五〇円

○オフセットページ

文・藤見 郁

フォト・ストーリー 写真・フュニクス

竹の家 落合 竜二

面集・女の館 西ドイツ・フュニクス

ふたりのお遊戯 西ドイツ・フュニクス

きもの繚乱 カメラ・北 好夫

★グラビアページ★

五百羅漢 カメラ・吉田 久

戦慄のまなざし 北米・フュニクス

脚立と貴婦人 北米・フュニクス

奇怪な散歩着 西ドイツ・フュニクス

縄と鎖のコメディ 北米・フュニクス

四作家競作同一題小説

花と悪銭 松山 省一

風松英之介 井村 錠

京 剣児

ご隠居のたのしみ(落合竜二・絵) 八巻 令

犬の楽園(秋吉富・絵) 下須 畜男

瀬沼めぐみの受難(山田彬弘・絵) 春川 光彦

アラビアの城・8 北園透一郎

奢れる神への祈り・1 森本 愛造

わが愛のうめきとさけび 新村満美子

私本・男色大鑑・2 かびや・かずひこ

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵) 阿麻 哲郎



39年(一月号)二五〇円

- フォト・ストーリー……文・藤見 郁  
魔女狩りバターン……フエニクス商会  
絵物語・女戦士のレポート……文・祖父江 新  
……絵・落合 竜二  
……文・井村 錠  
……絵・中川 彩子  
ミノーの貞操帯……  
……西ドイツ・フエニクス  
装身具とふたりの美女(フォト)……  
アメリカSM絵物語……北米・フエニクス  
★グラビア・かわいい妖精①②……吉田 久  
★グラビア・海外SMフォト紹介……  
……北米・フエニクス  
鬼神丸秘帖(小日向一夢・絵)……潮 一樹  
アラビアの城⑦(鬼頭暁・絵)……北園透一郎  
男色大鑑・若道のほりたかく(東桂史・絵)……  
……かびや・かずひこ  
おつかれさま(山田彬弘・絵)……春川 光彦  
■女宇宙士訓練室……絵・鬼頭 暁  
空想と狂想のあいだ……森下 高茂  
地図にない村(都築峰子・絵)……九十九郎  
体当たりマゾヒズム論・19……水尾 究  
「馬狂いの女たち」における  
マゾヒズム描写……森本 愛造  
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)阿麻 哲郎

38年(十二月号)二五〇円

- フォト・ストーリー……文・吉永百合夫  
深夜のひとりごと……カメラ・吉田 久  
絵物語・破魔姫受難……文・島本 春雄  
……絵・山田 彬弘  
○フォト・白い炎……吉田 久  
○アメリカSM絵物語……フエニクス商会  
グラビア・まるい笹口具……フエニクス商会  
……カーテンのある風景……吉田 久  
……海外SMフォト……フエニクス商会  
★特集・マゾヒズム画廊……フエニクス商会  
崖の上の墓標(豊田みのる・絵)佐藤達四郎  
ピンアップだけはやめて……ADグラナムール  
FとMの行き戻り(落合竜二・絵)光谷東穂  
奇妙な実験(都築峰子・絵)……八巻 令  
アラビアの城・6(鬼頭暁・絵)北園透一郎  
私のSM論……重森 東  
体当たりマゾヒズム論・15……水尾 究  
恋人たちのオリ(山田彬弘・絵)九十九郎  
ほも紳士録⑫……かびや・かずひこ  
体当たりマゾヒズム論……エダ・キリコ  
灰色の夜(カット・エダキリコ)水尾 究  
現代マゾヒズム文化時評……森下 高茂  
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)阿麻 哲郎

38年(十一月号)二五〇円

- 大吠岬の太陽……文・エダ・キリコ  
……カメラ・吉田 久  
○暗い画廊……吉田 久  
○フォト作品集……金井 行雄  
○アメリカSM絵物語……フエニクス商会  
ヴィナスの誕生……森下 高茂  
ねむれぬ夜の追憶(鬼頭暁・絵)北海 道雄  
悪党半九郎(小日向一夢・絵)……潮 一樹  
★グラビア・時代妖美術集……中島 喜美  
★グラビア・海外の公刊誌より……  
……フエニクス商会  
★グラビア・大吠岬……吉田 久  
ビルマの首枷族……春川 光彦  
ある女装者の夜々……かびや・かずひこ  
■画集・黒い皮の響宴……鬼頭 暁  
大都会の夜の底で(江淵晃夫・絵)九十九郎  
青雲崩れるとき(古正英生・絵)井村 錠  
現代マゾヒズム文化時評・19……森下 高茂  
体当たりマゾヒズム論・14……水尾 究  
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)阿麻 哲郎  
○絵物語・鉾山町の女たち……文・宗方 八郎  
……絵・都築 峰子  
○絵物語・武士道無残……文・島本 春雄  
……絵・東 桂史

38年(十月号)二五〇円

- 絵物語 龍宮城の反乱……文・祖父江 新  
……絵・落合 竜二  
○時代 妖説朽木女忍伝……文・島本 春雄  
……絵・鬼頭 暁  
○サド 異端の城……文・三鬼 俊  
……絵・中川 彩子  
○戦国 本能寺炎上……文・井村 錠  
……絵・小日向一夢 久  
★グラビア・ミッドナイト……吉田 久  
★グラビア・海外の公刊誌より……  
……フエニクス商会  
○雁形城落城図……小日向一夢  
○時代妖美術集……中島 喜美  
伊賀の闇の葉(古正英生・絵)佐藤達四郎  
裏切り(秋吉空・絵)……九十九郎  
ミッドナイト撮影記……エダ・キリコ  
蛇縛女切支丹(東桂史・絵)……義川 源  
アラビアの城・5 毒ぐもに巻かれる弓子  
(鬼頭暁・絵)……北園透一郎  
お転婆学園奇襲作戦……郷 保夫  
ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)阿麻 哲郎  
現代マゾヒズム文化時評⑬……森下 高茂  
体当たりマゾヒズム論・13……水尾 究  
寄稿作品ご紹介と短評……編集部・編  
裏窓叢書名場面集……編集部・編

38年(九月号)二五〇円

- 裏窓草紙「絵本いろはうた」……うた・宮古志満夫  
……絵・小日向一夢  
○絵物語 海賊虹姫伝奇……文・島本 春雄  
……絵・春日 章  
○絵物語 変幻白だぬき……文・井村 錠  
……古正 英生  
○アメリカ絵物語 男爵夫人の拷問博物館  
★グラビア・洋画のSMシーン・スチル集  
★グラビア・海辺のうた……吉田 久  
夜のなげき……  
★グラビア・海外SM絵物語・ご紹介  
小笹姫受難(小日向一夢・絵)……潮 一樹  
特製マゾキン(山田彬弘・絵)……嶋岡 晨  
魔女アクリリカ(中川彩子・絵)春川光彦  
■鬼頭暁画集「美しきものの檻」……  
○絵物語 必殺のデリンジャー……落合竜二  
体当たりマゾヒズム論・14……水尾 究  
現代マゾヒズム文化時評・18……森下高茂  
穴(あな)……(都築峰子・絵)……石山省一  
お化粧される弓子(鬼頭暁・絵)北園透一郎  
★裏窓叢書名場面集(中島喜美ほか絵画集  
ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)阿麻哲郎



38年(八月号)二五〇円

絵物語 東京—神戸十六時間

文・祖父江 新  
絵・山田 彬弘  
文・矢桐 重八  
絵・春日 章

絵物語 ぬめ肌女郎……

文・黒部 恭治  
絵・中川 彩子  
文・祖父江 新  
絵・落合 竜二

西部 紅のライフル……

絵物語 砂の上の船……

★グラビア・海外サド写真特選集  
残念なり猿飛佐助(小日向一夢絵) 井村 錠  
妖異水底に沈む(秋吉樹・絵) 信夫 澄夫  
お仕置きにぬれる弓子(鬼頭晩絵)

お転婆学園秘密作戦(江洲晃夫絵) 郷 保夫  
女の争い(都築峰子・絵) 五所 章  
フィギュア・トレーニング 春川 光彦  
切支丹散華(東桂史・絵) 北村 仙也  
現代マゾヒズム文化時評(17) 森下 高茂  
体当たりマゾヒズム論(13) 水尾 究  
ゴルドンの記憶⑤(江洲晃夫絵) 阿麻 哲郎

38年(七月号)二五〇円

絵物語 無明怨念記……

文・矢桐 重八  
絵・春日 章  
文・春川 光彦  
絵・中川 彩子

続・アラビアの城  
泣きじゃくる弓子 文・北園透一郎  
絵・鬼頭 晩

グラビア・静かな山林の午後 吉田 久  
闇に光る  
絵画集・サディスチンの微笑 江洲 晃夫  
切支丹女牢 喜多 玲子  
南北戦争以前 鬼頭 晩

海外SM絵物語・フェニクス商会  
切腹殉教記(小日向一夢・絵) 黒部 恭治  
しのび逢い刺青情話(都築峰子・絵) 北野 竜一  
くたばれッ淑女学院 郷 保夫  
西鶴におけるマゾヒズム 安東 泉  
血染め白百合(古正英生・絵) 佐藤達四郎  
体当たりマゾヒズム論(12) 水尾 究

墓場からの命令(山田彬弘・絵) 祖父江 新  
わが愛の渴望(落合竜二・絵) 白木ゆりこ  
虐げられた女たち(東桂史・絵) 野方 伸  
ゴルドンの記憶④(江洲晃夫・絵) 阿麻 哲郎

38年(六月号)二〇〇円

鬼頭晩時代妖美画集…… 鬼頭 晩

中島喜美時代妖美画集…… 中島 喜美  
グラビア・幽囚の部屋…… 吉田 久

絵画集・続・美しき海賊船 フェニクス商会  
七つの大罪(中川彩子・絵) 落合 竜二  
続・異端の終末 芦田 奈貴  
おどろ記珍化論…… 左 次郎

「ロリータ」における  
ニンフェッティズム…… 安東 泉  
「夜と霧」…… 黒田 史朗  
放浪と自己恋着の画家…… 河村 童八  
月光の道で…… 丸亀 恵子

鬼婦長…… 立原 道夫  
夜の妖蝶…… 五所 章  
ボスには乳房がある…… 水尾 究  
体当たりマゾヒズム論(11) 庄内 裕治  
さんざね不動(小日向一夢・絵) 黒部 恭治  
復讐黒髪秘聞(中島喜美・絵) 島本 春雄  
忍法「乳影」(鬼頭晩・絵) 潮 一樹  
妄執侍(古正英生・絵) 佐藤達四郎  
霧姫変化(鬼頭晩・絵) 阿麻 哲郎

ゴルドンの記憶③(江洲晃夫・絵) 阿麻 哲郎

38年(五月号)二〇〇円

絵物語・白蠟開若衆……

文・島本 春雄  
絵・東 桂史  
文・豊田 一狼  
絵・山田 彬弘

江洲晃夫耽美画集…… 江洲 晃夫  
グラビア・夢幻のへや…… 藤沢 修  
・美しき海賊船…… フェニクス  
・くさりとお美少女…… 商会・提供

海外SM画傑作選…… 井村 錠  
茅女物語…… 潮 一樹  
会津の女兵…… 飯田 豊吉  
その夜…… 阿麻 哲郎

ゴルドンの記憶(2) 村山 省  
椎名夫人の足…… 村山 省  
ほも紳士録…… かびや・かずひこ  
現代マゾヒズム文化時評(14) 森下 高茂  
体当たりM論(10) 水尾 究  
私の愛した女優…… 北野 竜一  
アラビアの城…… 北園透一郎

孤島の復讐鬼…… 祖父江 新  
異端の終末…… 葦田 奈貴  
背後の脅迫者…… 夢夫  
ばんざいッお転婆学園…… 郷 保夫

38年(四月号)二〇〇円

絵物語・冥府海賊伝奇……

文・島本 春雄  
絵・秋吉 樹  
文・松平 莊司  
絵・中川 彩子

・マドリリーヌと黄金の靴…… 文・東 桂史  
・白狐のお新いろうさんげ…… 絵・小日向一夢  
小日向一夢妖美画個展…… 毛 卓三  
グラビア・黒猫といす…… 猪島 昌也

・鏡と女…… 藤沢 修  
・パウリーネ夫人のピクニック…… フェニクス  
海外SM画傑作選…… 商会・提供

ゴルドンの記憶①…… 阿麻 哲郎  
処刑の囚…… 三鬼 俊  
無分別な夜…… 海老沢 七郎  
大阪非情地帯…… 豊中 夢夫  
内外ミュージックホール・スナップ集 藤沢 修

「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話 北野 竜一  
文芸評論「醜いコメディ」について 安東 泉  
ほも紳士録④…… かびや・かずひこ  
A子の話…… 南 ゆり  
体当たりマゾヒズム論⑨…… 水尾 究  
舞踏会の贅…… 春川 光彦  
のぞきの大スケ捕物帖…… 飯田 豊吉